
マジカル☆ラビリンス

甲斐日向

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジカル☆ラビリンス

【Nコード】

N3397E

【作者名】

甲斐日向

【あらすじ】

女王試験のため人間界にやってきた、魔法の国の王女・アスカ。試験の課題は『人間の中から主人を選び、主人の願いを三つ叶える』というもの。

アスカはひょんなことから出会った少年・渡羽に一目惚れ。主人にするため、立ち去った渡羽を捜すのだが…

プロローグ（前書き）

この作品は都合上、機種依存文字を使用することがあるため、PC
閲覧推奨です。携帯閲覧の方は機種によっては文字化けする恐れが
あるため、お手数ですが、作者運営のサイトからご覧下さい。

プロローグ

魔法世界・テュレーゼ。ここでは魔法使いジルコードと呼ばれる人間——アドムス、さまざまな種族の妖精ミノル、動物や鳥が人間のように進化した獣人ゼオレスクローネオーティン、鳥人などが暮らしている。

いくつもある国々の一つ、マジカリア国の王城。

陽の光が差し込む廊下を、灰色の髪をオールバックにした中年の男性——マジカリア国王が歩いていく。国王は、娘の部屋に意気揚々と入った。

「アスカ、入るぞ」

その途端、びゅんっ、とブラシが飛んできた。しかし、国王はひょいっとブラシを軽くよける。

ブラシはそのまま飛んでいくかと思いきや、国王の頭の少し後ろでピタリと静止した。

国王は一流の魔法使い——魔導師クレシアスなのだ。空中静止など、念じただけで扱える。

「ちよつと父様！ 部屋に入る時はノックぐらいしてよっ！」

次いで飛んできたのは少女の鋭い怒声。

国王がくりと人差し指を振ると、静止していたブラシは少女の手元へと飛んでいく。

「おお、すまんすまん。しかし、なんだな。アスカも年頃になったんだなあ。そんなことを気にするようになるとは……」

「で、なんの用なのよ？」

少女は、突然入ってきた父親を半眼で睨みつけつつブラシをひつつかむと、髪の手入れを再開した。

癖のない髪はブラシを通すと、するすると楽に髪が流れていって彼女のお気に入りだ。

ヒヤシンス色のセミロングの髪に、アイスグリーンの瞳。赤い珠と白いリボンの飾りがついた、黒いカチューシャ。

黒いハーフトップのベストに、空色のパフスリーブワンピース。ただし、スカートの部分だけがダークパープルだ。

「そうだった。今日はお前の十六回目の誕生日。十六歳おめでとう、アスカ」

「最初からそう言えばいいのに」

小さく肩をすくめ、アスカはブラシを化粧箱にしまう。

その横に置いておいた、三色の宝石がついた大きなペンダントを首に掛け、ニコツと微笑んだ。

「でも、ありがとう、父様。さっそくだけど、プレゼントは？」

満面の笑みを浮かべる娘に、国王はがっくりと肩を落とした。

「いきなりそれか……。ちゃんと用意してあるぞ」

「やったあ！ 何々？ 何くれるの？」

白い手袋をはめ、イスから立ち上がったアスカは、キラキラと期待のまなざしで父親を見る。

国王は「それはだな…」ともったいぶって、しばし間を置いた後、得意げに言った。

「人間界への、修行の旅だ！！」

堂々と渡された誕生日プレゼントに、アスカは啞然とした。

一瞬、頭が真っ白になりかけたが、意識がはっきりしてくると、不満が込み上げてきた。

「……はあ？ 何それ！ 誕生日になったら、人間界に行ってもいいって言うから楽しみにしてたのに、魔法修行だなんて聞いてないわよ！？」

しかもそれがプレゼントなの？ 物ちょうだい、物！

びしっと手を突き出すアスカ。

国王は手を突き出したまま、ずいずいと近づいてくる娘を手で制し、

「落ち着け、アスカ。いいか、我がマジカリア王家に産まれた女は、

十六歳の誕生日を迎えた日に人間界へ渡り、主人^{あるじ}として選んだ人間の三つの願いを叶えること。

これは女王となる素質を測るための試験も兼ね、先祖代々受け継がれてきた習わしであり、掟なのだ。お前も今日で晴れて十六歳。掟に従がい、人間界に――」

「絶対イヤ！ 掟だかんだか知らないけど、どっちにしる魔法の修行には変わりないんでしょ？」

そりゃあ人間界には行ってみたいわよ。前から行ってみたいって思ってたし。でもね、観光とかならともかく、修行だっていうなら、あたしは行かないからね！」

「アスカ……」

腕を組んでぷいっとそっぽを向くアスカ。こうなると、そう簡単には意見を変えない。眉を八の字にする国王。

その時、魔法でドアが開かれ、小さな妖精が飛び込んできた。

「姫様あー！」

「あ、ティア――」

ゴチーン

アスカが声のした方を振り向いた瞬間、妖精がアスカの額に正面衝突した。

「いった――っ！！」

「あああ、す、すみません。急いでたものでえーっ」

妖精・ティアラはぺこぺこと空中で何度も頭を下げた。

ティアラ自身は、衝撃吸収魔法をあらかじめかけているので無傷だ。

腰まであるチェリーピンクの髪。ストロベリーピンクの大きな瞳に、水色でストラップレスのワンピース。

腰にはワンピースと同色の、短いパレオのようなものがついている。頭。

頭の両脇についているルティアの花飾りは、アスカが昔、プレゼントしたものだ。

大きさは普通の人間となんら変わりないように見えるが、透明で薄い二枚の羽と、長く尖った耳が、妖精であることを如実に物語っている。

「どうしたのだ、ティアラ。そんなに慌てて」

国王の問いに、ティアラは心配そうな顔でアスカを見やっから答えた。

「あ、はい。姫様が人間界に行く聞いて、心配なのでついこのように思いました」

「うむ。それは頼もしい限りだ」

「ちよっと待ってよ。あたしは行かないって――」

「問答無用！」

抗議しようとするアスカの言葉を遮り、国王は心を鬼にして、時空移動魔法をかける。

アスカとティアラの周りを光が包み込むと、国王は魔法を発動させた。

「さっさと行ってこーい！」

「父様の人でなし――――！！」

怒りの叫声の余韻を残し、こうしてアスカは人間界へと旅立たされた。

1st 出逢い

父親の強制転移魔法によって、アスカは人間界に放り出された。しかも、空中に。

「いやーっ、なんでよりにもよって空なのよぉー！」

落下しながらアスカは呪文を唱えた。

「リィアフィィレストエルク！」

すると、アスカの手の中にほうきが現れた。うまく体勢を直し、ほうきにまたがって別の呪文を唱える。

「アフィィリィグオレィヒエウタエルク・リィラーチィクムィマウロィウイトリセルク！」

魔法発動！ ほうきはぶわり、と重力に逆らって宙に浮いた。そこでようやく一息つく。

「ふう。あー、よかった。ティアラも無事？」

きょろりと首を巡らせると、ティアラはすいーっと滑るように降りてきた。

「はい。まったく問題ありません、姫様」

ティアラは長い髪を揺らして、ガッツポーズをしてみせる。アスカは眼下に広がる人間界を見渡した。

「ここが人間界かぁ。なんかごちゃごちゃしてるとこねー。

でも、気持ちいい風吹くじゃない。やっぱり、ほうきで空飛ぶのは気持ちいいわね。」

これで修行のためなんかじゃなかったら最高なんだけど」

「仕方ありませんよ、掟ですもの。でも、これはいい機会です。姫様、きっちり修行してもらいますよ！」

腰に手を当て、ティアラはアスカの顔の周りを飛びながら小言を言い始めた。

「いっつも修行をサボってばかりで、ろくに練習もしないおかげで、レベルの低い魔法しか使えないんですから！」

「うるさいなあ。レベルが低くても、応用すればなんとかなるんだからいいじゃない！」

何よ、ティアラなんて、魔法って言ったら、ドア開けるくらいしかできないクセに！」

「私と姫様と一緒にしないで下さい！　姫様は一国の王女なんですから、初歩の魔法しか使えないのでは、民に示しがつかないと言ってるんですっ！」

ティアラの切り返しに、アスカは嫌味っぽく返した。

「あたしは好きで一国の王女に産まれたわけじゃないわよ！　いいわよねえ、あんたはお気楽な妖精に産まれることができます！」

「お気楽なんかじゃありません！　私だって苦労してるんですよ。姫様の世話やら何やら…」

「何よそれ！　それじゃまるで、あたしがティアラに世話かけまくってるみたいじゃないの！　チビっ子のクセに生意気よ！」

「チビっ子って言わないで下さい！　その気になれば魔法で大きくなれますう！」

「だったら、いつでもおつきくなって下さいよ！　虫みたいでうつとしいのよ！」

「その魔法を使うと疲れるんですー！」

不毛な言い争いを続けていたが、なんだかバカバカしくなってきたアスカは、現状を思い出して気を取り直した。

「あーもう、こんなことで言い争ってる場合じゃないわ。さっさと人間選んで、願い事叶えなくっちゃ。そしてマジカリアに帰って、父様に文句言いきくってやるんだから」

「適当に選んではいけませんよ、姫様。しっかり、その人の本質を見極めてからにして下さい。くれぐれも、魔法を悪用しそうな人を選ばないで下さいよ？」

「分かってるわよ。よっと」

アスカはほうきの上に立ち上がって、下界を見まわした。

「うーん、そうねー、誰にしようかしら」

目の上に手をかざしてきよろきよるするアスカに、ティアラは顔色を変えた。

「何してるんですか、姫様！ 危ないですよ！」

「大丈夫よ！ ほうきは得意中の得意なんだから！」

「それはそうかもしれないけど……」

ティアラが不安げに表情を曇らせた時だった。前触れもなく風が吹き荒れ、アスカはバランスを崩した。

「わわっ、何、この風！？ 落ち……きゃああっ」

「姫様っ！」

ほうきはアスカの手を離れどこかへと飛ばされ、アスカは地上へと落下していった。

その日、渡羽飛鳥^{とばあすか}はいつもより急いで帰宅していた。今日は母親のお客様が来るので、夕飯は自分が作らなくてはいけない。

母親曰く「飛鳥の手料理はなかなかのものだから自慢したくって♪」だそうだ。

「Πく—————！」

商店街を突っ切っていた渡羽は、妙な叫び声を聞いた。

「……ん？ なんてしよう、上から人（？）の声が……」

呟いて何気なく上を見上げると、渡羽は我が目を疑った。

「……！？」

人が落ちてくる！？ しかも、自分の上に。

「±∞◆£—————！」

声からして女の子のようだ。聞いたことない言葉だが。いやいや、そんなのんきに構えている場合じゃない！

「ええええええっ！？」

なぜ人が？ パニックに陥る渡羽。高速落下してくる少女が「μ×！！」と叫ぶ。

渡羽は反射的に、その少女の体を受け止めていた。

「うっ、わわわっ」

ものすごい衝撃。渡羽はたたらを踏んで仰向けに倒れる。はずみで渡羽のかけていた眼鏡が落ちた。

歩いていた人々がざわめき出す。アスカはむくりと起き上がると憤慨した。

「いたた…もうっ、なんなの、今の風は!!」

人々が注目する中、アスカのもとにティアラがようやく追いついた。

「姫様 ああああああつ」

「ティアラ」

見上げると、ティアラは涙目で言った。

「ご無事ですか、姫様。よかったです」

「もう、災難よ。まさか、あたしがほうきから落ちるなんて。とっさに衝撃吸収魔法かけたからよかったものの」

遠巻きに人々はアスカに不審な目を向ける。周りの人々のざわめきを聞いて、ティアラははっとした。

そう言えば、人間界と魔法界では使われている言語が違うのだ。それをアスカに伝えようとした時、アスカの下から声が聞こえた。

「S…」

「んんっ？」

見てみると、自分の下に人がいる。そういえばさっき、ちょうど落ちるところに人がいたような…

「A K H J ? \ 全※…」

聞き慣れない言語にアスカが困惑すると、ティアラが通訳してくれた。

「どいてほしいと言ってますよ。姫様」

「えっ。ああ、ごめん!」

慌ててアスカがどくと、下敷きになっていた少年は体をさすりながら起き上がった。

「大丈夫？」

アスカは念のために訊いてみたが、少年は驚いたように目を丸くした。次いで困ったように小首を傾げる。

「姫様、忘れたんですか？　こちらとあちらでは使われている言葉が違うので通じませんよ。こちらの言葉じゃないと」

「へ？　あつ、そうか」

言われてからようやくアスカも気づいた。そうか、言葉が通じていなかったのか。こほん、と咳ばらいをし、アスカは言語変換魔法の呪文を唱えた。

「リⅡエチャツユアⅡワング・リⅡポオアタⅡワング・リⅡオツツイⅡクムⅡロアジェルエルク。……えーと、改めて。大丈夫？」

おそろるおそろる、もう一度訊いてみる。今度はちゃんと通じただろうか。

「え？　あ、ああ…大丈夫だよ」

渡羽は、急に言葉が通じたので少し驚いたが、言葉が通じてホッとし、微笑んだ。

「君の方こそ、ケガとかしてない？」

その微笑みに、アスカは一瞬どきっとした。なんて素敵な笑顔なの。

「うん、大丈夫。あなたが下敷きになってくれたから…」

「下敷き…：うん、まあそういうことになるか」

正直な言葉に、渡羽は少しショックを受け、乾いた笑みを浮かべた。

「とにかく、ケガがないならよかった。どうして、空から落ちてきたかは訊かないで置いてあげるけど、危ないことはしちゃダメだよ」

「は、はいっ」

気を取り直して、諭すように告げると、少女はなぜかぽーっとした顔で返事をした。

それにしても、珍しい格好の女の子だ。この辺りではあまり見かけない。変わった髪の色をしているし、外国人だろうか。

などと考えていた渡羽だったが、はっと思いだした。

「あ…俺の眼鏡……」

足元を見回す少年に、アスカはそばに落ちていた眼鏡を手渡した。
「もしかしてこれ？」

「それだ！　ありがとう」

眼鏡を受け取り、ふいに視界に入った腕時計を見て、少年はぎよつとした。

「あ、もうこんな時間じゃないか！　それじゃあ、俺急ぐから」

「あ、ちよつと！」

アスカが止める間もなく、少年は走り去ってしまった。その後ろ姿を、アスカはぼーつと見つめる。

「行っちゃいましたね。それはともかく、さあ、姫様。主人候補^{あるじ}を探しましょう…って、あの、姫様？　どうしたんですか、ぼーつとして」

ティアアラが問いかけると、アスカは頬を紅潮させ、興奮気味に言った。

「か、かっこいい…？」

「ええっ？」

「優しいな物腰、穏やかなまなざし。加えて颯爽と去るその姿……完璧、あたしの理想のタイプ…っ？」

「姫様って、あーいうのがタイプでしたっけ？」

語尾にハートマークをつけてラブラブ光線を放つアスカに、ティアアラは首を傾げる。

と、俄然アスカはぐっ、と握り拳を作って宣言した。

「決めたわ。あたし、あの人にする！」

「ええっ？　でも、もういなくなっちゃいましたよ？　それに、そんな簡単に決めちゃダメですよっ」

「あの人なら、全然、問題なしよ！　あたしの直感がそう告げてるの！　さっそく追いかけるわよ、ティアアラ！」

「あっ、待って下さい、姫様…！」

どびゅん、と駆け出したアスカを、ティアアラは慌てて追いかけた

のだった。

それを物陰で見っていた怪しい青年は、怪しい笑い声を発した。

「ふふふふ。見つけたぞ、アスカ姫。」

姫を追いかけて数年。姫に近づく不埒な男どもは、全てこの手で排除してきた。

人間界と言えど、油断は禁物だからな。こうしてそばで見張っていないければ」

にやりと笑うと、怪しい青年は高らかに叫んだ。

「さあ、不貞の輩どもよ、どこからでもかかって来い！ 僕のアスカ姫には、指一本でも触れさせはしないぞ！ はーっはっはっは！」

青年の横を通り過ぎようとしていた老人がびくっ、と飛び上がり、離れた所を歩いていた高校生たちが「やだあ、何あれ？」「警察呼んだ方がいいんじゃないかねえの？」とひそひそ話をしながら、通り過ぎていった。

混みあう商店街の中、アスカは人混みをかき分けて、一目惚れの少年を捜していた。

しかし、人が多くてなかなか目的の人を見つけられない。

「もう、なんでこんなにたくさん人がいるのよ。これじゃあ、見つけられないじゃない！」

「この中から見つけるなんて無理ですよ、姫様。あきらめましょーよお」

「イヤよ。あたしはあの人に決めたんだから！」

あんた、せっかく堂々と空飛べるんだから、上から捜してよ」

「そんなこと言われましても、特徴があれば見つけれられるかもしれませんが、さっきの人はこれと言った特徴が……」

「あ、もしかしてあの人かな？」

「って、姫様、自分から言っておいて無視ですか」

ティアラのさりげないツツコミはアスカの耳には入っていないかつ

た。見覚えのある後ろ姿に、アスカはルンルン気分で声をかけた。

「あのお、すみませーんっ」

「はい？」

振り返った人を見て、アスカは目を点にした。

「……………」

確かによく似ているのだが……………地味だ。さっきの爽やかさはまったくくない。なんだか暗い。

「姫様、この人は違うのでは…………」

控えめにティアラが言う。アスカは小声で「そ、そうね」と返すと、相手に向き直り、なるべく明るく謝る。

「間違えましたっ。ごめんなさい！」

そのまま百八十度、くるりときびすを返そうとするアスカを、少年が引き留めた。

「待って下さい。君、さっきの女の子、ですよね？」

「へ？ ……ということは…………まさか、あなたがさっき、あたしの下敷きになってくれた人お！？」

がーんっ

少年の言葉に、アスカはがっかりした。

（ウソでしょ？ さっきの爽やかな人と、この地味ーな人が同一人物？ 信じられない！）

アスカの中で、ガラガラと爽やか少年のイメージが崩れていく。

その少年——渡羽はと言うと、二度目の『下敷き』に、またショックを受けていた。

「下敷き…………はい、そうです。先程はどうも…………」

ぺこりと軽く頭を下げた渡羽は、明らかにさっきと雰囲気が違う。アスカはじろじろと、それこそ頭のとっぺんからつま先まで、品定めするように渡羽を見ると、はっきりと正直な感想を漏らした。

「へえ…………」。眼鏡かけただけで、さっきとは全っっ然、印象が違うわね。思いつきり地味になったわ。」

「…………さっきもそうでしたけど、君って、思ったことを正直に、き

っぱりと言うんですね……」

自分が地味なのは重々承知だが、ここまで堂々と、面と向かって地味だと言われたのは初めてだ。笑えばいいのか泣けばいいのか。

「ところで、なんの用ですか？」

「そうそう。さっき、お礼言いそびれちゃったから、ちゃんとお礼言っておこうと思って」

「それだけのために、わざわざ俺を追いかけてきてくれたんですか！？」

「うん」

（なんか、さっきと口調とか雰囲気とか違うし、ちょっと地味だけど、この程度であたしの決心は揺るがない！ あたしの直感が外れたことはないんだから！）

かなりイメージは崩れたが、さりとて、助けてくれたことは事実。助けてくれたというか、下敷きにしてしまったただけだが。

自分の直感を信じ、アスカは渡羽に礼を言った。

「さっきはどうもありがとう。それで、あなたの名前を教えてくださいるとうれいんだけど」

「え？ あ、はい。俺は渡羽飛鳥と言います」

「あすか！？」

「そうですけど……あの、何か？」

「偶然！ 正式名じゃないけど、あたしもアスカって呼ばれてるのよ」

「そうなんですか？ 偶然ってあるんですねー」

「ほんとね」

ぽやんと笑うと、渡羽はアスカの左肩に目を向け、

「じゃあ、その肩に乗っている女の子の名前は、なんて言うんですか？」

「「え！？」」

アスカとティアラは声をハモらせ、同時に驚愕した。

渡羽は「どうかしましたか？」ときょとんとする。アスカは小声

でティアアラに話しかけた。

「ウソッ、ティアアラのこと見えるの!？」

「そんなハズありません。私たち妖精は、普通の人間には見えないんですからっ。ええ、どうしてでしょう」(泣)「

「落ち着いて、ティアアラ。大丈夫、なんとかなるわよ」

「姫様」

涙目になるティアアラを元気づけ、アスカは渡羽に確認してみた。

「あなた…この子の姿が見えるの？」

「はい。うつすらと透けて見えます」

「すごい。ティアアラは普通の人には見えないハズなのに。あ、声は聞こえる？」

アスカがちらりと目で促すと、ティアアラはおずおずと渡羽に話しかけてみた。

「あの、ティアアラと申します。聞こえますか？」

「声ははっきり聞こえますよ。ティアアラさんですね。渡羽飛鳥です。よろしく願います」

ほっと肩の力を抜いて、ティアアラは笑った。

「こちらこそ、よろしく願います。えーっと、渡羽さん、でよろしいですか？」

「はい。あの、こんな所では通行人の邪魔になるんで…俺の家に来ませんか？　すぐ近くなんで…」

渡羽の申し出に、アスカはぱあっと顔を輝かせた。

「いいの!？」

「はい。では、行きましょうか」

「はいはい♪」

喜色満面で、アスカは渡羽と並んで歩き出した。

それを物陰で見ていた謎の青年は、苛立たしげに唸った。

「むむむむ。なんなんだ、あの男は！　いきなり出てきて「俺の家に来ませんか？」だとう！？　ふざけるな！

アスカ姫は僕のものだ。あんな男に姫を奪われてたまるものか。

排除しなければ。

よし、尾行開始だ！」

1st 出逢い（後書き）

追伸列記簿

皆さん、初めまして&こんにちは、甲斐日向です。マジカル☆ラ
ビリンスの第一話をお届けいたしました！

この回でようやくサブタイトル通り、アスカと渡羽が出会います。
そしてメインキャラが全員登場。ここから物語が動き出すわけです。
第一話は特に補足することはありますが、一つだけ。アスカが
渡羽と出会った時のセリフ、あれは文字化けではありませんので。
知らない言語を表すために、わざと記号表示しているだけです。

さてさて、ついに出会った二人ですが、アスカをつけ狙う謎の青
年の正体は？ アスカは渡羽を主人にできるのか？
あるじ

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

2nd 同居

閑静な住宅街。アスカはそのうちの一つ、淡いクリーム色の家を見上げた。

「ここがあなたの家？　ちっちゃーい。まるで庶民の家みたい」
齒に衣着せぬ物言いに、渡羽^{とば}は乾いた笑みを浮かべながら、庭に入った。

「まあ…庶民と言えば庶民ですけど……」
悪気があって言っているわけではないと思うし、事実なので渡羽は深く気にしなかった。

「あ、ねえ、渡羽！　これ何？」

渡羽に続いて庭に入ったアスカは、脇の小さな花壇を指差した。

「それは俺が作った花壇ですよ」

「これ、全部一人で作ったの！？」

「ええ、まあ。俺、花が好きですから……」

照れ笑いを浮かべる渡羽。アスカは花壇をまじまじと見つめ、感嘆の息を漏らした。

「すっごーい。あたしにはマネできないな」

「姫様は細かいことが苦手ですからね。一生、ムリでしょうね」

「一生って何よ、失礼ねー！」

腕を組んでしみじみと頷くティアラ。半生ならともかく、一生とは何よ。

「アスカさんたち、ケンカはやめて下さい。あと、花壇に気をつけて――」

「ねえ、あたしのことはアスカでいいよ。『さん』づけされるのやなのよね」

アスカは困ったように微笑した。

「すみません。じゃあ、今度からはそう呼ばせてもらいます」

渡羽が素直に謝ると、アスカは尊大に頷いた。

「よろしい。ところで、渡羽はティアラが見えるのよね？」

「うっすらとですけど…」

「OK。あのね、突然だけど、あたし本当は普通の人間じゃないの。魔法使いなのよ」

「ええっ!？」

あっけらかんとしたアスカの言葉に目を丸くする渡羽。当然の反応である。

アスカは自慢げに笑って「証拠、見せてあげる」と指を振った。

渡羽から二、三步離れ、精神を集中させる。

「シッカイエルク！」

魔法界の言語で、魔法の発動ワードを唱えたアスカは、ふわりと宙に浮いた。渡羽はさらに目を丸くした。

「ア、アスカさん？ う、浮いてますよ!？」

「どお？ すごいでしょ。でも、こんなの序の口よ。あたしが他にできるのは……リロ」

言うや否や、アスカが立てた人差し指の先に火が灯った。

「うわっ、手から火が!？」

アスカが軽く指を振ると火は消えた。

「あとはハヒイエルクっていう、物を自在に動かす魔法くらいかな。この二つは、呪文詠唱は必要ないんだよ」

「すごいですねー。そんなことができるんですか」

目を丸くしながらも、感心したようにため息をつく渡羽。渡羽の顔の横に滞空しながら、ティアラが苦笑気味に言った。

「でも、これは基本中の基本ですから、魔法使いなら誰でもできるんですよ」

「もう、余計なこと言わないでよ、ティアラ！ せっかく渡羽にいいところ見せてるのに!」

「あああ、すみませんすみませんっ。もう口出ししませんから、首絞めないで下さいっ」

きうーっとティアラの首を指で絞めるアスカに、渡羽は慌てて止

めに入る。

「アスカさん、そんなことしたらティアラさんが死んじゃいますよ！」

「平気よ。これくらいじゃあ、ティアラは死なないわ。それと、アスカさんじゃなくて、ア・ス・カ！」

「そ、そうでしたね。では、そろそろ中に入りましょう」
家のカギを開け、渡羽はアスカたちを家の中へと促した。

母親はまだ仕事から帰ってきていないらしい。担当さんと打ち合わせがあると言っていたが、長引いているのだろうか。

「これが人間界の家なんだあ。狭いけど、見たことない物ばかりでおもしろーい！」

食堂に入ると、アスカは物珍しそうにあちこち見ている。

「アスカさ：じゃなくて、アスカ、何か飲みますか？ 麦茶しかありませんけど」

「むぎちゃ？ んー、よく分かんないけど、いる！」

「ティアラさんも飲みますか？」

「はい。いただきます」

渡羽はアスカにイスを勧め、台所横の冷蔵庫から麦茶を出してコップに注ぐ。

「で、渡羽。あたしが魔法使いだってことは信じてくれた？」

「え？ まあ、魔法見せてもらいましたし、信じますよ」

「よかった。じゃあ改めて自己紹介。」

あたしの名前はアスフェリカ・グランジェ・ウィルママジカリア。
長いからアスカでいいわ。

あのね、あたしが人間界に來たのは、女王試験のためなの」

「女王試験？」

「そう。あたし、実は魔法の国の王女で、王家では先祖代々、女の子が産まれた場合、十六歳になったら人間界に降りて、主人とする

人間を一人選び、その人間の願いを三つ叶えるっていう掟があるの。で、それは女王になる素質があるかどうかを調べる試験でもあって、あたしも今日で十六歳になったから、人間界に降りてきたってわけ」

「そうなんですか。はい、どうぞ」

突拍子のない話に目を丸くしながら、渡羽はアスカの前にコップを置いた。

「ありがと。…って」

アスカはなみなみと注がれた麦茶を見て、顔をしかめた。

「何これ。なんか茶色い……」

「それは麦茶ですから…もしかして、知らないんですか？」

ティアラの前に、コップ代わりのボトルキャップを置いて渡羽が訊くと、ティアラも渋い顔をした。

「魔法界にはない飲み物です…」

「人間界の飲み物って、みんなこうなの？」

「いえ、そういうわけでは…」

「なんかまずそう。でも、せっかく渡羽が出してくれたんだし……えいっ」

意を決し、アスカはぐいっとコップを豪快に呷あおった。見習うように、ティアラもキャップに口をつけた。

「ぷはっ。ちょっと苦いけど、さっぱりしてておいしー♪」

「少し、グランの実のお茶に似てますね。色は全然違いますが」

「気にいってもらえたのならよかったです。それで、話の続きは…」

「ああ、うん。普通は願い事を叶えて終わりなんだけど、あたしの場合は、初歩の魔法しかうまく使えないから、修行も兼ねてるのよ」
「魔法修行ですか。あの、もし願いを三つ叶えられなかったら、どうなるんですか？」

「うーん、もしそうになったら罰として魔法界に強制送還されて、魔法力を奪われちゃうの」

「魔法力を奪われると、魔法使いもただのヒトですからね。魔法界で暮らすにはとっても不便になるんです」

「そうなんですか。結構、大変そうですね」

気遣わしげに表情を曇らせ、渡羽が俯くと、アスカはざり言った。

「そういうわけで、渡羽！ あなたは見事、あたしに選ばれたわけなのよ」

「え？ 俺が選ばれた人間なんですか？」

驚いて渡羽は顔を上げた。

「そう！ だから、これからよろしくね、渡羽」

「あ：はい、よろしく願います」

なんだか状況をうまく飲み込めず、渡羽は曖昧に頷いた。

「で、あたしはこの部屋に住めばいいの？」

「どこの部屋に：って」

「姫様、ここに住む気なんですか！？ いけませんよ、そんなの！」

ティアラが身を乗り出す。アスカは当然といった顔で、

「だって、渡羽の願いを叶えるのに、あたしが近くにいないと意味ないでしょ？」

「それはそうですけど」

「あの、急にそんなことを言われても……」

「ほら、渡羽さんも困ってますよ？」

「ええー？ ダメなの？ 渡羽」

おねだりするように、上目遣いで渡羽にすり寄るアスカ。

同年代くらいの女の子に、ここまで近づかれたのは初めてだったので、渡羽は「うっ！」と呻いて赤面した。

じーっと見つめてくるアスカ。目が「お願い。泊・め・て？」と訴えている。

「……分かりました。母さんに頼んでみましょう」

渡羽はあっさり折れた。

「やったあ！」

諸手をあげて喜ぶアスカを尻目に、ティアラは「本当によろしいんですか？ 渡羽さん」と申し訳なさそうに訊いた。

「はい。ちょうど一部屋空いてますし、俺の母さんは童話作家で、メルヘンとかファンタジーなことを信じる人なので、きっとアスカたちのことを話したら喜びますよ」

「それでは、お言葉に甘えさせていただきます」

ティアラはうきうきしているアスカに代わって、丁寧な頭を下げた。

その会話を、使い魔のカラスを通して、渡羽家の外で聞いていた青年は、ぐぬぬ、と固く拳を握りしめた。

「なんてことだ！ アスカ姫があんな地味男と、一つ屋根の下で暮らすことになるなんて……！ 断固阻止しなければ。」

いや、待てよ？ あんな地味男ならば、アスカ姫に何かするハズもないか。

いやいや、奴も男だ。四六時中そばにいれば、何かしら間違いを犯すかも……

それにしても、あのアスカ姫が自分から男に近づくなんて。だが、アスカ姫は誰にも渡さん！ アスカ姫は僕のものだ。

ふふふふ、はーっはっはっは！

ふんぞり返って高笑いをする青年に、近くの家から出てきた中年の女性が怒鳴りつけた。

「ちよっと、そのあんた！ 変なバカ笑いしないでくれる？ 近所迷惑なのよ！」

「あ、すみません。以後気をつけます」

「まったく、近頃の若い子は、周りの迷惑ってもんを考えないのかしらね。髪まで染めちゃってまあ……」

そうして、女性は長々と小言を言い始めた。青年は逃げるに逃げられず、最後まで説教される羽目になった。

翌朝。アスカはあてがわれた部屋のベッドで「んんーっ」と伸びをした。

「よく寝たあ。あ、おはよう、渡羽」

「おはようございます、渡羽さん」

「おはようございます。朝ご飯、持って来ましたので、ここに置いておきますね」

渡羽は朝食の乗ったトレーをテーブルの上に置く。

「ありがと。昨日はごめんね、いきなり押しかけちゃって」

ベッドの縁に腰掛け、アスカはブラシで髪を整えながら言った。
「いいですよ。母さんも許してくれましたし。それに、こっちこそすみませんでした。母さんにたくさん質問されて疲れたでしょう？」

渡羽の母、美鳥^{みどり}は童話作家で、なかなか売れっ子らしい。

時々本屋でも見かけるし、渡羽が小さい頃はまだデビュー前だったが、手作りの童話をよく読んで聞かせてくれた。

昨日は担当者との打ち合わせ後、その担当者と一緒に帰ってきたのだが、ややこしくなりそうなので、担当者が帰ってからアスカを紹介したら、興奮してあれこれ質問攻めにしたのだ。

喜ぶだろうとは思ったが、まさかあそこまでとは。

二つ返事でアスカの同居を許され――むしろ言い出す前に「ねえ、うちに住まない！？ いいえ、ぜひ住んでちょうだいっ！」と同居を勧める母を思い出して、紹介しない方がよかったのではと半ば後悔している。

「ううん。そんなことないよ。渡羽の母様って楽しい人ね。あたし、気に入っちゃった」

まったく気にしていない様子で破顔するアスカに、渡羽は心からほっとして微笑んだ。

「それじゃあ、俺は学校に行ってきますね。アスカは家で待っていてくれますか。なるべく早く帰ってくるようにしますから」

「渡羽あー。あたしも行っちゃダメなのー？ 『学校』ってどんなところー？ 行ってみたーい」

魔法界にも学校はあるが、アスカは学校に通っていなかったので、『学校』というものがどんなものなのか興味がある。

「ダメです。部外者は学校に来てはいけない決まりなんですから」「なんでなんでー？ つまんなーい」

「とにかく、ダメって言ったらダメです。それじゃあ行ってきます」「いってらっしやあああい」

不服そうに口を尖らせつつ、アスカは渋々と渡羽を見送った。家を出て歩いていく渡羽を、窓から見下ろしてため息をつく。そのまましばらく、ボーツと空を見上げてみる。

「姫様、暇でしたら魔法の修行でも」

「イヤ。」

即答され、ティアラはがくつと肩を落とした。

「そんなことばかり言っていたら、願い事を叶えるなんて夢のまた夢ですよ？」

「そんなことになったら、魔法力を封じられてしまうんですよ！いいんですか？」

「イヤに決まってるでしょ。でも、修行するのもイヤ」

「どうすればいいんですか、もう」

嘆息するティアラ。しかしすぐに何かを思いつき、アスカの右肩に座る。

「あ、ではとりあえず、人間界を散歩しましょうよ。しばらく人間界にいるわけですし、人間界のことを知っておいた方がいいです。それならいいでしょう？」 姫様

「そうねー。じゃあ、そうする。そこの窓開けて、ティアラ」

「え？ はい」

ティアラは窓の鍵を解錠し、魔法で窓を開けた。

「リィアフィィレストエルク！」

魔法でほうきを出し、アスカはほうきにまたがった。

「ほうきの準備OKっ」と

「姫様、窓開けましたけど、どうする…」

「アファイリグオレヒエウタエルク」

「え？ 姫様？ ま、まさか…」

振り返った瞬間に飛行呪文を耳にし、ティアラはたらりと汗を垂らした。

「リラーチクムマウロウィトリセルク！」

ティアラは止めようとしたが一步間に合わず、アスカは開け放たれた窓から外へ飛び出した！ ほうきに乘って。

「やっぱりい！ 姫様、いけませんよ、窓から外に出たりしては！ 誰かに見られたらどうするんですか！」

半泣きで、ティアラは窓の外で滞空しているアスカに叫んだ。

「大丈夫、大丈夫！ 全然、問題なしよ！」

「なんの根拠もなしに、自信たっぷりに言わないで下さいっ」

「ほーら、何してるのよ、ティアラ。置いてっちゃうわよ」

「あっ、置いていかないで下さい」

ティアラは魔法で窓を閉めてから、ワガママ姫様の後を追った。

2nd 同居（後書き）

追伸列記簿

どうもこんにちは、甲斐日向です。マジ☆ラビ第二話をお届けいたしました。

今回、実は一部だけ、結構悩んだ部分がありました。アスカが渡羽に魔法使いである証拠として、魔法を見せるシーンがありました。アスカはレベルの低い魔法しかうまく使えないという設定なので、最初に考えていた魔法では、少しレベルが高いような気がしたので、急遽変更しました。

結果、火を出すという魔法になったのですが、これってレベル低いんですか？ 今でもちょっと不安といいますが、悩んでおります。うーん、どうなんだろう。

えー、今回の内容について他に語ることはありませんので、ちょっと次回の予告のようなものを。

次回はいいよ、一つ目の願いを叶えることになります。そして謎の青年の正体が…！

と、こんな感じの内容です。マジ☆ラビは毎週土曜もしくは日曜に更新予定です。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

3rd 願い事

高い空を滑空しながら、アスカはぼやいた。

「あいかわらず、どこもかしこも人ばかり。ホント、人間界ってごちゃごちゃしたとこねー。それにしても、渡羽の学校ってどこだろう」

アスカの呟きに、ティアラは目を剥いた。

「姫様！ 渡羽さんに言われたでしょう。来てはいけないって」

「分かってるわよ。ただ、どこにあるかくらい知っておきたいだけよ。行ったりしないわ」

笑顔でそう言うアスカに、ティアラは半眼で、

「本当ですかあ？ そうやっていっつも、ウソついて修行サボったり、どこかに遊びに行ったりして、よく女王陛下に叱られるじゃないですか。今回もそうやってウソついて、学校に行くつもりでしょう」

ずばり心の内を言い当てられ、アスカは内心ぎくりとした。

（ぎくっ。さすがティアラ。あたしの考えてることは全部お見通しってわけね……）

アスカは引きつった笑顔で、念を押した。

「ヤダなあ、ティアラってば。そんなことないわよ。ホントに行かないったら行かないわよ」

「信じられませんっ」

「もう、ティアラってば疑り深いんだから。大丈夫だから心配しないで☆」

駄目押しに、ばちん、とウインクをしてみる。しかし、ティアラには無意味だった。

「それでいつも騙されるんですよねー」

「しつこいなあ。ホントに行かないって――」

「はーっはっはっはっ！」

出し抜けに聞こえてきた聞き覚えのある笑い声に、アスカは静止した。

「ん？ このカンに障る笑い声は……」

冷や汗を垂らして、おそろおそろ振り返った。

「シン！！」

「ごきげんよう、アスカ姫。お元気そうで何よりです」

浮遊魔法で浮いているのだろう。そこにいたのは、アスカにしつこくつきまとっているストーカー男、シンだった。

コバルトグリーンの髪にアイスグリーンの瞳。ストライプのスーツをシックに着こなし、貴族がするように胸に手を当て、恭しく腰を折って一礼した。

「またあんたなの、シン！ なんの用なのよ！」

嫌悪感をあらわにするアスカだが、シンは気にも留めた様子はなく、優雅に前髪を掻き上げた。

「照れなくてもいいんですよ、アスカ姫。別に用などありませんが、あなたに逢いに」

「二度と来ないで！ っていつも言ってるでしょ！？ 何度も言うけど、あたしはあんたなんかだーいっ嫌いなもの！ あんたはあたしの好みの対極に位置するのよ。だからさっさと消えて」

あからさまに嫌そうな顔できっぱりと言い切るアスカ。

シンはくすりと微笑んだ。普通の女の子ならときめいてもおかしくない笑いだった。

が、いかんせんアスカにはまったく効果がない。

「そんなはつきり言わなくてもいいじゃないですか。でも、あなたのそういうところは嫌いじゃありませんよ。ここで逢えたのも何かの縁です。これから僕と一緒に人間界巡りをしませんか？」

ダンスに誘うように、シンは手を差し出した。ぴきつとアスカのこめかみに青筋が浮かぶ。

「あんた、人の話聞いてた！？ 聞いてないでしょ！ あたしはあんたなんか好みじゃないの！ だああれがあんたなんかと、人間界

巡りなんてするもんですか!!

それに、あたしは今、女王試験の真っ最中なのよ。だからあんたなんかの相手なんてしてられないの。もう二度とあたしの前に現われないでよね!!」

早口でまくし立て、アスカは猛スピードでその場から逃げだした。「アスカ姫! ……相も変わらず素早い。さすがは僕のアスカ姫だ。だが、もう少し好感を抱いてくれれば、なおいいのだが」

再度、前髪を掻き上げ、シンは艶やかに笑った。

猛スピードで空を駆け抜け、アスカはしばらくしてから振り返ってみた。そこにシンの姿はない。

「よし、ついてきてないわね」

肩の力を抜くと、アスカはほうきのスピードをゆるめ、憤慨した。「なんなのよ、あいつ! ホント、ムカつく!」

「私もあの人は嫌いです。あーいう身勝手な人は、いつかその身を滅ぼすんです」

肩につかまっていたティアラも、こくこくと首肯して賛同する。

「人間界にまで追いかけてくるなんて、しつこいたらありゃない!」

「まったくですね。…あ、もしかしてあれ、渡羽さんでは…」

「渡羽!?! ホントだ、渡羽だ。じゃあ、もしかしてあれが学校ってヤツかな」

たった今まで怒り心頭だったアスカだが、渡羽の名を聞いてころりと態度を変えた。

「そうなのではないですか? って、姫様、ダメですよ!」

先手を打ち、ティアラはアスカの髪を一束掴んだ。

「いったーいっ。髪引っ張らないでよ、ティアラ! 抜けたらどうするの!?! 放しなさいよ!」

「放したら渡羽さんのところに行ってしまうじゃないですか。渡羽

さんから来てはいけないって言われてるんですから、行っちゃダメですっ」

「いいじゃない、別に。それに…あっ」

「どうしましたか？ 姫様」

アスカは渡羽を上空から見下ろし、まじめな顔つきで呟いた。

「ねえ、あの渡羽の前にあるのって、花壇よね」

「んー…そうですねえ。花壇ですね。でも、なんか荒らされてませんか？ 花がメチャクチャになって…」

キラン、とアスカの目が光った。

「何やら事件の予感！ 行くわよ、ティアラ！」

「えっ？ あ、いつの間に髪を…ああ、もう、待って下さい、姫様あー！」

焦りを顔に滲ませ、アスカは渡羽のもとへと急降下していった。

休み時間、渡羽は花壇の様子を見に外に出てきた。校舎の横手にあるその花壇は、園芸部のみんなで整えたもの。

そのうちの一つ、渡羽が担当している花壇の前で、渡羽は愕然とした。

花壇の花がなぜ残らず切られている。

無意識に、水の入ったじょうろを取り落としていた。水がアスファルトに広がっていく。

「なん…で…」

昨日まできれいに花が咲いていたのに。その面影は今やどこにもない。

花は全て、刃物のようなもので茎から切られ、花びらが散り、土が散乱している。

「渡羽！」

渡羽の後ろに降り立ったアスカは、ほうきを消して渡羽に駆け寄った。

思いがけない声に、渡羽は吃驚の声を上げた。

「え？ アスカ！？」

「その花壇、どうしたの！？」

問いかけに、渡羽は俯いて顔を逸らした。

「……なんでもないですよ。それより、どうして君がここにいますか？ 来てはいけないうって言ったでしょう」

「今はそんなこと言うてる場合じゃないでしょ！？ その花壇、もしかして渡羽のじゃないの？」

「そうですよ。俺が作ったものです」

「メチャクチャに荒らされてるじゃない！ 一体、誰がやったの！？」

「分かりません。さっき来てみたらこうなって……

この花、やっと咲いたと思ったのに」

「え……？」

渡羽は痛ましげに、花壇をもう一度見て、腰を落とした。

真っ二つになっている花の一つを、手で丁寧にすくい上げる。

「この花は、昨日咲いたばかりなんです。なかなか咲かなくて、あきらめかけてたんですけど、昨日見てみたら咲いてたんです。なのに……」

「渡羽……」

渡羽の背中が、痛いほどに悲しい。アスカは胸に当てた手をきゅっと握りしめた。

（そうだよね。渡羽にとって、花は何よりも大事なものなんだ。一生懸命育てた花を……やっと咲いたばかりの花を、こんなメチャクチャにされて悲しいよね。誰がこんなひどいことをしたんだろう。これじゃあ渡羽がかわいそうだよ……）

その時、ティアラが耳元で囁いた。

「姫様、チャンスですよ。願い事してもらおう」

「あ、そっか。ねえ、渡羽！ 願い事して。『花を元に戻して』って！」

渡羽の隣まで駆け寄り、アスカは明るい声で言った。

「え…？ でも」

「そうすれば花も戻るし、あたしも課題一つクリアーできるし、えーとこういうの人間界ではなんて言うんだっけ。…あ、そう！ 一朝一夕よ！」

「姫様、それを言うなら一石二鳥では？」

ティアラの冷静なツッコミが入る。

「うっ。……なんでもいいじゃない！ とにかく、渡羽、早く！ このペンダントに向かって願い事言って！」

アスカは常時、胸にかけているペンダントを外し、渡羽に手渡した。ペンダントには赤・青・緑、三つの丸い宝石が三角の形に並んでいる。

渡羽はアスカの気迫に押され、おそろおそろペンダントを受け取った。

「じゃ、じゃあ…：俺の花壇を元に戻して下さい…：」

渡羽が願いを言うと、三つの宝石が発光し、ペンダントが宙に浮いた。

「パーガウエクオ||リ||ギオン||ラーチ||ポオアタエルク・リ||ギオン||オツツイ||オンザツキィエルク！」

アスカが呪文を唱える。呪文に呼応し、三つの宝石から発せられている光が混ざり合い、虹色になった。

「うわっ」

光の眩しさに、渡羽は目をつむった。虹色の光は大きく広がり、花壇を包み込んでいく。

その光が徐々に消えていくと、渡羽はそろそろと目を開き、目を瞠った。

花壇が元通りのきれいな状態に戻っていたのだ。

あの咲いたばかりだった花も、小さいながら顔をこちらに向けている。

「すごい…：花壇が元に戻った。花もちゃんと咲いて…：」

信じられない思いで、渡羽は咲いたばかりの小さな花に触れてみた。確かに本物の花の感触。昨日の感動が蘇る。

光を失ったペンダントはアスカの手元にゆつくと降りてきた。三つの宝石のうちの一つ、赤い宝石が白に変わった。

「ふう、パーガウエクオの一つが白になったわ。これで一つ目クリアーね♪」

「お見事です、姫様。普通の魔法はうまく使えないのに、パーガウエクオを操ることだけは失敗しないのは、やはり王家の者だからでしょうか」

にこにこ笑うティアラのセリフに引かかるものを感じ、アスカはこめかみを引きつらせながら、笑顔でティアラの髪を両手できゅつとつかんだ。

「ふふふふ。ティアラ？ だけってのは何よ、だけってのは！」

「あああ、すみませんすみませんっ。もう言いませんから髪の毛引っ張らないで下さいーっ」

「アスカ！」

渡羽は勢いよくその場で立ちあがった。

「ん？ 何？ 渡羽：わっ」

ティアラをぺいっと放り出し、アスカが渡羽に向き直ろうとした時、渡羽ががしっとアスカの両手を握りしめた。

「ありがとうございます！ 花壇を元に戻してくれて。うれしいです。本当にありがとうございます！」

アスカは渡羽のうれしそうな顔を間近で見て、どきっと赤面した。「ど、どういたしました」

満面の笑みの渡羽に、アスカはどぎまぎした。こんなに近くで男の子の顔を見たのは初めてだ。

（わく、渡羽に手握られちゃった）

アスカは渡羽に握られた手を見つめた。まだほんのりとぬくもりが残っている。渡羽はるるんと花壇に戻り、花を眺めている。

視線を渡羽の後ろ姿に移し、アスカは微笑んだ。さっきまでの悄

然とした背中とは打って変わって、喜悦に満ちている。

（でもよかった。渡羽に喜んでもらえて。渡羽がうれしいと、あたしもうれしい気持ちになる。こんなの、初めて……

願う事はあと二つ。このままいけばなんとかなるかも。よしっ、がんばるぞ！）

アスカは頬を朱く染めて、渡羽の笑顔を見ながら意欲を燃やした。

三人から少し離れた木の枝に止まっていたカラスが「カア」と一鳴きし、どこかへと飛び去って行った。

3rd 願い事（後書き）

追伸列記簿

どうもこんにちは、甲斐日向です。マジ☆ラビ第三話をお届け致しました！

ふふふ、今回でようやく、アスカにつきまとう謎の男の正体がわかりましたね。とは言っても名前くらいしか出てないんですけど！彼は書いて楽しいんですけど、実際にいたら嫌だなーと思っています。ストーリーカーは犯罪だぞ！しかし仲間内では結構人気があったりする奴。

そして後半では、渡羽の一つ目の願いが叶えられます。渡羽って本当に花が好きなんですねー。趣味・園芸。なんて地味なんだっ。きつと老後は盆栽に没頭するタイプだっ。それか縁側でお茶するりながら日向ぼっこ。ほのぼの。

今回で一つ目の願いが叶い、アスカの試験の課題は一つクリアです。

さてさて、残りの願いはなんなのか。そしてアスカは叶えられるのか。

第一部としては今回が折り返し地点です。まだまだ先は長いので、どうか二人の行く末を見守ってやって下さい！

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

4th 期限

アスカが渡羽家に居候してから六日。この間に、アスカはだいぶ人間界に慣れた。

人間界の文字を覚えたいというアスカに、別に覚えなくても、魔法を使えば読み書きできるので？——魔法界と人間界では言語が違うのに、話を通じるのは魔法を使ったからだと教えられたので——そう言ったのだが、文字は言語と違って魔法で変換できないそうだなので、渡羽が学校から帰った後などにこつこつと教えた。

来た当初は、人間界の文字の読み書きができなかったアスカだったが、渡羽に教わった今ではすらすらと難しい文章も書けるようになった。

勉強が苦手だというアスカだが、頭が悪いというわけではないようだ。

ティアラも「飲み込みは早いのですが、努力するのが嫌いで、身につけた力を生かすのが下手なんですよねえ」と笑っていた。

その後、聞きつけたアスカに「別にいいでしょ！ 勉強できなくて死ぬわけじゃないんだからっ」と怒鳴られていたが。

母にもすっかり気に入られ、時々、まるで本当の親娘のように見える。

魔法修行の方はと言うと……あまり進歩していないようである。

そうして渡羽もアスカも、日々の生活を通して少しずつ、異性として互いを意識するようになっていた。

それは淡い恋の花。ゆっくりと、けれど確実に、つぼみは開き始めている。

真穂市立・戸尾ヶ崎中学。渡羽の通う中学校である。

そこそこ古い学校で、校舎や学校の備品にも傷や汚れが目立つ。明日から夏休みで、皆、神妙な顔をして担任教師の話を聞いているが、内心はうれしくてたまらない。

帰りのHRが終わり、渡羽が帰る用意をしていると、前触れなく軽いバックチョークをかけられた。

「あーすか！」

「うわあっ」

「ようやく終わったなー。明日っから夏休み！ 待望の素晴らしき夏の休暇！」

学生やっててよかったと思えるのはこの瞬間だけだぜ」

渡羽にバックチョークをかけているのは、少し浅黒い肌で、金髪に紫の瞳の男子生徒。額にはバンダナを巻いている。

彼はバルカン（あだ名）、渡羽の旧友である。

「あとはテストと宿題さえなきゃあなあ。せつかくの長い休みは楽しみてえもんな。

なあ、飛鳥？」

「うぐぐ…あの、バルカン……苦しい…です……」

首に回されている腕を叩いてギブアップを示す。

バルカンは百七十センチを軽く超える長身で、元・柔道部。

対して渡羽は百六十センチそこその園芸部。体格も力も全然違う。

バルカンは「お、ワリイワリイ」と腕を放した。そこへ、一人の女子生徒が歩み寄ってくる。

「もう、バルカンくんったら、渡羽くんに乱暴はよしてよ！」

ダークブラウンのショートヘア。たれ目がちで目元の小さなほくろがよく似合う。女生徒は渡羽を心配そうに覗き込んだ。

「大丈夫？ 渡羽くん」

「…ええ、もう大丈夫ですよ、高尾さん」

弱々しく笑みを返す渡羽。女生徒——高尾明衣子^{たかおあいこ}は少しほっとして、次いでバルカンを睨みつけた。

「渡羽くんはバルカンくんとは違うんだから、ちゃんと力加減考え
てよ」

「いやー、ついな。小学校からのつき合いなもんだから。飛鳥なら
慣れてるし」

「そういう問題じゃないでしょ？ もう」

あきれて肩をすくめる明衣子。バルカンは豪快に笑うと、ぺしっ
と渡羽の背中を叩いた。

「安心しろって。飛鳥こいつはそんなにヤワじゃねーよっ」

本人は『ぺしっ』のつもりだったが、渡羽にしてみれば『ぼしっ』
だった。

「あいたあっ！」

「バルカンくん！！」

「おっと、つい。ま、そりやともかくさ、明日から夏休みだろ？

どっか遊び行こうぜー、飛鳥あゝ？ な？ な？」

せき込みながら、渡羽は涙目でバルカンを振り返る。

「な…何を、言ってるんですか。俺たちにそんな余裕は、ないでし
よう？ 俺たちは受験生なんですから」

渡羽の一言に、バルカンはだうーん、とものすごく嫌な顔をした。
受験生。そうなのだ。渡羽たちは現在中学三年生。エスカレータ
ー式の学校ではないので、当然、間違いなく受験生なのだ。

バルカンだって忘れていたわけじゃない。しかし、考えたくない
ことだってある。

せっかくの夏休み。中学最後の夏休み。それを受験勉強一辺倒で
終わりにしたくはない。

頭を抱え、身をよじりながらバルカンは絶叫した。

「ぐわああああっ、それだけは考えないようにしてたのにいつ！
ぐうう、さすがは飛鳥。見事なカウンターだ。もうおまえに教え
ることは何もないっ」

演技くさく、感慨深げにバルカンは涙を流して笑った。明衣子は
渡羽の背中をさすりながら、ため息をついた。

「バルカンくんってば、遊ぶことしか考えてないんだから」

「まあ、バルカンらしいと言えばらしいですけどね」

「受験かあ……そうよね、夏休みだからって、わたしたちは浮かれていられないのよね。」

：渡羽くんは、慶星^{けいせい}高校、だっけ？」

「はい。高尾さんもそこを受けるんですよね。高尾さんなら、もつと上の高校を目指してもいいと思うんですけど」

明衣子がかあつと頬を赤らめた。まさか、渡羽が狙っている学校だからだとは言えない。

小首を傾げている渡羽と、赤くなつて俯いている明衣子の間に、バルカンが底抜けに明るい笑顔で割り込んできた。

「はいはい！ オレも慶高狙いだぜい！ みんな仲良くお仲間だな！」

二人の肩に腕を回し、バルカンは楽しげに笑う。本人は無自覚だし、明衣子の渡羽への気持ちにも気づいていない。

（わざとじゃないのは分かってるけど……少しくらいは空気を読めないの！？）

明衣子はプルプルと怒りで震えた。

当事者である渡羽と言え、いまだに明衣子が慶星高校を選んだ理由を考えていた。

渡羽が帰宅すると、アスカとティアラが笑顔で出迎えてくれた。

「あ、おかえりなさいませ、渡羽さん」

「おかえりー、渡羽」

「ただいま、二人とも」

家の中に上がろうとすると、アスカが軽く制止した。

「ねえ、渡羽。疲れてるとこ悪いけど、ちょっと付き合ってくれない？ 渡羽に見せたいものがあるの」

にっこりと笑うアスカ。渡羽は微笑みを返した。

「あ、はい。いいですよ」

アスカは渡羽を連れて外に出た。庭を通り、どこかへと歩いていくアスカに、渡羽は不思議そうに問いかけた。

「どこに行くんですか？ 見せたいものって……」

「えへへ、それは見てのお楽しみ♪」

スキップをしそうな勢いで庭の奥へ進んでいくアスカ。その時だった。

「はーっはっはっはっ！」

聞き覚えがありまくる、嫌なバカ笑いが聞こえてきたのだ。

「うげっ、このバカ笑いは……」

「な、なんですか、この笑い声は……」

苦虫を噛み潰したような顔をするアスカ。渡羽は驚いてきよろきよろと周りを見回している。

「姫様、渡羽さん、あそこです！ 屋根の上に！」

ティアラが指さす先を見て、アスカは眉を吊り上げた。屋根の上で腕組みをして立っている青年が一人。

「うわ、ホントだ。あんたねえ、迷惑だから降りてきなさい！ 人のこと見下ろしてるんじゃないわよ！」

「姫様、そういう問題ではないと思うのですが……」

「ふふふ、あなたの仰る通りです。今、そちらに参りましょう。とうっ」

青年は屋根を蹴って飛び上がり、くるりと前方宙返りをした。渡羽が目を瞠る。

青年の体はそのまま落ちることなく、ゆっくりと地上に降りてきた。

「お久し振りで、アスカ姫。そして、初めましてだな、地味男君じみおとこ」
アスカに向かって恭しく礼をし、シンは渡羽に目を留めると、ふゝ、とうすら笑いを浮かべた。

空から降りてきたので、一瞬驚いた渡羽だったが、アスカの知り合いらしいと知って、同じ魔法使いなのだと理解した。

「誰ですか、あなたは？」

わずかに警戒心を見せる渡羽に、シンは前髪を掻き上げて嗤った。
「ふっ。君のような凡人君に名乗るような名はないが、あえて名乗ってやろう。」

僕の名はシン。アスカ姫の婚約者フィアンセさ」

「フィ、フィアンセ！？」

それはつまり、将来を誓い合った相手と言うことでして。しかし、アスカはシンの言葉をそっけなく一蹴した。

「何言ってるのよ、シン！ 渡羽、本気にしちゃダメよ。全部、あいつが勝手に言ってるだけなんだから！」

「あ：そうなんですか？」

呆氣にとられつつも、渡羽は内心ほっとした。

「相変わらずつれませんね、アスカ姫。ところで、修行の方はいかがですか？」

「なんであんたに、そんなこと言わなくちゃいけないのよ！ いいじゃない、どうなってたって。あんたには関係ないんだし」

「その口振り、どうやら順調に進んでいないようですね」

凶星を当てられ、アスカはばつが悪そうに怒鳴った。

「う、うるさいわね！ あんたには関係ないでしょ！？」

それに、あたしの前に、二度と現われないでってこの前言ったでしょ！？ さっさとどっか消えてよ！」

ぎゃんぎゃんと喚くアスカに、シンはいつもの艶やかな笑みを浮かべず、少し真剣みを帯びた表情で前髪を掻き上げた。

「いつもならそうして差し上げたいのですが、そうもいけなくなっただですよ。アスカ姫、あなたはまだ願い事を一つしか叶えていないようですね」

真面目な顔でまっすぐ自分を見つめてくるシンの瞳を見返し、アスカは初めてシンの前で静かに声を発した。

「！ ……なんであんたがそんなこと知ってるのよ」

「アスカ姫のことなら、僕はなんでも知っているからです。」

それよりいいんですか？ そんなにのんびりしていて。期限まで、あと一日しかないというのに」

シンの言葉に反応したのは渡羽だった。

「…え？ 期限って…：…どういふことですか？」

「なんだ、アスカ姫から聞いていなかったのか？」

女王試験には一週間の期限があり、その期限以内に、選んだ人間の願いを三つ叶えなくてはならないのだ」

「三つの願いを叶えられなかったら、罰を受けるというのは聞いていましたけど、期限があるなんて…：…」

「もし、期限以内に願いを叶えられなければ、罰を受けることになるのさ。」

しかし、どうせこの男は願い事などしない。僕はあなたに罰を受けさせたくありません。

幸い、この試験は棄権することができます。ですから今すぐ棄権し、僕と一緒にマジカリアに帰りましょう」

「イヤよ！ 期限はまだ一日あるんだから平気よ！ 勝手になんでも決めつけないで！」

「アスカ姫、僕はあなたのためを思ってるんです。さあ、帰りましょう！」

シンがアスカの腕を引っ張る。アスカは顔をしかめた。

「痛っ。ちょっと何するのよ！」

「シン様！ 姫様への乱暴はおやめ下さい！」

ティアラが二人の間へと滑り下りた。シンはうっとうしげにティアラを睨んだ。

「付き人の妖精がごちゃごちゃと…邪魔をしないでもらおうか」

シンの鋭いまなざしに一瞬怯んだが、ティアラは一生懸命、アスカからシンの手を離そうとする。

「そうはいきません。私には付き人として、姫様を守る義務があります！ その手をお放し下さいっ！」

「なんと言おうと、アスカ姫は連れて帰るぞ！」

「イヤだつてば！ 放して！」

アスカはシンの手を振り払おうともがく。

「やめて下さい。嫌がってるじゃないですか！」

渡羽はシンの手をアスカから引きはがし、シンを突き飛ばした。

「くっ」

「アスカ、こっちへ」

「姫様、大丈夫ですか！？」

泣きそうな顔でティアラがアスカを見上げる。アスカは「うん、なんとか」と手をさすった。

「：ふっ、この僕を突き飛ばすとはな」

シンは悔しげに顔をゆがめた。渡羽はアスカを背中にかばい、珍しく怖い表情を浮かべた。

「どうしてあなたは、相手の気持ちも考えずに、自分の考えを押しつけようとするんですか？」

あなたが何者なのか、アスカとどういう関係なのか知りませんが…
あなたのような身勝手な人に、アスカは渡せません！」

「渡羽…」

見据える渡羽の視線を真っ向から受け止め、シンは一度目を伏せ、きびすを返した。

「：ふん。そこまで言うのなら、今日のところは退いてやる。

明日、また迎えに来ますよ、アスカ姫」

肩越しにアスカを見、一度も笑うことなく、シンは魔法で姿を消した。消える瞬間に、アスカはシンの背中にあかんべーをした。

「来なくていいわよーだ。べーっ」

「アスカ。どうして期限のことを言ってくれなかったんですか？
言ってくればそれまでに願い事を見つけたのに」

困惑気味に渡羽が言った。アスカは憂い気な表情になり、しゅんと俯いた。

「わざわざ言うほどのことじゃないと思ったから。それに……」
(もし、願い事を全部叶えちゃったら、渡羽といられる時間が減っ

ちゃう。そうなりたくなかったんだもん……)

「アスカ？」

黙り込んでしまったアスカに、渡羽は怪訝な顔をする。

アスカはパツと顔を上げて、暗い雰囲気^{ふっしょく}を払拭^{はら}するように明るい笑顔を浮かべた。

「別にいいじゃない！ 明日までに願い事見つければ。

もう戻ろう。ホントは渡羽に見せたいものがあつたけど、あいつのせいでそんな気分じゃなくなっちゃったし」

そう言うと、アスカは真っ先に来た道に戻った。

「あ、待って下さい、アスカ」

慌てて渡羽も来た道に戻って行った。ティアラは二人の間に流れる微妙な空気に、表情を曇らせた。

その夜。アスカは、ベッド上で仰向けになり、ぼんやりと天井を見つめた。

「あーあ、今日が人間界で過ごす最後の夜か。さっきは、まだ一日あるから平気、なんて言っただけど、実はかなりヤバイのよね。

渡羽はマジメだから、たいてい『自分の力でなんとかします』って、願い事してくれないんだもん」

ため息をついて、アスカは目をつむり、ごろんと横を向いた。

(このまま願いを三つ叶えられなかったら……ううん、たとえ叶えることができたとしても、女王になるために、あたしはマジカリアに帰らなくちゃいけない)

目を開くと、見慣れた部屋が見える。一週間過ごした家。明日、あたしはここを出ることになる。でも…

「シンの言うとおりの棄権すれば、またいつか、試験のためにここに来ることができる。渡羽に逢えるんだ。

でも、それはいつになるか分からないし、あいつの言うとおりにするのは、なんかしゃくだし……うーん……」

あれこれ悩んでいると、次第に眠気が襲ってきた。アスカはそのまま眠りに落ちた。

夢の中、アスカは一人、広い草原のようなところに立っていた。その後ろにシンが現れる。

「アスカ姫…アスカ姫」

「…あれ？　ここ、どこ？」

「ここはあなたの夢の中ですよ」

二人の声が、草原の中で響き渡る。広い空間なのに、なぜか声が反響して聞こえる。

「夢？　じゃあ、あたしいつのまにか寝ちゃったんだ」

はっと気づいて、アスカは勢いよく後ろを振り向いた。

「…って、シン！　なんであんたがここにいるのよ。人の夢にまで出てこないでよっ。最悪だわ、この夢！」

「アスカ姫、僕と一緒にマジカリアに帰りましょう」

夢の中のシンは笑っていないかった。静かな声で、諭すように言葉を紡ぐ。

「しゅっこいなあ。あたしはまだここにいます！　渡羽のそばにいたいの！」

帰りたきゃ、あんた一人で帰りなさいよ。人の夢にまで出てきて……目障りなのよ！」

「そう邪険にしないで下さい。たとえ今は帰る気がなくとも、いつかマジカリアに帰る時が来るんです。

人間の願いを三つ叶えれば、あなたは女王になる資格を得る。

そうなればマジカリアに帰り、女王として生きる。二度と人間界には降りられなくなる。

人間の男に恋をしたって、叶わぬ恋ですよ。あきらめるべきです」
押しつけるわけでも、無理強いするわけでもなく、ただ事実を述べているだけだ。

本当は、アスカも分かっている。シンは事実しか言っていないことを。

「……分かってるわよ、そんなこと。でも……仕方ないじゃない！好きになっちゃったんだもん！」

ここぞとばかりに、アスカは叫んだ。胸に秘めた渡羽への想いを。「渡羽とずっと一緒にいたいのに！ 渡羽と離れるなんて…渡羽に逢えなくなるなんて…そんなの…そんなの絶対にイヤ！！」

「アスカ姫……」

シンは複雑そうな表情を浮かべた。ゆらりと、蜃気楼のようにシンの姿が揺れた。

「…様！ 姫様！ 朝ですよ。起きて下さい、姫様！」

「ん……ティアラ…？」

翌朝、アスカはティアラの声で目を覚ました。目に涙がたまっている。

「おはようございます、姫様。大丈夫ですか？ だいぶうなされていましたけど……」

不安げな顔でティアラはアスカの膝の上に立ち、見上げた。姫様の涙なんて、何年ぶりに見ただろう。

涙をぬぐい、アスカは笑った。

「大丈夫。渡羽は？」

「少し前に学校に行かれましたよ」

「そう……」

アスカは表情に影を落とした。やはり、どうしても頭を占めるのは期限のことばかり。

（今日で渡羽とはお別れ……ヤダな。帰りたくない。

あたしは渡羽のことが好き。でも、渡羽は？ 渡羽はあたしのこと、どう思ってるんだろう）

『あなたのような身勝手な人に、アスカは渡せません！』

昨日の渡羽の言葉が蘇る。普段、穏やかな渡羽の強い声音。

（あの言葉は：シンを追い返すために、なんとなく言っただけなのかな……）

あの言葉を聞いた時、すごくうれしかった。渡羽はあたしのこと、大事に思ってくれてたんだって。

でも、直接聞いたわけじゃないから、渡羽の本心は分からない。

渡羽の本心が知りたいよ……）

「あのー、姫様？　姫様！」

いつの間にかティアラはテーブルの方に飛んで行って、一通の封筒を持ち上げて見せた。

「へ？　何？　ティアラ」

「この部屋の窓に、姫様宛てに手紙が届いていたんです。差出人の名前からして、使い魔を使ったみたいですけど」

「ってことは、シンね？　もう、ホントにしつこいわね。なんだった言うのかしら」

ティアラから手紙を受け取り、封を開けるアスカ。しかし、手紙を開いてすぐに怪訝な顔をした。

「あれ？　ねえ、ティアラ？　これって、あたし宛の手紙よね？」

「はい。宛名には『アスカ姫へ』って書いてありましたから」

「おかしいなあ。これ、頭に『渡羽へ』って書いてある」

「え？　渡羽さん宛なんですか？」

「うん。でも、封筒はあたし宛だったし、読んじゃえ。どうせ、渡羽への悪口とか書いてあるんだろうし。えーと、何々？」

【今日の午後七時、修羅坂に來い。ただし、一人に限る。決してアスカ姫を連れてくるな。連れて來た場合、万死に値する】

……何これ。まるで挑戦状みたいね」

ティアラも手紙を覗き込み、文字を追ってからため息交じりに言った。

「まるでどころか、これは完全な挑戦状ですよ。どうしますか？　渡羽さんに知らせます？」

「渡羽を危険な目に遭わせたくないわ。でも、あいつのことだから、無視したら何をしてくるか分からないし……仕方ないわね」

「それでは、私が知らせてきます。姫様はここで待ってて下さい」魔法で窓を開け、ティアラは渡羽の学校を目指して飛んで行った。アスカはティアラを見送り、大仰に肩をすくめた。

「今日が最後だっていうのに、今朝の夢といい、ホント、やな奴。……ん？　もう一枚、手紙がある」

二枚目の手紙に気づき、アスカは何気なくそれを開き、しばらくして目を瞠った。

4th 期限(後書き)

追伸列記簿

とうとう梅雨入りし、じめじめした日が続いていますね。雨の日はなんとなく体がだるだるな甲斐日向です。

とはいっても今日はからりと晴れています。でも午後から少し曇りがち。僕はこれくらいがちょうどいいですね。

どの天気が一番好きかと訊かれれば迷わず「曇り!」と答えますよ。

あんまり関係ないですが、昨日からとある中華街で買ったカンフースーツを、パジャマ代わりにしています。

黒の長袖なのでちょっと暑いですが、生地が薄いので通気性はよい。ハズ。

さてさて、マジラビ第四話をお届けしましたが、今回はちょっとシリアスですねえ。佳境に入ってきたといえますか。むふふふ(怖いぞお前)。

今回はシンの登場がカギとなっていますね! 奴のせいでちょっとアスカたちがかき回されちゃって、何やら不穏な空気というか気まずい雰囲気……嗚呼。

でも、渡羽ちよつと頑張ったね。ティアラもね。えらいえらい。むう、なんかシン悪者だな。悪役だな。でも俺は悪役も好きだぞ! (何が言いたい)

しかし好きと言えば、初めの方に出てきた新キャラのバルカンも好きですねー。なんて言うか……ああ、渡羽にも友達いたんだなあ……と(そこかよ)。

それは冗談だとして、バルカンのバカっぽさというか、渡羽と対照的な明るさが気に入っています。アスカと並んだら、めっさ楽しそうですね。元気っ子二人で。

明衣子もアスカと対照的にちよつと大人しげなところが。とにかく、主役二人と対照的な二人がよいのです！ この二人は今後レギュラーに…なる？ どうでしょう。

はてさて、次回は渡羽とシンが決闘しちゃいます。アスカを巡って…っ。修羅場？（笑） 二人の決闘はどうなるのか。アスカの恋は実を結ぶのか。いよいよ決着が！

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

5th 決闘

その日の午後七時。渡羽は、修羅坂に向かった。あたしも行くと言うアスカに、渡羽は一人で大丈夫だと言って聞かせた。

修羅坂につくと、シンは修羅坂の上で腕組みをし、仁王立ちしていた。夏の熱気をはらんだ風が、二人の間を吹き抜ける。

「ふふふふ。怖じ気づかずに来たか。まあ、そうでなければ、張り合いがないがな」

「一体なんだと言うんですか、あなたは。アスカにしつこくつきまとったりして。しかも、あんな挑戦状まで送ってくるなんて」

シンは渡羽を見下ろし、笑みを消した。

「君だって大事な花に害虫がついていたら、排除しようとするだろう？ それと同じだ。」

アスカ姫に近づく害虫は排除する。今までそうしてきたのだ。たとえ人間であろうと、容赦しないぞ！」

「ちょ、ちょっと待って下さいよ！ 俺は別にそんなつもりは…」

「問答無用！ 行くぞ！」

シンは地を蹴り、空中に立った。渡羽に右手を向け、呪文詠唱を始める。

「ビフォォー！！ワイズエッジエルク・リ！！パナト！！ファイーロ！！ビュッセーエルク！」

すさまじい風が刃となり、渡羽に襲い掛かる！ 渡羽は悲鳴を上げた。

「魔法を使うなんて卑怯ですよ！ 俺は丸腰なのに…うわっ、眼鏡が！」

強風によって、渡羽の眼鏡が飛ばされる。

「果たして、この風刃の嵐から逃げ切れるかな！？」

にやりと笑うシン。渡羽は四方八方から襲いかかってくる風刃を必死でよける。そうしなければ、下手をすれば死ぬ！

その様子を見ていたシンは、ふと違和感を感じた。

(：ん？　なんだ、これは)

ほんの微かだが、魔法力を感じる。自分のものでも、アスカ姫やティアラのものでもない、別の魔法力。

しかし、この町に——この人間界に、今のところ自分たち以外の魔法使いは来ていないハズだ。もしもいるなら、遠い国でない限り魔法力を感じ取れる。

だが、今まで自分たち以外の魔法力を感じたことはないし、今感じている魔法力はすぐ近くからだ。強まったり弱まったりと不安定だが、確かに感じる。

(いったいどこから……)

渡羽を目で追いながら、シンはまさかと思った。

「なんでこんなことに……！　俺が何をしたって言うんだ！」

渡羽の叫び声に、シンははっと我に返った。そんなわけがない。

一瞬頭をよぎった可能性を否定し、シンは小さく舌打ちをした。

「全て避けきったか。なかなかやるな。では、これならどうだ？」

リローストⅡカルネーⅡアウミⅡロアジェルエルク・リⅡパナト

ⅡフィーロⅡエンⅡススワールエルク！」

渡羽の頭上にいくつもの青い火の玉が出現した。それらは一斉に、渡羽に向かって飛来する。

「！！　火の玉が落ちてくる！？　くそっ」

「それをよけられないようでは、アスカ姫のことはあきらめるんだな！」

「そんなこと言われても……っ。うわあああああ！」

いくつもの青い火の玉が隕石のごとく落ちてくる。渡羽は覚悟を決めて固く目を閉じた。まさにその時！

「渡羽！　危ない……！」

「姫様、いけませんっ」

いるはずのない人の声。渡羽は目を開け、声のした方に目を向けた。

「え？ アスカ！？」

物陰から飛び出したアスカは、早口で呪文を唱える。

「ルンウェーデヴァイデンゴーゼエルク・リッワノッサケナミ
パッリエクスチャエルク！」

間一髪で間に合った。アスカたちの頭上に光の防壁が現れた。アスカは防壁を押さえるように、両腕を翳している。

「ア、アスカ……」

「大丈夫、心配しないで」

肩越しに渡羽を振り返ると、アスカは少しつらそうにだが笑った。

「渡羽さん、眼鏡ですっ。どこも壊れていないですよ」

「そうか。ありがとう、ティアラ」

ティアラが拾ってきた眼鏡を受け取り、渡羽は眼鏡をかけた。渡羽をかばうアスカを見て、シンは動揺していた。

「アスカ姫、なぜここに……！」

「渡羽はあたしを守る！ 渡羽を傷つけさせはしないわ！」

「アスカ……」

渡羽はアスカの頼もしい背中を見つめた。

——初めから、敵わないと思っていた。相手は魔法使い。

ただの人間である自分に、太刀打ちできるわけがない。

——ずっと、叶わないと思っていた。相手は魔法の国の王女。

ただの人間で、平凡で、地味な自分では、釣り合うわけがない。

けれど、たとえば魔法使いであるシンが相手でも、アスカが助けてくれる。

一人ではなくて、力を貸してくれる。

身を挺して守ってくれるのは、それだけ自分を想ってくれているということ。

一方通行じゃない、恋心。二人でなら、乗り越えていける。

次々と防壁に阻まれる火の玉。しかし、威力が凄まじく、防壁の方がダメージを受けていた。

「ううっ、壁が……もたな……きゃあああっ」

ついに防壁が破られ、アスカは火の玉の直撃を受けた。

「アスカ!」「アスカ姫!」「姫様あっ!」

三人の悲鳴が重なる。アスカはぐらりと前のめりに倒れた。辺りに焦げた臭いが充満していく。

よろめきながら駆け寄り、渡羽はアスカを抱き起こした。シンも滑空し、アスカのそばに降りてきた。

「アスカ! アスカ、しっかりして下さい! アスカ!」

渡羽の呼びかけに、アスカはうっすらと目を開いた。焦点の合っていない目で、渡羽の顔を認めると、か細い声で名を呼んだ。

「……と……ば……」

「アスカ……」

「渡羽……無事?……よかった……」

弱々しく笑うアスカ。渡羽は泣き笑いのような顔で、問いかけた。

「俺は無事です。アスカのおかげです。でも、どうして来たんですか。俺一人で平気ですって言ったのに……」

「……どうしても……心配になって……だって、渡羽……人間だもん……魔法、使えないでしょ?……だから……」

切れ切れに言いながら、それでもアスカは笑っている。渡羽は痛ましくて、首を横に振った。

「分かりました。分かりましたから、もうしゃべらないで下さい……」

アスカは目だけを動かして、渡羽の横に立っているシンに語りかけた。

「……シン……お願い……渡羽は……渡羽だけは、許して……」

渡羽は……あたしの……大事……な……」

それを最後にアスカは力尽き、目を閉じた。完全に動かなくなったアスカに、渡羽は愕然とした。

「――アスカ? ……っアスカ! アスカ、目を開けて下さい、アスカ!」

「アスカ姫!」

「姫様ーっ、冗談はやめて下さいよ!？ 起きて下さい、姫様あっ
ティアラが泣きながら、アスカの胸元に飛びついた。

渡羽はそっとアスカの体を横たえ、拳を握りしめて、シンに掴み
かかった。

「……っ。お前、魔法が使えるんだろ!？ なんとかしろよ! お
前のせいでこんな……っ」

胸倉を掴む渡羽の、かつてない激しい瞳を見つめ、シンは静かな
声で返した。

「無理だ。僕は死者を生き返らせる魔法は使えない。それに、死者
の蘇生魔法は禁断の魔法。どうすることもできないんだ」

「そんな……そんなことって……」

シンの言葉に、渡羽は呆然とシンから手を放し、へたり込んだ。
その目から涙があふれ、嗚咽を漏らす。

「アスカ……俺はまだ……君に何も伝えていない……まだ君に……」

(好きだと言っていないんだ……)

やるせない思いで、渡羽はうなだれた。こんなことなら、もっと
早く気持ちを伝えていればよかった。

自分とは違うと、身分も立場も住んでいる場所も、何もかも違う
からと、遠慮して気持ちを押し隠していなければ。

後悔と自責と深い悲しみが、渡羽の心をしめつけた。

「お願いだ……アスカ。もう一度笑って……。生き返ってくれ。俺は
……俺は。」

笑っている君が好きだったんだ……!」

「ホント? 渡羽」

「はい……」

「じゃあ、もう一度言って」

「何度でも言います。俺はアスカのことが好……き……っ。って、え?」

今、聞こえるはずのない声がしたような。渡羽はおもむろに顔を
上げ、

「確かに聞いたわよ。渡羽?」

倒れたままにつこり笑っているアスカを見た。

瞬間、シヨックのあまり、ぴし、と渡羽の眼鏡にヒビが入った。

「アアア、アスカアア！！？ な、な、なぜ！？ 生き返ったんですか！？ でも、そんな魔法は使えないって！」

「ごめんね、渡羽。今のは全部演技。お芝居よ」

「はあ？」

渡羽の目が点になる。

「お二人の決闘も、全て仕組まれたことだったのですよ。なぜなら……」

「ティアラ、その先は僕から話そう。渡羽、なかなかの告白だったぞ。これならアスカ姫を……いや、我が娘を安心して任せられる」
言っている意味が分からず、渡羽は頭上にいくつもの「？」を浮かべた。

「はい？ 我が娘って……」

「いい加減、変身解といたら？ 父様」

「うむ」

「ええええええええ！？」

笑顔で言ったアスカの言葉にも驚いたが、ぼん、と白煙にシンの体が包まれたかと思うと、シンは中年の男性の姿になっていた。

開いた口が塞がらないとはこのことだ。唾然とする渡羽。アスカは立ち上がって服をはたいた。

「よいしょつと。作戦成功よ。ありがと、父様。手紙が届いた時はびっくりしたわよ。まさか、あのシンが父様だったなんて」

シンもといマジカリア国・国王は、親指と人差し指を立ててあごに当て、一笑した。

「ふふふ。わしの若かりし頃は凛々しかろう、アスカ」

「うーん、まあまあね。あたしの好みの対極に位置するっていうのは、ホントだけどね。」

それにしても、もうちょっと手加減してくれてもよかったんじゃない？ この服、お気に入りだったのに、少し焦げちゃったわ」

服を見下ろし、アスカはぼやいた。

一応、反射魔法をかけていたが、さすがは一流である魔導師クレシマスの称号を持つていただけはある。

四流の魔法士ノエウイである自分の魔法では、完全には防ぎきれなかったようだ。ちよつと悔しい。というかなりムカつく。

「魔法で元に戻せばいいだろう。それとも、新しい服を買ってやろうか。」

いろいろと新作が出ているし、お前の専属デザイナーも、新しい服のデザインを考えているようだしな」

ほのぼの(?)とした親子の会話に、渡羽はそーっと口を挟んだ。
「あの…これは一体どういことなんでしょうか。話が見えないんですけど……」

「あー、えつとね。実はシンは父様で、父様はシンってことなのよ」

「はあ…シンさんはアスカの父親で、アスカは魔法の国の王女ですから、シンさんは魔法の国の王様ってことで……」

ぐるぐると頭で情報を整理し、シンⅡアスカ(王女)の父親Ⅱ国王という図式が、ピーンと繋がる。

顔を蒼白にし、渡羽は平身低頭して謝った。

「じゃあ、俺は今まで、国王様に対して無礼なことを!？ す、すみません!」

「いやいや、謝らねばならないのはわしの方だ。試したりなどしてすまなかった。」

このアスカの選んだ人間だったもので、ちと心配になってな」

「ひっどーい。何よ、それえ」

ぶーぶーと口を尖らせるアスカ。その頭を軽く撫で、国王は満面の笑みを浮かべた。

「はっはっは。だが、それは間違いだと気づいたよ。渡羽殿は立派な紳士だ。お前の目に狂いはなかったぞ」

「当然よ! あたしの直感が外れたことはないんだから」

ふんぞり返って得意げに笑うアスカ。

国王はアスカの頭を片手で撫でながら、空いている手をあごに当て、何度も頷いた。

「いやあ、本当によかった。送り出したはいいが、アスカのことだから、試験をサボるのではないかと思ってな」

「しっつれいねー。掟なんだから、いくらあたしでもサボったりはしないわよ」

父親の手をうつとうしそうに振り払って言うアスカに、ティアラが肩をすくめながら言った。

「その割には、この一週間、魔法の練習をしていませんでしたよねえ」

「べ、別にサボってたわけじゃないわよ。ただ…」

「とにかくにも。試験の結果、アスカは期限以内に、主人であるあるじ渡羽殿の願いを叶えることはできなかった。よって…」

一転して、アスカは不安げな表情になった。上目遣いで父親の顔を窺う。

「やっぱり、強制送還して魔法力封印？」

「——と言いたところだが、特別に、このまま人間界で魔法修行を続けることを許可する！」

「「ええ!？」」

渡羽とアスカ、ティアラの三人の声がハモった。

「よろしいのですか、国王様!？」

「そうよ、そんなこと勝手に決めちゃっていいの? 母様…女王陛下の許可も得ないで」

「母さんにはわしから言っておく。多少、仕置きを食らうだろうがな……」

苦笑混じりに国王は言った。ティアラがうれしそうにアスカの肩に座った。

「よかったですね、姫様」

「うん。うれしいけど…なんで？」

きょとんと不思議そうにアスカが問うと、国王は鷹揚に頷いた。

「お前の渡羽殿に対する想いはよく分かった。渡羽殿も、アスカのことを好いてくれているようだし、愛し合う二人を引き離すのは心苦しいのでな」

寛大な父親に、アスカは久し振りに感謝した。

ここ数日の悪行の数々を水に流すのに十分な処置だ。これくらいはしてもらわないと割に合わない。

無理やり人間界に転送したこと。姿を偽ってずっとつきまといたこと。

人間界に来てから、使い魔のカラスを通して四六時中覗き見ていたこと。

そして手紙で知ったことだが、アスカがほうきから落ちる原因となったあの風も、渡羽の花壇をぐちゃぐちゃにしたのも、このウザ父の仕業だったのだ。

あの風はとっさの対応力を見るためだったらしい。覗き見ていたのも、試験官としてのことだからそれは別にいいのだ。

けれども、花壇をぐちゃぐちゃにしたのは、少しやりすぎだったのではないか。いくら試験とはいえ、やっていいことと悪いことがある。

実力を試すにしても、他に方法があっただろうに。あれで渡羽がどれだけ傷ついたことか。

アスカはばあつと顔を輝かせて、心からの笑みを浮かべた。

「ありがとう、父様！ 用はもうこれで終わりでしょ？ じゃ、とつとと帰って」

「トホホ。お前は顔だけでなく、性格まで母さんに似てきたなあ。もう少し本音を隠したらどうだ」

がつくりと肩を落とす国王に、アスカはヒラヒラッと手を振る。

「生まれ持った性格は直せないわよ。ね、渡羽」

「あ、そうですね、アスカ…いえ、アスカ姫」

「何よ、改まっちゃって。呼び捨てでいいわよ。」

それにしても、初めて逢った時もあったんだけど、渡羽って、眼

鏡かけてる時と外してる時って性格違うわよね」

ずっと気になってはいたのだが、訊くタイミングを逃していた。

渡羽はそっと眼鏡に触れて微笑した。

「眼鏡を外すと地が出てしまうんです。なぜかは分からないんですが」

「ふーん。でも、さっきは眼鏡かけてても、地でしゃべってたわよね」

「さっきは動揺してましたので……」

でも、なるべく眼鏡かけてても、地で話せるように頑張ります」

「いいよ、別に。どっちも渡羽だもん。あたしはどっちの渡羽も大好きだよ」

さらりと言われ、渡羽は真っ赤になって俯いた。

「えっ、あ……ありがとうございます……」

「はっはっは。若いというのはよいものだ。」

渡羽殿、こんな無鉄砲で非常識な娘だが、一つよろしく頼むぞ」

「は、はいっ。分かりました」

「なーに、父様。まだいたの？ 早く帰って。邪魔よ！」

半眼でアスカはしっしっとして手で追い払うしぐさをする。今度こそ国王は落ち込んだ。

「はぁ。本当に本音を隠さない子に育ってしまった。どこで育て方を間違えたのだろうか……」

そう嘆きながら、国王は魔法で姿を消した。

渡羽はしばらく黙っていたが、つつつとアスカが近寄ってきたので、照れながら口を開いた。

「じゃ、じゃあ……帰りましょうか。だいぶ暗くなってきましたし……」

「うんっ。あ、ねえ。手、繋いでもいい？」

「恥ずかしいですよ、そんなの……」

こうして照れている渡羽はなんだかかわいい。アスカは猫がじゃれつくように、渡羽にすり寄った。

「平気だって。ティアラ以外、誰もいないじゃない」

「あ、私のことはお気になさらず。手でもなんでも繋いじゃって下さいな♪」

ティアラは邪魔をしないように、二人から離れた。初々しい二人を見ると、自然と顔が綻ぶ。

「ほら。ティアラもこう言ってるし。いいでしょ、渡羽」

「……仕方ありませんね」

ギクシャクと慣れない動きで、渡羽はアスカに手を差し出した。

「家までですよ？」

はにかむ渡羽の手を、アスカはぎゅっと握った。離れないように放さないように。

「分かってるよ！ えへへ、幸せ？」

「どうぞ、あなたのお好きなようにして下さい。お姫様」

観念したように、渡羽は微笑んだ。アスカが穏やかな声で問いかけた。

「じゃあ、ずーっとそばにいてもいい？」

「……ずっと魔法を覚えないつもりですか？」

「それもいいかもね♪」

「よくないと思いますけど……」

こうして花開いた恋の花。二人は寄り添い合って、家へと帰っていく。

「あ、渡羽、見て」

「はい？ ……ああ。きれいな星空ですね」

一緒に見上げた夜空は、きっと忘れられない思い出になるだろう。

5th 決闘(後書き)

追伸列記簿

ぬああつ、もうこんな時間か！？ やっべーっ！ と思いつつ、日付変わるギリギリまでパソコンに向かってる甲斐日向です。マジ☆ラビ第五話をお届け致しました。

ついに、ついにこの話が書けた…っ。物語前半の最後の見せ場と言うべき話です、今回。終わりました…試験終わりましたよ。渡羽とシンは決闘しちゃいましたよ。結果は読んでの通りです。

お疲れ！ 渡羽！ 君の勇姿はこの目に焼きついている。だからもう休んでいいのよ。さあ安らかにお眠り……って別に死んではいませんぜ。ホント、渡羽は頑張ったよ。頑張ったんだけどねえ…しかし、今回、何が一番の見せ場ってそりゃあシンの実体でしょう。(え？ そこ？) 彼はやってくれましたね。ふふふのふ。

まあ、冗談はさておき、渡羽とアスカの恋もとりあえず決着がつきました。この先、二人はどうなるのやらやら。

えー、次回は夏休みです。サマーバケーションです。学生はいいですね！ 渡羽とアスカの恋がようやく動き出します。渡羽のお母さんが出てきます。夏真っ盛りです。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

6th 夏恋

ミーンミンミンミンミンミン……

どこかでセミという虫が鳴いている。あれは夏になると聞こえるらしい。

ミーンミンミンミンミンミン……

むわっとした熱気が部屋にこもっている。窓は開けているが、あまり風がないし、セミの声がうるさい。

ミーンミンミンミンミンミン……

ただでさえ暑いのに、あれの鳴き声を聞くと、余計暑く感じる。魔力でもあるのだろうか？

ミーンミンミンミンミンミン…… ミーンミンミンミンミンミン……

…… ミーンミンミンミン……

「あ———っ、もううるさい！」

アスカはがばっと起き上がって窓に駆け寄った。

「少しは静かにしなさいよ！ ミンミンミンミンうるさいし、暑いし、のど渴いたし、暑いし、夏なんてもうイヤーっ！」

どこかにいるであろうセミに向かってアスカは声を張り上げた。道を歩いていた通りすがりの人が汗を拭きながら、アスカの絶叫に首肯して同意した。今のアスカの絶叫は、誰もが心の中で思っている本音だった。

アイスグリーンの瞳と、ヒヤシンス色のロングヘア。今は暑いのでポニーテールにしているが、普段は下ろしている。

アスカ——正式名はアスフェリカ・グランジェ・ウィルIIマジカリア。魔法の国の王女である。彼女は十六歳の誕生日、魔法界からこの人間界へとやってきた。

アスカの住むマジカリア国は女王制で、マジカリア王家に生まれた女兒は十六歳を迎えると、女王試験を受ける。

その女王試験は、人間界で主人とする人間を一人選び、主人の願

いを三つ叶えること。

この試験では人選の良さ、判断力、魔法力の強さなどを試される。人間を選ぶと言っても、適当に選ぶのでは意味がない。魔法の存在を知り、その力を悪用する者、欲深い者などを選ぶようなら、失格となる。

これは女王となった時、より良い臣を選べるかどうかに関がる。悪しき臣はいらぬ争いの種を持ち込むことがあるからだ。

そして、良い人間を選んだとしても、なんでもかんでも叶えればよいわけではない。

魔法を使わずとも手に入れられるもの、努力すれば叶うようなことを、わざわざ魔法で叶える必要はない。

何がよくて何がいけないのか、それを判断し決断することは、国を統治していく中で大きな意味を持つ。女王の判断と決断一つで、国が栄えるか廃れるかが決まるのだ。

そして魔法力——魔法を使うための力だ。主人の願いを叶える時、王家が所有している、パーガウエクオと言う宝石を加工したものを操り、魔法を使う。

パーガウエクオには魔力が宿っていて、魔法力が弱い者では反発してうまく魔法を使えない。それをうまく扱えるかどうか、統治者として認められる条件の一つでもある。

他にも人間界の暮らしや主人、周囲の者と馴染めるかどうかなど、いろいろと試される。

アスカも女王試験を受けるために人間界へ来て、主人と出会った。
その主人とは……

「アスカー、麦茶持ってきましたよ」
「やったあ、待ってました！」

ドアをノックし入ってきたのは、黒髪眼鏡の地味な少年。どことなく影が薄そうで、これといった特徴のない、ありふれた平凡な少年だ。

彼こそが、アスカの主人——渡羽飛鳥。十四歳の中学三年生。初

めて人間界にやってきたアスカが、初めて会った人間が彼なのだ。
アスカは渡羽に一目惚れし、直感で主人あるじに選んだ。そしてともに暮らした末に、両想いになった。

今では家族公認——ただし片親のみ——の恋人同士です。

「お待たせしました。すみません、部屋のクーラーが壊れてしまつて、暑い思いをさせていますね」

誰に対しても敬語の渡羽は、アスカに対しても変わらない。アスカはふるふると首を横に振った。

「ううん。あたしの方こそゴメンね。ずっと渡羽の部屋に居座つてるもん。渡羽は『受験生』なのに、勉強の邪魔じゃない？」

麦茶を飲みながら、困ったように問いかけるアスカ。

この『麦茶』と言う飲み物は、人間界に来て初めて飲んだのだが、見た目に反して結構おいしいので、お気に入りの飲み物だ。

渡羽は「いいえ」と微笑する。トレーをテーブルに置き、自分の分のコップを手にとって机に向かった。

「そんなことはありませんよ。アスカこそ、俺が勉強している間はつまらないでしょう」

「それこそ問題なしだよ。渡羽が勉強してる間は、美鳥みどり母様が書いた本とか読んでるし、頑張ってる渡羽見るの好きだし」

ためらいなく好きだと言われ、渡羽は麦茶を吹き出しかけた。いまだにこの不意打ちには慣れない。

「ごほ。…えーと、その、そうですか。ありがとうございます」

「ねえ、渡羽」

「わあっ」

顔のすぐ横でアスカの声がする。いつのまにかアスカが渡羽の後ろに立っていた。

「勉強してる渡羽も好きだけど、やっぱり少しは渡羽と遊びたいなあ」

「え、アスカ、でも…」

しおらしい様子で、アスカは渡羽の背中に寄りかかり、淋しげに

言った。

「ううん、分かってるの。渡羽は『高校』に行くために勉強しなきゃいけないってことは」

「さっきは問題ないって…」

「退屈ってわけじゃないよ。さっき言ったことはホントだもん。」

美鳥母様が書いた本はおもしろいし、人間界には珍しいものがいっぱいあるから、見たり聞いたりするのが楽しいし」

「あの、その…」

「でもね！」

ぐっと拳を握りしめると、アスカは渡羽から離れ、叫んだ。

「『夏休み』に入ってから以来、ずーっと渡羽と遊んでないのよ！毎日、勉強勉強っ！朝から晩まで机に向かいっぱなし！

この暑いのに、よくそんなに同じこと繰り返してられるわね！？あたしだったら耐えられないわっ。勉強なんて聞いただけでイヤになるし、やりたくないかないしっ。

それで渡羽と遊べないなんてもっとイヤよぉっ！」

本音爆発。元々、アスカは真っ正直で、本音を隠さない。それでも、頑張っている渡羽のために、これまで我慢していたのだが……

「遊びたい遊びたい！渡羽と一緒に遊びたいっっ」

限界だったらしい。アスカにしては頑張った方だと思う。

子供のように駄々をこねるアスカのもとに、ふわりと何かが飛んできた。

「姫様、ワガママを言っではいけませんよ。渡羽さんにとっては大切なことなんですから」

飛んできたのは小さな女の子。チェリーピンクの髪にストロベリーピンクの瞳。背中には透明な薄い二枚の羽。そして尖った長い耳。少女の名はティアラ。魔法界の妖精だ。アスカの付き人でもある。

「あたたかい目で見守るって決めたじゃありませんか」

腰に手を当て、ティアラは滞空しながら言った。アスカはティアラを上目遣いで睨んだ。

「そうは言うけどね、ティアラ。渡羽はさっきあたしが言ったとおり、ホントに勉強ばかりの毎日なのよ？」

夏休みに入ってからこれ三週間。この数週間を思い出す。

朝。起床↓朝食↓勉強。

昼。昼食↓勉強。

夜。夕食↓勉強↓入浴↓勉強↓就寝。

以下続。

「一緒に出かけたのなんて、ご飯の材料の買い出しくらい。

せっかく：せっかく恋人同士になったのに……全然、恋人らしいことしてないのよーっ」

わーんといいに泣き出すアスカ。渡羽は空のコップを机に置いて、おろおろとうろたえるばかり。こういう時どうしたらいいのか勝手が分からない。

ティアラはため息をついた。今回ばかりは嘘泣きではなく、本気泣きのようだ。

まあ、姫様の気持ちも分からなくはない。姫様の言ったことは事実だ。文字通り、勉強に明け暮れる渡羽。

初めの一週間くらいは、美鳥の書いた本を読んだり、人間界のことをいろいろ聞いたりして暇をつぶしていたが、だんだん不満が積もってきたらしい。

アスカの言うことにも一理あるので、どちらも責められないし、味方にもなれない。どうしたものかとティアラが解決策を考えていた時だった。

「飛鳥く、入ってもいいかしら？　…ってあら、どうしたの？　アスカちゃん」

一度ノックしてから、渡羽の返事を待たずに、渡羽母——美鳥が部屋に入ってきた。

肩より少し長めの黒髪。ゆるやかなウェーブがかかっていて、おっとりした雰囲気に見える。

渡羽は母親似のようだ。眼鏡をかけているところなどがそっくり

である。

床にうずくまって泣いているアスカを見ると、美鳥は心配そうにアスカの体を起こした。

「み、美鳥母様っ！」

「あらあら。なあに？　飛鳥とケンカでもしたの？　それとも、ついに飛鳥に純潔奪われちゃったのかしら」

「母さん！　何バカなこと言ってるんですかつ」

ゆでダコのように顔を真っ赤にして、渡羽が怒鳴る。

「そうよねえ、飛鳥にそんな根性あるわけないものねえ」

そうはつきりと否定されるとちよつと物悲しい。性格はまったく似ていないようだ。

「じゃあ、なあに？　本当にケンカ？」

「…いえ、そういうわけでは…」

「聞いてっ、美鳥母様！　渡羽ってば、渡羽ってばあ…っ」

「はいはい、聞いてあげるわ。だから少し落ち着きましょう。ね？」
よしよしとアスカの頭を撫でる美鳥。アスカはぐすぐすと鼻をすすり、こくと頷いた。

さすがは母親。泣いている子供の扱いが手慣れている。

しばらくしてから、アスカは落ち着きを取り戻した。美鳥はせかすことなく、アスカに事情を聞いた。

「それで、どうしたの？　アスカちゃん」

「うん…。あのね、渡羽、ずっと勉強ばかりしてるでしょ？　『夏休み』に入ってからずっと。

だから、ほとんど一緒に遊べなくて、出かけたりもできなくて…
…さみしいの。

勉強しなくちゃいけないのは分かってるけど、勉強そればかりじゃなくて、あたしのことも少しは気にかけてほしいって言うか……恋人らしいことしたいな…って」

そのままうなだれるアスカ。美鳥は渡羽によく似た穏やかな笑みを浮かべ、優しくアスカの頭を撫でた。

美鳥は悄然としている息子に顔を向けた。飛鳥だって本当は分かっていたはずだ。

勉強ばかりでアスカに淋しい思いをさせていたことも、アスカが本音を言わず我慢していたことも、どうすればアスカの機嫌が直るかも。

けれど、そういうことを言葉や態度に表すのが苦手で、初めてのことに戸惑っていることも、美鳥は解っている。

（本当、不器用な子ねえ）

一体、誰に似たんだけ。くす、と美鳥は笑った。

「そうだったの。それじゃあアスカちゃんが泣きたくなるのも無理ないわね。」

でも、もう大丈夫よ。そんな二人にプレゼントがあるの」

「プレゼント？」

「ええ！」

美鳥は服のポケットから、一枚のチケットを取り出した。

「じゃじゃーん。新聞屋さんからもらった、プールのペア割引券☆」

目を瞬かせ、アスカはチケットをまじまじと見た。

「この間、新しく大きなプールができたでしょう？ そのチケットよ。いろんな水のアトラクションがあるらしいわよー。」

飛鳥もたまには息抜きが必要だし、明日あたり二人で行ってらっしゃいな」

にっこり笑って、美鳥はアスカにチケットを渡した。渡羽はイスから立ち上がった。

「でも母さん、俺は——」

「飛鳥」

厳しい目で、美鳥は渡羽を捉えた。渡羽はたまに見せる母のこの瞳に弱い。

「根を詰めるのは良くないわ。体を壊したら元も子もないのよ？」

「……」

母さんの言うことはもつともだ。渡羽は俯いた。

「それにね、あんまり恋人をほったらかしにしていると、愛想尽かされちゃうわよ」

にんまりと笑う母に、渡羽はあんぐりと口を開けた。その一言はかなり堪えた。

「これなら飛鳥の息抜きになるし、アスカちゃんの悩みも解消！

それに、夏はアバンチュールがつきものよ！ 海辺やプールで、あらやだそんなっ的なドッキリ体験をしないでどーするの！」

「いえ、それは別に…」

「一度も遊ばないで夏休みを過ごすなんてもったいないわ。勉強もいいけど、恋も大切になさい」

「はあ…」

「というわけで、早速水着を買いに行くわよ！ 飛鳥が思わず襲いたくなっちゃうような、嬉し恥ずかし素敵な水着をっ！」

すつくと立ち上がり、美鳥はその気満々だった。アスカは「水着？」ときよんとしているが、渡羽は動揺した。

「ちよっと、さりげなく何言ってるんですか！」

「あら、心配しなくても飛鳥のめちゃーんと見繕ってあげるわよ。

去年のままでいい、なんて野暮なこと言っちゃダメよお？ アスカちゃんとの初プールデートなんだから、ビシッとかっこよく決めないと」

美鳥はるるんと上機嫌で、なんだかよく分かっていないアスカを連れていく。

イスの背もたれに寄りかかり、渡羽は顔を手で覆った。

母さんのテンションにはついていけない…

6th 夏恋（後書き）

追伸列記簿

六月ももう終わり…。梅雨はいつ明けるんでしょうか…。どうも
こんにちは、マジ☆ラビ第六話をお届け致しました。

本編では一足先に夏が来てますね。ああ暑い。アスカが叫ぶのも
無理はありません。

ええ僕も叫びたいです。暑いーっ！ …ってまだこっちは六月な
んですけど。

今回は渡羽母・美鳥さんが出てきました。明るいですね。いつで
もハイテンションな元気なお母さんです。もう五十過ぎてるんです
けど。

美鳥さんのおかげで今回はちょっとギャグ調な感じ。晴れて恋人
同士になった渡羽とアスカですが、やはりというかなんというか、
渡羽が一步踏み込め切れていないようです。

こればかりは眼鏡があるうがなろうが変わりません。次回で少
しは距離が近づくといいいんですがねえ。

ああ、そうそう。最近サイトを作りました。詳しいキャラ設定や
アスカたちのイラストなど、舞台の裏側が見れちゃいます。

興味がある方、もっとマジ☆ラビやアスカたちのことを知りたい
！ という方は是非ご覧下さい。宣伝ですみませぬ…

次回はいいよ水着選び。はてさて、アスカたちはどんな水着を
選ぶのやらやら（選ぶのは美鳥さんのようですが…）。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

7th 游泳池

かくして、渡羽、アスカ、美鳥の三人はデパートにやってきた。ここに来てようやくアスカも意味を理解し、俄然はしゃぎだした。水着売り場に着くと、美鳥は主導権を握って、渡羽に指示を出した。

「それじゃあ私はアスカちゃんの水着選んでくるから、飛鳥は自分のを選んできなさい。」

いいのが見つかったら持ってきて見せるのよ。自分だけで決めるのはなし。さあ、いざ戦いの場へ！」

「おーっ♪」

意気揚々と、女性の水着売り場へ突撃していく美鳥とアスカ。

渡羽は小さくため息をついて、男性の水着売り場へと重い足を引きずって行った。

さまざまな水着を見て、アスカは目を丸くした。水着というのは、水の中で着る服のことらしい。

魔法界では、魔法で風の膜を張って水中に潜るため、わざわざ服を着替えたりしない。

一口に水着と言っても様々な種類があるものだ。アスカが目移りしていると、美鳥がいくつか持ってきてくれた。

「これが一番オーソドックスなタイプね。スクール水着もこの形だし。あとは…これなんかどう？」

同じワンピースタイプなんだけど、下がスカートになってるのよ。でもアスカちゃん、いつもスカートばかりはいてるから、たまにはこういう…」

美鳥は別の水着を見せて「ショートパンツタイプもいいかも」とアスカの体にあてる。

「わあ、種類がいっぱいあるのね。…ん、なんか不思議な触り心地。すべすべしてるって言うか、妙な弾力がある」

「水中でも動きやすくできてるからよ。あー、あとね、タンキニタイプとか、ビキニなんて言うのもあるのよー♪」

手にとってはアスカにあててみる美鳥。アスカも、渡羽と出かけられる、恋人らしいことができる、とあつてとても楽しそうだ。

二人を遠目に見ながら、渡羽はたらたらと水着を選んでいた。

別にアスカと出かけるのが嫌なわけではないし、むしろうれしいのだが、気が乗らない。

その理由は、行き先がプールだからだ。つい先日、恋人同士になったばかりで、いくら一つ屋根の下に住んでいるとはいえ、初デートがプールだなんて。

(プールと言ったら、水着を着るわけですよ。裸も同然の水着を。そんな露出の高いものを着ているアスカと二人なんて…：恥ずかしすぎますよっ！)

渡羽は赤くなったり青くなったりと、かなり動揺していた。周りの客たちが不審な目で見ている。

「飛鳥！ ちょっと来て！」

挙動不審な渡羽の腕を、美鳥がぐいっと引っ張った。

「わっ、母さん、なんですか！ そ、そっちは女性用ですよーっ」

「今ねえ、アスカちゃんが水着を試着してるのよ。飛鳥にも見てもらおうと思って。一緒に歩くんだから、好きな水着の方がいいでしょう？」

「べ、別になんでもいいですよっ。放して下さいっ！」

「アスカちゃん、もういいかしら？」

「え…あ、うん…」

いつもと違い、気弱なアスカの声が、試着室のカーテンの向こうから聞こえる。

逃げようと渡羽はバタバタとかがくが、美鳥は頓着せずにカーテンを開ける。

「はい、じゃあ開けるわよお」

シャツとカーテンが開かれる。アスカはワンピースタイプで花柄の水着を着ていた。

着慣れないものを着ているせいか、アスカは気恥ずかしそうに俯き加減だ。

一瞬にして、渡羽は目を奪われた。ほけっとアスカの水着姿を見つめる。

「まあ、かわいい。見慣れてるせいか、スカートだとよく似合うわねー」

「あ、ありがと、美鳥母様」

照れ笑いを浮かべたアスカは、渡羽の視線に気づいて、かあっと頬を朱く染めた。

「そんなにじっと見つめないでよ、渡羽。結構恥ずかしいんだからねっ」

「え？ あっ！ すっ、すみません！ あわわ、うう後ろ向いてますから！」

「もう、それじゃあ意味がないでしょ？ どう？ 似合ってるわよね、飛鳥？」

「は、はい。似合って…ます」

赤面しながら、渡羽はアスカに背を向けてこっくり頷いた。

美鳥は満足げに頷くと、アスカにOKサインを出した。アスカはホッと笑って、カーテンを閉めた。まだ胸のドキドキが治まらない。渡羽もアスカも、互いの姿が見えなくなって、ようやく一息ついた。

しかし、そんなことは気にも留めず、美鳥は試着室のアスカに話しかけた。

「じゃあアスカちゃん、次の水着も着てみてね。すぐ近くにいますから、終わったら呼んでちょうだいな」

「う、うん」

「えっ、まだ試着するんですか!？」

「当然よ。一着だけじゃあ、何がアスカちゃんに合うか分からないじゃない？　いろいろ試してみて、一番いいものを選ばなくちゃ。飛鳥の方はどうなの？　いいの見つかった？」

「…選ぶ前に母さんが無理やり連れてきたんじゃないですか」

「あらっ、そうだったの？　ごめんなさいねえ。後で一緒に選んであげるわ。」

あ、ねえねえ、飛鳥。あれ、アスカちゃんにどうかしら」

そう言っ、美鳥が指さした水着を見て、渡羽は顔を真っ赤にした。

「絶対ダメですっ！！！」

マネキンが身につけている紐ビキニに、渡羽は泣きたくなった。

数十分後、渡羽はぐったりとした様子で、水着売り場から出てきた。結局、あれから何度もアスカの水着ショーを見せられ、心臓が壊れるかと思った。

渡羽の水着も選ぶことになったのだが、よりにもよってあの母親が一番に持ってきた水着は……最悪だった。

どーんと目の前に突き出されたのは、真っ赤な海水パンツ。鮮やかすぎる赤。ものすごく目立ちそうだ。

それだけならまだしも、渡羽が何気なく後ろにひっくり返してみると、『漢』と野太い字ででかでかと書かれていた。しかもなぜか周りには桜吹雪。

もちろん、渡羽は「絶対っ対に嫌ですっ！！」と突き返した。「えっ？　かっこいいのに」と美鳥は不満げだったが。

その後、渡羽が自分で選んだ。普通の無地の海パンを。不満げな美鳥を会計に押しやり、今に至る。

アスカは「もう少し見ていたい」と売り場の中を散策している。売り場近くのベンチに座り、渡羽は小さくため息をついた。息抜きのはずなのに、なんだか気が重い。

「渡羽くん？」

名を呼ばれ、渡羽は顔を上げた。

声のした方に顔を向けると、クラスメートの高尾明衣子^{たかおあいこ}が立っていた。

「…高尾…さん？」

制服姿しか見たことがなかったので、私服姿だと、一瞬誰だか分からなかった。

「えっと…こんにちは」

「あ、はい。こんにちは」

渡羽は慌てて立ち上がり、ぺこりと頭を下げた。

「奇遇…だね。こんなところで会うなんて」

「そうですね」

「渡羽くんも買い物？」

「あ、ええ。母さんに無理やり連れ出されて」

「もしかして荷物持ちに？」

「えーと、まあ…そんなところですよ」

そこで会話は途切れた。二人の間に沈黙が落ちる。

（ど、どうしよう、こんなところで渡羽くんに会うなんて思ってたかったよう）

明衣子は内心、うれしさ半分、恥ずかしさ半分だった。

（こんなことならもっとかわいい服着てくればよかった。うー、会話が續かないっ。なんか話題話題…………そ、そうだ！）

明衣子はさっき引ききでもらったチケットを思い出した。

「あの、渡羽くん！ 明日空いてるかな？ よ、よかったら一緒に…」

明衣子は買い物袋からチケットを取り出しかけ――

「あ、すみません。明日は先約がありました」

ぴしっと固まった。

「と言ってもさっき決まったんですけどね。他の日ならまあ、いいんですが…って、高尾さん？」

呆然と固まっている明衣子に気づいて、渡羽は首を傾げた。

「高尾さん？ 聞いてます？」

「…あはは、そうだよ。わたしなんかと一緒に出かける暇なんてないよね」

ふ…と燃え尽きたような遠い目で、明衣子は乾いた笑みを浮かべた。なんだか目がやばい。渡羽は冷や汗をかいた。

「あ、あの、高尾さん？」

「渡羽くんはマジメだから、受験生の身でありながら遊びに行こうとするわたしにつき合うなんてことしないよね…」

「いえ、そんなことは…」

「ううん、いいの。わたしが悪かったの。急に誘ったりしてごめんね。さよならっ渡羽くん——っ」

「高尾さ——んっ!？」

涙ながらに駆け去る明衣子に、渡羽は啞然とした。

今日の高尾さんはどうしたんだろう。受験勉強で疲れているんだろうか。

鈍感な渡羽は明衣子の言動をまったく理解できていなかった。

「渡ー羽！ どうしたの？ ぼーっとして」

会計が終わった美鳥と、売り場の散策に飽きたアスカが戻ってきても、渡羽はしばらく啞然としたままだった。

そして翌日、渡羽とアスカは予定通りプールに来ていた。さまざまな種類のプールが一つの公園の中にあり、一日中楽しめるというレジャープールだ。

電車に乗って約三十分。プールはできて日が浅いこともあり、だいぶ混雑している。入場券を買い、入場した二人は更衣室前で別れた。

ティアラは家で留守番のため、更衣室など入ったことがないアスカを一人にさせるのは心配だが、ついていくわけにもいかないので、

簡単な説明だけしておいた。

とりあえず昨日買った水着に着替え、渡羽は更衣室を出た。プールに入るので眼鏡は外している。

渡羽の眼鏡は度の入っていない伊達眼鏡なので、眼鏡を外しても普通に見える。

ただ、眼鏡を外すと、眼鏡をかけている時には視えないモノが視えるので、少々難ありなのだが：

「……………」

渡羽はちらりと入場ゲートの外側を見た。

ゲートの正面で、小学生ぐらいの半袖シャツに半ズボンを着た男の子が、こちらを向いて立っている。きょとんとした顔で、ただひたすら微動だにせず。

誰も気づいていない。それどころか、男の子がいる場所を素知らぬ顔で通り過ぎる。あの子は普通の人には視えない。触れることもない。渡羽にだけ視えている。

視えるからといって、渡羽は何もしない。ああいうモノには下手に近寄らない方が身のためだ。

他にも三角帽子をかぶった、ファンタジー小説やゲームに出てきそうな小人が、二人ほど視える。

小人たちはビーチボールや、水中ゴーグルなどを売っている店の周りをうろうろしていて、物珍しそうに売り物を見ている。

眼鏡を外すと、なぜかあいつた人外のモノが視える。渡羽が眼鏡をかけているのは、それらを視ないためだ。

関わり合いにならない方がいいモノもあるし、あっちから寄ってきたりもする。そうすると面倒事に巻き込まれるので、視えなくなるならその方がいい。

眼鏡を外している時なら、ティアラもはっきり見える。

眼鏡をかけていてもティアラがうつすらと見えるのは、それだけティアラの魔法力が強いからか、この世界とは違う魔法界の住人だからか。どちらにしても、人外のモノが視えるということに変わり

はない。

そしてもう一つ、渡羽が眼鏡を外すと変わることがある。それは口調と性格だ。

眼鏡をかけている時の渡羽は、誰に対しても敬語を崩さず、引っ込み思案なのだが、眼鏡を外すと敬語ではなくなるし、多少積極的になる。

本来はこっちの方が地である。眼鏡を外すとなぜ地が出るのか、それは本人もよく分かっていない。

「へえ、本当にいろいろあるんだな。ウォーターライダーや流れるプールは定番だけど、渦潮プールに溪流下り……ってなんだ？」

案内図を見ながら、渡羽は首を傾げた。

「あっ、渡羽〜！」

アスカの声に、渡羽は条件反射で振り返った。そして、ぱっと赤面する。

小走りで駆け寄ってきたアスカは、昨日最初に見た花柄ワンピースの水着だった。最終的に何を買ったのかは知らなかったが、あれに決まったのか。

改めて見るとやはり気恥ずかしい。アスカも渡羽の水着姿を見て、はにかむように笑った。

「えっと、お待たせ」

「…あ、うん。いや…」

互いに照れくさくて黙り込む二人。アスカはちらっと上目遣いで渡羽を見やった。

渡羽は顔を逸らし、前髪を掻き上げていた。眼鏡を外している渡羽はやっぱりかっこいい。視線を足元に戻し、アスカは微笑んだ。

しばらく目を合わせず俯いていたが、先に口火を切ったのは渡羽だった。

「じゃあ、行こうか」

すっと出された手に、アスカは普段の渡羽なら絶対にできなような行動だったので、一瞬面食らった。

しかし、眼鏡を外した渡羽は、眼鏡をかけている時と性格が違うことを思い出し、「うん！」とうれしそうに笑って、その手を握り返した。

「ところでさ、アスカって泳げるの？」

プールサイドにある、休憩用のパラソルの下にタオルなどを置いて、渡羽が訊いた。

考えてみれば、肝心のそれを訊いていなかった。渡羽は問題なく泳げる。けれどもアスカはどうなのだろう。

「んー、よく城を抜け出して潜ったりはしてたよ。でも、魔法で風の膜を作ってその中に入るだけだから、泳ぐとは違うのかなあ」

「試しに泳いでみたら？ その二十五メートルプールで」
というわけで、泳いでみました。

「あはは、やっぱりダメだったね」

準備運動をし、いざ泳いでみたアスカだったが、魔法を使わずに泳いだのが初めてだったため、呼吸の仕方や、どう体を動かせばいいのか分からず、すぐに沈んだ。

慌てて渡羽が助けに行き、アスカは笑顔でそう言った。仕方がないので、アスカは浮き輪を使うことにした。

渡羽は練習しようと言ったのだが、めんどくさいからいい、と突っぱねた。

その後、二人は流れるプールに向かった。水に入ると、途端に体が流れていく。

「わっ、体が勝手に動く」。渡羽っ、これおもしろーい

浮き輪でぶかぶかと流れながら、後方の渡羽に手を振るアスカ。水深が結構あるので、渡羽は半分泳ぎながらアスカの後についていく。流れも結構速い。

この流れるプールは園内を一周しているので、流れていくだけで他のプールの様子が見られる。

プールサイドからも見えたチューブ型ウォータースライダーの下を通り、子供用プールを横目に、しばらく流れに身を任せていたアスカだったが、ふと妙案を思いつき、浮き輪から身を乗り出した。

「ねえ、渡羽！ 渡羽は泳げるんでしょ？ ここならあたしが溺れることないし、追いかけてこしよう！」

「…は？」

渡羽はアスカの提案に目を点にした。

「渡羽、泳げるのに泳がないなんてつまらないでしょ？ だから泳いでいいよ！ よーし、じゃあ行くよー」

「えっ、ちょっ、待——」

渡羽の言葉を聞かず、アスカはバタ足で人の合間を縫って流れていく。

アスカとしては言葉通りだったのだが、渡羽としてはアスカの言動の意図が読めず、困惑するばかりだ。

あっという間に見えなくなったアスカに、呆けていた渡羽ははつと我に返って、急いで追いかけた。

一方、アスカは勢いに乗ってゆらゆらと流れていた。偶然にも前にあまり人がおらず、すんなりと流れていくことができた。

浮き輪に背中を預け、眩しい夏の太陽を目を細めて見上げ、アスカはのんびりと流れていく。

「んー、気持ちいいー。プールって楽しいなあ。ティアラも連れてきてあげたかったけど、ティアラは体が小さいから危険だし、魔法で大きくなっても、普通の人間には視えないから、どっちにしろ無理ね。あーあ。ティアラ、今頃何してるかなー」

いつも一緒だったティアラがいないと少しさみしい。家で留守番をしているであろうティアラを思い、アスカは少し表情を曇らせた。

思えば、ティアラと長く離れることなど、魔法界にいた頃にはなかった。どこに行ってもティアラが一緒で、どんな時もそばにいた。口うるさい時もあるし、すぐ泣いたりするけれど、喜びや怒りや悲しみを、本当の意味で分かち合えるのはティアラだけだった。

ふう、とため息をついたアスカは後方を向いていたので、進行方向にゴムボートがあることに気づいていなかった。

ぼむ、と頭がボートにぶつかり、アスカは驚いて振り返った。

「!? !?」

「あ、ごめんなさい!」

ゴムボートに乗っていた水着姿の少女が、アスカを上から覗き込んだ。

「大丈夫ですか?」

「あ、うん。あたしもよそ見してたから…」

フェミニンショートのダークブラウンの髪。目元にある小さなほくろが特徴的な彼女は、ゴムボートの横と一緒に流れていた連れに向き直った。

「ほら! やっぱり他の人の邪魔になるじゃない。だから貸しゴムボートなんていいって言ったのに!」

「そうは言っても、おまえ泳げないんだろ? それに、最初はおまえだってキャーキャー言っただけじゃねーか」

「それはっ、人が少なかったからで…今はこんなに人が多いんだから迷惑になるでしょ」

「他にもゴムボート乗ってる奴いんじゃない。気にすんなって」

「実際に迷惑かけてるでしょ! もう、わたし降りるっ」

「オイ、あぶねーって!」

連れの人はゴムボートの向こうにいたのでアスカからは見えないが、男の子らしい。自分たちと同じで恋人同士で来たのだろうか。

ゴムボートにせき止められる形で、アスカがぷかぷか浮いていると、ようやく渡羽が追いついて来た。

「ア、アスカ…やっと追いついた」

「あれー、追いついちゃった？ 追いかけてっことは渡羽の勝ちだね」

「もう追いかけてっことはやめてくれ。そもそも、流れるプールは追いかけてっことをするところじゃないし…」

「えへへ。ゴメン」

疲れたようにため息をつく渡羽に、アスカはぺろっと小さく舌を出した。

渡羽の名前に、ゴムボートに乗っていた少女は目を丸くして、再びゴムボートからアスカを見下ろした。

「もしかして…：渡羽…くん？」

「え？」

渡羽が声に見上げると、驚いて目を瞠っている明衣子と目が合った。

「あれ、高尾さん？」

「なんだ、なんだ？ 飛鳥がいんのかー？」

ひょいっとゴムボートの陰から顔を出したのは、金髪に浅黒い肌の少年。渡羽は本気で驚いた。

「バ、バルカン！？」

「おっ、ホントに飛鳥じゃん。なんだよ、遊びに来るんなら誘えよなー」

バルカンはにかつと白い歯を見せ、ボートを押さえたまま、反対の腕を渡羽の首に回した。

「水くせーぞ。オレたちの仲じゃん」

「なんでバルカンがここに…：って言うか、なんで高尾さんと一緒なんだよ」

「いや、昨日偶然会ってさ。なんかヤケにどんよりした顔してたから声かけたら、ココの割引チケット持ってたから、他に行く奴いねーならつき合ってやろうと思ってさ」

「…高尾さんは君なんかと来たくなかっただろうに。他に一緒に行きたい人くらいいたんじゃないか？ つき合わされた高尾さんが不

憫でならないよ」

それを渡羽が言うのか。明衣子は渡羽の言葉にドキリとした。その相手とはまさにあなたのことなんですが。

しかし、鈍感な渡羽はやはり明衣子の様子に全く気づかない。

「何ー？ オレじゃ不満だったのか？ この美丈夫なオレ様じゃ」

「バカ言ってる」

バルカンの腕を振りほどき、渡羽は肩をすくめた。それまで黙っていたアスカは、ちょいちょいと渡羽をつついた。

「渡羽の友達？」

「ああ、高尾さんとはかく、こいつは友達というか、単なる腐れ縁のクラスメートだけど」

「オイオーイ、そりゃないんでないの？　せめて親友とか言ってくれても――」

笑顔でアスカの方を向いたバルカンは、その瞬間、心臓に天使の矢が刺さったかのように感じた。ハートど真ん中：！

一瞬にして、バルカンは恋に落ちた。「誰が親友だ」と抗議する渡羽の声など馬耳東風。

アスカはきょとんとバルカンを見ている。固まってしまったバルカンに、明衣子が怪訝な顔をした。

7th 游泳池（後書き）

追伸列記簿

七月かあ……七月と言やあ七夕だなあ……織姫と彦星か。だからなんだよ。暑いなあ……あープール行きてーっ！

というわけで（どんなわけだ）マジラビ第七話をお届けしました。暦も話数も七。本編内は八月ですけど。

今回、アスカたちは涼しそうですね。プールですか。あ、サブタイトルの『游泳池』は中国語でプールって意味です。まんまですね。アスカたちの水着選びから始まり、驚きの再会へと。ちょっとだけ渡羽の秘密とかも分かりましたね。シリアスな。

いやはや、それにしても初々しいカップルですな。あの二人って進展しそうでしませんが。でも、眼鏡なしの渡羽だったら少しはいけるのではなからうか。多少は積極的だし、アスカだって、初めに一目惚れしたのは眼鏡なしの方だし……

今回出てきたレジャープールは僕の地元のプールをモデルにします。さすがに溪流や渦潮プールはありませんが。ああ行きたいなプール。

前回に続いてティアラの出番がまったくありませんね。なんだか動かしにくいんですよ。好きなんですけどね。そのうちティアラにスポットを当てた番外編でも書きたいな。

次回は再会した彼らと遊びます。渡羽とアスカの恋に、ちょっとした波乱が巻き起こる……やも？

それでは、次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

8th 三恋花

四人はプールの真ん中に立っていて流れをせき止めていたため監視員に怒られたので、昼時ということもあって、プールサイドのレストランにやってきた。

丸テーブルの席に案内され、一通りオーダーを済ませると、双方の知り合いである渡羽が紹介することになった。

「それじゃあ改めて紹介するよ。二人は俺のクラスメートで、こっちは高尾明衣子さん」

手で示されて、明衣子はアスカにぺこっと頭を下げた。

「は、初めまして」

「うん、はじめまして」

「で、こっちが――」

続けて渡羽がバルカンを紹介しようとすると、顔を赤くしたバルカンが自ら名乗った。

さかづきしょうのすけ

「坂月将之介、十五歳！　バルカンと呼んでください！」

「ばるかん？」

「ハイ!!」

小首を傾げるアスカに、バルカンはこの上ない笑顔で頷いた。

こんな笑顔のバルカンは、小学校来のつき合いである渡羽も見ることがない。なんだか不気味だ。

「昔っからのアダ名なんすよー」

由来は幼稚園の頃に流行っていた、特撮ヒーローものの主人公の名前だ。そのヒーローに憧れ、よく真似をしていたので、そう呼ばれるようになった。

「そっか。じゃあそう呼ぶね」

ニコツと笑うアスカに、バルカンはにへらっと頬をゆるめた。本当に不気味だ。

「えーと、それでこっちが…」

本名を言うべきかためらう渡羽を察して、アスカは「あ、自分と言うよ」と後を引き継いだ。

「あたしはアスフェリカ・グランジェ。十六歳。長いから、普段はアスカって呼ばれてるの」

「え、あすか？」

「素敵なお名前ですね！」

明衣子は目を丸くしたが、バルカンはやたら顔で気にも留めていない。

不気味なほど笑顔のバルカンに、渡羽はふと、さっきプールから上がる時に見たものを思い出した。それはバルカンの水着。

彼が穿^はいている水着は、昨日母親が最初に持ってきた、あの真っ赤な海パンだったのだ。後ろには野太い『漢』の文字。

もしも、万が一……いや、百万が一、あの海パンを買い、今日穿いていたら……バルカンとおそろい！！考えるだに恐ろしい。

「それにしても、こんなところで飛鳥と会うとは思わなかったぜ。飛鳥はこういうところ来ないと思ってただけだな」

「それはこっちのセリフだ。まさかこんなところに来てまで君と会うとは思わなかった」

「なんだよそれー。まるでオレに会いたくなかったみたい言い方じゃんか」

「こういうところで知り合いに会うのはなんだか恥ずかしいんだよ。それに、バルカンの奔放すぎる行動につき合わされたくないし」

「ひっでー。おまえってホント眼鏡外すと変わるよな」

ブーイングするバルカン。明衣子は普段と雰囲気の違い渡羽に困惑していた。

敬語じゃないし、はきはきとしゃべっている。いつもの控えめで少しおどおどしている渡羽とは正反対だ。

「……さっきから気になってたんだけど、今日の渡羽くん、なんかいつもと違うね」

「ん？ ああ、高尾は知らないんだっけか？ 飛鳥は眼鏡外すと性

格変わんだよ。ハンドル握ると性格変わる、みたいな感じ」

「そ、そうなんだ」

知らなかった。渡羽とは中学に入ってから知り合った。眼鏡を外す機会などなかったので、こんな一面があったとは。

無理やりここへ連れてこられた時には、バルカンを恨みもしたが、渡羽の新たな一面を知ることができて、来てよかったと思う明衣子だった。

アスカは頬杖について、運ばれてきたトロピカルジュースの氷を、ストローで掻き回しながら言った。

「へえ、バルカンは渡羽が眼鏡外したら地が出るってこと知ってるのね」

「そりゃもう！ 小学生の時から親友ですから！」

「親友じゃなくてただの腐れ縁だろ」

「そんな冷てーこと言うなよっ。いろいろ面倒見てやってたのは誰だと思ってんだ！」

「確実に俺だよ。君がバカやったり、無茶をするたびに俺がフォローしてたんじゃないか」

「ううっ、真顔で真実を。ここは笑って受け流せよお」

バルカンはうるうると目を潤ませて渡羽にしなだれかかる。渡羽はかなり迷惑そうだが、そんな二人をアスカは微笑ましく見ていた。なんだかこうして、渡羽が友達と話しているのを見るのは不思議な感じだ。

渡羽はあまり学校でのことを話してくれない。だから友達という渡羽を見るのはうれしい。

「そういやさっき、米倉先輩よねくら見かけたぜ。キレーなお姉さんと二人で歩いてた。ありゃきつと彼女だな！」

渡羽に手で押しのけられながらもバルカンが言くと、明衣子がため息交じりに訂正した。

「何言ってるの、小学生くらいの男の子も一緒にいたじゃない」

「そうだったかあ？」

「そうよ。バルカンくんだったら女の人しか見えてないのね。全然似てなかったけど、たぶん弟じゃないかしら」

オーダーした料理が運ばれてきた。渡羽と明衣子は冷垂^{れいすいめん}麵、バルカンは冷やしきつねうどん、アスカはざるそばだ。

冷垂麵とは、ゆでてから冷やした麵に、ハムや錦糸卵、野菜などを盛りつけて、酢やゴマの入ったしょうゆダレをかけた麵料理のことだ。

渡羽がタレを緑色の麵にからませながら、

「もし弟なら、一緒にいた女の方は姉か母親じゃないか？」

「いや、あんなに若くてキレイな人が母親なわけねーって！ 仲良さげに腕組んで歩いてたから姉貴でもねーよ」

冷やしきつねどんをズルズルすすりながら、バルカンは自信たっぷりに断言した。

「そうね。でも、その一緒にいた男の子が『今日は父親として家族サービスするから』って言ってたけど、どういう意味かしら」

「さー？ ままごとでもしてたんじゃないの？ それにしてもホント、キレイな人だったなあ」

「君はそれしか言うことないのか？」

「バルカンくんって、本当に女の人しか見てないのね」

呆れる渡羽と明衣子。バルカンは「うっせー」と油揚げをはむはむ咀嚼する。

にこにこ笑いながらそんな三人を見ていたアスカに気づき、バルカンは慌てて取り繕う。

「あっ、すんません、さっきからオレたちばっかしやべってて」

「え？ ああ、いいよ、別に。渡羽が友達と話してるの初めて見たから、ちよつと楽しくて。」

バルカンも明衣子も渡羽とは昔から仲良しなの？

「いや、高尾さんとは中学に入ってから知り合ったんだ。バルカンは小学校の時から一緒だけど」

「そうそう。確か高尾とは中二の時だよな、会ったの」

「バルカンくんと会ったのは二年の時だけど、渡羽くんとは一年の時に会ったことあるの」

明衣子の言葉に、渡羽は目を瞬かせた。

「あれ？ そうだったっけ」

「一度だけだけだね。…もしかして覚えてない？」

少し淋しそうに微笑みながらの明衣子の問いかけに、渡羽は目線を上げて思い返してみよう。しかし、やはり思い出せなかった。

「ごめん、よく覚えてないな」

「…そっか。そうよね、一度だけだったし、名前とか言ったわけでもないし、覚えてないのも無理ないよね」

微笑んではいるが、明衣子の声のトーンが下がったのは確かだった。

四人の間に暗い沈黙が落ちる。こういった雰囲気が苦手なバルカンは、どうにか場を盛り上げようと口を開きかけた。

「あ、あのよ…」

「ねえ！ ご飯食べ終わったら、二手に分かれて遊ばない？」

その場の暗い雰囲気などないものとするように、アスカはいつもの明るい笑顔で言った。

渡羽と明衣子がそろって目をぱちくりさせている。

「男は男同士、女は女同士積もる話もあるだろうし、そうしよう！
ねっ？」

につこりと笑うアスカの笑顔を見ると、なぜだか元気が出てきた。

数十秒前まであった重い雰囲気が、アスカの言葉と笑顔で一瞬にして払拭された。

アスカの提案を受け入れ、四人は二手に分かれることになった。待ち合わせ時間と場所を決め、渡羽とバルカンは渦潮プールに向かった。渦潮プールに向かう道すがら、バルカンはアスカへのラブ

コールを始めた。

「いや、アスカさんってかわいいな。明るいし元気だし、年上だし。」

おまえにあんなかわいい知り合いがいたなんて驚きだぜ。なんで紹介してくんなかったんだよ？」

「俺も会ったのは夏休み直前だったんだよ。紹介するヒマなんてなかったんだ」

どこことなく不機嫌そうな顔で、つつけんどんに言う渡羽。バルカンはにやりと意地の悪い笑みを浮かべた。

「ほおおう、んじゃ何か。会って間もないアスカさんをプールに誘ったってか。おまえって実は手が早かったんだな」

「あのな。誘ったんじゃなくて母さんが行って来いって…」

「なあ、アスカさんって外国人っつーか、もしかしてヴィジョネリの人か？」

その問いに、渡羽はぎくりとした。確かに、最初アスカと会った時、渡羽もそう思った。

ヴィジョネリはここ——あいずみこく藍泉国から見れば異国にあたり、この国とはだいぶ文化が異なる。

そして、ヴィジョネリ人は主にそうはつへきがん蒼髪碧眼であるのが特徴だ。

アスカはそれに近い髪と眼の色なので、バルカンがそう思うのも無理はないが：ヴィジョネリと呼ぶのは古い言い方で、今はヨルムトという別の呼び名が流通している。

今時そう呼んでいるのはお年寄りぐらいだ。

（本当は違うけど、そんなことは言えないし、ここは話を合わせておこう）

あえて呼び方には触れずスルー。

「あー、うん。確かそうだって言ってたような」

「けど藍泉語ペラペラだよなー。すっげーな、外国語しゃべれるのって。かわいいだけじゃなくそんな特技もあるなんて、尊敬するぜ、アスカさん！」

顔を赤くしてうへうへと笑うバルカンに、渡羽は薄気味悪そうに、一步離れて歩いた。

しかし、バルカンがアスカに一目惚れしたということには、全く気づかないニブチンの渡羽。

「なあ！ 一緒にプール来るくらいなんだから、仲はいいんだろ！？」
アスカさんのこといろいろ教えてくれよ！」

きらきらと目を輝かせて顔を近づけてくるバルカンに、渡羽は顔を引きつらせた。

「い、いろいろって？」

「たとえば、誕生日とか好きなものとか嫌いなものとか！」

「誕生日……」

アスカと初めて会った時、今日が十六歳の誕生日だと言っていたから、あの日が誕生日なんだろうが、いつだったかはつきりと覚えていない。

「いつだったかな。夏休みに入る前だから、七月の半ばくらいだったと思うけど」

「何ー！？ じゃあもう過ぎてんじゃんか。くそう、もっと早く出会っていれば……」

悔しげに唸るバルカン。

「じゃあよ、好きなものとか嫌いなものは！？」

「え？ うーん、なんだろう」

考え込む渡羽に、バルカンは訝しげな顔で、

「……飛鳥、お前ホントにアスカさんと仲いいのか？ アスカさんのことよく知ってんじゃねーの？」

「あ……いや、その……」

「アスカさんのことほとんど知らねーんだなー」

頭の後ろで手を組み、バルカンはあっさりと何気なくそう言った。渡羽は言われて初めて、自分はアスカのことを何も知らないのだと気づいた。

魔法の国の王女であること、女王試験のために人間界に来たこと、

それ以外は知らない。

アスカ自身のことは何も知らないのだ。好きなものや嫌いなものだって、よく分らない。

出会ってからひと月。それなのに何も知らないのは、それだけアスカと深く関わっていなかったということだ。

今頃になって、アスカが「さみしい」といった理由が解った。

一方、渡羽が落ち込んでいることなど知らないアスカと明衣子は、泳げない者同士ということで、噴水のあるプールへと向かった。

そのプールは水深が浅く、ひざとくるぶしの間程度で、子供たちが噴水の水を浴びたり、アスレチックで遊んでいた。

アスカたちは貸しビーチボールで遊ぶことにした。キャッチボールをしながら、アスカは興味本位で明衣子に訊いてみた。

「ねえ、さっきの渡羽と初めて会った時って、どんな感じだったの？」

「えっ。えっと……私、その日は日直で……クラス全員のノートを運んでたんです」

その時を思い返し、明衣子は思いを巡らせた。それは中一の秋のこと。

「渡羽くんとは隣のクラスだったんですけど、その時までは名前も知らなかったんです。

話したこともなかったし、その……あまり存在感がなかったというか」

「あははっ、やっぱり渡羽って学校でも地味なのね」

「はい。あ、いえ！　それで、ノートを運んでいる時に渡羽くんが『重そうですね、手伝いますよ』って声をかけてくれた」

明衣子はぽつと頬を朱くした。それでアスカは明衣子の気持ちに気がついた。この子は渡羽のことが好きなんだ。

「その時はわたし、渡羽くんのこと知らなかったから遠慮したんで

すけど、渡羽くんは『気にしないで下さい。俺が勝手にやりたいと思っただけですから』って、結局運んでくれました」

「そっかぁ。優しいね、渡羽は。それで明衣子は渡羽のこと好きになっちゃったんだ」

「えっ！　どうして分かったんですか！？　あっ」

驚いて動きを止めたために、ぼむっとビーチボールが明衣子の頭に直撃する。ボールはぷかぷかと水の上を流れていく。

慌ててボールを取りに行く明衣子の背中に、アスカが笑いかけた。

「やっぱりね。分かるよ。だってあたしも渡羽のこと好きだもん」

「：あの、アスフェリカさんは」

「アスカでいいよ。それに『さん』づけと敬語も必要なし！」

「でも、年上だし…」

「年なんて関係ないわよ！　あたしがいいって言ったらいいの。国のみんなもそう呼んでくれたし」

「国のみんな？」

小首を傾げる明衣子に、アスカは慌てて両手を振った。

「あ。ううん、なんでもない！　とにかく、あたしのことはそう呼んで」

「うん、分かった。あの：アスカ：は、渡羽くんと、どういう関係なの？」

思い切って明衣子は、一番気になっていた疑問を投げかけた。

やけに親しそうな渡羽とアスカ。二人で来るくらいだし、もしかしてもしかすると：

「どういう関係？　んー、そうねえ、渡羽はあたしのご主人様よ」

「え？」

びしっと明衣子は固まった。予想とは違う衝撃。恋人かと思ったのだが、ご主人様というのは一体どういうことなのか。

「あ、でも一緒に住んでるから家族って言ってもいいのかなあ」

「一緒に住んで！？」

さらなる衝撃。同棲！？

「そう。居候させてもらってるの。えーと、故郷から出てきて住むとこなかったから…って、明衣子？ 聞いてる？」

ボールを持ったまま固まっている明衣子。アスカはきょとんと首を傾げ、少し考えてから言った。

「ねえ、明衣子。あたしたち、今日初めて会ったばかりだけど、あたし、明衣子のこと好きになったわ。」

渡羽の友達だし、同じ渡羽を好きな者同士、気に入ったの。だから、だからね。明衣子にお願いがあるの」

固まっていた明衣子は、アスカの不思議と凜とした声で我に返った。

明衣子が本当に渡羽のことを好きなら：

アスカは一度目を伏せ、目を開けると、明衣子を正面から見つめた。

「その気持ち、大切にしてほしいの。渡羽を譲るつもりはないけど、あたしに遠慮したりしないでもいいから、ずっと渡羽のこと好きでいてほしい。」

明衣子だから、頼めるの。あなたになら許せるから」

そう言うと、アスカはにっこりと笑った。

明衣子は何も訊き返せなかった。今の笑顔には、それを思いとどまらせる何かがあったのだ。

約束の時間になり、渡羽とバルカン待ち合わせ場所へと向かった。

待ち合わせ場所ではすでにアスカと明衣子が待っていて、アスカは笑顔で、明衣子はなんとなくぎこちなく迎えてくれた。

四人は最後に波のプールで遊んでから帰宅することにした。

ひとしきり遊び、着替え終わった後、渡羽たちはバルカンたちとは帰る方向が違うので、プールのバス停で別れた。

人もまばらな電車の中で、アスカは子供のように、イスに後ろ向

きに座って窓の外を見ていた。ほうきで上から見るのと、電車から見るのではまた違う感じるのでおもしろい。

渡羽はしばらく無言だったが、思い立ってアスカに話しかけた。

「あの、アスカ？」

「ん？ 何？」

「：俺、今までアスカのこと、ずっとほったらかしにしてましたよね。だからアスカのこともよく知らなくて……」

「どうしたの、渡羽。急にそんなこと言って」

「アスカがこっちの世界のことを知ろうとしたり、俺のことを考えてくれたりしているのに、俺はアスカに何もしてない、アスカのことを知らないなって：バルカンに言われて気づいたんです」

真剣な表情の渡羽に、アスカは姿勢を戻して、隣に座っている渡羽の横顔を見た。

「不慣れな世界でアスカは頑張っているのに、俺は自分のことで手いっぱい、アスカが苦手の勉強をしても、いろんなことを我慢していても、アスカがどんな思いでいるのかさえ解ってあげられませんでした。」

今日だってきつと、母さんが何も言わずにいたら、俺は……アスカを泣かせてでも、勉強を続けていたと思います」

渡羽は膝の上で組んだ手を、固く握りしめた。後悔と自責の念から、くつと顔をゆがませる。

「身勝手で、薄情ですよね。改めて今までのことを振り返ってみると、俺はアスカを傷つけてばかりでした」

「そんな……」

「アスカが何度遊びに誘ってくれても、全部断って。」

夜遅くまで勉強している俺に、疲れを取る飲み物を作ってくれた時も、ろくにお礼も言わず……

だからアスカは、さみしいと思ったんですよね。それでも、俺のことを思っってワガママを言わずに我慢して」

渡羽がアスカを見る。アスカはわずかに痛みを堪えるような表情

をしていた。

いつも笑っていたけれど、陰ではずっとこんな表情をしていたのだろう。そう思うとやるせない。

「つらかったでしょう。アスカは細かいことや勉強だけじゃなく、我慢したり、本音を隠すのも苦手ですから。

すみません、淋しい思いをさせてしまって」

悲しげに謝る渡羽に、アスカは小さく首を横に振った。

「渡羽がそんな顔することないよ。さみしかったのはほんとだけど、気づいてくれたから。」

気づいてくれたのなら、もういいよ。許してあげる。だから、そんな悲しい顔しないで」

アスカは大人びた微笑みを浮かべた。いつものような、どこかあどけなさの残る笑顔ではなく、年上だと実感させる大人びた笑顔を。その笑顔に、渡羽は泣き笑いのような表情になった。やっぱ彼女 herself より一枚上手なのだ。

渡羽が笑みを返すと、アスカは一転していつもの笑顔に戻った。

「今日は楽しかったよ！ 友達もできたし、渡羽と二人で出かけられたから。またこうして出かけようね！ 渡羽の気が向いた時でいいから」

「はい。どこでもお供しますよ」

いつもの調子を取り戻し、渡羽は穏やかに微笑んだ。

ほんの少し、渡羽はバルカンに感謝した。バルカンのおかげで、離れかけていたアスカとの距離を取り戻すことができたのだから。

それどころか、以前よりも距離が近づいたような気がする。とは言え、

「それと、これからはもっとアスカのことを知ろうと思います。バルカンにバカにされるのは気分のいいものではないですから」

「？」

バルカンの余計な一言は結構、癪に障ったので、意地でもアスカのことを知ってやると、密かに燃える渡羽だった。

8th 三恋花（後書き）

追伸列記簿

こんにちは、甲斐日向です。マジラビ第八話をお届け致しました。前回の続きで：バルカンと明衣子が登場！そしてバルカンの本名が明かされましたね。

ええ、あーいう名前だったんですよ。意外とパツと思い浮かびましたね、あの名前。

ちなみに言っておきますが、バルカンの名前の由来は某特撮ヒーローものの『サ○バル○ン』から取ったわけではありません。決して。いやこれは本当です。

本当の由来は、某マンガの主要キャラが紙パックで作ったおもちゃです。

さて、今回で少し渡羽とアスカの距離が縮まりました。しかしこれといった進展はなく……いやいや、これから渡羽もアスカに近づいていこうとするでしょうし、進展がある……はず？

今回は番外編もあります。八話のその後みたいな。本編にあまり深くかわらないので、番外編という形をとりました。ティアラが久し振りに登場してますよ。

それでは、次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

エピソード とある夏の日の1ページ

「え？ あたしの誕生日がいつかって？」

棒アイスをぱくりと頬張り、アスカはきょとんと聞き返した。

「はい。昨日言ったじゃないですか。これからはアスカのことをいろいろ知りたいって。それで、まずは手始めに誕生日から訊こうかと」

カーペットの上で正座して、渡羽はカップアイスを片手に微笑んだ。

「俺たちが初めて会った日、誕生日だって言っていましたから、あの日がそうですか？」

「ううん、確かにあの日、あたしは誕生日だったけど、日にちは少し違うよ」

「え？ そうなんですか？」

目を丸くする渡羽に、かき氷を食べていたティアラが補足する。

「魔法界と人間界では時間の流れが違うんですよ。魔法界の時間はこちらの半分の速さで進みます。こっちが一時間進んでも、あっちでは三十分しか進まないというわけです」

「そうなんですか：じゃあ、アスカの誕生日って：」

「あたしの誕生日はあっちの四月七日！」

アスカは食べ終えたアイスの棒をゴミ箱に捨てた。

「四月七日ですね。俺は十一月一日なんですよ」

「へえ、1続きなのね」

「はい。ですから覚えやすいと言われます。でも、1続きで覚える人にはたまに十一月十一日や一月十一日と間違えられたりするんですよね」

その一例がバルカンだ。小学生の時に、バルカンは渡羽の誕生日を1続きということで、なぜか一月一日と覚えていた。

いくらなんでもそれはないだろう。渡羽は当時を思い出して少し

むかつ腹を立てたが、アスカには笑顔で尋ねた。

「えーと、じゃあ、次は好きなものとか嫌いなものを教えてくれますか？」

「好きなものは、渡羽かな？」

「……そういうことではなくて」

赤面して、渡羽はちよつと俯いた。

「えへへ。冗談けどウソじゃないよ。渡羽が好きなのはホントだもん」

「あ、ありがとうございます」

「んーと、好きなもの……それって食べ物とか？」

「ま、まあなんでもいいですよ」

照れ隠しか、渡羽はぱくぱくと今までの倍の速さでアイスを口に入れる。

「好きな食べ物はー、チョコレート。チョコレートが入ってるものならなんでも好きだよ。嫌いなのはすっぱいもの」

「ああ、だから梅干し食べられないんですね」

「そう！ 人間界に来て初めて食べたけど、あれは、あれだけは絶対イヤ！ もう二度と食べたくないっ」

梅干しの味を思い出したらしく、アスカはものすごくすっぱそうな顔をした。

渡羽は苦笑して、

「栄養あるんですけどねー。俺は嫌いじゃないですよ、梅干し」

「あたしはイヤ。んー、この話題はもう終わりっ。他に好きなもの……ほうきで空飛ぶのは好きね。得意な魔法だし」

「姫様が唯一失敗しない魔法ですしね」

ティアラの一言に、アスカはびくつと頬を引きつらせた。

「悪かったわね、失敗ばかりで！」

アスカはティアラの体を、指で何度もビシビシとつつきまくる。

「あああっ、すみませーん！ 痛いです、姫様あっ」

「あんたなんか、こうっ。こうしてやるっっ」

「やーんっ」

「あ、あの…もうそのくらいで…」

なんだか弱い女の子をいじめているあくどい男のようだ。

「まあいいわ。あとは知らないところを探検することかしらね。それから嫌いなものは、勉強と細かい作業と……しつこいどこぞのストーリー男かしら。」

ジト目でアスカはきっぱりと言った。その場にひゅうっと冷たい空気が漂う。

「……………えーと…あ！　じゃあ、家族のこととか訊いてもいいですかっ？」

場を取り繕うように、渡羽はなるべく明るい声で言った。

話題を逸らそうとしたのだろうが、まったく逸れていない。むしろ地雷を踏んでいる。

アスカは、しつこいどこぞのストーリー男ⅡシンⅡ父親ということで、この質問には少し不機嫌気味に答えた。

「知っての通り、あのウザ父と女王陛下である母様、それから兄様と妹がいるわ」

「え、アスカって兄弟いたんですか？　てっきり一人っ子かと」

国王様が異様にアスカに執着していたから。

と思ったがそれは口に出さなかった。言えばたぶん、余計にシンを思い出させるだろう。だが、意外にもアスカの方からそこに触れてきた。

「まあ、父様は一番あたしに甘かったから。あんなバカなことするほどね。母様は誰にでも厳しい人だし、かわいがられた記憶は父様の方が多いかも」

「国王様は優しい人ですね」

「そうなのかな。うん、でもそうかも」

昔、よく城を抜け出して連れ戻された時も、父様はいつも母様からかばってくれたっけ。

王女としての自覚を持てと怒る母親に、父親は元気なのは良いこ

とだと、むしろ褒めてくれた。

（その代わりに父様が母様にお仕置きされてたけど）

そう言うたびに、国王は女王に魔法で吹っ飛ばされていた。

自分も毎回懲りなかったが、父親も懲りなかったのは、やはり親子ゆえなのだろうか。

「結局、あたしは父様の子なのよねー」

「そうです、アスカ姫。僕とあなたは繋がっているのですよ！」

「……………」

アスカの隣で、にっこりと笑うシン。

予期せぬ登場に、一同は反応できずに固まった。

そして、三人そろって満面の笑みのシンを指差す。

「「シン／様／さん——！！？」」

「やあ、ごきげんよう、皆の衆！ 元気でいたかな？」

「ななっ、なんであんたがここに……って言うか、なんでまたその姿なのよ！ 父様！」

突き出した手をふるふる震わせるアスカ。

目の前にいるこの男、青年の姿をしているが、魔法で若い姿に変身しているアスカの実父・マジカリア国王その人なのだ。

シンはキザったらしく前髪を掻き上げた。

「この姿の方が何かと便利でして。お気に召しませんか？ アスカ姫」

「今さら他人ぶらないでよっ！ あーもう、正体分かってるからなんかやりにくいわ！ でも、父様がその気なら合わせてあげようじゃないのっ。というわけだから改めて。シン、なんでここにいますよ？」

「それは愚問というものですよ、アスカ姫。僕はいつでもあなたをそばで見守っているのですから。そして時に、こうして直接あなたとお話を」

「とどのつまり、四六時中あたしにつきまってるわけね？」
ぴきぴきとアスカのこめかみに青筋が浮かび始める。

渡羽とティアラは、アスカの怒りのオーラを目にし、びくつと身をすくませた。

「ほんと、あんたはどこにでもついてくるわよね。城抜け出した時にもついてきてたし」

怒りのため精神がいつもより集中しているのか、呪文なしでアスカは魔法でほうきを出した。

「何度追いつても出てくる上に、人の話全然きかないし」

「…アスカ姫？ いつもより目が据わっているようですが…」

「あたしはあんたなんか好きじゃないって言うてるのに、照れ隠しだのなんだの…」

「あの、アス」

カッと目を見開くと、アスカはほうきを野球のバットのごとく、フルスイングした！

「いい加減しつこいのよ、このストーカー男おおおおっ!!」

ガシャーッ！ キラリーン☆

ほうきは見事シンに命中し、シンは窓を突き破って空のお星様となった。

「わーっ、窓があああっ」

風通しの良くなった部屋の中で、渡羽は頭を抱えて悲鳴を上げた。そして扇風機がむなしく風を送っていた……………

9th 年越し

師走しわすの終わり。この日、渡羽家では大掃除を行うことになった。冷たい水を張ったバケツと、その中に沈む雑巾。窓拭き用のスプレーと布。掃除機にほうきにちりとり。その他もろもろの掃除用具。それらを食堂の真ん中に置き、渡羽家の面々は食堂に集まっていた。

現在、渡羽家を仕切っている、渡羽美鳥。その息子・渡羽飛鳥。そして、この家に居候している魔法の国の王女・アスフェリカー——アスカと、付き人の妖精・ティアラ。

ただし、ティアラは美鳥には見えていない。ティアラは普通の人間には見えないのだが、渡羽は人外のモノを見る能力ちからがあるため、うつすらとだが見えている。

アスカは並べられた掃除用具の前に立つと、すうっと両の掌を掃除用具に向けた。

「ハヒイエルク！」

アスカが呪文を唱えると、カタカタと掃除用具が震え、命を吹き込まれたかのように動き始めた。

それを見た美鳥が興奮気味に叫んだ。

「きゃあああつ、本物だわ！ 本物の魔法だわーっ！ いやん、素敵！ さすがはアスカちゃん。魔法の国の王女様だけあるわあ？」

「えへへ、それほどでも」

アスカは照れ笑いを浮かべた。掃除用具たちは自分のすべきことを心得ていて、各々の仕事を始める。

ファンタジー好きで童話作家である美鳥は、本物の魔法を目の当たりにして、すっかり我を忘れている。

何度かアスカの魔法を見たことのある渡羽だが、せかせかと動き回る雑巾や掃除機を見ていると、おとぎ話の世界に迷い込んだような気になる。

大掃除は彼らがやってくれるので、今年の大掃除は楽に終わりそうだ。

「今回はうまくいきましたね」

ティアラが渡羽の肩に座り、掃除用具たちを観察しながら言った。王女でありながら、初歩の魔法しか使えないアスカは、修行してはいるものの、いまだに失敗ばかりだ。だから成功したことにホッとしている。渡羽も笑って、

「そうですね。よかったです。それにしても、やっぱり魔法って便利なんですね」

ティアラの声は美鳥には聞こえないので小声で返し、後半のみ、美鳥にも聞こえる声量で言った。

「そうねえ。いつも二人だけで掃除してたから、だいぶ助かるわ。ありがとう、アスカちゃん」

「どういたしました。渡羽や美鳥母様にはお世話になってるし、これくらい、ちよろいちよろい！」

アスカがそう胸を張った時だった。掃除用具たちが、妙な動きを始めた。未熟なアスカは、集中力が散漫すると魔法の制御が弱まってしまう。

ティアラが気づいてアスカに警告を飛ばした。

「姫様！ 集中力を散漫させてはいけません！」

「へ？」

間の抜けた声でアスカが反応した時、掃除用具たちが一斉に暴れ始めた！

雑巾は水を振りまきながら宙を飛び、壁に体当たりする。バケツはひっくり返ってゴロゴロと廊下を転がっていった。

「わーっ、廊下が水浸しに！」

渡羽が慌てて雑巾を捕まえようとする。しかし、雑巾は必死になっている渡羽を嘲笑うようにひよいひよいと避けて、水を撒き散らす。

水に濡れながらも奮闘する渡羽に、雑巾はびゅんっと加速して、

渡羽の顔面にアタックした。

「うぶっ！」

渡羽は目を回してその場にぼったりと倒れた。

「いやーっ、渡羽あ！？　しっかりしてえっ」

目を回している渡羽をアスカが抱き起こして前後に揺さぶる。その後ろで、居間からも悲鳴が上がった。

「ああーっ、やめてえっ、それはお父さんが買ってきてくれた、フアンダレン作『眩きものたち』の模写なのよー！」

次いで、ガシャーンッ、とガラスの割れる音がする。どうやら窓が割られたようだ。

「姫様あっ、早く止めて下さーい！　このままでは部屋がメチャクチャに……キャーッ」

「ティアラ！？」

ここからでは見えない。しかし、ゆゆしき事態であることは確かだ。アスカは渡羽の体を床に寝かし、魔法を解除した。

「ああ、そんなこともありましたねえ」

居間のこたつでみかんをむきながら、渡羽は苦笑した。大晦日の夜、一年の出来事を振り返るのが渡羽家の習慣だ。

先日に起きた事件を思い返し、渡羽はなんとも言えない気持ちになった。

あの後、アスカが魔法で元の状態に戻したので、割れた窓ガラスも、水浸しになった廊下も、ボロボロにされた『眩きものたち』の模写その他は元に戻ったが、結局、自力で掃除をすることになり、終わるまで丸一日かかった。

それでも例年よりは人手があったため、早く終わった方だ。

今回の教訓。楽をしようとする痛い目に遭う。油断は禁物。集中力は大事。

むき終わったみかんをアスカの前に置く。アスカはその時の失態

を思い出してか、頭を抱えて突っ伏し、唸っている。

「まあ、誰にでも失敗はありますし」

「姫様の場合は失敗ばかりです」

むいてもらったみかんの一粒をかじりながら、ティアラが言う。

いつもなら「失敗ばかりで悪かったわね!」と怒鳴るところだが、さすがにあの時のことは、アスカも心苦しく思っているので、何も言わなかった。

「いつも集中力は大事だと言っているのに、姫様はすぐ調子に乗るんですから」

「うう」

「まあまあ、ティアラ。アスカだって反省しているんですし、もう過ぎたことですよ」

「それもそうですけど、今後このようなことがないよう、しっかり心に留めておいてもらわなければ。」

なんでも魔法で解決できるからと言って、慢心するのはよくありませんからね」

はっとして、渡羽はみかんをむく手を止めた。ティアラの言葉は的を射ている。魔法に頼ってばかりではいけない。

便利だからと言って、使いすぎたり慣れてしまえば、いつかは油断が生まれる。

その油断が大きな過ちにつながることもあるのだ。それは魔法に限らない。

渡羽はティッシュで手を拭くと、ティアラの頭を指でそつと撫でた。

「そうですね。俺も気をつけるようにします。ティアラは偉いですね」

微笑む渡羽。ティアラは頭を撫でられて顔を朱くし、少し困ったように、けれどうれしそうに笑った。

それを上目遣いで見ていたアスカは、ぶすつとした顔で、渡羽がむいてくれたみかんを頬張った。なんだかおもしろくない。

「二人とも、お待たせ、年越しそばができたわよ」

美鳥がお盆にどんぶりを乗せて居間に入ってきた。二人の前にどんぶりを置く。

「熱いから気をつけてね」

「これが年越しそば？」

「と言っても普通のそばですけど。マジカリアでは年越しに何かしたりしないんですか？」

「んー、そうねえ。年越しには特にしないけど、新年が明けたら新年のお祝いをするわね」

「まあ、そうなの？ 新年のお祝いってどんな？」

美鳥が身を乗り出す。魔法界の話になると、美鳥は目の色が変わる。

「えっと、いつもは許可なしに入るのは禁じられてるんだけど、その日だけは城が一般公開されてね、国民も自由に城に出入りできるの。」

で、国を一周するパレードが開かれて、夜にはその日だけ食べることを許されている、レジンストロっていう料理を食べるのよ」

「魔法の国での新年のお祝いは派手なのねえ」

「レジンストロって、こっちのおせち料理みたいなものですかね」

「そうねえ。でも、その日にだけ、それも夜に食べるっていうところが少し違うわね」

「あたし、『おせち料理』楽しみ！ 明日食べられるのよね？」

年越しそばを食べながら、アスカは期待のこもった目で訊いた。

渡羽が首肯した時、除夜の鐘が鳴り始めた。

「あ、除夜の鐘ですよ」

「いよいよ年が明けるわよ。今年も一年お疲れ様。アスカちゃんが来て、この家も賑やかになったわよね。来年もよい年でありますように」

美鳥はそう言って、年越しそばと一緒に持ってきた甘酒の杯を傾けた。

除夜の鐘が鳴り響く。一つ、また一つと。そして、テレビでは年明けへのカウントダウンが始まった。

ティアラはふいふと窓辺まで飛んで行った。カーテンをぐぐり、外を見る。

暗い夜空。けれど、月明かりが町を照らし、星々が瞬いている。

ティアラが夜空を見上げていると、一つの星が流れた。

「！ 流れ星」

ちょうどその時、背後のテレビでカウントダウンをしていた、バラエティー番組の司会者が《ゼロ！》と叫んだ。

「新年、明けましておめでとう」

「あけましておめでとうございます」

「あ、あけましておめでとう」

カウントダウンが終わると同時に、美鳥が甘酒の入った杯を高く掲げ、新年のあいさつを述べた。

渡羽も、初めて経験するアスカも新年を祝う。カーテンの向こうから出てきて、ティアラは窓の縁に座った。

渡羽はそんなティアラに目を留め、口の動きだけで「おめでとうございます」と言って微笑んだ。

ティアラは渡羽に笑い返して、美鳥に甘酒を勧められているアスカへと飛んで行き、肩に座った。

アスカは目だけでティアラを見ると、微笑んでから甘酒に口をつけた。

元旦の朝、アスカはベッドの上で唸っていた。昨夜飲んだ甘酒で酔ったらしい。人間界のお酒は自分には合わないようだ。

「うゝ、なんか体だるいゝ、頭痛いゝ」

「大丈夫ですか？ 姫様」

「だいじょぶじゃなゝいゝ」

ごろんと寝返りを打ち、体を丸くした。コンコン、とノックの音

がし、渡羽が入ってきた。

「入りますよ、アスカ。二日酔いに効く薬持ってきました」

「ういゝ？」

ごろりと寝返りを打って、渡羽の方に体を向ける。のらのらと身を起こすと、途端にめまいがする。

「あゝ、頭がぐらぐらするうゝ」

「甘酒で酔うなんて：アスカってお酒弱いんですね」

「そんなことないわよ、あたしお酒飲めるもん。ただ、人間界と魔法界じゃ成分が違うんだと思う」
あっち

「姫様はどちらかと言えばお酒に強い方ですしね。ビン一本くらい簡単に飲み干しちゃいますよ」

ティアラがあっさり言う、渡羽は目を丸くした。

「じゃあ、こっちのお酒の方が強いってことですか？」

というか、マジカリアでは未成年でもお酒を飲んでいいのだろうか。ちなみに藍泉での成人年齢は十八歳だ。

「たぶんねゝ。うう、葉ゝ」

「あ、はい。甘酒でこれなら、普通のお酒なんて飲めませんね。

まあ、未成年は元々飲んではいけませんし、飲む機会はないでしょうけど」

「飲む機会あっても絶対イヤゝっ」

錠剤を水で口に流し込むと、アスカはぼたん、とベッドに寝転がった。

「だいぶつらそうですね。起きられそうにありませんか？」

「今はムリいゝ」

「そうですか。じゃあ、おせち料理はもう少ししてから食べましょうか」

「……『おせち』。うう、食べたいけど、今食べたら吐きそう……ごめん、渡羽」

「いえ、いいんですよ。お正月の朝はゆっくりするものですし、無理にとは言いませんから」

コップをお盆に戻し、渡羽はお盆を持って立ち上がった。

「それじゃあ、母さんにも言ってきます。具合がよくなったら教えて下さい。ティアラ、あとはお願いしますね」

「はい。おまかせ下さい」

空中で滞空しながら、ガッツポーズを見せるティアラ。

渡羽が部屋を出ていつてから、アスカは壁の方を向いて、背を丸めた。

（あーあ、せっかくの初めての『お正月』なのに、災難だわ。治癒系の魔法が使えれば、二日酔いなんて簡単に治るのに。

こんなことなら、もっとマジメに魔法修行しておけばよかったな）
くすんと落ち込むアスカ。何を考えているのかだいたい分かっているティアラは、すんと、と枕元に降り立った。

「元気を出して下さい、姫様。何も食べられなくなったわけじゃないんですし」

「でも、迷惑かけたことには変わりないわ。あたしのせいで、渡羽たち朝ご飯食べられないんだもん」

ティアラは目を瞠った。あの姫様が他人への迷惑を省みるなんて。昔はオテンバで、城の者たちをからかったり、イタズラをしては城を抜け出して、町や危険な森、山に遊びに行っていた。

何度怒られても反省の気配を見せず、懲りずに言いつけを破っていた。そんなアスカが迷惑をかけてしまったと落ち込んで反省している。

（これも渡羽さんのおかげでしょうか）

渡羽と出会ってから、アスカは確実に成長してきている。それは良い意味で、今までならなかったことだ。

ティアラはうれしそうに笑うと、踊るようにくると回った。

「姫様。姫様がそういった考えを抱くようになって、ティアラはうれしく思います。だから、姫様の元気が出るように、姫様のために、一曲捧げます」

「え？」

アスカは寝返りを打って、ティアラに体を向ける。ティアラは手を組み、祈るように目を伏せると歌い始めた。

透明で、涼やかで、流れる水のような旋律。そういえば、妖精の歌には微弱だけど治癒効果があるんだっけ。

アスカは目を閉じて歌声に耳を傾ける。普段はキンキンと金切り声で怒鳴っているティアラの声が、今は耳に心地よい。

歌っている時のティアラの声は、どこか大人びていていつもと違うせいだろうか。

少しずつ、体のだるさがなくなってきたような気がする。頭痛も引いてきた。

（ありがと、ティアラ）

目を閉じて歌い続けるティアラに、アスカは心の中でそっとお礼を言った。

9th 年越し（後書き）

追伸列記簿

皆さん、こんにちは。甲斐日向です。マジラビ第九話をお届けしました。

前回よりだいぶ季節が過ぎ、冬休みに入りました。大晦日です。時間休み続きなので、六話からは“お休み編”とでも言いましょうか。五話までは“女王試験編”ということで。

たぶん次回で“お休み編”は終わりです。その後からはまた新シリーズに入ります。予定です。

えー、サブタイトル通り年越しです。それ以外何ありません。今回は特に話すことがありませんねえ。なのでちょこっと次回の予告でも。

新年を迎えた渡羽家に、渡羽の姉夫婦がやってきた。姉たちと仲良く話す渡羽を見て、アスカは魔法界の家族が恋しくなり……

はい、今回は渡羽の姉（＋その他）が出てきます。この方はお気に入りです。もしかしたらマジラビキャラの中で一番やも（え？）それでは、次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

10th 新年

食堂に入ってきたアスカを見て、美鳥が心配そうに近づいてきた。ティアラも一緒にいるが、美鳥には見えていない。

「アスカちゃん、もう大丈夫なの？」

「うん。心配かけてごめんね、美鳥母様」

「私の方こそごめんなさいね。飛鳥から聞いたわ。アスカちゃん、こっちのお酒弱いんですね。それなのにたくさん勧めちゃって……」

「あたしも知らなかったんだし、気にしないで。それより『おせち』食べよう！ 『おせち』！」

すっかりいつもの調子を取り戻しているアスカに、美鳥は「そうですね」と笑った。

さっそく、渡羽がおせち料理の詰められた重箱をこたつへ運ぶ。美鳥がお雑煮を人数分、お椀によそい、アスカがそれを運ぶ。

全員がこたつに入ると、美鳥は丁寧に頭を下げた。

「それでは改めまして、明けましておめでとうございます。今年も一年、よろしく願います」

「「よろしく願います」」

渡羽とアスカも一礼する。そしてお待ちかね、重箱のふたが開けられた。

カズノコ、海老、黒豆、伊達巻き卵などが、重箱の中に所狭しと詰め込まれている。

アスカは初めて見るおせち料理に、歓声を上げる。

「すごーい！ なんか豪華」

「ふふふ。なんとと言っても新年のお祝い料理ですもの。それじゃあ食べましょうか。いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

アスカはまず伊達巻き卵に手を伸ばした。形がロールケーキに似ている。はむっと口に入れると、甘さが口に広がる。

「ん〜、おいしーっ♪」

「飛鳥お手製だものね、アスカちゃんへの愛情たっぷりよ」

「か、母さん！」

「あら、違うの？」

「いえ、そんなことは：じゃなくて、どうしてすぐそういう言い方するんですか！」

「んもう、照れちゃって。かわいいわねえ、我が息子？」

「わっ、もう子供じゃないんですから頭撫でないで下さいよっ」

「いくつになってもあなたは子供よ。私にとってはね。そうそう、子供と言え、翔子^{しょうこ}は今日の午後に来るそうよ」

「翔子？」

お雑煮のモチをぐいーんと伸ばしながら、アスカが小首を傾げる。渡羽も同じくお雑煮をすすりながら、

「俺の姉ですよ。結婚して家を出てるんですけど、毎年正月には帰ってくるんです」

「そっかあ、あたしの兄様と一緒になのね。兄様も結婚して他の国に行っちゃったから」

「あらあ、それは初耳ねえ。アスカちゃんってお兄さんがいたの？」

「あと妹さんもいるんですよね？」

伸びるモチに四苦八苦しながら、アスカは「うん！ 生意気盛りなのが一人ね」と返した。

「まあ、そうなの。ふふっ、賑やかそうねえ」

「それで姉さんはいつ頃来るんですか？」

美鳥はちらっと、食器戸棚の中の置き時計を見やった。既に九時を回っている。

「そうねえ、お昼は食べてから来るって言ってたから、二時過ぎじゃないかしらねえ」

「そうですか」

「じゃあそろそろ、お年玉を渡そうかしら」

美鳥はスカートのポケットから二つのぽち袋を出し、アスカと渡羽それぞれに手渡した。

「はい、これが飛鳥の分。こっちがアスカちゃんの分よ」

「あ、ありがとうございます」

「？　なあに、これ？」

手渡されたぽち袋を見てきよんとするアスカ。

「それはねえ、お年玉よ。新年のお祝いに子供とかに贈るの。まあ、多めのお小遣いって感じかしら」

アスカはぽち袋を開けて中を見てみた。お札が一枚入っている。出してみると一万円札だった。

「それで何か好きな物を買うもよし、貯金するもよし。でも大切に使うのよ？　無駄遣いは厳禁です」

にっこり笑う美鳥に、渡羽は「はい」と答え、アスカは「ありがとう、美鳥母様！」と満面の笑みを浮かべた。

そうして雑談を交えながら、正月の朝のひと時を過ごした。

おせちを食べ終え、食後のデザートにみかんをむきながら、アスカは渡羽に問いかけた。

「ねね、翔子姉様ってどんな人？」

「うーん、そうですねえ……格好よくて立派な人ですよ、いろんな意味で。姉さんは俺の憧れなんです」

渡羽は懐かしむように目を伏せる。アスカはその横顔に、ほんの少しだけ淋しさを感じた。

置いていかれるような、わずかな距離感。目の前に渡羽はいるのに、心はまるで別のところにあるようで。

「ちよっと、イヤだな」

「え？」

アスカはハッと我に返った。慌てて「なんでもない」と顔の前で

手を振って、みかんの最後の一粒を口に入れた。

時計の針がもうすぐ午後の二時半を指そうという頃、ピンポーンと玄関のチャイムが鳴った。

キッチンでお菓子の用意をしていた美鳥が、「きつと翔子たちよ」と小走りで玄関に向かう。

アスカと一緒に、こたつで正月のテレビ特番を見ていた渡羽も立ち上がった。

やにわに騒がしくなった玄関から、ぱたぱたと誰かが駆けてくる音。次いでドアが開くと、小さな男の子が飛び込んできた。

「あすかにいちゃん！」

まだ三、四歳くらいだろうか。エンジ色のダッフルコートを着た茶髪の男の子は、まっすぐに渡羽に向かっていき、抱きついた。

渡羽は男の子の頭を優しく撫でてやる。

「いらっしやい、寿一。としかず去年は風邪をひいて会えませんでしたから、二年ぶりですね。元気にしてましたか？」

「うんっ！」

顔を上げ、男の子は満面の笑みを見せた。そこへ美鳥と、年の頃二十代後半の男女が居間に入ってきた。

黒髪ショートカットの女性が、凛々しい表情で微笑む。

「あけましておめでどう、飛鳥。久し振りだね」

「おめでどう、飛鳥君」

女性の隣に立っている、茶髪セミロングの男性がへらっと笑う。

「はい。あけましておめでどうございます。姉さん、義兄さん」

渡羽が新年の挨拶を返すと、渡羽の姉・翔子は呆れ気味に、弟に抱きついている我が子を見た。

「こら、トシ。ちゃんと挨拶はしたのか？」

「？」

「来る前に教えただろう？ 飛鳥兄ちゃんたちに会ったら『あけま

しておめでとうございます』って言うんだって」

母親にそう窘められ、寿一と呼ばれた男の子は、思い出したように一歩渡羽から離れ——それでも手は渡羽から離さず——渡羽をもう一度見上げた。

「あけましておめでとうございます？」

「はい、よくできましたね。あけましておめでとうございます」

渡羽がにっこり笑うと、寿一はうれしそうに再度、渡羽の腰に抱きついた。

そこで初めて、面くらったように立ち尽くしているアスカに気づき、狼狽して母親の後ろに隠れた。

「ん？ おや、見慣れない顔だね」

珍しげに翔子がアスカを見ると、隣にいた男性が「わお♪」と頬を紅潮させて、ばひゅつとアスカの前に素早く移動した。

目にも留まらぬ速さに、渡羽は目を白黒させた。男性はアスカの手を握りしめ、興奮気味に歓喜の声を上げた。

「かわいいー！！ 蒼い髪と碧の目がチャーミングだね！！ このカチューシャがよく似合ってる！ 何よりこの服」
ばしっ

男性の後頭部にスリッパが振り下ろされた。はたいたのは翔子だ。

「初対面の女の子にいきなり食いつくな。まったく」

肩をすくめ、翔子は男性——旦那の雅英をぐいっと押しのけ、アスカの前に進み出る。翔子はふっと笑みを浮かべた。

「私の旦那が失礼したね、お嬢さん。こいつはかわいいものに目がなくてね。困ったものだよ。」

申し遅れたが、私は羽柴翔子。飛鳥の姉で、今はこのバカの妻だよ」

そう言って、翔子は握手を求めてきた。アスカは翔子の顔に見とれていて、反応が少し遅れた。

「あっ、初めまして！ ああたしはアスフェリカ・グランジェです！
みんなからはアスカって呼ばれてますっ」

「へえ、弟と同じ名前か。それでは少し呼びにくいな。私はアスフレリカと呼ばせてもらおうよ」

アスカは差し出された手を握り、ぼーっと翔子の顔を見つめた。顔立ちはあまり似ていないが、笑い方が眼鏡を外した時の渡羽とよく似ている。さすがは姉弟と言えよう。

それに、なんと言っても翔子はかっこいい。口調も顔つきも物腰も、どこか男らしい。

渡羽が翔子を『格好よくて立派な人』だと評した理由がよく分かった。確かに翔子はかっこいい。女の人なのに、ちよつときめいてしまった。

「翔ちゃん、頭はやめてよ、頭は。パーになったらどうするの」
雅英がよろよろと翔子にしがみつく。翔子はうっとうしそうに、片手で雅英の顔を押しつけながら、

「今さら頭をどついたところで何も変わらないだろう？ 元々パーなんだから」

「し、しどいっ。うわー、飛鳥君！ 翔ちゃんがいじめるよおおおっ」

雅英は泣きながら渡羽にしがみついた。

「うわあっ」

「飛鳥に抱きつくな！」

翔子は、すぱんすぱん、とスリッパで雅英の背中をはたきまくる。美鳥はそんな子供たちのやり取りを楽しそうに見守っている。アスカも、賑やかな家族だなあ、と笑った。

せっかくの家族水入らずの時間を邪魔しては悪いから、とアスカは散歩に出かけることにした。

雅英は「いろいろ話してみたかったのに」と残念そうにしていたが、アスカは以前、美鳥に買ってもらった白いコートを着て、ティアラと一緒に家を出た。

誰も見ていないことを確認してほうきに乗り、アスカは空を散歩していた。特に目的も、行く場所も決めていない気ままな空の旅だ。コートが冬の凍えるような風ではためいている。アスカはぶるっと身震いした。

「うー、やっぱり外は寒いわね。保温魔法使えば、この程度の寒さどうってことないんだけど。ティアラは寒くない？」

アスカはコートのポケットを見下ろした。ティアラがそこからひよこっと顔を出す。

「はいっ。ポケットの中はぽかぽかで快適です」

「うらやましい限りだわ。あたしもポケットに入りたい：っ」

「ですから、魔法修行をして魔法のレベルを上げればよかったのです。修行をサボっているから、いざという時に困るんですよ」

「もうお説教は聞き飽きたわよ。でも、今だけはティアラの言う通りかもって思うわ。はあ、ちよっとくらいは修行した方がいいかしら」

ぽつりと言った言葉に、ティアラがすぐさま反応した。目をうるっと潤ませて感動する。

「やっとやる気になられたのですね！？　そうです、その方がよろしいですよ！　修行してレベルが上がれば、高度な魔法が使えるようになりますし、とても便利です。」

元々、姫様は魔法士^{ソエウイ}程度で収まっていたはいけないのですから、どんどん上流を目指すべきです。

そのためにはまず魔法力を練る力の加減と、発動した魔法を持続させる集中力をですね……」

うんたらかんたら。ティアラがいろいろと講義をしているが、アスカははあーと長く白い息を吐いて、鉛色の空を見上げた。

「家族かあ。そういえば、母様たち元気にしてるかな」

人間界に来てから半年。一度もマジカリアに帰っていないし、連絡もしていないので、マジカリアや家族の今の様子を知らない。

父親はしょっちゅう周りをうるちよろしているので、まったく懐

かしくもなんともないが、母や国民たちは懐かしく思う。

翔子たちと話す渡羽を見ていて、なんだか自分も家族に会いたくなってきた。

「たまにはマジカリアに里帰りしてみようかな」

少しずつでき始めた雲の切れ間から日が射している。アスカは空を滑空しながら、遠い故郷に思いを馳せた。

家に帰ると、渡羽が出迎えてくれた。翔子たちもアスカの帰りを待ちわびていたらしく、居間に入ってきたアスカを座らせ、談笑し始めた。

夕食も楽しく過ごし、アスカはますます家族に会いたくなった。その頃には寿一もアスカと打ち解けるようになっていた。

別れを惜しむ翔子たちを見送り、渡羽たちは夕食の後片づけに居間へと向かう。

「さてと、そろそろ私は仕事を始めようかしら。お正月休みは終わりね」

「じゃあ後片づけはやっておきますよ。後で夕食を持っていきましようか？」

「悪いわねえ。頼むわ。夕食は十時頃持ってきてもらえる？」

「分かりました」

自分の部屋へと向かう美鳥。渡羽とアスカは居間に入り、食器などを片づける。

そこへティアラが飛んできて、ポン、と人間の子供大の大きさになった。

見た目は十二、三歳といったところか。背中の二枚の羽は消え、パツと見は人間の子供とさほど変わらない。

渡羽が初めてこの姿を見た時は驚いたが、今ではもう見慣れた。いつも通り、それぞれ分担された仕事に手をつける。

ティアラが食器を台所に運び、その後テーブルの上を拭いておく。

渡羽が食器を洗って、アスカはその食器を拭く。

いつもは談笑しながらやっているのだが、今日は静かだった。たいていアスカが話を切り出すので、アスカがしゃべらなければ誰もしゃべらない。

しばらく食器が触れ合う音と、時々流れる水の音だけが響いていた。

「あのね、渡羽」

体は正面を向いたまま、アスカが呟くように口を開いた。

「あたし、マジカリアに帰ろうと思うの」

つるっ パリーン

洗剤のついたスポンジでコップを洗っていた渡羽は、思いがけない告白にコップを落とした。

「え？ ええっ？ な、なんですか急に！ か、帰るっていつですか！？ いやそんなどうして…っ!？」

目に見えて動揺する渡羽に、アスカはぷつと吹き出した。

「あはは、ビックリした？ ごめんね、驚かして。なんかね、翔子姉様たち見てたら、母様たちに会いたくなっちゃって。ちょっとした里帰りよ」

「え。……あ、ああ、里帰りですか。そうですか。はい、分かりました」

まだ完全に平静を取り戻したわけではないが、渡羽はずり落ちかけた眼鏡を直し、落としたコップの破片を拾い集める。

それをとりあえずキッチンペーパーの上に置いていく。

「明日帰るつもり。なるべく早い方がいいかなって」

くすくすと笑いながら、アスカは「貸して」と横から、コップの破片の乗ったキッチンペーパーに手を伸ばした。

「危ないですよ」

「平気よ。見ててね」

破片の上に両手をかざし、アスカは精神を集中させる。

「バパジャ||ゴアラ||アイシフィエルク」

簡単な修復魔法を唱えると、一瞬でコップが割れる前の状態に戻った。使用前の状態にも戻っているのです、そのまま食器棚に置く。

「本当に便利ですね。魔法というのは」

「えへへ。それでね、話を戻すけど、渡羽も一緒に行かない？」

「え？ 俺も、ですか？」

食器洗いを再開し、渡羽は顔だけをアスカに向ける。アスカは渡羽の隣に並び頷いた。

「そう。せっかくだから、渡羽にあたしの故郷を見せてあげたくて。それに、母様にも紹介したいし」

「行ってもいいんですか？ とうか、魔法使いじゃなくても行けるんですか？」

「んー、まあ人間が魔法界に行ったって話は聞いたことないわね。あたしの知る限りは。でも大丈夫じゃない？ 魔法界に連れていっちゃいけないって決まりはなかったと思うし」

「うーん、魔法界ですか：なんだかドキドキしますね」

苦笑する渡羽。アスカはその横顔を見つめ、するっと自分の腕を渡羽の腕にからませた。

「ア、アスカ？」

「ねえ、渡羽。さっき、あたしが帰るって言った時、あたしがいなくなっちゃうって思ったでしょ。もう二度と帰ってこないんだって」

「え、あ、それは……」

「さみしいって思った？」

淡く微笑んで、アスカは渡羽の顔を覗き込む。アスカの瞳に渡羽の顔が、渡羽の瞳にアスカの顔が映り込む。

渡羽は真剣なアスカのまなざしに、正直な気持ちを打ち明けた。

「それはもちろん：さみしいですよ。ずっと一緒に暮らしてきましたし、家族のようなものですから。それに……」

言葉を切り、ためらいがちに、それでも恥じらいながら、
「アスカは俺にとって大切な人ですから……」

確かにはつきりと言った。渡羽は赤面して顔を逸らした。

アスカは一瞬きよんとしたが、すぐうれしそうに笑って、渡羽の腕をぎゅっと抱いた。

「大丈夫だよ！ 渡羽に黙っていなくなったりなんかしないからね。あたしはずっと渡羽と一緒にいるよ！」

渡羽の腕にすり寄り、アスカは満面の笑みを浮かべる。

——渡羽と一緒にいたい。これからずっと

そんなアスカを見て、渡羽もはにかみながら微笑んだ。

——いられるといいな。このまま渡羽のそばに

テーブルを拭き終わったティアラが、二人をあたたかい目で見守っていた。

——いられたらいいのに。今のまま、人間界に。ずっと……………

ほんのわずかに、アスカの目に憂いが宿った。今の幸せがずっと続くことを願いながらも、いつか終わってしまうのではないかと、一抹の不安を胸に抱えて。

10th 新年（後書き）

追伸列記簿

こんにちは、甲斐日向です。マジ☆ラビ第十話をお届け致しました。

今回もサブタイトル通り、新年を迎えました。そして渡羽の姉・翔子が登場！ 前回の追伸列記簿でも言いましたが、この人は僕のお気に入りです。僕は凛々しい女性に惹かれるようです。

そしてそして、予告した通り今回で“お休み編”は終了。次回からは“里帰り編”に突入です。

この“里帰り編”は物語開始当初から書きたくてウズウズしていました。渡羽の秘密の解、魔法界と人間界の関係、アスカの家族の登場など楽しみな要素が多いので。

今回も特に補足すること…はありませんね。次回は魔法界に里帰りします。久し振りに自称・婚約者のあの男も登場しますよ！

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

11th 帰郷

翌日、渡羽とアスカは魔法界に行くことを美鳥に伝えた。

美鳥は魔法界に行くこと聞いてとても興奮していたが、仕事の都合上、一緒に行けないことを非常に残念がっていた。

うらやましそうに息子を上目遣いで見ながら、

「でも、あんまり長居しちゃダメよ？ 外泊は別に構わないけど」

「それは問題ないわ、美鳥母様。明日には帰ってくるつもりだから」

「あら、そうなの？ いいのよ？ 二泊や三泊してきたって。私は一人でも大丈夫だし：あ、でもそちらに迷惑かしら」

「ううん、こっちも何泊してもいいんだけど、人間界と魔法界じゃ時間の流れが違うのよ。」

人間界は魔法界の倍の速さで時間が過ぎるから、あっちでの一日はこっちの二日になるの」

事前に聞いていたので、渡羽は驚いた様子はない。

最初に聞いた時は、それだとアスカが長居できないから一緒に行くのは遠慮すると言ったのだが、アスカがどうしても家族に紹介したいと言うので、申し訳なく思いながらも了承した。

「あらあ、それなら長居はできないわね。のんびりしてると飛鳥の冬休みが終わっちゃうものねえ」

「うん。だから心配しないで、美鳥母様。お仕事がんばってね」

「ありがとう、アスカちゃん。ほんといい子ねえ、アスカちゃんは。アスカちゃんが本当に私の娘になってくれたらいいのに」

あまりに自然に言われたので、渡羽は一拍置いてからぶつと吹き出した。

「っええ！？ なっ！ 何言ってるんだ母さん！！ 娘ってどういう意味だよ！？」

動揺しすぎているようだ。眼鏡をかけたままにもかかわらず、渡羽は地に戻っている。

「あらあ、どういう意味って…そのままの意味よ。アスカちゃんがあなたと結婚してくれれば、私の義理の娘になるでしょ♪」

「んなっ!!」

美鳥がにんまりと笑う。ぼっ、とゆでダコのように顔を真っ赤にする渡羽。

アスカも意味を理解してから、少し顔を朱くして俯いた。渡羽は口を開いたまま固まっている。

「ああ、別に結婚しなくても養子にするとかでもいいのよねえ……って聞こえてないわねえ♪」

二人にはまだ早い話題だったみたいね。確信犯、美鳥。

しばらくして正氣に戻った渡羽は、散々美鳥に文句を言い、一足先に平静を取り戻していたアスカと一緒に家を出た。

正氣に戻ったおかげで、今さらながら疑問に思うことがある。魔法界に行くと言ってもどうやっていくのか。アスカが人間界に來た時は、国王様に強制的に送り出されたそうだが。

「あの、アスカ？ 魔法界へはどうやって行くんですか？」

「私もそれは疑問に思っていました。魔法界に行くということは、時空移動魔法を使うんですね？」

渡羽の横に滞空していたティアラが問う。アスカは二人を肩越しに振り返った。

「そりゃもちろんそうよ。時空移動魔法を使わないと、魔法界に行けるわけじゃないじゃない」

「ですが、時空移動は第一期魔法ですから、一流である魔導師フイミハイデ クレシマスにならないと使えないではありませんか。

姫様は四流シヴァミハイテノエウイの魔法士なのですから、時空移動魔法は使えないでしょう」

ティアラの言葉を聞いて、ほうきを出す呪文を唱えるアスカの傍ら、渡羽はぎょっとした。

「ええっ？　じゃあどうやって行くんですか」

「まさか姫様、一縷の望みにかけて、パーガウエクオで魔法力を増幅させて、時空移動魔法を使おうとか思っているのではありませんよね……！」

頬を両手で挟んで、顔を青くするティアラ。ティアラはひゅいつとアスカの前に飛んで行き、かんし諫止する。

「いけません、姫様っ。いくらパーガウエクオを操れるからと言って、それは危険です！　能力以上の魔法を使えば、たとえ魔法力を増幅したとしても、反動や副作用でどうなるか分かりませんよ……！」さらに驚愕する渡羽。アスカはしかし小さくため息をついて、あきれ顔でティアラを手で追い払うしぐさをする。

「それくらい解ってるわよ。そんなことしないし、したくないわよ。いいから離れて黙って見てなさい」

不安げにティアラは、言われたとおりにアスカのそばを離れる。

渡羽も心配そうに見つめている。

アスカは大きく息を吐くと、すうーっと思い切り息を吸い、

「どうせまた近くにいろんしょ……！！　とっとと出てきなさいよ、シン……！！」

大音量で空に向かって吠えた。すると、どこからともなく「はーっはっはっは！」と聞き慣れた笑い声が聞こえてきた。

渡羽とティアラはきよろきよると周りを見回し、アスカは手にしたほうきをくると回して持ち直し、穂の部分を前方に向けた。

「あなたの呼びかけに応え、シン、ただ今参りました。お呼びですか？　アスカひ」

ばすっ

自分の前に現れたシンの顔面に、アスカは腕を伸ばして、ほうきの穂の部分を突き当てた。

「やっぱりいたのねストーカー男。ホント期待を裏切ってくれるわね、あんたは」

「……あの……痛いのですが……」

穂の部分に顔をうずめながら、シンはもそもそと言った。

いつもどおり、ストライプが入ったスーツ姿のシンは、これまたいつも通りコバルトグリーンの前髪を掻き上げた。

「ごきげんよう、皆の衆。そして我が愛しのアスカ姫。ふふふ、まさかアスカ姫からお呼びがかかるとは思っていませんでしたよ」
にっこりと笑うシンに、アスカはふんつと鼻で笑った。

「しらじらしいわね。そんなこと言って、今まで使い魔で覗いてたんでしょ？」

「覗いていたとは心外ですね。見守っていたと言って下さい」

「どっちにしろ見てたんでしょ？ だったら呼び出した要件も分か
つてるわよね？ 父様」

腕を組んで、アスカはシンを睨み見る。シンは若い頃の国王の姿だ。渡羽もティアラもそれが分かっているので、対応に困っている。
「アスカ姫。この姿の時は」

「はいはい、どっちでもいいわよ。そもそも、もう正体バレてるんだから、わざわざ変身しなくていいじゃない」

ぶすくれるアスカに、シンは楽しそうに笑った。

「こちらの姿の方が気に入ってますので。それに、渡羽はこの姿の方が気兼ねしなくていいだろうと思ってね」

シンが渡羽を見る。話を振られて、渡羽はどぎまぎした。

「えっ、あ、俺は別にどちらでも……」

「ふふ、渡羽は相変わらずだな。しかし、使い魔を介して見た時はよく分からなかったが……」

渡羽に近づき、シンはまじまじと渡羽を見る。渡羽はびっくりと体を強張らせた。

時々周りに出没してはいたが、こうして会話することはなかった
ので、正体が分かってから話すのはこれが初めてだ。

シンはアスカの父親。そして渡羽はアスカの恋人。父親として何

か小言を言われるのではないかと、渡羽は身構えた。

「少し背が伸びたのではないか？」

「え？」

肩すかしを食わされ、渡羽は目を点にした。

「ふむ、やはりそうだ。初めて会った時より少し伸びている。成長期だからな、これからもっと伸びるだろう。そのうち僕に追いつくかもしれないな」

笑顔のシンに、渡羽は目をぱちくりさせてから、照れ笑いを浮かべた。

アスカは知らず知らずのうちに詰めていた息を吐いた。

人間界に残り、渡羽との交際を認めてくれたとはいえ、何かしら思うところはあるだろうから、渡羽に文句でも言うのかと心配だった。

シンはアスカに向き直ると、少し真剣な顔つきになった。

「アスカ姫、僕を呼んだのは時空移動のためですね？」

「そうよ。あたしじゃ時空移動魔法使えないもの。父さ…シンは魔^ク導師だから使えるでしょ？」

表情を引きしめたアスカが、まっすぐにシンを見据える。シンは前髪を掻き上げ、

「それはもちろん。では行くとしましようか。あなたとマジカリアに帰れる日を待ち望んでいましたよ」

シンはきびすを返し、両手を前方に伸ばして精神を集中させる。

「言っておくけど里帰りだからね。母様たちに会ったらこっちに戻ってくるんだから」

それにシンは答えず、無言で微笑んだ。微かに憐憫を含んだ笑みだったが、シンの後ろにいたアスカたちには見えなかった。

シンの周りに弱い風が起こる。シンの中に宿る魔法力が放出されているのだ。

そして魔法力が練り込まれていくのが分かる。アスカは改めてシンの魔法力の強さに感嘆した。

漏れ出てくる魔法力だけでもかなりの強さを感じるのに、これでも全力じゃない。

一流の証である魔導師クレシマスの称号を手に入れるには、これくらいの魔法力レベルにならないといけないということだ。

「ファイディーラⅡボツⅡジェイシーエルク」

シンの前方の地面に、白い光の円が現れる。

「リⅡラーチⅡタカヴァⅡツージャガⅡリストⅡレレッキーチャメロネルク」

時空の道が開かれ、白い光の柱が立った。シンがアスカたちを振り返り、柱の中へと促す。

「魔法界に道が繋がりました。さあ、この光の中に入って下さい」

「うん。行こう、渡羽！」

「は、はいっ」

アスカは渡羽の手をつかみ、光の中に飛び込む。ティアラとシンも後に続いた。

光の柱は全員が入ると急速に細くなり、跡形もなく消えた。

一瞬にして四人は時空を超え、人間界から魔法界へと移動した。光の柱から出るとそこは別世界。町のはずれにある丘の上に渡羽たちは立っていた。

そこから見える景色は渡羽の知っているものとは全然違う。まず、空が黄色い。そしてその空を鳥が飛んでいる。

しかし、鳥は鳥でも、かなり大きい。象くらいありそうだ。それに、鳥以外にちらほら飛んでいるのは………人だ。

人がほうきやじゅうたん、もしくはそれ以外の物、果ては身一つで空を滑空している。まさに魔法使いの典型的な姿だ。

ぽかんとしている渡羽の後ろで、アスカが伸びをした。

「んーっ、久し振りの空気。やっぱり故郷はいいわね」

「はい。とても懐かしい香りを感じます」

ティアラもうれしそうに、空中を飛び回る。

「それにしてもっ、暑いわね!!」

顔をしかめてアスカは言った。何せアスカたちは人間界の気候に合わせて冬服を着ているのだ。それも真冬だったので厚手のコートなども着ている。

「えーと、こっちを出たのがバラネッサの月で、あっちで半年過ぎたからこっちじゃ三ヶ月で……ということは、今はフェアーの月なのね」

バラネッサは四月、フェアーは七月だ。暦は人間界と一緒になので、現在魔法界は夏。コートなど着ていたら蒸し焼きになってしまう。

アスカは素早く呪文を唱えた。

「ラサバ||ロアジェルエルク」

ポン、とアスカと渡羽の服が変わる。

アスカは人間界に来た頃に着ていた、黒いハーフトップの上着に水色のパフスリーブワンピース。

「うん、やっぱりこれが一番ね」

「ア、アスカ。これは？」

渡羽の服も変わっている。白い半袖シャツに黒い長ズボン。両肩から垂れ下がっているのは胸と背中を覆う空色のマントで、ダークブラウンのサンダルと涼しげな格好だ。

「わあっ、渡羽、結構似合ってるかも♪ それはね、マジカリアの基本的な服装なの。服はなんでもいいんだけど、そのマントをつけるのがマジカリア国民の証って言うか規則なのよ」

渡羽は着慣れない服に少し戸惑い気味だ。アスカはにっこり笑うと、くるっと回って町を背に両手を広げた。

「ようこそ！ 魔法界・テュレーゼへ！」

「は、はあ…」

本当に違う世界に来てしまったんだなあと思然としている渡羽。

「そして、ここが我が祖国、マジカリア。テュレーゼ一の最大国であり首国よ。」

あ、そうだ！」

アスカはふと思い出して、ほうきを出す呪文を唱えた。

「リリアフィールレストエルク」

ポン、とアスカの手の中に一本のほうきが現れる。「ここなら大丈夫よね」とアスカはほうきの柄を上にして立てたまま、ぱっと手放した。

そのまま倒れるかと思いきや、ほうきの穂の部分が二股に分かれ、ぴよこんと動いた。

「うわあっ！ ほ、ほうきが動い……」

「ブロッサム！」

ぴよんぴよんと飛び跳ねているほうきに、アスカがぎゅっと抱きつく。

「よかったあ、やっぱり魔法界だと動けるのね」

わけが分からずうろたえている渡羽に、ティアラがすいっと近づいてきて説明する。

「魔法使いのほうきには生命が宿っていて、本来はああして動くことができるんですよ。」

ですが、持ち主の魔法力を供給してもらって初めて、ほうきは自由に動くことができます。人間界では姫様の魔法力が弱いために、ほうきに力を送れなかったので動かなかったんですよー」

ブロッサムというのはあのほうきの名前です。にっこり笑うティアラ。

つまりは電池式のロボットのようなものか。渡羽は「そうだったんですか……」と納得して、もう一度周りを見渡した。

町の中心に見える大きな城。あれがきつとアスカの住んでいた城だろう。不思議だ。ここには当然初めて来たのに、なぜだろう。

「懐かしい感じがします」

「渡羽さん？」

「魔法界には来たことがないのに、まったく知らないはずなのに、来たことがあるような……いえ、ここにいたような気がするんですよ。」

懐かしい：故郷に戻ってきたような、そんな心地よさを感じるんです」

ティアラがゆっくりと瞠目する。シンが何かに気づいたように、渡羽を注視した。

アスカもブロッサムを腕に抱えたまま、不思議そうに渡羽を見た。

「え？ ホントに？」

「はい」

困惑する渡羽。あごに手を当てて渡羽を見つめていたシンは、おもむろに渡羽に近づくと、さっと渡羽の眼鏡を取り上げた。

「わっ」

突然のことに、渡羽は目をぱちくりさせた。シンは眼鏡を宙に浮かせて、渡羽のあごを指先で持ち上げると、矯めつ眇めつする。

なんなのだろう、この状況。渡羽は全く状況が理解できず、固まった。

アスカやティアラも、シンの真剣な表情に口を出せずにいる。

「……やはりそうか」

まっすぐに渡羽の目を覗き込み、シンは得心がいつて、ようやく渡羽のあごから手を放した。

渡羽は詰めていた息を思い切り吐き出す。緊張した。今のできなり疲れた。

「……ちょ、ちょっとなんのよ、シン！ いきなり渡羽の眼鏡取ったりして！」

「アスカ姫、落ち着いて魔法力感知をしてみてください」

詰め寄ろうとするアスカに、シンは静かな声で言った。

アスカは怪訝な顔をしたが、神妙に魔法力感知を試みる。目を閉じ、心を研ぎ澄ませる。

魔法力感知は、自分の魔法力の宿ったもの——たとえばほうきなど——や、もしくは自分以外の魔法力を持つものを探す時に行う。

それはどこから漂ってくるにおいを嗅ぎ取る行為と同じ。

アスカはこれが苦手だったが、シンは無駄にやれと言っているわ

けではないようなので、いつもより集中する。そして、気づいた。

「！　これって…」

「以前にも同じものを感じてまさかとは思っていましたが、今のはつきりしました。」

渡羽には魔法力がある」

確かに感じた。自分たちとは違う魔法力を。

魔法力の波動はひとりひとり違う。魔法力を持つ者はここには三人。常ならば感じ取るのは自分を除いた二人分の魔法力だが、今アスカが感じたのは三人分。

つまり、シンとティアラと…渡羽。

今まで気づかなかった。今でさえシンに言われなければ気づかなかったかもしれない。それほど弱い波動。

シンが気づいたのは彼が魔導師だからだろう。たぶんほとんどのヒトは気づかない。

当の本人である渡羽は魔法力があると言われて、ハトが豆鉄砲を食ったような顔をしている。

「微弱なものです。魔法界は魔法力にあふれている。そのため、渡羽の中に秘められていた魔法力が一時的に増幅されたのでしょう」

「って、渡羽に魔法力があつたってのは分かったけど、それがなんだって言うのよ。渡羽が魔法界を懐かしく感じた理由にはなっていないんじゃないの？」

「いいえ、大いに関係あります。魔法力があるということは、渡羽の祖先もしくは前世が、我々と同じ血筋だったかもしれません」

「「ええっ!？」」

シン以外の三人が声を上げる。シンは落ち着き払った様子で、渡羽の眼鏡を空中でくるとゆっくり回した。

「祖先もしくは前世の魂が、故郷である魔法界の空気を感じ、魔法力を通じて渡羽に影響を与えているのでしょうか」

「渡羽の祖先が…あたしたちと同じ…」

それはもしかして……。アスカは硬い表情で、わずかに俯いた。

もしも渡羽が同じ祖先をもつなら、それは十貴士じきしと関係があるかもしれない。テュレーゼに伝わる伝説の貴士たちと。

アスカの表情から考えを読み取り、シンは瞑目した。同じ考えをシンも抱いていた。だが、それは魔法界の歴史と人間界の歴史に大きく関わることなので、ここで口に出すことは憚おそられる。

「渡羽。君は幼い頃から、もしくはアスカ姫と出会った頃から、人外のモノが視えたりしていないか？」

渡羽の顔色が変わる。シンは目を細めた。

「視えているんだな」

「……ああ」

「いつからだ？」

「…物心ついた頃…いや、もしかしたらその前から視えていたかもしれない。意識し始めたのが物心ついた頃だったから」

いつもより沈んだ声で話す渡羽。あまり知られたくなかった。普通の人間とは違う自分。アスカには知られたくなかった。

子供の頃は眼鏡をかけていなかった。そのため、よく人外のモノが視えた。俗に言う“霊”というモノを。他にも小人やよく分からないモノも視えた。

「眼鏡をかけると見えなくなるんだな？ その眼鏡はいつからかけている？」

「小学校に入った頃…かな。あまりにもたくさん視えて嫌になったんだ。そのことを田舎のばあちゃんに話したら…眼鏡をくれたんだよ。その時にはあちゃんはまだないをかけてくれた」

優しい祖母。ふくよかでいつもにこにこ笑っていて、とてもかわいがってくれた。

変なものが視えると言っても、バカにしたり邪険にしたりせず、ちゃんと話を聞いてくれた。そして「怖い」と泣く自分を慰めてくれた。

『飛鳥。今もそれは見えるかい？』

老婆のひざに顔をうずめている少年に、祖母が優しく問いかける。幼い渡羽はちらりと庭の隅を見、こくりと頷いた。しわだらけの手で、老婆はそつと孫の頭を撫でた。

『そうかい。飛鳥、これをごらん』

祖母は傍らに置いておいたプラスチックケースを開けた。渡羽はその中を見て、小首を傾げた。

『…メガネ？』

『よく見ておいで』

祖母はケースから眼鏡を取り出して、何やらぶつぶつと小声で言った。言葉の意味はまったく分からなかったが、祖母はにっこり笑うと眼鏡を渡羽に手渡した。

『今おまじないをかけたよ。飛鳥がもう怖いものが見えなくなるようにってね』

おそろおそろ渡羽は眼鏡をかけてみた。そして祖母が無言で示す先を見る。さっき見た場所。軍服姿の男性が立っていた場所。

しかし、そこには誰もいなかった。

渡羽は大きな目を丸くすると、ゆっくりと眼鏡をずらしてみた。するとその分だけ男性の姿が見えてくる。渡羽はひっと息を呑むと眼鏡をかけ直した。

『それをあげよう。その眼鏡をかければ、もう怖いものは見えない。もう泣かなくていいんだよ』

そんな祖母は渡羽が中学に入る少し前に亡くなった。今はもういない祖母を思い出して、渡羽は沈痛な面持ちになった。

「そのまじないというのが、不可視の法だったのだろうな。それで眼鏡をかけると人外のモノが見えなくなった」

シンは腕組みをして、くるくると回っている眼鏡を見た。渡羽たちも同じく眼鏡に視線を向ける。

傍目にはなんの変哲もない眼鏡。他人にとってはただの眼鏡だが、渡羽にとっては、大好きな祖母からもらった、世界にたった一つ的眼鏡だ。

「渡羽の御祖母はたぶん、人間界で言う異能者だったのだろう。渡羽は御祖母の血を強く受け継いでいるのだな。渡羽の異能は遺伝によるものか」

シンが指を振ると、眼鏡は回転を止め、すうっと渡羽の手元に戻った。

「そのまじないは強力だ。渡羽が眼鏡をかけると性格が変わるのは、たぶんそのまじないの副作用だろう」

渡羽はじっと眼鏡を見つめてから、眼鏡をかけ直した。アスカが困ったように、シンに向き直る。

「で：ティアラが見えるのは、渡羽に魔法力があるからってこと？」
話がちやちやして、アスカはよく理解していなかった。
確認するようにシンに問う。

「ええ。ティアラたち妖精は普通の人間には見えません。ですが、魔法力があれば妖精は見えますからね。渡羽にティアラが見えてもおかしくはありません」

「えーと、じゃあ：その、人外のモノって言うのは？」

渡羽が一瞬顔を強張らせたが、アスカは気づいていない。

「魔法界にはいませんが、人間界には“霊”というものがいるらしいのですよ。死後、魂のみとなった者たちのことです」

「ふーん。つまり：」

アスカは人差し指を立てて、きっぱりと言った。

「渡羽は魔法力があるから、妖精も人外のモノも見えるってことね！」

「厳密に言えば違いますが、そういうことですな」

シンはいつものように優美に笑った。

「さて、このまま城に空間移動で跳んで行ってもいいのですが、アスカ姫も久々に故郷に帰ってきたことですし、少し町を見て回りたい」

いでしょう？」

「そうねえ、渡羽にいろいろ紹介したいし」

「ですから、ここから城までは歩いて行って下さい。僕は一足先に城に帰っていますので」

空間移動の呪文を唱えながら歩き出したシンを、アスカが引き留める。

「え？　一緒に行けばいいじゃない」

「その申し出はうれしいのですが、遠慮させていただきます。」

民の中には僕の正体を知っている人もいますからね。ややこしいことになっては、ゆっくり散策もできないでしょう」

シンの言うことも一理ある。いちいち「この人は実は国王^{父様}で今はちよつと若い頃の姿になってるけどまあ気にしないで」と言ってもらえない。

「確かにそうね……分かったわ。じゃあ先に帰ってて」

「道中、お気をつけて」

一礼すると、シンは頭上に現れた空間移動の穴に飛び込んだ。シンが中に入ると、穴は集束して消えた。

「さて、じゃあ行こっか、渡羽。……渡羽？」

動かない渡羽に、アスカはそつと近づいた。渡羽は憂いを帯びた横顔で町を見つめていた。

「……渡羽」

「……『普通』の人とは違うと思っていましたが、魔法使いの血を受け継いでいるかもしれないとは、思いませんでした。」

でも、これで俺が人外のモノや、ティアラが見える理由が分かっていますっきりしましたよ。眼鏡をかけると性格が変わる理由も」

ゆっくりと渡羽はアスカを振り向いた。渡羽はまだ少し複雑そうな顔だったが、口元には笑みが浮かんでいた。

「人外のモノが視えることが、アスカに知られてしまったのは少しショックでしたけど、いろんな原因も分かったのでプラスマイナスゼロです」

「渡羽……」

アスカには渡羽が無理して笑っているような気がした。アスカはブロッサムを柄をきゅっと握りしめた。

魔法界に連れて来たことで、渡羽に悲しい思いをさせてしまっただろうか。俯くアスカに、渡羽は困ったように笑った。

「アスカまでそんな暗い顔をしないで下さい。俺はもう大丈夫ですから。」

それに、俺にいろいろ紹介してくれるんでしょう？ そんな暗い顔のままでは楽しくありませんよ？ アスカは笑っている方がいいです」

アスカは顔を上げた。「笑っている君が好きだ」と、以前渡羽は言ってくれた。あたしも渡羽は笑っている方がいい。

自分が暗い顔のままでは渡羽を困らせてしまう。そんなのはイヤだ。

「うん！」

アスカは破顔した。渡羽の手を握り、町へと走り出す。渡羽は転びそうになりながら、ティアラは苦笑しながら、アスカについていく。

ブロッサムがぴよこんぴよこんと、うれしそうに三人の周りを飛び跳ねていた。

11th 帰郷（後書き）

追伸列記簿

どうもこんにちは、甲斐日向です。マジラビ第十一話をお届けしました。

とうとう八月に入ったというのに、最近はなぜか明け方と夜は涼しくなってきました。まあ、僕は涼しい方がいいんですけど。

ほんの数日前まで朝も夜も暑かったのになぜでしょう。それに、父がぼやいていたんですが、僕の家近くではほとんどセミが鳴いてません。

周りは畑や田んぼや森もあるし、セミがいて当然じゃないか。セミはどこだっているしね。

なのになぜかあの「ミンミン」という鳴き声が聞こえてきません。父は「今ぐらいの時期なら朝から鳴いてるくらいなのに今年は静かだな。これは異常だよ」と言っていました。

会社の方ではよく聞くんですけどねー。うちの周りじゃほとんど聞きません。セミの声がない夏というのは不思議なもんです。

はてさて、今回は少し短めですが、とうとう魔法界に出發です。次回からは魔法界が舞台となります。楽しみです。

えーと、今回は少し補足説明を。アスカたちがたまに話している魔法使いのレベルですが、

ファイミハイテ クレシマス

一流Ⅱ魔導師 第一期魔法が使えるヒト

カオミハイテ ボミガ

二流Ⅱ魔導師 第二期魔法が使えるヒト

アーガミハイテ オクイノ

三流Ⅱ魔導師 第三期魔法が使えるヒト

ンヴァミハイテ ノエウイ

四流Ⅱ魔法士 初歩、第四期の魔法が使えるヒト

ギター

無流 魔法力を持っていないヒト、魔法力を奪われたヒトとなります。

魔法界の住人はほとんど魔法力を持って生まれますが、中には魔

法力を持たずに生まれてくるヒトもいます。

魔法を使えるヒトは総じて魔法使いと呼ばびます。ジルコーデイン魔法士・魔導師ノエウイ クレシアスという称号はプロの証です。

魔法教会から認定書をもらって初めて、称号を名乗れるのですが、王家・王族は認定書なしで称号を与えられます（初めはノエウイ）。称号を持つている人は各称号で、持っていない人は単に魔法使いと呼ばびます。アスカはノエウイです。一般人と変わらないです。王女としてどうなんだろうこれ。

漢検や英検などと同じようなものですね。あつた方が何かと便利ですが、まあなくても平気です。

時々しか出てこない設定ですが、覚えておいても多分損はありません。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

12th 魔法界

「それではそのように取り計らないなさい」

「はっ」

片膝を立てて跪いていた臣下の男は、立ち上がると玉座の主あるじに一礼し、謁見間を後にした。

足音が遠ざかると、玉座に座っている中年の女性は、ふうと息をついた。

「これで少しは楽になるかしら。それにしても、外は相変わらず暑そうなこと」

大きな窓ガラスから外を見やり、女性はため息をついた。その時、覚えのある魔法力の気配を感じ取った。

「これは…」

遠い。町の外だ。なぜわざわざ。でも。女性は口元をゆるめた。

「帰ってきたのね」

それも、珍しいものを連れて。

隣の空いた玉座を見やり、もう一度外を見た。魔法力の気配がする方向を。

「楽しみだわ」

帰ってきたのなら、当然ここに来るだろう。例の少年も一緒に。会えるのが楽しみだ。

何気なく空を見上げていた渡羽は違和感を感じた。明らかに何か違う。空の色ではなく、何かが足りない……

「…!! 太陽が…」

「ん、どうしたの、渡羽？」

「あの、空に太陽が………ないんですけれど」

そう。ないのだ。この空には太陽が無い。人間界なら在って当然

の太陽が。

呆然としている渡羽に、アスカはきょとんとしてさも当然のように言った。

「そうよ。魔法界には『太陽』はないの」

「えええええっ!？」

愕然とする渡羽。そんなあっさり。しかし、太陽がないならいろいろと問題があるのではないか？

それに、太陽がないというならこの明るさと暑さはなんだ。

「で、でもこんなに明るいですし、暑いじゃないですか!」

「? 明るいのは空が光ってるからよ。暑いのも空が発熱してるからで」

「えええええっ!?!? そういう仕組みなんですかあああっ!？」

魔法界と人間界では環境がかなり違うようだ。こちらの常識は通じない。カルチャーショックだ。アスカが人間界に来た時もこんな感じだったのだろうか。

「:こ、こんなに違うなんて: :じゃあ人間界に来た時、アスカは戸惑ったでしょう」

「あー、うん。少しはね。でも、人間界のことは昔教わったから、大体のことは知ってたし、本当にこうなんだなーってぐらい。

一般の子供はね、学院で基本的なことだけ、人間界のことを習うんだって。あたしは学院じゃなくて王城専属教師に教わったんだけど」

「そうなんですか: : :本当に魔法界と人間界は全然違いますね」

「おもしろいでしょ? だから、あたしずつと人間界に行ってみたかったの。あ、もうすぐ町の入り口よ。早く行こっ」

すぐそこに見える町の入り口を示す門に向かって駆け出すアスカ。その隣をブロッサムがぴよこんぴよこんと併走(?)している。

「もう、姫様ったらはしゃぎすぎですよ」

渡羽の頭上で苦笑するティアラ。アスカの気持ちは分かるので、本人に言うことはないが。渡羽もつられるように微苦笑し、ティア

ラを見上げた。

「俺たちも行きましようか」

道の先でアスカが「二人とも、はーやーくー!」と手を振っていることだし。ティアラは「そうですね」と笑みを返した。

町に入ると、渡羽はさらに驚く光景を目にした。

ビルではないが、建物のほとんどが四角い。石造りのようだ。ところどころに円筒形の建物があるが、総じて屋根は屋上になっている。

道には露店が軒を並べ、大変賑わっている。しかし渡羽が驚いているのはそこではなく、町を歩いている人々だ。

普通に人が歩いている。だが、その中に混じって兎やら狸やらカラスやら、動物や鳥が、二足歩行して服を着てしゃべっているのだ。そして誰もが、下に着ている服は違えど、渡羽と同じデザインのマントをつけている。

これはマジカリア国民の制服のようなもので当然だろうが、獣や鳥が立って歩いてしゃべっているのは、かなり違和感がある。信じられない。本当にファンタジーだ。

呆氣にとられている渡羽の前を歩きながら、アスカが説明してくれている。

「魔法界にはね、あたしたちアダムスとティアラたち妖精以外に、獣人と鳥人が住んでるの。あ、アダムスっていうのは人族のこと。

魔法界の言葉で、妖精はミノル、獣人はゼオレスクーティン、鳥人はルフオーティンって言うのよ。
ゼオレスクーティン

獣人や鳥人は見ての通り、獣や鳥のような姿をしたヒトたちなの」

「はあ…」

「主に町で暮らしているのはアダムスとミノル獣人と鳥人ね。
ゼオレスクーティン

妖精は種族によっては町にもいるけど、ほとんどがその体質に適

した場所で暮らしてるわ。たとえば土族は地下に住んでてね、雲族は雲の中に住んでるの。あ、ティアラは花族よ」

「はあ…」

話を聞いても、非現実的だ。本当にここは自分の住んでいた世界とは別世界。

空は黄色くて、太陽は無くて、魔法使いが空を飛んでいて、ほろきが生きていて、獣や鳥が立ってしゃべって、妖精がいて…

（ここが、アスカの住んでいた世界）

そう思うと不思議だ。来ることはないと思っていたアスカの故郷。知ることはないと思っていたのに、なんだか懐かしくて。

ふう、と息をつく。そしてふと、渡羽は視線を感じた。周囲のヒトが自分を見ている気がする。

ちらりと目をやると、渡羽を見ながらひそひそ話をしているヒトたちがたまに目につく。

「ねえ、あれ…もしかしてマーティンじゃない？」

「マーティン？」

「リーフェミアルだったりするんじゃないか？」

「え、まさか……」

「どうしてテュレーゼにリーフェミアルが……」

「あれがマーティン……」

雑踏の合間に、時々聞こえる“マーティン”“リーフェミアル”というのはなんだろう？ 自分のことを指しているようだが。

「？」

怪訝そうに渡羽は小首を傾げた。そこへ横合いから、十歳くらいの女の子と五歳くらいの男の子が駆け寄ってきた。

「あつ、アスカ姫さまー！」

「姫さまだあ」

「え？ あ、フィロオーラ、ジェネル」

駆け寄ってきた少女たちを抱き止め、アスカは破顔した。

「久しぶりー、二人とも。元気にしてた？」

「うん！ 姫さま帰ってきたんだね」

「さみしかったー」

少女たちはぎゅうっとアスカに抱きつく。アスカは二人の頭を撫でて「ただいま」と言った。二人は顔を上げてにぱっと満面の笑みを浮かべた。

二人をきっかけに、わらわらとアスカの周りに人が集まってきた。獣人や鳥人もいる。

「姫様」

「おかえりなさい、アスカ王女」

「修行は終わったんですか？」

「アスカ様が帰ってきてくれてうれしいですよ！」

あっという間にヒトだからができる。アスカはその中心で、周りのヒトたちに笑顔を振りまいている。

こうして見ると、やっぱりここはアスカの故郷なんだなと実感する。ここにはアスカを知るヒトがたくさんいるのだ。

「あの…ところで、アスカさま。…あちらの方は…？」

群衆の中のひとりが、少し離れたところで所在なさにしている渡羽を目で指した。その言葉に、他のヒトたちも渡羽を一斉に見る。突然注目され、渡羽はどぎまぎする。

「ああ、あの人はあたしの主人^{あるじ}よ。渡羽って言うの」

笑顔でアスカが答えると、群衆がざわめきだした。

「主人^{あるじ}…ということは、マーティン？」

「やっぱりマーティン…」

「もしかしてリーフェミアルなの？」

「テュレーゼにマーティンが…」

好奇の目を向ける者、目を輝かせる者。だが中には、明らかに気分を害したような者もいる。

胡乱な目で渡羽を見ている。ヒトビトの視線が痛い。居心地悪そうに渡羽が身じろぐ。

アスカはキツ、と表情を険しくすると、人だかりをかき分けて、

渡羽の前に立った。渡羽を背にして、群衆たちを見据える。

「みんな！ 珍しいのは分かるけど、そんなにじろじろ見ないで！

渡羽は注目とかされるの苦手なんだから。

…それに、確かに渡羽はリーフェミアルだけど…渡羽自身は何も悪くないわ」

「…？」

渡羽は目を瞬かせた。アスカの言うことがいまいちよく分からな
い。『悪くない』というのは？

「もう行こう、渡羽。母様はもうあたしが帰ってきてること知って
るだろうし、早く会いたいもん」

渡羽の手を握り、アスカは俯き加減で歩き出す。ティアラがおろ
おろと、ブロッサムが分かっているんだか分かっていないんだか、
ひよこひよこことついてくる。

群衆はアスカたちに道を開け、啞然と見送った。しばらく歩いて
行って、アスカはぽつりと言った。

「ごめんね。イヤな思いさせちゃった」

「え？ あ、いえ、そんな。俺は別に…」

アスカは渡羽を振り返らず、歩いたまま続ける。

「みんな珍しいのよ、人間界の住人が。人間界に一般人は行けない
から」

「そ、そうなんですか」

「そう。だから初めて見る本物に興味津々なの」

くるつとアスカは肩越しに振り返り、微笑んだ。

「それだから気にしないでいいよ！」

なんだか不自然だった。心からの笑みではなく、作り笑いな気が
して。渡羽はただ「…はい」と答えるしかできなかった。

それ以上踏み込んではいけないと、何かが警告している。訊きた
いことがあったけれど、渡羽は思いとどまった。

マーティンやリーフェミアルとはなんなのか。『悪くない』とは
どういう意味なのか。

渡羽の心に、小さなわだかまりができて始めていた。

賑わっていた大通りを抜けると、比較的落ち着いた通りに出た。その通りを進んで行くと、丘の上からも見えた城の門が見えた。近くで見るとさらに大きく見える。

「大きいですねー…」

「渡羽の家は小さかったもんね。あれの何十倍もあるわよ」

「……久し振りに正直な感想を言われましたね」

確かにこれに比べれば小さい。小さいが…アスカは本当に正直だ。でも、アスカらしい。

ティアラがすいっと飛んできて、アスカの肩に座る。

なぜかさつきからブロッサムが渡羽に寄り添い、時々柄の部分――人間で言うなら上半身だろう――を軽くこすりつけてくる。

それを見たアスカが「渡羽なつかれちゃったね」と笑っていた。ほうきに懷かれるなんて複雑な気分だ。

「ここがあたしの生まれ育った家。懐かしいなー。半年振りなのよね」

アスカは目の上に手をかざして城を見上げた。自分は帰ってきたんだな。

「あーっ、早く母様に会いたい！ 元気してるかな♪」

るるんとアスカは軽い足取りで門に向かう。すり寄るブロッサムに少し辟易しながら、渡羽も後に続く。

門に近づいてきた人影に、ふたりの番兵が気づいた。片方は人だが、片方は熊だった。アスカだということを認めると、顔を綻ばせた。

「アスカ王女！ お戻りになられたのですか？」

「うん。と言っても里帰りだけど。見張りご苦労様」

アスカが労いの言葉をかけると、人の方の青年番兵は照れ笑いを浮かべた。王女に直接労っていただけとは。

熊の番兵がそんな同僚を見て、笑みを深くする。

「いつお戻りになるかと、皆心待ちにしていましたよ。姫様の笑顔が見れなくて寂しく思っていました」

「えへへ、ありがとう」

「失礼ですが、そちらの方は？」

「ん。あたしの主人^{あるじ}。ちよつと里帰りにつき合わせちゃってるの」

「この方が王女の主人様^{あるじ}……。この方のために、アスカ王女は人間界で修行を続けていらっしゃったんですね？」

「うん。現在進行形でね」

「はー、本物のマーティンなんですよ。初めて見ました。すごいなあ！」

興味深げに青年番兵は渡羽を見つめる。アスカは「はいはい、そこまで」とその視線を遮るように、番兵の顔の前にさっと手を出した。

「あたしたちは母様のところにあいさつに行かないといけないんだから」

「あっ、そうですよね。申し訳ございません、お引き留めしてしまつて。つい嬉しくて」

青年番兵はびしっと姿勢を正した。熊の番兵が微笑し、門を押し開ける。さすがは熊。巨大な門なのにひとりで開けてしまった。

「さあどうぞ、皆様方」

「ありがとう！」

ふたりの番兵に手を振り、アスカたちは門をくぐった。番兵たちは一礼してアスカたちを見送る。

「やっぱりあの笑顔を見ると元気出るよなー」

「そうだな」

「でも、大丈夫かね」

「ん？ 何がだ」

青年番兵は少し物憂げな表情で、

「王女の主人様^{あるじ}、マーティンというかりーフェミアルだろ？ ……カ

デリーン様はリーフェミアルがお嫌いだから……」

同僚の言いたいことは分かる。城に入ればカデリーン様と会うこともあるだろう。カデリーン様はリーフェミアルを心底嫌っている。

その時、カデリーン様はあの主人様^{あるじ}に何をするか……

熊の番兵は思案顔で、アスカたちが歩いて行った方向を見やった。何事もなければいいが……

「いよーしっ、そこまで！　ちっとばかり休憩だ」

長時間の訓練で汗だくになっている部下たちに休憩を言い渡し、鎧を着た虎の獣人は、自分の槍を肩に寄せ、水でも飲みに行こうとその場を離れた。

歩いていると、見覚えのある後ろ姿が見え、虎人^{こじん}は声をかけた。

「おっ。アスフェリカ王女じゃねーか！」

振り返ったアスカは虎人に気づくと、駆け寄ってきた。

「ウロブレ임將軍！」

「おーおー、相変わらず元気っ子だな。人間界で修行してるって聞いたが、なんだ、音をあげて帰ってきたのか？」

虎人はにやっと笑って、アスカを見下ろした。

「違いますよ！　里帰りです」

「そうかい。オレはてっきり、修行が嫌になって故郷^{くに}が恋しくなったのかと思ったぜ」

「……それは、少しあります、けど」

わずかにばつの悪い顔で、アスカは小声でぼそぼそと言った。虎人はぶはっと吹き出し、ゲラゲラと笑った。

「もーっ、笑わないで下さいよ、將軍！」

「はっは……いや、だってよ……くくっ……ぶわっはっはっは!!」

「笑い過ぎです!!」

腹を抱えて笑う虎人に、アスカはむくれる。そこで立ち尽くしている渡羽が視界に入り、慌てて彼を紹介する。

「あつ、このヒトはウロブレ임將軍って言ってね、小さい頃、遊んでもらったことがあるの。で、將軍この人は…っていつまで笑ってるんですかあ！」

まだプルプルと肩を震わせているウロブレ임の背中を、バシツと叩くアスカ。そこまで笑うことないじゃない。

一方、渡羽は將軍を見て目を丸くしていた。

虎だ。鎧を着た虎がしゃべっている。まるで人間のように表情豊かで、声だけ聞いていれば人間と変わらないだろう。

ようやく笑いが収まってきたウロブレ임は、涙目でアスカたちに向き直った。

「はー、いやあ、悪い。ホント、王女は正直もんでカワイイな」

「何言ってるんですか、もう。將軍、この人はあたしの主人あるじの渡羽で、今回、一緒に来てもらったんです」

「ほおう、ってえことはマーティンか。珍しいもん見たな。オレはウロブレ임だ。マジカリア近衛軍の將軍をやっている。よろしくな、坊主」

「あ、はい。こちらこそよろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる渡羽を見て、ウロブレ임は腕組みをし、感心したように何度か頷いた。

「おーおー。礼儀正しいじゃねえの。オレの若い頃に見してやりたいぜ」

豪快に笑うウロブレ임。なんだか少しバルカンに似ている気がする。

渡羽はちよつと不機嫌な顔になった。こんなところに来てまでバルカンのことを思い出すなんて。

それから少しウロブレ임と話して、アスカたちは別れた。だいぶ時間を食ってしまった。

大きな扉を通って中に入ると、またもやアスカに気づいたヒトたちが集まってきた。

どこに行ってもアスカは目立つ。というか人気者だ。アスカの明

るさは人を惹きつけるのだろう。自分も含めて。

柱廊を渡り、アスカたちは一つの部屋の前まで来た。ここは女王の謁見間だそうだ。

とうとうアスカの母親――マジカリアの女王様との対面だ。渡羽は緊張した。

アスカが扉に手を触れると、りいーん、と甲高い澄んだ音がして、扉が開いていく。今のも魔法だろうか。

謁見間はまるでホールのように広く、何もない。玉座まで細長く赤いじゅうたんが敷かれているだけだ。

シャンデリアはあるが、天井まで続くいくつもの大きな窓ガラスが、空の光を取り込んでいるのでとても明るい。昼間はシャンデリアは必要なさそうだ。

そして奥の玉座。そこに座っている中年の女性。隣の玉座には国王の姿に戻ったシンが座っている。

その女性はまっすぐに、ひんやりとした目でアスカたちを見つめていた。

12th 魔法界（後書き）

追伸列記簿

こんにちは、気まぐれかつ作業速度がカメ足な甲斐日向です。マジラビ第十二話をお届け致しました。

今回、魔法界にやってきたアスカたちですが、魔法界と人間界ではだいぶいろんなものが異なりますね。空の色は黄色だったり太陽がなかったり……

あ、空と言えば、アスカは空が発光や発熱していると説明してましたよね。空と言っても魔法界はドーム状の世界なんで、屋根にあたる部分が魔法界の『空』です。

その部分が光ったり暗くなったりすることで昼・夜があり、熱を発することで夏になります。冬は発熱しません。

なので思いっきり高いところまで行けばいつかは天井にぶつかります。横に移動すれば壁がありますし。

太陽ほど熱はないので、人間界の夏ほど暑くはないでしょうけど、厚手のコートを着ていたらさすがに暑い、というくらいの暑さです。逆に冬もさほど寒くはないと思います。四季はあっても気温の変化は少ないのではないのでしょうか。

でも、太陽がないということは太陽光に含まれる紫外線がないので、日焼けしたくない女性にはうれしいかもしれませんね。

代わりに虹やオーロラという幻想的な光の現象もなくなりますけど。

他にも太陽がないことで利点欠点がありますが、詳しいことは省きます。面倒ですし自分でもよく分かっていないので。

それと、作中でアスカが（魔法界は）今は七月と言っていました。が、計算するときにぎりぎり七月に入っただけ、ということになります。

なるはずです。僕の計算が合っていれば！ 計算苦手なんで不安なんです：

そして、これまで謎だった渡羽の謎が明らかになっちゃいました。渡羽が靈感少年だということは7thで判明していましたが、なぜ妖精^{ティアラ}が見えるのか、なぜ眼鏡を外すと地が出るのか、という最大の謎が今回で判明しましたー。

渡羽と言えば、ほうき（ブロッサム）に懐かれたというおもしろ展開がありましたね。

ブロッサムは魔法力を供給されていない時は意識ありません。持ち主以外から魔法力を供給されても動きません。ちなみに無性別です。

それにしても、今回は渡羽がちょっとかわいそうな扱いされてますね。でも、魔法界の住人全員が“リーフェミアル”を嫌っているわけではありませんよ？ 一部のヒトたちだけです。

どちらかと言えば人間界に憧れるヒトの方が多いです。マーティンやリーフェミアルの正確な意味はそのうち出てきます。

妖精についても少し触れましたね。ティアラが頭に花飾りつけてるのは、花族の妖精だから、ではありませんよ。念のため。

妖精も：出せたらいろいろ出したいなあと思ってはいますが、いかんせんアスカたちとは深くかわらないのでどうだろう……

えー、今回初めて出てきた虎人のウロブレイムは結構気に入っています。僕はこういう頼れる兄貴っぽい奴が好きなんです。

しかし、ここぞとばかりに獣人が多いですね。鳥人もそのうち出したいです。

そして！ ついにアスカの母親が登場！ 彼女を出すのもずっと楽しみでしたー☆ あのアスカにそっくりな母親ですからね。性格などは次回で明らかに。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

13th 家族

アスカたちは静かに玉座まで続くじゅうたんの上を歩いて行った。五段ほどの階段があり、その上に玉座がある。

階段の数歩手前で立ち止まり、アスカは玉座の二人を見上げて微笑んだ。

「ただいま。父様、母様」

父親に対しては今さらだと思ったが、たぶん言わないと拗ねるだろう。

国王はアスカと、明らかに緊張している渡羽を見て、口の端に笑みを浮かべた。

「お帰り、アスカ」

女王は黙したまま笑みも浮かべず、じっとアスカを見る。そして渡羽を。

微かに感じる魔法力。それは少し魔法界のモノとは異質だ。

似ているけれど違う。だが根本は同じだ。我が娘はなんとも風変わりな子を好きになったこと。

ふっ、と女王の表情が和らいだ。

「お帰りなさい、アスフェリカ」

アスカは満面の笑みを浮かべる。

「元気そうね。それとティアラ」

「はっ、はい！」

呼ばれて、ティアラは背筋を伸ばした。

「これまでよくこの子の面倒を見てくれたわね。大変だったでしょう」

「い、いえ、そんな！ 確かに姫様のお世話をするのは大変ですが、私が好きでやっていることですから！」

「ふふ。では今後もしっかりお願いするわ」

「はい！」

笑顔で答えるティアラ。アスカが少し物言いたげに眉をひそめている。

「そちらがアスフェリカの主人^{あるじ}ね」

女王はカチコチに固まっている渡羽を見やる。渡羽はびくーっとさらに緊張した。

「ようこそ、我がマジカリア国へ。イリアタルテ・グランジェ・ウイルマジカリアよ。あなたを歓迎します」

渡羽は目を瞬かせ、次いで肩の力が抜けた。

町のヒトたちが、自分にあまり良い感情を持っていないようだったので、国の長たる女王様もそうだったらどうしようと思っていたのだ。

けれど、女王様は歓迎すると言ってくれた。ほっとした。

「はじめまして、渡羽飛鳥です」

「名前だと、呼び方は違うけれどアスフェリカとややこしいわね。

渡羽と呼ばせてもらおうわ」

「はい」

あ、アスカと同じことを言ってる。渡羽は昔にアスカが同じことを言っていたことを思い出した。

以前、国王様がアスカは母さんに似てきたと言っていたが、確かによく似ている。

少し女王様の方がきつい顔つきだが、アスカが大人になったらきつとこんなふうになるのだろう。

「人間界は楽しいかしら？」

再びアスカに顔を向けて、女王は問いかけた。

「うん。魔法界では見たことないものとか、人間界でしか通じないこととかあって、毎日楽しいよ。あのね、あたし、人間界の文字を覚えたの！ それから友達もできたのよ！」

「そうなの。ところで、アスフェリカ？」

女王はにっこりと満面の笑みで、

「修行の方はどうなっているのかしら」

びしっ

アスカの笑顔が固まる。ティアラも渡羽も国王も、気まずい顔になった。あくまで女王は笑みをたたえたままだ。

「試験あれから随分と経っているのだから。魔導士ボミカとまではいかなかったも、魔法師イオクイノにはなっているわよね。というよりも、それくらいなっていて当然よね？」

笑顔が怖い。アスカがだらだらと脂汗をかき始めた。

「真面目に修行をしていたのなら、いくらあなたでも魔法師イオクイノにはなっているはずだわ。まさか」

女王のやけに静かでゆっくりな言葉に、ドキッと心臓が跳ねる。

「まだ魔法士ノエウイだなんて：まさか言わないわよね？」

まさかと二回言った。アスカは長い沈黙の後、小さい声で「ゴメンナサイ」と謝った。女王はすうっと目を半眼に開いた。

「——そう。まだなのね」

「：いえ、その：ゴメンナサイ」

「アスフェリカ」

びくんっ、とアスカの肩が跳ねる。空気が冷たい。

自分のことではないのに、まるで自分が責められているような気がして、渡羽もティアラも固唾を呑んで見守っていた。

「あなたは自分の立場というものがまだ解っていないの？」

あなたはこの国の第一王女であり、女王候補のひとり。いずれはこの国を背負うことになるかもしれないあなたが、魔法士ノエウイのままでするというの！

所詮、魔法士ノエウイなど、魔法使いジルコーデインが与えられる四称号の中で最下位なのよ！？

それに称号は一般国民ならともかく、王家や王族の者は協会に申請せずとも勝手に与えられるもの。

称号を持っているからといってのんきに構えている場合ではないのよ！？ 人間界に残らせたのは遊び呆けさせるためではないわ！」

厳しい言葉に、アスカはしゅんとうなだれた。覚悟はしていたが、

やはりいざその言葉を突きつけられると落ち込む。

事実なだけに、フォローすることもできない渡羽とティアラ。

「あの…でもね、母様。少しはちゃんと修行してたのよ。これは本当。ただ…」

「ただ？」

アスカはちらっと上目遣いで国王を見た。

「シンが時々、っていうか、しょっちゅう邪魔に来るもんだからやる気が失せて…」

ぎくつと国王の顔が引きつる。女王は「ほおおおう？」とゆっくり、国王に顔を向ける。

国王は慌てて顔を逸らした。ジト目で国王を睨みつける女王。

「しょっちゅう姿が見えなくなると思っていたら、やっぱりアスフレリカのところに行っていたのね、シーウォルド」

「あ、いや…その…」

「しかも“シン”ということは、また若い姿に変身していたわけね。わざわざ」

「いやあ…それは、そっちの方がアスカも見慣れていると…」

「バカを言うのではないわよ。そのままの姿の方が見慣れているに決まっているでしょう。十六年間見てるのだから」

「……………」

「シーウォルド」

今度は国王の方がだらだらと脂汗をかき始めた。女王の怒りの矛先は、完全にアスカから国王へと移っている。

渡羽は邪魔にならないように、こっそりとアスカに問いかけた。

「アスカ、“シーウォルド”というのは？」

「え？ ああ、渡羽は知らないんだっけ。シーウォルドは父様の名前よ」

「…シンじゃなかったんですか」

「そーなのよね。たぶん“シン”は偽名だったんじゃない？ あたしに正体バレないための」

それで合点がいった。なぜ、アスカが今まで、シンが父親だと気づかなかったのか。

姿が違うということもあっただろうが、名前も違ったのだ。なら気づくわけがない。

「私は言ったわよね？ アスフェリカの人間界滞在を許可した時に」
「……………」

「アスフェリカの修行の邪魔はしないこと。周りをうろちよろするな、と」

冷たい空気が流れてくる。夏なのに涼しい。いや、寒い。

アスカもティアラも平然としているが、渡羽はこういった雰囲気慣れていないので、かなり居心地が悪い。

「いや、しかしだな、イリア。父として、我が子の成長ぶりをこの目で見たいと……」

「そんなもの、魔法で水晶でも鏡でも使えば見れるでしょう」

「やはり直に近くで見たく」

「ならないわよ。」

「……………」

淡々とした切り返しに、国王はもはや言葉もない。ひたすら顔を逸らし、どうにかこの場を切り抜ける方法を考える。

そろそろかと思ったアスカは、小さく防御魔法の呪文を唱える。

「まったく、何度言えば分かるのかしら？」

女王の手元に魔法力が凝縮されていく。国王がはっと気づいたが遅かった。全身から怒りのオーラを迸らせた女王は怒り満面で、

「いい加減にしなさい！！ この粘着質男お—————っ！！」
「！」

国王に爆発魔法を叩き込んだ。

爆発の余波がこちらにも来たが、アスカの防御魔法のおかげで事なきを得た。

しかし、国王は直撃だったため、黒焦げになって玉座から崩れ落ちた。

「こここ国王様あ！？　アアアスカッ、こ、国王様が！」

「心配ないわよ、渡羽。母様ちゃんと手加減してあるもの」

「あれで！？」

黒コゲなんですけど！

「母様が本気出してたら跡形も残らないわよ。それに、あたし程度の防御魔法で防げるわけじゃないじゃない」

「うう。でも大丈夫なんですか？　あれ…」

「大丈夫よ、父様だもの。こんなのあの二人の間じゃ日常茶飯事だし」

あっけらかんと笑って言うアスカ。こんなことが日常茶飯事だなんて……よく国王様生きてますね…、と、渡羽は別の意味で感心した。

女王は玉座から立ち上がると、ぷすぷすと煙が出ている国王の体を見下ろした。

「あんたは昔からそう！　何度、来るな顔見せるな近寄るな消えろと言っても、しつこくつきまとってくるし、うるさいし、人の話は全然きかないし！」

国王相手だといひ昔の口調に戻ってしまう。怒鳴り散らす女王の前で、国王はよろよろと起き上がった。

「それはお前に少しでも…」

「あんたがそばにいと腹が立って集中できなくなるのよ！　だからただでさえ集中力のないアスフェリカの周りをうろつくなんて言ったのよ。魔法修行の妨げになるから！」

ずずいっと女王は国王に近づく。国王は起き上がると、玉座にもたれかかって、女王を見上げた。

「なのに、アスフェリカに悪い虫がついたら困るとか言って、わざわざ、若い姿に変身してアスフェリカに近づく男たちをことごとく追っ払って！」

でも、それだけなら許してあげなくもないわよ。私だってアスフェリカに悪い虫がついてほしくないもの」

「な、なら…」

「だからと言って、あんた自身がアスフェリカに言い寄るのを黙って見過ごすわけにはいかないのよ！！　どうして言い寄る必要があるっていうの！？」

女王の大喝は止まらない。すっかり蚊帳の外になったアスカたちは、とりあえず事が収まるのを待つしかない。

「アスカ、あの二人って仲悪いんですか？」

「ううん、悪くはないわよ。ただ、父様があれだから、母様が一方的に怒るっていうか」

「やはり、シン様は国王様なんですわね。思い返してみると、姫様とシン様のやり取りにそっくりです」

「そうなんですか？　そういえば、アスカとシンさんが二人で話しているところって、見たことありませんでしたけど…」

その時だった。

「わしはアスカも愛しているが、お前のことも愛してるぞ！」

「ああそう！　私は昔からあんたのことなんか大嫌いよ！　あんたは私の好みの対極に位置してるんだから！！」

…ものすごく覚えのある言葉だった。アスカとティアラは顔を見合わせた。

「……あたし、前に同じこと言ったわよね」

「ええ。確かに仰ってましたね、シン様に」

「自覚なかったけど、あたしと母様って似てるんだ……」

まさかここまで似ているとは。アスカとティアラは乾いた笑みを浮かべた。

「このっ……しつこいのよっ！！」

再び爆発が起きる。そして今度こそ国王は沈黙した。動かなくなった国王を鼻であしらい、女王はようやくアスカたちに向き直った。「さて、少しはすっきりしたわ。アスフェリカ、この粘着質男が邪魔をしていたことは分かったけれど、それを差し引いてもあなたがいまだ魔法士ノエライなのは、あなた自身の問題でしょう？」

話が戻り、アスカは悄然とする。女王は玉座に座り直すと、ひじ掛けにひじを立てて頬杖をついた。

「まあ、全く修行していなかったわけではないようね。少しではあるけれど、魔法力が上昇しているようなもの。」

だから今は咎めないわ。せっかくの里帰りでもあるのだし」

アスカはパッと顔を輝かせた。

「ただし、今後きちんと修行をすること。そのための人間界滞在なのだから。いいわね？」

「うん！ ごめんね。ありがとうございます母様！」

「ゆっくり休みなさい。あなたの部屋はそのままにしてあるわ。渡羽の部屋もすぐに用意させます」

「はい。ありがとうございますっ」

恐縮して思い切り頭を下げる渡羽。ティアラもぺこりと一礼し、三人は謁見間を出て行った。

三人がいなくなって、イリアタルテはふう、とため息をついた。

どれだけ時間が経ってもあの子は変わらない。いつまでも天衣無縫で、だからこそ。

「あの子は渡羽に惹かれたのね」

自分を飾ることなく、ありのままにいられるアスフェリカだからこそ、ありのままの渡羽を好きになった。……過去がどうあれ。

「マーティンである渡羽を」

「そうだよ。あの子は渡羽殿を見つけ、選んだ」

復活したシーウォルドがイリアタルテの横に立つ。

イリアタルテはシーウォルドを見もせず、不機嫌そうに「相変わらず復活早いわね」と小さく舌打ちした。

「たとえば相手がマーティンであっても、あの子は受け入れた。叶わぬ恋であっても、渡羽殿のそばにいたいと言ったんだ」

シーウォルドは目を閉じた。夢の中で、自分はアスフェリカに言

った。

『人間の願いを三つ叶えれば、あなたは女王になる資格を得る。

そうなればマジカリアに帰り、女王として生きる。二度と人間界には降りられなくなる。

人間の男に恋をしたって、叶わぬ恋ですよ。あきらめるべきです』試験が終われば、待っているのはどちらにしろ別れ。だからまだ傷が浅いうちにと考えた。

けれど、アスフェリカは答えたのだ。

『……分かってるわよ、そんなこと。でも……仕方ないじゃない！好きになっちゃったんだもん！

渡羽とずっと一緒にいたいのに！ 渡羽と離れるなんて…渡羽に逢えなくなるなんて…

そんなの……そんなの絶対にイヤ！！』

その時分かった。アスフェリカの渡羽殿への想いは、断ち切れないうと。もう選んでしまったのだと。

「だからな、イリア。わしは渡羽殿を認めた。アスカの心をつかんだ彼なら、任せられると思ったのだ」

「確かに、渡羽なら問題なさそうだわ。魔法力もあるし、順応性ありそうなもの。

けれどね、シーウォルド。渡羽はマーティンなのよ。そしてあの子は…アスフェリカは——女王候補なのよ」

頬杖をつき、窓の外を見やったらま、イリアタルテは低い声で言った。

その声にはやるせなさが含まれている。シーウォルドも表情を曇らせた。

いつかは女王となる身。必ず別れは来る。

「パーガウエクオが選んだ、このテュレーゼの柱……それが、女王なのよ。人間界に留まるのは、許されないこと」

「今アスカが人間界に留まっていられるのは、あくまで女王候補だからだ。候補でいる限りは渡羽殿のそばにいられる」

「けれど、パーガウエクオが最後の決定を下せば……」

あの二人は別れなければいけない。

どうして、あの子だったのか。イリアタルテは頬杖をついた手で目を覆った。

「なぜパーガウエクオはあの子を選んだのかしら。

どうしてあの子が好きになったのが、マーティンだったのかしら。アスフェリカには：幸せになってもらいたいのに」

はがゆくてしかたがない。どうしようもないことだから、悔しくて、やるせない。

「ねえ、シーワールド。私はどうすればいいの？」

「イリア……」

「私は……」

「イリア」

ぽん、とイリアタルテの肩に手を置き、シーワールドは微笑んだ。

「こっちを向いてごらん」

珍しく素直に、イリアタルテはシーワールドに顔を向けた。

ぷに。

顔を向けた瞬間に、肩に置かれたシーワールドの右手の人差し指が、イリアタルテの頬に刺さる。よくある子供だましだ。

イリアタルテは顔を引きつらせながら、シーワールドの胸倉をつかんで凄む。

「何？ あんた私を怒らせたいの？ 黒焦げにされたいの？ だったら望み通りにしてやるわよアンポンタン！！」

「いやいやいやいや」

シーワールドは冷や汗をかいた。イリアなら本当にやる。シーワールドはそつとイリアタルテの手をほどき、

「二人きりの時は愛称で呼んでくれと言っているだろう？」

微笑むシーワールド。イリアタルテはぐつと言葉に詰まり、乱暴にシーワールドの手を振り払った。くるっとシーワールドに背を向け、

「……………シード」

聞こえるか否かというほどの小さい声で呼んだ。シーワールドはうれしそうに笑った。

「イリア」

「な、何よ」

「お前のしたいようにするといい。お前がどんな決断をしようとも、わしはどこまでもついて行くぞ」

「……………私はあんたのそういうところが嫌いなよ」

そう言うことを平気で言ってしまうところが。

でも、そんな直球な言葉に救われていることも確かで、本当はいつもお礼を言いたいけれど、なんとなくムカつくし気恥ずかしいから、今回もイリアタルテは何も言わなかった。

謁見間を出たアスカたちが、たわいない話をしながら長い柱廊を歩いていると、アスカたちの頭上に、ぽっかりと黒い穴が開いた。

魔法力を感じ、アスカが気づいて顔を上げるのと、その黒い穴から何かが落ちてきたのは同時だった。

「どうかしたんですか？ アスカ…わっ」

「渡羽！」

穴からの落下物の下敷きになる渡羽。拍子に眼鏡が落ちてしまった。あれ？ こんなことが前にもあったような…？

「くっつ、また変なところに出たもんだなあ」

落下物はむくりと身を起こし、呆れ気味に息をついた。落ちてきたのは人だった。それも女の子。傍らには小さな少年の妖精がいる。その少女を見て、アスカは瞠目した。

「…カリン！」

13th 家族（後書き）

追伸列記簿

どうもこんにちは。甲斐日向です。マジラビ第十三話をお届けしました。

とうとう出てきましたね、女王様！ アスカの母親！ 皆さんの予想とはどうだったでしょうか。予想通りかはたまた予想外か。

厳しい人、ということとで父親と違い、アスカに対して風当たりが強いです。これはアスカにというより国王に対して、の方が正しいかもしれません。

やはり国王はシンなんだなあと、今回で納得いただけただけではないでしょうか。あ、そう言えば本名出ましたね。若い頃からあんな感じなんですよ、やっぱりあの人は。

よく結婚しましたね、イリア様。まあ、そのあたりはいずれ、番外編か何かで書くかもしれないし書かないかもしれません。

そして終盤は気になるものがちらほらと。何やらパーガウエクオはただの石ではなさそう。それに謎の少女まで。

次回は少しシリアス展開。魔法界と人間界のあれこれを背景に。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

14th 姉妹

「…カリン！」

空間移動魔法の出入り口である黒い穴から落ちてきた少女を見て、アスカは瞠目した。

彼女はアスカの妹、カデリーンだ。

外跳ねのフクシアレッドの髪にサルビアブルーの吊り目。髪は左側でサイドテールにしている。

カリンの隣にいるのは妖精の少年で、ライトブルーのショートヘアにオリエントタルブルーの瞳。

二人とも、どこか刺々しさのある雰囲気をもっている。カリンはアスカの姿を認めると、目を丸くした。

「姉さん！？　なんでココに！　いつ戻ってきたの！？」

「さつきよ。ちょっと里帰りにね。それより！」

アスカはびしっとカリン——いや、カリンの足元を指差した。

「さっさと渡羽の上からどきなさいよ！」

「とば？」

「うう…」

自分の下から人の呻き声が聞こえ、カリンは足元を見下ろした。下には少年が一人。カリンは少年の上に座っていたのだ。

「うわっ、何、アンタ！　なんでアタシの下なんかにいるんだよ！」

「どいてくれない？　重いんだけど」

渡羽がかすれた声で言うと、カリンはこめかみに青筋を立てた。

「んなっ…：初対面の女の子に向かって言う言葉がそれ！？」

「“女の子”ってタマかよ」

ぼそりと少年妖精が言うと、カリンは、キッ、と少年妖精を睨み、ぴしっと指で弾いた。

「るっさいよ、クラウン！」

「いってー！」

「アンタも、いつまでアタシの下にいるつもりよ！ 変態！」

「あんたが上に乗ってるからどけないんでしょ！ 早く降りなさいっ」

「分かったから、服引っ張らないでよ」

袖を引っ張るアスカの手を振り払い、カリンはようやく渡羽の上から降りた。

「いたた…」

「渡羽さん、大丈夫ですか？ はい、眼鏡です」

「あ、ありがとう、ティアラ」

よろよろと起き上がった渡羽に、ティアラが眼鏡を渡す。

その時、「カリン、もう少し手加減しろよな！」と抗議の声を上げかけた少年妖精——クラウンが、ティアラを見て「あー！」と叫んだ。

「ティアラ！」

その声に、ティアラはびくつとして、怯えた顔でクラウンを見る。

「ク、クラウン…」

「アスカ姫がいるってことは、やっぱりお前もいたのか。泣き虫ティアラ！」

「わ、私は泣き虫じゃないですっ」

「ヒトの顔見てびびってんじゃないよ！ ムカつくなあ！」

クラウンはぐいっとティアラの髪を引っ張った。

「やああつ、髪の毛引っ張らないで下さいいいっ」

「ちよつと、クラウン！ いくらティアラでも女の子なんだから、もう少し優しくしたらどうなの！？ 女の子の髪引っ張るなんて最低よ！」

「！ …っ、アスカ姫には関係ねーだろ！」

アスカの言葉に、クラウンは顔を朱くしてそっぽを向いた。渡羽がアスカの横で「アスカもいつも同じことをしてると思うんですが…」と呟いたが、誰の耳にも入っていなかった。

「くーっ、生意気！ ティアラ返してよ！」

「ふんっ」

クラウンが髪を放すと、ティアラは涙目でアスカのところまで飛んで行き、アスカの陰に隠れた。クラウンは不機嫌そうにちらりとティアラを見ると、すぐに顔を逸らした。

「さて、ティアラも返してもらったことだし。早くこの場から去りたいところだけど……」

その前にカリン。ちゃんと渡羽に謝ってよね!!」

じろりと半眼で見据えてくるアスカに、カリンは腕組みをして見返す。

「謝るって何を」

「あんたねえ! 渡羽を下敷きにしたでしょ!? その上、変態だなんて失礼なこと言って!」

「謝るのはそっちだろ!? 女の子に向かって『重い』って言ったんだぞ、ソイツ! しかも初対面で! 失礼なのはどっちなんだか!」

「渡羽は悪くないわよ! それに重いのは事実でしょ!」

「……姉さん!! アンタ、どっちの味方よ!」

「渡羽に決まってるでしょ!? それに、姉に向かって『あんた』とは何よー!」

怒鳴るアスカに、カリンも負けじと怒鳴り返す。顔を突き合わせて睨み合う両者。

アスカがシン以外にここまで敵意をあらわにするのを初めて見た。渡羽は少々面食らいながらも二人の仲裁に入る。

「ま、まあまあ。落ち着いて下さいよ、アスカ」

「だって、渡羽!」

「いいんですよ。悪気があってやったわけじゃないでしょうから。俺も失礼なこと言ってしまいましたし」

「渡羽がなくてもあたしがよくない。ちゃんと謝って、カリン」
しかしカリンはつーんとそっぽを向いている。

「カリン!」

今にも噛みつきそうな勢いのアスカに、カリンはやれやれと首を横に振って、

「…わーったわよ。謝ればいいんでしょ。ちょっと、アンタ」

「渡羽よ！」

「はいはい。さっきは悪かったわね」

「いえ。俺の方こそ、すみませんでした」

申し訳なさそうに笑って、渡羽は軽く頭を下げた。その様子にカリンは眉をひそめた。

「…アンタ、なんかさっきと雰囲気、えらい違くない？ 頼りなさげっていうか……」

「あ…それは…」

「気のせいよ、気のせい！ 全然同じよ！！ ねっ、渡羽！？」

「あ…はい」

説明しようとした渡羽の言葉を遮り、アスカは渡羽とカリンの間に割って入り、渡羽を振り返った。

「ふーん。まあいいか」

たいして興味なさそうに、カリンはあっさり納得した。

アスカはほっとした。一刻も早くこの場から去りたかった。なぜならカリンは……

「ところでさ、コイツ、誰なの？ 町の奴らは城の中には入れないし、城の奴にしては見かけない顔だし」

「えっ！ あ、この人はそのー」

俄然、焦り出すアスカ。渡羽は「？」と小首を傾げている。

「…なんか、魔法力も全然感じないし」

胡乱気に渡羽を見るカリン。アスカはますます慌て、

「だからそのー…あっ、この人はね、無流ギターなの！ だから魔法力感じなくて当然…」

「無流ギターだとしても、法石ほうせきくらい持ってるだろ。でもそれらしいもん持ってなさそうだし…」

「うあっ？ えーっと、それはそのう…」

「テュレーゼミアルにしては、なんか毛色が違うし…」

カリンは渡羽を品定めするようにじろじろと見る。渡羽は少したじろいで、カリンの言葉を否定した。

「いえ、あの、俺は魔法界の住人じゃないんです」

「え？」

もっと早く、ここから立ち去っていればよかった。

「俺は…」

「渡羽、ダメ！」

やっぱり渡羽を魔法界に連れて来なければよかった。

「人間界から来たんです」

だってカリンは、リーフェミアルを憎んでいるから。

「…なん、だって…？」

カリンは大きく目を見開き、ふらりと渡羽から数歩離れた。渡羽はきょとんとしている。アスカは激しい後悔に顔をゆがませた。

「人間界から…？　じゃあアンタは…まさかリーフェミアル？」

渡羽を見つめるカリンの瞳には驚怖。そして、それがみるみる憎悪へと変貌する。

カリンの全身から魔法力がにじみ出てくる。

「あの…町のヒトとかにも言われたんですけど、そのリーフェミアルというのは…」

「うるさい！！　しゃべるな！　話しかけるな！　アンタがリーフェミアルだったなんて…！」

完全に憎悪に染まった目で、カリンは渡羽を睨み見る。

「どうりでおかしいと思ったんだ。魔法力はないわ法石もないわで……でもマーティンだって言うなら納得がいく。」

アンタがマーティンで、しかもリーフェミアルだって知ってたら近づきやしなかった。リーフェミアルなんかに触ってたなんて……気持ち悪い！」

あからさまに汚らしいものを見るように顔をしかめるカリン。アスカはその一言に、一瞬で頭に血が上った。

「カリン！！　なんてこと言うのよ！？　あんたが勝手に渡羽の上に落ちてきたくせに！！　リーフェミアルだからって、たったそれだけのことで渡羽を汚物扱いしないで！！！！」

「それで充分だろ！　リーフェミアルはみんな汚い！　醜い！　非道な奴らだ！！」

「リーフェミアルってだけで決めつけないで！　実際に会ったこともないくせに、勝手なこと言わないでよ！　カリンが知ってるのは刷り込まされた歴史情報だけでしょ！？」

カリンは顔をゆがませ、驚いて唾然としている渡羽を見て嗤った。「それが何？　でも事実だろ？　リーフェミアルが遠い昔アタシらに……アタシらの先祖に何をしたのか、それは姉さんだって知ってるだろ！？」

「！」

息を呑むアスカ。言われずとも知っている。人間界と魔法界の因縁は、魔法界に住む者なら子供でも知っていることだ。

けれどそれは過去昔のことであって、現在今とは関係ない。渡羽とは関係ない。渡羽がやったわけじゃない。

「リーフェミアルは勝手な言い分を振りかざして、アタシから……」
「そんなの関係ない！！」

ひととき大きな声でアスカはカリンの言葉を否定した。カリンは気圧されて口をつぐむ。

「それはずっと昔のことで、渡羽自身が何かしたわけじゃない。そんなのは渡羽をひどく言う理由にならない！」

怒りでアスカの体からも魔法力が放出される。それは渦となってその場を飲み込んでいく。

「キャッ」

「ティアラっ」

魔法力の奔流で飛ばされそうになったティアラを、渡羽が抱き止める。

「あ、ありがとうございます、渡羽さん……」

「いえ」

ティアラに微笑みかけ、渡羽は不安げにアスカを見やった。

（アスカ……）

あふれ出てくるすさまじい魔法力に、カリンは身震いした。

いつもは弱々しい魔法力のくせに、感情が昂たかぶるとこんなにも魔法力が強くなる。これが姉さんの実力のほんの一部……！

「……だからムカつくんだ……」

ぎりつと歯を噛みしめ、カリンはアスカから距離を取った。このままここにいてもなんの意味もない。

元々こんなところに出るつもりじゃなかった。ちょっと空間移動に失敗して、偶然ここに出ただけなのだ。

（ほんとにムカつく！ これだけの力を持つてるのにうまく使えないで、それなのにみんなからちやほやされて）

カリンはぽつりと呟いた。

「姉さんはズルい」

「え？」

よく聞き取れず、アスカは眉をひそめる。カリンは真っ向からアスカを睨みつけた。

「いいよね、姉さんは！ そんなに強い力があって！ 好き勝手もできて、誰から必要とされてさ！

人間界滞在だって本当は試験期間のみなのに、今も滞在を許され

てる！ それは姉さんだから。姉さんがそう望んだからっ！　ワガママ言っても、姉さんなら許される。

その上、リーフェミアルを魔法界に連れてくるなんて！！　どうせそれもお咎めなしなんだろ！？　なんでいつも姉さんばかり！　ムカつく！　姉さんも、そいつも、何もかも！！」

錯乱したように喚くカリン。アスカは困惑した。カリンが自分を嫌っているだろうとは思っていたが、正面からはっきりと言われたのは初めてだった。

憎んでいるリーフェミアルに会ったことで、積もり積もっていた不満や怒りを抑えきれなくなったのだろう。

「リーフェミアルなんか嫌いだ…みんな嫌いだ…っ。みんないなくなればいいんだ！」

そしてその思いが強いため、リーフェミアルに対する憎しみと、アスカに対する不満を混同してしまっている。そのことにカリンは気づいていない。

「カリン！　落ち着いて！」

「うるさいっ！　姉さんがなんと言おうとリーフェミアルなんか嫌いだ！　大っ嫌いだ！　リーフェミアルなんて…っ」

弾かれたようにカリンは言葉を切った。そうだ。リーフェミアルなんていなければいいんだ。リーフェミアルのいる世界なんていない。

「――メチャクチャにしてやる」

今までの興奮した様子から一転して、カリンは静かに、怖いほど静かに半眼で言葉を紡ぐ。アスカはカリンの意図に気づいて目を瞠った。

「リーフェミアルのいる世界を、人間界をメチャクチャにしてやる…っ」

「やめなさい！　それに、そんなことできるわけないでしょ！？　あんたはまだ時空移動魔法を使えないんだから！」

止めようとするアスカの言葉に、カリンはにやりと笑った。ズボ

ンのポケットを探り、アスカの前に、ある物を突き出した。

それを見たアスカは顔色を変えた。

「！それは…っ、ファイティードソルデー時空廻廊の鍵！？ どうしてあんたがそれを…っ」

カリンが手にしているのは、全体に細かい文字が彫り込まれた、長い銀色の鍵だった。それは時空廻廊へと続く扉を開けられる魔宝ロゼアス具。

時空廻廊——時空と時空を繋いでいるジルティードソルデー時空神の神殿に続く廻廊のことだ。

本来、この時空神の神殿には入ることができないが、神やそれと同等の者、もしくは神クラスの力を持つ者や選ばれし者などは入ることができる。

時空を渡る際は、この時空神の神殿を経由しなければ、別時空に渡ることはできない。ただし、時空移動魔法を使った場合は時空神ジルティードソルデーの神殿を経由せず、別時空に跳ぶことができる。

時空移動魔法が使えない者は、この時空廻廊の鍵を使って、一度ファイティードソルデー時空神の神殿を経由することで別時空に渡ることができるのだ。

だが、別時空に渡ることが一般国民には禁じられている。時空移動を許されているのは、王家と王族のみ。

そしてこの魔宝具、ロゼアス時空廻廊の鍵は、王城の主——マジカリアの場合は女王——と主が許可した者しか入れない禁断の間に保管され、よほどの事情がない限り、たとえ王家・王族でも主の許可なしに持ち出すことは禁じられている。

それをカリンが持っているということは…：

「…まさか…っ、禁断の間から盗み出してきたの…！？」

カリンはくすくすと笑い、「そうだよ」と悪びれなく言った。

「だってこれがないと時空渡れないし。母さんに言っても貸してくれないだろうからさ、勝手に持ってくるしかないだろ？」

「なんてことを！ それは重罪よ！？ 返しなさい！ 今ならまだ減刑してもらえるかもしれないわ！」

「やだね。もう決めたんだ」

そう言ってカリンは時空廻廊ファイデューラプレッシモギョの鍵を宙に放り上げた。

「ファイデューラノウルジェイシーエルク」

解呪の呪文を唱えると、カリンの後ろに銀色の扉が現れ、ゆつくりと開いた。カリンはその扉へと歩き出す。

「やめなさい、カリン！」

制止するアスカの声に、カリンは振り返りざまいくつかの植物の種を放った。

深緑色の種はアスカたちの足元に落ちるとものすごい速さで成長し、巨大な蔓となってアスカたちを絡め取った。

「！」

「うわっ！」

「キーンッ」

巨大な蔓の森に絡め取られ、アスカたちは身動きができない。カリンは三人を半眼で上目遣いに見、くす、と嗤った。

14th 姉妹（後書き）

追伸列記簿

どうもこんにちは。甲斐日向です。マジラビ第十四話をお届けしました。

今回は今までよりもシリアス色が強いですね。というよりコミカルさがまったくありません。

そして今回出てきたアスカの妹は、マジラビ内では珍しく主人公たちに敵対心むき出しですね。しかし、僕はコミカルよりもこういう雰囲気の方が好きだったりします。しばらくはこの雰囲気が続きます。苦手な方にはすみません。

今回はアスカがちよつと魔法で頑張ります。呪文たくさん出てきます。カリンが時空廻廊に入っちゃいます。難しい話も出てきます。分かりにくかったらすみません。

それでは、次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

15th 魔石

扉の中に足を踏み入れながら、カリンはにやりと笑った。

「アタシはこれから人間界に行って遊んでくるよ。行くよ、クラウン」

「おう！　じゃ、またな、アスカ姫、泣き虫ティアラ！」

「コラ、待ちなさい！　カリン！」

「私、泣き虫じゃないです〜！」

じたばたともがくアスカを尻目に、カリンは扉の向こうに消える。扉はカリンたちが中に入ると同時に自動で閉まり、シュン、と消えた。

「くーっ、油断した！　これ、カリンが逃げる時によく使う魔宝具ロゼアス
ベルガンレイラパレッタ！　囚われの蔓じゃない！　こんな手に引っ掛かるなんてえ！」

胸から足まで蔓が巻きつき、頭しか動かせない状態で、悔しそうに叫ぶアスカ。渡羽とティアラも同様だ。

「でも、これなら……ティアラ！」

「はいっ」

離れたところで同じように絡め取られているティアラは、アスカの声に応えて目を閉じた。魔法力を解放し、呪縛を解く！

ティアラの身体が薄桃色の光に包まれる。徐々に、ティアラの体に巻きついていっている蔓が緩んでいく。

「えいっ！」

裂帛の気合とともに、ティアラの全身から魔法力が解放される。

魔法力の波が蔓の森を包み込むと、蔓の巻きつく力が弱まった。

「よし、今だわ！」

アスカは蔓の隙間からペンダントを引っ張り出し、パーガウエクオの魔力を発動させる。

「パーガウエクオ！！シヨールレツシグ。」

シヨールケレストールウィーズルフォア・シヨールケレストールノイ

エⅡフオア。

イエルーシユアⅡリⅡフオア・リⅡオツツイⅡケナⅡフオア。
パーガウエクオⅡシヨⅡーⅡディレット。

シヨⅡーⅡケレストⅡリ・シヨⅡーⅡクレイファンⅡリ！」

魔法力とは質の違う力がパーガウエクオから発せられ、アスカの体に染み渡る。

やわらかくあたたかい魔法力と違い、この力――魔力は張り詰めていて冷たい。

何度使っても体が締めつけられるような感覚がする。アスカは顔をしかめ、素早く別の呪文を唱える。

「リストⅡヤーギエⅡケレストⅡキュイーシエルク」

全員に魔法がかけられる。全身を見えない薄布で包まれたような感覚だ。

アスカは息苦しさを感じた。パーガウエクオを操りつつ魔法を使うことなど滅多にない。いや、たぶん初めてだと思う。

パーガウエクオは魔法力と相反する魔力の宿った魔石。

その力を操るということは、反発しあう磁石と磁石を無理やりくっつけようとするようなもの。かなりの負担がかかるのだ。

主人あるじの願いを叶える時もパーガウエクオを使うが、それはパーガウエクオの魔力を操っているわけではないので、負担はない。

少し息切れしながら、アスカはさらに別の呪文を唱える。

「ⅡリロⅡリⅡワノツサⅡケナⅡエネルギーⅡエルク！」

ゴオツ

オレンジ色の炎が蔓を焼き尽くす。焼けたのは蔓だけで、全員火傷一つない。アスカがかけた反射魔法のおかげだ。見えないヴェールが炎から三人の体を守ったのだ。

焼け焦げて崩れていく蔓の森。渡羽たちは炭化した蔓の残骸を払い、その場から離れる。

「うわⅡすごいですね。一瞬で蔓が全部炭にⅡ」

「姫様！」

「え？」

ティアラの悲鳴に、渡羽はアスカを振り返った。アスカは炭化した蔓の残骸の上に立っていた。

そして次の瞬間、ぐらりとアスカの身体が傾いだ！

「アスカ！」

扉の中に入ると、そこは不思議な空間だった。

青だったり紫だったり、赤だったり緑だったり、周りの空間の色が目まぐるしく変わる。そのせいか光がないのに明るく感じる。

役目を終えた時空廻廊の鍵がカリンの手元に戻る。カリンは鍵をポケットにしまうと歩き始めた。

壁も床もないのに、ちゃんと歩くことができる。まるで宇宙遊泳をしているような感覚だ。

「初めて入ったけど：時空廻廊ファイデールラプレッシモって妙なことだな。なんか酔いそう
だ、オレ：」

「クラウンはまだ飛んでるからいいだろ。アタシは歩いてんだぞ。
妙にフワフワして変な感じだよ」

二人して気持ち悪そうな顔をする。カリンは前方を見据え、適当に歩いていく。

時空回廊は刻々と道が変わっていくらしく、同じ道を通ることは
ないのだという。歩いていけば勝手に目的の時空神ジルティードソルディの神殿に着くと
文献にはあったのだが：

「勝手に歩いてればいいらしいけど、いつ着くんだろうな。ていう
か時空神ジルティードソルディの神殿ってどうやって入るんだ？ 扉もなんにもないし」
「オレに訊くなよ。そんなの分かるわけねーじゃん。」

それよりさっきの囚われの蔓ペルガンレイラパレッタ、あれ意味なくね？ あれ草属性の
魔宝具じゃん。ティアラは花族だから効かねーし、すぐ解かれるぞ
？」

「いいんだよ、あれは足止めだし。ちょっと時間稼ぎできればそれ

で……」

話していると、奇妙な感覚が襲った。大きな波に押されたような、ぶ厚くて柔らかい綿の中を通り抜けたような。

「!? なんだ今の……、!!」

気づくとそこは広い円筒形の部屋の中だった。今度はちゃんと床と壁がある。黒い床と壁。

床には大きく複雑な魔法陣が白い線で描かれていて、天井にはステンドグラス。そこから光が落ちてきているようで、部屋自体に明かりはなかった。

カリンの立っている正面には三つの巨大な銀色の扉。全体に様々なレリーフが施されている。

草や花、天使、樹、雲、鳥、動物、星や月……あらゆる自然物が描かれ、三つの扉をくつつけると一つの絵になっている。

「スゴ……」

「本物初めて見た……」

扉に目を奪われていたカリンたちは、部屋の中央に置かれた黒い丸テーブルとイス……そしてイスに座っていた人物に気づいていなかった。

二人の声に、彼らに背を向けてティーカップを傾けていた人物は振り返った。

「あ、お客様ですか？」

「「!」」

足もとまで隠すほど丈の長い白ローブを着た人物が、イスから立ち上がった。目深にフードをかぶっているので顔はよく見えず、口元だけが笑っていた。

ときがみ

「時空神の神殿へようこそです」

性別は判別不可だが、かわいらしい声だし背が低いのでたぶん女だろう。

カリンは表情を引きしめた。ここがジルティリードソルデー時空神の神殿。文献に書いてあったとおりだ。

【黒き閉ざされた部屋。三つの銀の扉。時空の魔法陣。そしてそこを管理する神】

「…アンタが、いや、アナタが…時空神ジルティリード…？」

カリンの声に緊張が混じる。目の前にいる相手は神。本来相まみえることのない、別時空の尊き存在。

少女（？）はにこっと笑みを深くした。

「ちがいますですよ。」

「へ？」

目を点にするカリンとクラウン。

「ジルティリードさまは今、お休み中なのです。ねむねむなのですよ。だからイオが代わりにお客様の相手をするです」

「え？ あ、じゃあアンタは…？」

「イオはただの守人もりびとです」

がくつと肩を落とすカリン。拍子抜けだ。神に遇えるとちよつとは期待していたのに。

守人なんて文献にはなかった。だが、ここは文字通り神の領域。すべてが文献に記されているというわけではないのだろうが。

「さてさてお客様、あなたの目的の場所はどこですか？」

問われてカリンははっと我に返った。そうだ、あたしは人間界に行くためにここに来たんだ。厳しい顔つきになり、カリンははつきりと告げた。

「――人間界のリーフェ」

「それは『過去』ですか？ 『現在』？ それとも『未来』ですか？」

扉の方に歩いていく守人の背中に、カリンは問いかけた。

「？ 何？ その『過去』とか『現在』って…」

「ここは時間と空間を管理する場所です。時と時をつなぎ、『過去』

『現在』『未来』もつないでいるです」

「じゃあ、過去や未来の人間界にも行けるってことか？」

「行くことはできますよ。あ、でも…あなた、時空廻廊の鍵を使

ったですか？」

振り返る守人。カリンが首肯すると、あごに人差し指を当てて「あうー」と小さく唸った。

「ならダメですね。時空廻廊の鍵は時空神ときくみの神殿に来るための入場券みたいなものですし、時間移動は別のカテゴリーですから」

「?????」

「ああ、今のは忘れて下さいです。とにかく『現在』のリーフェ：あなたが来た時間と同じ時間のリーフェに行けばいいんですよ」失言だったです。守人は慌てて真ん中の扉へと小走りで向かう。カリンは眉をひそめたが、難しいことを考えるのは苦手なので気にしないことにした。どちらにしろ人間界に行くことはできるようだし。

「お客様二名様、ご案内です」

軽い足取りで真ん中の扉の前に立った守人の手に、一本の杖が現れた。

先端が鉤爪のような形をした白にほぼ近い灰色の杖。鉤爪のような部分の中には、透明な細長い六角形の水晶が浮いている。

「これが『現在』の扉です。さあお二方、こちらへどうぞです」手招かれ、カリンは扉の前に立った。クラウンはカリンの肩の上に乗る、やや不安げな顔をしている。

きゅっと口元を一文字に結び、守人が杖を掲げた。

「時空じくうの扉よ、呼応せよ。我は守人もりびと。時空ときくみの神と契約せし者」

守人の声に応えるように、扉が銀色に発光する。カリンたちは思わず顔を腕で覆った。

「時空神ジルティリードの名において、我、今ここに、時空じくうの扉を開け放たん」

杖の先端を扉に向ける守人。先端の水晶がくるくると勢いよく回り出す。光が一層強まった。

「うわっ」

「うわあああああっ」

光に包まれたカリンたちの姿が消える。水晶が回転をやめた。守人は杖を下ろし、微笑んだ。

「良い旅路をです☆」

床に倒れるアスカ。渡羽は慌ててアスカに駆け寄り、抱き起こした。

「アスカ!？」

「う…ごめん…魔法力使い過ぎたみたいで…めまいがしたの」

弱々しくアスカは笑った。渡羽は不安げな顔で、アスカの顔や服についた炭を払う。

「そんなに強力な魔法を使っただけですか？」

「ううん…魔法そのものはそんなに…でも、パーガウエクオを操ったから…」

「パーガウエクオ？」

「このペンダントについてる三つの宝石…これが、パーガウエクオ……」

ペンダントを持ち上げて見せるアスカ。ペンダントの中央には白・青・緑の三色の宝石。

渡羽の願いを叶えるまでは、赤・青・緑だったが、渡羽の願いを叶えたことで、赤の宝石が白く変わったのだ。

この三つの宝石は、主人の願いを叶えるごとに色が白くなるのだそう。ただそれだけのものだと思っていたのだが……

「なんなんですか…？ この宝石は……。そんなに疲弊するほど特別なものなんですか」

「…あはは…渡羽には言っただけでしたね……」

そう。これはただの宝石じゃない……。これは、ませぎ魔石…魔力が宿つてる……」

「魔力？」

荒い息でつらそうなアスカに代わり、ティアラが説明してくれた。

「魔法力と相反する力のことです。主に魔族が持つ力で、魔法力を持つ者にとっては、毒のようなものなんですよ」

「ええ！？　じゃあ、大変じゃないですか！　アスカはその、毒を受けたのと同じ状態ってことですよね！？」

「はい。パーガウエクオは本来、この世界にはない産物。この世界に害を及ぼすもの。ですが、パーガウエクオはテュレーゼの至宝でもあるんです」

「ど、どうしてですか？」

矛盾した答えに、渡羽は困惑して首を傾げた。ティアラが真剣な顔で、

「それは、パーガウエクオが――テュレーゼの柱とも言うべき女王を選ぶからです」

「女王を選ぶ？　石が、ですか？」

ますますわけが分からない。石が女王を選ぶなんて。それも魔石が。

「パーガウエクオには意思があるんです。そしてその意思が女王を選ぶんです。」

代々、テュレーゼの女王はパーガウエクオが選んできました。テュレーゼの女王、それはマジカリアの女王のことです。マジカリアの女王となる者はパーガウエクオに選ばれ、この世界を支える柱となります。

なぜ、パーガウエクオが女王を選ぶのか。本来あるはずのない魔石がこの世界にあるのかなど、謎は多くありますが：その理由が故に、パーガウエクオは魔石でありながら、この魔法界の宝なのです」

「この三つの石が、世界の宝……」

「正確にはこの三つではなく、パーガウエクオの原石が、です。パーガウエクオの原石はそれこそ厳重に、禁断の間の奥の奥で保管されています。」

この三宝石はパーガウエクオから削り出された、いわばパーガウエクオの一部です。女王候補はこの三宝石をいかに操れるかが、女

王選定の最大の鍵となります」

ティアラは表情を曇らせ、わずかに俯いた。

「…ですから、姫様がこれの力を操ることは必然なんです。でも、こんなに疲弊するものだとは思っていませんでした。姫様がパーガウエクオを操るのを初めて見ましたから」

「あたしも…予想外だったわ…：反射魔法かけたから大丈夫だとは思ったけど…あたし、コントロール下手だから…もしかしたら蔓だけじゃなくて、渡羽たちも焼いちゃうかなーって思ってた…パーガウエクオを補助に使ってみたんだけど…：使わない方が、よかったかな…」

「まったくです。使うなら使うと言って下さいよ。体の方は大丈夫ですか？　姫様」

「んー、まだちよつと頭がくらくらするかな…：でも、こんなところでのおんびりしてられないわ。カリンを追いかけてなきゃ。あたしは時空移動魔法使えないから…母様のところに行こう。母様なら時空移動魔法使えるし」

そう言って身を起こしかけたアスカの頭を見て、渡羽は違和感に気づいた。

「あれ？」

「どしたの、渡羽？」

「カチューシャの飾り…なんか色違いませんか」

カチューシャについている丸い宝石は紅かったはずなのに、今は少し灰色っぽくなってるような。

「ああ、これ？　これは内蔵されてた魔法力が減ったからね。これは法石ほうせきって言ってね、魔法力を溜める石なの」

「法石？　宝石じゃなくて？」

「そ、法石。法石は魔法力を溜めるものだから、魔法使いは全員持つてるし、必ず身につけなきゃいけないの。ないと魔法使う時困るしね」

「ああ、だからアスカはいつもこのカチューシャをつけていたんで

すね」

髪を結んだ時も、寝る時も風呂に入る時も（たぶん）、カチューシャだけは外さなかった。そういう理由だったのか。

「そゆこと。あたしの法石はこのカチューシャの飾り。ちなみにティアラは髪に隠れて見えないけど、左耳につけてるピアスがそうなの」

ティアラが耳の前に垂らしている髪をどけて左耳を見せる。確かに小さい碧色のピアスがついている。

「法石はピアスやネックレス、腕輪や首輪に加工するヒトが多いんですよ。姫様みたいに飾り玉にするのは珍しいというか、普通じゃないです」

「悪かったわねっ、普通じゃなくて」
声を荒げるアスカ。同時に少し咳き込む。

「アスカ、大丈夫ですか!？」

「うー、まだちょっと回復しきっていないみたいね。動けなくはないけど、ちょっとつらいかも。母様たちのところに行かなくちゃいけないっていうのに」

ため息をつくアスカ。渡羽は何かを決心したように表情を引きしめた。

「アスカ、俺が女王様のところまでおぶっていきますよ」

「はえ？」

「歩くのはつらいんでしょう？ だったらおぶっていった方が早いです」

「え、え、あゝ…そうかもしれないけど…」

すでに渡羽はその気満々のようで、アスカに背を向けて乗りやすいようにしゃがんでいる。

こんなふうに密着するのは初めてで、アスカは気恥ずかしそうにためらっていたが、渡羽がせかすように振り返ったので、アスカはそーっと渡羽の背に乗る。

きちんとアスカが背につかまったことを確認し、渡羽は立ち上が

った。

「きゃっ」

「じゃあ、行きますよ？」

「う…うん…」

渡羽はたたっと走り出した。アスカに負担をかけないように少し遅めに。

渡羽の背に揺られながら、アスカは頬を朱く染めて、頭の上から渡羽に問いかけた。

「と、渡羽。重くない？ 大丈夫？」

「大丈夫ですよ。俺だって男ですし、女の子一人くらい背負えます」（そういう意味じゃないんだけどな…）

アスカは赤面した。まさかこれほど密着することになるうとは。しかも渡羽の方から言い出してくるなんて。うれしい半面、恥ずかしい。

渡羽の背中とは思ったより広くて、頼もしい。パーガウエクオを使わなければここまで動けなくなることはなかったから、渡羽の背中に乗ることなどなかっただろう。

そう考えると、パーガウエクオ使ってよかったかも、と思う現金なアスカだった。

15th 魔石（後書き）

追伸列記簿

どうもこんにちは、甲斐日向です。マジラビ第十五話をお届けしました。

いやー、もう十五話ですか。早いものですね。ストックがなくなってきたてやばいです。早く書かねば……っ。

はてさて、今回は時空移動とパーガウエクオの秘密というつかい山場がありますが……実は、カリンが“時空神の神殿”に行くシーンは初めカットする予定だったんですが……それだとページ数が少なくなる上に、話のキリが悪くなるので入れました。

パーガウエクオについてはようやく出せました……たぶん誰もほとんど気にしてなかったと思いますけどね。

アスカのペンダントについている三つの宝石は、元はパーガウエクオという一つの石で、その一部を加工したのが三宝石です。別々の石じゃありません。

パーガウエクオのペンダントは女王候補なら誰でも持ってます。

あれが女王試験の受験資格と言うか、受験票みたいなものです。主人の願いを叶える時にあれを使って願いを叶えます。あれを使わずに願いを叶えてもノーカウントです。

そして願いを叶えると、願いを叶えた証として、色が白くなるんです。つまり、主人の願いを全部叶えれば、三宝石は三つとも白くなります。

アスカは願いを一つしか叶えていないので、一つしか白くなりませんでしたが。

それと、パーガウエクオの呪文は本当は漢字にして、魔法界の言葉でルビを振ったかったんですが、機能上できなかったの、あーいう形にしました。

パーガウエクオの力を発動させる時はあの呪文を言います。難しいですね。

次回は人間界へと場所を移して、カリンの暴走を食い止めるわけですが……ここでちょっとお知らせです。

諸事情により、次回から三週ほど小説をお休みさせていただきます。なので次回の更新は九月二十七日以降となります。

キャラ人気投票の結果発表は、休み明けに自サイト『悠久の螺旋』にて発表させていただきます。サイトの方はたぶん休み中も運営していますので、よければ覗いてみて下さい。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

16th 因縁

廊下を走りながら、渡羽は無表情で背中のアスカに問いかけた。

「アスカ、訊いてもいいですか？ カリンさんの言っていたこと…」

「…やっぱり、気になる？ よね……」

「聞かない方がいいことなら、訊きません。でも、話せるのなら知りたいです」

しばらく沈黙が落ちた。ややあってアスカは小さくため息をついた。

「分かった。話すわ。本当は人間界の住人に、魔法界と人間界の関係を話しちゃいけないんだけど…もう巻き込んだし、隠しておけないから」

目を閉じ、アスカは一度深呼吸した。真剣な顔つきでおもむろに話し始めた。

「カリン…本名はカデリーン。あたしの一つ下の妹で…：マーティン…リーフェミアルを憎んでる」

渡羽の隣を飛んでいたティアラが悲しそうに表情を暗くした。渡羽は表情を変えず、何も言わなかった。

「マーティンは魔法界の言葉で『人間』を表していて、リーフェ人とシェーシア人をまとめてそう呼ぶの」

惑星シェーシアーリーフェと同じ宇宙に存在するもう一つの惑星の名だ。シェーシアにも人間が住み、リーフェ同様、人外など様々な種族がいると言う。

シェーシアとは数十年前から世界的な交流が始まっており、シェーシア人がリーフェに移住するケースも見られている。

事実、渡羽の幼学生時代の同級生にシェーシア人がいた。

「リーフェミアルはリーフェの住人って意味で、渡羽はマーティンでありリーフェミアル。あたしたち魔法界の住民はテュレーゼミアルよ。」

そして、カリンがリーフェミアルを憎んでいる理由、それは……

リーフェミアルがテュレーゼミアルを狩って、リーフェから追い出したから」

ピタ、と渡羽は足を止めた。アスカは静かな声で続ける。

「テュレーゼミアルは元々、リーフェに住んでいたの。住んでたって言うっても、ホントの最初は別の世界で……リーフェに移り住むことになったんだって。」

その頃、リーフェにはもうリーフェミアル……人間が住んでて、初めは不思議な力を持っていたテュレーゼミアルを警戒してたんだけどね、少しずつ打ち解けていったんだって。――あ、この頃はテュレーゼミアルじゃなくて、ジョアロトって呼ばれてただけだ」

渡羽は何も言わない。それでもアスカは語る。昔々から言い伝えられてきた歴史を。

「でもね、何十年か経って……ある人間がジョアロトのひとりを瀕死の状態にしちゃったの。」

ジョアロトは魔法が使えるから、すぐに回復したけど……そのジョアロトは自分を傷つけた人間を恨んで、魔法を使って死なせてしまった」

魔法で命を奪うのは禁じられている。だからそのジョアロトは、その後重い罰を受けたのだけだ。

「それがきっかけだった。ジョアロトに反感を抱いていた人間たちが、ジョアロトを襲うようになったの。」

全部の人間がそうだったわけじゃないけど、怒りが連鎖して、ジョアロト狩りが始まった」

びく、と渡羽が反応した。けれど何も言わない。

「当然、ジョアロトは身を守るために戦ったわ。でも、『魔法使いは人間を魔法で傷つけない』って誓約を結んでいたから、魔法を使わずに戦った。普段魔法に頼ってるだけに、ジョアロトが不利だった」

多くの命が散った。ジョアロトも、リーフェミアルも。

「狩りはそのうち規模が拡大し、全面戦争に発展した。ジョアロトとリーフェミアルの軍、そして中立軍。中立軍は両者の和解を求め、戦場に立った。」

でも、もう取り返しがつかなくて、どうしようもなくて……中立軍のリーダーが、ある提案をしたの」

『このまま戦争を続けていても互いに被害が増すばかり。だから我々ジョアロトは、この世界とは別の世界に移住するのはどうだろう』

「リーフェミアルたちは喜んで提案を受け入れたけど、ジョアロトは猛反対した。でも、最後には中立軍の必死の説得に、ジョアロトは泣く泣くリーフェを去ることになったわ。」

その記憶は魂と歴史に深く刻み込まれた。魂に残っている先祖の記憶と歴史が、カリンに憎しみを刷り込ませてるのよ」

「……カリンさんは、自分の意思で俺たちリーフェミアルを憎んでいるわけではない、ということですか？」

ずっと無言だった渡羽がようやく口を開いた。アスカは「……うん」と頷いた。渡羽は長く息を吐き出し、

「それならよかったです」

と笑った。アスカもティアラも目を瞠った。今の話を聞いて、笑うなんて。

「渡羽？」

「それってつまりは、周りの人から『この料理はおいしくないよ』と言われて、自分では食べたことないけど、ああそうなのかって思いこんでいるのと同じことですよね」

「え？ あー、うーん……そういうこと……になるのかな？ どうなの、ティアラ」

突然、話を振られて、ティアラはまごついた。

「えっ！ ええと………たぶん」

「なら、大丈夫ですよ！」

にこにこ笑い、渡羽はまた走り出した。アスカは困惑して渡羽を上から覗き込んだ。

「だ、大丈夫って何が？ イヤじゃない？ 怒ってない？ …悲しく、ないの？」

「そうですねえ、正直に言えばちよつと悲しいですけど、嫌ではないですし、怒っていませんよ。だってそれは大昔のことなんですよ？」

「うん、千年以上も前の話」

「だったら、そんな昔のことで怒っても仕方ないじゃないですか。それに、俺一人が怒ったところで意味ありませんし」

…渡羽の言う通りかもしれない。今さら怒ったところで、魔法界と人間界の関係が変わるとは思えない。

「だからアスカ。気にしなくて“大丈夫”ですよ」
「！」

その言葉だけで、アスカの瞳から涙があふれた。アスカは渡羽の背中に顔をつけた。くぐもった声で言う。

「…ごめん」

「いいえ」

「ごめんね、渡羽。イヤなこといっぱい聞かせて」

「俺の方こそすみません。つらいことを話させてしまいました」
ふるふると首を横に振るアスカ。

「ほんとね、怖かった。このこと話したら…渡羽があたしのこと、嫌いになるんじゃないかって…っ」

「嫌いになんかなりませんよ。どんなことがあっても」

「…っほんと？」

「はい。何があっても俺はアスカが好きですよ」
にっこりと笑う渡羽。

「…：なんかさっきから渡羽、いつもと違う」
渡羽が『好き』だと言ってくれることなど滅多にないので、アス

カは珍しく赤面した。

「あはは：なんだか魔法界に来てからいろいろと吹っ切れました。あれこれ言われて」

「さらにかっこよくなったかも」

「そ、そうですか？」

「えへへ。好きだよ、渡羽！」

顔を上げ、アスカは渡羽の首に抱きついた。

「わわっ」

よろめきながら、渡羽は謁見間へ走り続けた。

渡羽の背中から手を伸ばし、アスカは扉に触れる。

りいーん

甲高い澄んだ音が響き、扉が開く。

「母様！」

先ほど出て行ったばかりの娘たちが飛び込んできて、マジカリア国女王・イリアタルテは軽く目を瞠った。

「どうしたの、アスフェリカ。そんなに慌てて」

「大変なの！」

「……そうね、大変仲がよろしいようね」

「え？ あ！」

面食らっている女王の言わんとしていることに気づいて、アスカは顔を真っ赤にした。渡羽の背中への乗り心地がよくて、いまだにアスカは渡羽の背中に乗っていた。

国王が二人を見て「若いなあ」とうれしそうに頬をゆるめている。「あーっ、えっと、これはその！ と、渡羽！ もう下ろしていいからっ」

「もう大丈夫なんですか？」

アスカはこくこくこくと何度も頷いた。背中から下ろしてもらうと、アスカはこほん、と一つ咳ばらいをした。

「あのね、カリンが…カリンが時空廻廊の鍵ファイディーラフレッシモギオを持ち出して人間界に行っちゃったのよ！」

「…！」

ガタン、と国王は玉座から立ち上がった。女王は苦々しげに目を細める。

「…カデリーン…：なんでまたそんなバカなことを…：」

「さっき、カリンと鉢合わせしちゃって、渡羽のことを知ったカリンが怒ったの。それで、人間界をメチャクチャにしてやるって…：母様！ 母様なら時空移動魔法使えるでしょ！？ 今すぐあたしたちをリーフェに送って！ あたしがカリンを止めるわ！」

「…：そうね、分かったわ。頼んだわよ、アスフェリカ」

謹厳に頷くアスカ。女王は玉座から立ち上がると、不安に顔をゆがめている国王の腕を軽く叩き、

「大丈夫よ。アスフェリカに任せましょう」

そう微笑んで、ぐっと厳しい顔つきになる。

「ファイディーラ…ボツ…ジェイシーエルク・リ…ラーチ…タカヴァ…
ア…ツ…ジャガ…フォカスト…レレツキーチャメロネルク」

白い光の円がアスカたちの足元に現れ、次の瞬間には、アスカたちはその場からかき消えた。

時空移動により、アスカたちは人間界へと戻ってきた。途端に凍えるような寒さが襲ってきた。

「うわっ、寒っ」

「ぎゃーっ、そうだった！ こっちは冬だったんだあっ」

時間の流れが違うため、魔法界は真夏でも人間界は真冬。アスカが服変換の魔法を解くと、人間界を出発した時の服装に戻った。

「うー、こういう時は時間の流れが違うと困るわね。さて、とカリンは一体どこに…」

と、アスカが首を巡らせた時だった。一足先に辺りを確認しに行

っていたティアラが大慌てで戻ってきた。

「ひ、姫様あー！ たたっ、大変ですーっ！」

「ティアラ！？ どうしたの！？」

「ま、街が大変なことに…とにかくこちらに来て下さい！」

ひゅん、とティアラが商店街の方へと飛んでいく。アスカと渡羽は顔を見合わせ、ティアラの後を追った。

商店街に近づくにつれ、何やら騒がしくなってきた。道を曲がり、二人は飛び込んできた光景に絶句した。

巨大化した車やアリが、そこら中で暴れ回り、それらから逃げ惑う人々。道のあちらこちらには、奇怪なオブジェが並び、兵隊よろしく、行進している雪だるまが練り歩いている。

「……なんですか…これは…」

渡羽が目丸くして呟いた。アスカはため息をついてうなだれた。

「はぁ……やってくれたわね、カリン……」

あの子、やる時は容赦ないし、このまま放っておくと、さらにすごいことが……」

「のんびりしてないで、なんとかして下さい、姫様！ そのために戻ってきたのでしょう！？」

「そうね、これをどうにかできるのはあたしぐらいしかないもんね。渡羽、少し離れてて」

「はい。頑張って下さい、アスカ」

「まっかせて」

得意げにウインクをし、アスカは商店街に向けて両手を向けた。

「ヴィアオ〓コキヒエツジア〓ニンターエルク・パザンカ〓バパジヤ〓ゴアラ〓ヤイシフィエルク！」

アスカの手から放たれた光が、一枚の布のようになり、商店街を覆った。光の中で雪だるまやオブジェなどが消えてゆく。

「やった、成功！？」

思わずガッツポーズをするアスカ。だがしかし。

ボンッ、と煙が商店街を覆ったかと思うと、商店街が鬱蒼とした

ジャングルに変わった。人々の混乱倍増。

アスカはガッツポーズしたまま目を点にする。

「……あれ？」

「姫様ーっ、状況を悪化させてどーするんですかーっ!!」

「うるさいなあ。できなかったものは仕方ないでしょー？ うだうだ文句言わないでよ」

むっとした顔で言い返すアスカ。その時、頭上から笑い声が降ってきた。

「あっははは！ 相変わらず魔法使うの下手なんだね、姉さん」

「カリン！」

アスカたちが頭上を見上げると、カリンが宙に浮いた金色の雲に腰掛けていた。

あれは魔宝具・くつろぎの雲だ。ロゼアス セイオウィビツイナ 大きさは自在に変えられ、言葉通り上に乗ってくつろぐことができる。

移動速度も自在に変えられるが、さほど速くはなく、ゆったりと空を散歩する時などによく使われる。

カリンは足を組んでアスカたちを見下ろし、斜に構える。

「そんなに魔法使うの下手なんて、女王候補失格なんじゃないのー？」

「むむむ」

「それくらいアタシだってできるし、なんで姉さんが選ばれたのかわっかんないわ。ホント、なんで姉さんなんだろ。いつも」

笑みを消し、カリンはアスカを睨み見る。

「候補とはいえ、姉さんを選ぶなんてパーガウエクオも見えないね。他の候補者はもっとうまく魔法使えるよ。最低でも魔法士ノエウイなんかじゃないし」

「う、うるさいわね！ そんなに自信たっぷりなカデリーン様なら、この状況をなんとかできるんでしょ？ 早く元に戻しなさい」

見返すアスカを、カリンは鼻で笑った。

「ヤダね。言っただろ？ 人間界をメチャクチャにしてやるって。」

こんなのまだ序の口だよ」

「そう。やめる気はないのね。なら、力づくでもあんたを止めてみせるわ!」

「おもしろいじゃん。姉さんの魔法でアタシを止めるっての? やれるもんならやってみな!」

セイオウイビツイナ
くつろぎの雲が上昇する。アスカは魔法でブロッサムを呼び出し、カリンの後を追う。

「姫様! カリン様! おやめ下さい、姉妹で争うなんて…」

「カリンの邪魔はさせないぜ、ティアラ」

慌てて二人の後を追おうとしたティアラの前に、クラウンが立ち塞がる。ティアラは一瞬、怯えたように肩を震わせたが、今回ばかりは表情を厳しくした。

「クラウン! どうしてカリン様の行いを見過ごしているんですか! ? あるじ 主を諫めるのは側付としての役目でしょう! ?」

「分かってるさ。でも、カリンの気持ちはオレだって分かる。オレもリーフェミアルは嫌いだ」

下方の渡羽をちらっと見て言った。クラウンはすぐに視線をティアラに戻し、

「それに…カリンは、オレの恩人だから」

ティアラははっと息を呑んだ。

「お前も知ってるだろ? 昔、オレが森に入った時に妖獣に襲われたのを、カリンが助けてくれたこと」

「…もちろん知ってます。クラウンが無事に帰ってきて、うれしかったです。村のみんなも喜んでいましたね。

クラウンを助けてくれたのがカリン様だって聞かされた時は驚きました。カリン様には感謝しています。

でも、それとこれとは別です! 恩があるなら…恩があるからこそ、主が道を外しそうになった時、その道を正すのが側付です!」

「ダメなんだよ!」

つらそうに顔をゆがませ、クラウンは叫んだ。

「オレにはカリンを止められない。カリンの敵に回れない！」

ここでカリンのやることを否定したら、今度こそカリンは一人ぼっちになっちまう！ オレはカリンが悲しむのは見たくないんだ！」
何かを訴えるようにクラウンは言う。ティアラはその様子が痛々しく思えて口をつぐんだ。

ただいたずらにカリンはこんなことをしているわけじゃない。理由があるんだと、そんなふうに言っているかのようで。

「オレは…オレだけは、カリンの味方でいてやりたいんだ。カリンはオレの主で、恩人で…友達なんだ。解ってくれよ…ティアラ……」
そう言うクラウンの声はいつもと違ってか弱く、泣きそうだった。ティアラは何も返せず、困惑した風情でクラウンの顔を見つめた。

二人の会話を地上で聞いていた渡羽は、カリンの言動に引つかかるものを感じていた。

カリンがリーフェミアルを――渡羽^{自分}を憎んでいるのは分かる。アスカに対してもいい感情は持っていないようだ。

だが、それが気にかかっている。カリンはアスカを嫌うというよりも、別の感情を抱いているような気がする。それがなんなのか気にかかる。

その理由こそが、この行動の鍵を握っているように思えるのだ。
二人を止めるにも、その理由を突き止めなければ。

渡羽は今までの言葉を思い返した。

『姉さんはズルい』

『いいよね、姉さんは！ そんなに強い力があって！ 好き勝手もできて、誰からも必要とされてさ！』

『姉さんがそう望んだからっ！ ワガママ言っても、姉さんなら許される』

『なんでいつも姉さんばかり！』

『なんで姉さんなんだろ。いつも』

『ここでカリンのやることを否定したら、今度こそカリンは一人ぼっちになっちゃう!』

クラウンの言葉を思い出し、渡羽は気づいた。もしかしてカリンさんは……

「グラムⅡユアイユⅡゴーゼエルク・リⅡパナトⅡフィーロⅡケナⅡヌールシューベルク!」

カリンが攻撃呪文を唱える。左腕のリストバンドについている青い宝石が光り、一本の水の矢がアスカへと放たれる。アスカは防御魔法の呪文を唱えた。

「ルンウェⅡデヴァイデンⅡゴーゼエルク・リⅡワノツサⅡケナミパⅡリⅡエクスチャエルク!」

大気が壁となり、矢を打ち消した。

「まだまだ! グラムⅡストⅡユアイユⅡゴーゼエルク・リⅡパナトⅡフィーロⅡケナⅡヌールシューベルク!」

またも宝石が光り、今度は複数の水の矢が飛んできた。アスカは魔法力を高め、盾の防御力を上げる。

「うーっ、狙いは正確ね! 威力も高いし:防ぐので精いっぱいだわ」

「ホラホラ、どーしたの、姉さん!? 力づくでアタシを止めるんじゃないかったの?」

うぐぐ、とアスカは歯を食いしばった。勢いで力づくで止めるなんて言ったが、手も足も出ない。カリンは魔宝具を使って魔法力を増幅させている。せめて魔宝具を奪うか破壊できれば……!

「カリンさん!」

「!」

「もうやめて下さい、カリンさん!」

渡羽が空中の二人を見上げ叫ぶ。アスカは動きを止めて渡羽を見る。カリンも声に反応して渡羽に顔を向け……

「うるさい！ なれなれしく愛称で呼ぶな、リーフェミアルが！！」
「ええっ！？ すすみません、カデリーンさ…」

「気安く名前を呼ぶなあ！ 地味眼鏡！！」

「ええええええ！！？」

理不尽だ。せつかく説得の糸口を見つけたかもしれないのに、なんだか話を聞いてくれなさそうだ…

カリンの言い草にアスカはむかつ腹を立て、怒鳴った。

「ちょっとカリン！ 確かに渡羽は、眼鏡で地味で園芸が趣味の勉強バカだけど、そこまで言うことないでしょー！？」

「姫様…そこまでは言ってますよ」

さりげなくティアラがツツコミを入れる。

「フンッ、誰がやめるか。リーフェミアルの命令なんか聞かない！」

「いえ、別に命令では…」

「うるさいっ、邪魔するな！ 行けっ、キュービロンルーケビノ南瓜人形の種！」

紅い種を地面へと投げ落とすカリン。アスカは「しまったっ」と顔色を変えた。

種は地面に落ちると芽を出し、急速に成長していく。蔓が幾つにも枝分かれし、まるで森のようになっていく。

「うわわわっ」

「渡羽！」

ぎゅん、とアスカは渡羽のもとへ急降下。太く巨大な蔓が渡羽に迫る。

「わあああっ！」

「渡羽！ 早く後ろに乗って！」

「アスカ！」

渡羽がブロッサムにまたがると、アスカは急上昇。間一髪のところで蔓に捕まらずに済んだ。蔓は成長を続け、空から見ると巨大な森が町のご真ん中にあるようだ。

「しょ、商店街が…」

「まずいことになったわ。あれは南瓜人形キュービロンルーケビノの種。カチボヤ人形を意

のままに操るカリンの十八番^{おはこ}よ。あれを使われる前になんとかしたかったんだけど……」

成長する森の中で巨大な紅いカボチャが実っていく。カボチャは人の頭の二倍ほどあり、実ったカボチャから体が生え、手足が生え、人型になった。

「！！ カ、カボチャが……いえそれよりも人型に！？ あああつ、カボチャ人形が動きだした！？」

カボチャ人形たちは手当たり次第に人を襲い始めた。逃げ惑う人々の悲鳴がこんなところまで聞こえる。

「なんてことを……！ このままじゃ本当にリーフェがメチャクチャになるわ！」

歯噛みするアスカ。これ以上やったら、いくら王家でも減刑できなくなる。重罰は免れない。

（そんなのダメ！ 止めなきゃ！ 助けなきゃ、カリンを！）

いくら生意気でも自分を嫌っていても、妹なのだ。たった一人の妹。大切な家族だ。助けてあげたい。

（でも、どうやって？ どうすればいいの！？ こんな時、どうしたら……）

悔しげにブロッサムの柄を握る手に力を入れる。その時、肩にぬくもりを感じた。振り向くと、渡羽が微笑んでいた、

「大丈夫です。落ち着いて下さい」

「渡羽……」

「カデリーンさんを——助けたいんでしょう？ 俺もです。だから、俺にまかせて下さい」

穏やかに笑う渡羽。アスカはその笑顔に、涙が出そうになった。不安が消えていく。

渡羽ならカリンを任せられる。信じられる。

「うん……！ 分かった、渡羽。お願い、カリンを助けて！」

「はい。できるだけのことはします」

アスカは渡羽の指示通り、いったん地上の無事な場所へ降りた。

カリンが気づいて、意識をこちらに向けてきた。

セイオウイビツイナ
くつろぎの雲がゆっくりとアスカたちから少し離れたところに降りてくる。

「何？ まだ邪魔する気？」

カリンの蔑視にひるむことなく、渡羽は語りかけた。

「もう一度言います。こんなことはもうやめて下さい」

「しつこいな、オマエも。あんまりしつこくすんなら一発、魔法をぶち込んで…」

「これ以上続けても、君の本当の想いは届きませんよ」

「――！！」

目を瞠るカリン。アスカもティアラも困惑した様子で渡羽を見る。

「カリン様の…」

「本当の想い…？」

「……………」

クラウンは黙って事の成り行きを見守る。渡羽は少し哀しそうに、カリンを見つめた。

16th 因縁（後書き）

追伸列記簿

ご無沙汰しております。甲斐日向です。マジラビ第十六話をお届けしました。

皆様、長らくお待たせしました、マジカル☆ラビリンス更新再開です！ 二ヶ月近くの放置、すみませんでした！

ようやく復活のメドが立ちましたので、更新します：

しかし、いきなり不穏な雰囲気ですね、本編は。しかもいつもより少し長めで……

魔法界と人間界の関係と言いますか、魔法界誕生の歴史がちょこっと語られます。触りだけ……。渡羽がちょっとカッコイイかも？

渡羽と言えば、今回から渡羽が少し変わっていきます。垢抜けると言いますか。アスカだけでなく、渡羽も成長しているんですね。そして、カリンとアスカの魔法対決！ これも前々からやりたかった。バトルはいいですねえ。おかげで呪文率が前回に続いて多いです。

なんだか今回もシリアスシーンが多いですね。一応コミカル小説なんですけどね。僕はどうしてもシリアスというか、ダークだったりと、そっち方面に話を持ってくことが多いようです。苦手な方はすみません。

今回はカリンの行動の理由が明らかに。すべての決着がつきます。アスカも渡羽もクラウンも頑張りますよ！ あ、ティアラは何もしません。

それでは、次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

17th 本心

「カリン様の…」

「本当の想い…?」

困惑しているアスカとティアラ。カリンは渡羽を睨めつけた。渡羽は構わず続ける。

「君がこんなことをするのは、リーフェミアルが憎いから、アスカに思い知らせてやりたいから。でも」

「うるさい…」

「それは見せかけで…原因の一つであるのも嘘ではないでしょうけど」

「うるさい…っ」

渡羽の言葉に、カリンは顔をゆがめていく。言うな。それ以上言うな。

「君が本当に望んでいるのは、復讐でも見返すことでもなく」

「黙れ…」

その先は言うな。言わないで。

「ただ、構ってほしいんでしょう?」

これまでにないほど、カリンの目が大きく見開かれる。クラウンが泣きそうな顔でカリンを見、瞑目した。

「あ…っ、ああああああああっ!!!」

「!?!」

頭を抱え、カリンは絶叫した。アスカたちは突然の事態に驚いた。「うるさいうるさい黙れ! 黙れリーフェミアル風情が! オマエなんかに分かるか! 解ってたまるもんか! オマエなんかには、アタシの気持ちをお…っ!!」

頭を掻きむしり、空に向かって吠えるカリン。その体から激しい

魔法力が放たれる。不意打ちで、渡羽はその場から吹き飛ばされた。
「うわあっ！」

「渡羽！！」

アスカが素早く渡羽の後ろに回り、渡羽の体を支える。そのまま近くの建物の陰に避難した。

強い魔法力だ。カリンの体にこれだけの力が秘められていたなんて。でもこれは……

グレイトバン
「……暴走だわ」

「え？」

「グレイトバン。ええつと……」

「精神的や肉体的に強い衝撃を受けたり、生命の危機を感じた時に魔法力が暴走する現象です。幼い子供や未熟な魔法使いが陥りやすい事故です」

説明がうまくできずにいるアスカの代わりに、ティアラがアスカの陰から説明した。アスカは「そうそう、そんな感じっ」と乾いた笑みを浮かべた。

「さっきの渡羽さんの言葉でかなり動揺したみたいです。となるとそう簡単には止められませんよ」

「へー、そうなんですかー。……って、えええっ！？　もしかして俺、状況を悪化させただけですかぁ！？」

がびーん

助けるつもりが余計なことをしてしまった。まかせて下さいと大見栄切っておきながらこの失態。言わなきゃよかった。ああ、後悔先に立たず。

「気にしないで、渡羽。なんとかするから！」

とは言ってもカリンを気絶でもさせない限りこれは止まらないわ。この勢いの中であたしの魔法はたぶんカリンに届かない。けど、接近すればあるいは……」

「ですが姫様、この奔流の中、カリン様に近づくのは困難ですよ？」
「――オレが行く」

三人のもとに、クラウンが飛んできた。アスカたちは啞然としてクラウンを見る。クラウンは無表情で告げた。

「オレがカリンを押さえる。その間に恵みの涙トルアラニージェと法石を壊せば……」

「そ、そうね。でも危険よ？ あの状態のカリんに近づくなんて。」

それに、今頃どういう心境の変化？ 止める気があるならもっと早く止めればよかったじゃない」

言われてクラウンは表情に影を落とした。

「…ごめん、アスカ姫。でも、カリンのためだったんだ。カリンを…独りにさせたくなくて」

「どういこと？」

「アスカ。カデリーンさんは本当は、さみしかったんですよ」

「え？」

渡羽が言うと、クラウンが無言で首肯した。

「カリンはさ…ずっと誰から見向きもされなかったんだ。第二王女として最低限の相手はされても、本気で向き合ってくれる奴はいなかった。なんで分かるか？

——アスカ姫がいたからだよ」

「え…：あた、し？」

なんとなくぎくつとするアスカ。

「アスカ姫は潜在的に強い魔法力を持って産まれた。だから、次期女王に選ばれる可能性があると、幼い頃から大事にされてきた。その点、カリンは第二王女でありながら魔法力が弱くて…」

「ちょ、ちょっと待って。え…：それ、おかしくない？ だってあたし、いつも魔法失敗するし、すぐコントロールできなくなるのよ？

魔法力強いなら、もっとうまく魔法使えるはずでしょ？」

「確かにそうだけど、アスカ姫の場合は潜在能力が大きすぎるんだよ。だからコントロールしきれていないんだ」

「なんだ、失敗するのは魔法力のレベルが低いからだだったんじゃないんだあ」

「そういうこと。でもさ、そのせいでアスカ姫ばかりがかわいから

れて、カリンはまともに相手されなかった。

元々あんなひねくれた性格だから親しい奴もいないし、修行の成果を報告しても、国王や女王はアスカ姫のことばかり気にしてさ。

それでも思ってること素直に言えなくて、言いたいこと全部我慢して、父親や母親の望むとおりになろうと頑張ってた……」

クラウンの言葉が痛い。クラウンの言っていることが本当なら、カリンはずっとつらい思いをしてきたんだろう。

誰にも悩みを打ち明けられず、頑張っても誰にも褒められず、うわべだけの付き合いしかされない。そんなこと、アスカには耐えられない。

「カリンはオレにだけはなんでも話してくれた。だからオレは、カリンの味方でいてやりたい。カリンの心の拠り所になってやりたいんだ。」

そんなオレが、カリンを止められるわけない」

クラウンは目を閉じて思い出す。膝を抱えて、不安げな顔で淋しそうに問いかけてきたカリンを。

『クラウンだけは：アタシの味方だよな？』

そうだと答えれば、同じ言葉を今度はうれしそうな笑顔で。

『クラウンだけはアタシの味方だよな！』

「そう言って無邪気に笑うカリンの心を、裏切れなかったんだよ……」

でも、もうダメだ。これ以上は見てられない。カリンが自分を傷つけるのを、黙って見てるだけなんて、できない……！」

両の拳を握りしめ、クラウンは絞り出すように言った。

アスカは俯いた。そんなことにも気づけず、自分はカリンを責めた。たった一人の妹なのに、家族なのに、気づいてあげられなかった。

「ごめんね、カリン。あたし、お姉ちゃん失格だね。ずっと苦しんでたのに、解ろうとしなかった」

にじみ出てきた涙をぬぐい、アスカは顔を上げた。

「でも、もう大丈夫。今、助けてあげる。あたしが、カリンを助けるよ！ クラウン、力を貸して。一緒に助けよう」

「！」

アスカの笑顔に、クラウンは表情を明るくした。アスカは渡羽の手を握りしめた。

「ありがとう、渡羽。渡羽がいてくれてよかった。渡羽がカリンのことに気づいてくれたから、あたしも気づけた」

「そんな……俺のせいでこんな事態になってしまった……」

「ううん。仕方ないわよ。これはカリンの心が未熟だったからで、渡羽のせいじゃないわ。」

危ないから渡羽はティアラと一緒にここで待ってて。行くわよ、クラウン！」

「おう！」

二人は奔流の中へと飛び出した。勢いは依然収まっていない。

奔流の中心でカリンが頭を押さえてうずくまっている。このまま放出を続けたらカリン自身も危ない。急がなければ。

「頼んだわよ、クラウン！」

「絶対、カリンを止めてやる。後はまかせるぜ、アスカ姫」
「うん」

アスカが頷くと、クラウンはポン、と大きくなった。

年の頃十三、四歳の間人間的な姿になったクラウンは、奔流の中、カリンのもとへ近づいていく。一瞬でも気を抜けば吹き飛ばされる。

（カリン……今行くからな。絶対、助けてやるから）

アスカは比較的流れの弱い物陰で、精神を集中する。

クラウンがカリンを押さえて勢いが弱まった隙を狙い、カリンの法石と、魔法力を増幅させる魔宝具・恵みの涙を破壊する！

成功すればカリンを無傷で助けられるが、もし失敗すればカリンやクラウンはただでは済まない。だから今度こそ失敗はできない。

（ダメ。落ち着いて。しっかりしなさい、アスフェリカ！

クラウンが言ってたじゃない。あたしの潜在能力が強いって。潜

在能力が強いなら、このくらいの魔法簡単に操れるはず。

あたしの力だもの。自分の力をうまく操れないでどうするの!?)
目を閉じ、集中する。いつもより強く、深く。

「シザー||スト||ユアイユ||ゴーゼエルク」

クラウンは奔流に押し流されないよう、足を踏ん張って進んだ。
あともう少し。

「カ：リン……カリ：ン……」

うずくまっているカリンは、昔を思い出させる。出会った時のカリンを。王城で再会した時の、カデリーン王女を。

カリンに助けられて村に帰ったあと、村長に言った。

城に仕えたい。助けてくれた王女に恩返しがしたいと。村長は渋ってたけどなんとか許してもらえた。

城に行き、女王と国王に許可をもらってから王女を捜した。その時カリンは、一人で庭の隅にうずくまっていた。誰にも構ってもらえず、ぽつんと一人で花を見ていた。

ひねくれて、口が悪くて、口より先に手が出るけど、誰よりも努力家で、家族思いで、さみしがり屋なカリン。

家族が好きだから、困らせたくないから、今までワガママを言わずにいた。本当は姉のことだって嫌いじゃない。むしろ憧れてる。

(誰からも好かれて、誰とでも仲よくなれる素直なあの人に、カリンは憧れてた。あんな風になりたいって言ってた)

けれど、どんなに頑張っても追いつけなかった。いくら修行しても誰も自分を見てくれなくて、姉は女王候補リーフェに選ばれて、その上、人間界に残りたいというワガママも許されて。

「カリン……カリンは……うらやましかったんだよね? うらやましくて、悔しくて、それが嫉妬に変わっちゃっただけなんだよね?」
クラウンは手を伸ばした。

「カリンはただ……置いていかれるのがさみしかったただけなんだよね?」

伸ばされた手が、カリンの肩に届く。びくん、とカリンの体が震

える。

「：解ってるよ。オレも置いていかれた時、さみしかったから」
城からの招請で奉公に出ることになったティアラ。

村にはほとんど帰れないだろうと言われた。それでもティアラは行くと言った。

何度も引き止めようとしたけど、本人を前にすると言葉が出てこなくて。

（何も言えないまま出発の日が来て、最後に別れくらい言ってやろうと思ったのに、あいつは出発の日が早まったことを黙ってて、オレは別れの言葉さえ言えなかった）

さみしくて、追いかけてくた、そばにいる理由が欲しくて城に来た。

初めはそれだけだった。ティアラのそばにいたかったから、恩返しをするためにもっともらしい理由をつけて追いかけてきた。

（でも、カリンとつき合っていくうちにカリンのことを放っておけなくなった。カリンのことを解ってやれるのはオレだけだ。だから――）

「もう大丈夫だ。オレがいるから。オレだけは、カリンの味方だから」

きゅっとカリンを抱きしめる。カリンはおもむろに顔を上げた。

「クラ：ウン：？」

魔法力の流れが弱まってい。く。

「今だ！！」

クラウンの合図で目を開き、アスカは物陰から躍り出る。

「リリースーチーカヴァーケナーヌールシューベルク！」

全力で魔法を放つ。一本の氷の矢がカリンへまっすぐ飛来する。

魔法力が弱まり、渡羽たちが建物の陰から出てきた。放たれた矢は狙い通り。

「クラウ：？ アタシ：……」

「動くなよ。アスカ姫がちゃんと、助けてくれるからさ」

お前の大好きな姉ちゃんが。カリンを抱きしめ、クラウンは微笑んだ。

「姉さん…？」

朦朧とする頭で、カリンはクラウンを見つめる。

矢がカリンに届く直前で、アスカは副呪文を唱える。

ブラッチ
「分裂！」

一本の矢が三つに分裂する。分裂した矢はそれぞれ、カリンの両の耳飾り——法石と、左腕のリストバンドについている青い宝石——トルアラニージェ恵みの涙に命中。

瞬時に魔法力が消え、暴れていたカボチャ人形や蔓の森が消えた。カリンは朦朧とする意識の中で、笑みを浮かべた。

「…ありがと…姉さん……」

商店街はその後、アスカが復元魔法で元に戻した。（今度は成功した）

気絶したカリンを背負い、クラウンはカリンのズボンのポケットから出しておいた時空廻廊の鍵をアスカへと放り投げた。

「わわっ」

「テュレーゼに戻るんだろ？ オレはこうだし、アスカ姫が開けてくれよ」

「ちよっともう、ロゼアス魔宝具はロゼアス魔宝具でも、これは宝器なんだから大切に扱いなさいよ」

肩をすくめ、アスカは宙に時空廻廊の鍵を浮かせて呪文を唱える。

「ファイディーラノウルジエイシーエルク」

カリンの時と同じように、銀色の扉が現れ、ゆつくりと開く。

この扉の先は、人間界でも魔法界でもないまったくの異世界。その上時空神の神殿には真正正銘の神様がいるのだ。

「姫様、私、緊張してきました」

「おお落ち着くのだよ、ティアラ！ こうゆう時は深呼吸よ、しんこ

きゅー！　ねっ、渡羽！？」

「え……？」

渡羽を見ると、渡羽は女王の前に出た時よりも顔をこわばらせ、脂汗だらだらだった。…訊かない方がよかったかもしれない。

「そんなに緊張することないかもしれないぜ？　オレたちが来た時、神様は“お休み中”だったらしいからな。オレたちも会ってないんだ」

「ホント！？　　いないの！？　　なんかそれはそれで残念な気もするわ」

「とにかく、早く行こうぜ。カリンをこのままにしとくわけにいかないだろ」

「そ、そうね……うん、覚悟決めるわよ！」

ぐっ、と握り拳を作り、アスカは思い切って扉に入った。クラウド、渡羽、ティアラも続く。

扉に入ると扉は消え、妙な空間の中に立っていた。黄色や赤、青や白と周りの空間の色が目まぐるしく変化する。

「何、ここ……これが時空廻廊？ファイティールプレッシモ」

「そうだよ。二回目だけど…やっぱ酔いそうだな」

「アスカ、ここから魔法界に行けるんですか？」

「あ、ううん、このファイティール…時空廻廊のどこかにある時空神の神殿から魔法界に行けるの」

「どこかって…どこにあるか分からないんですか？」

「入ったの初めてだし、詳しいことは文献に載ってないんだもん。歩いてれば自動的に着くとか…」

「オレたちも適当に歩いてたら着いたぜ？　で、なんか変な感覚になったと思ったら…」

その時、大きな波に押されたような、ぶ厚くて柔らかい綿の中を通り抜けたような、全身にむわっとした感触を感じた。

「きゃあっ、何々！？」

「今、妙な感覚が…」

「姫様、ここは…！」

いつの間にかアスカたちは広い円筒形の部屋にいた。壁も床も黒いが、床には大きく複雑な魔法陣が白い線で描かれている。

天井にはステンドグラスがあり、光がそこから落ちてきているため、部屋には照明らしきものが一切なかった。

「もしかしくなくても、ここが…！」

「ええ、ジルティリードゾルディ時空神の神殿…ですね」

アスカとティアラは注意深く部屋を見渡す。ふと、部屋の真ん中に置いてある黒い丸テーブルとイスに気づいた。

「ん？ 何あれ」

丸テーブルに近づくアスカたち。その上には一冊の大きな白い本。「おかしいな、ここに守人がいるはずなんだけど」

「守人？」

アスカが本に何気なく手を伸ばした時、背後から人の声がした。

「そこにある物は勝手に見ないでくださいね」

「…！？」

突如、誰もいなかったはずの場所に人が立っていた。全員、すざつ、とその場から飛びのいた。

足もとまで覆い隠している純白のローブ。変わった形の杖を片手に、フードを目深にかぶっているので、表情も性別も判別不可。

「わたしがお探しの守人ですよ。時空神の神殿へようこそです」

口だけが笑みを形作る。得体の知れない人物に、アスカたちは動揺する。クラウンだけが平然としていた。

「あなたは先ほども来たですね。元いた時空にお帰りですか？」

「ん、ああ」

「皆さん、同じ行き先ですか？」

「そうだよ。魔法界テュレーゼに」

「ふふふ、今度は大所帯ですねえ。えーと、ひいふうみい…五人ですね。お客様五名様、ご案内ですう」

意気揚々と守人は、反対側の三つの扉へ歩いていく。巨大なそれ

は銀色で、あらゆる自然物のレリーフが施されている。

「わぁ…きれい……」

「見事なレリーフですね……」

「さすがは、時空ときくうの神ジルティリード様の居住地です……」

ティアラの眩きで、アスカははっと我に返った。そうだった。

ここは神のおわす場所。あの人(?)は自分を守人と言っていたが、もしかしたら時空ときくうの神が化けた姿かも……

「あ、あのっ、あなたはジルティリード様…ではないんですか?」

アスカの問いかけに守人は肩越しに振り返った。

「ほえ? ちがいますですよ。イオは守人。ジルティリードさまの助手みたいなものです。ジルティリードさまはねむねむですから、静かにしてくださいね」

口調はやわらかだが、有無を言わせない迫力がある。守人は真ん中の扉の前に立つと、こちらへどうぞですと手招いた。

「行き先は『現在』の魔法界テュレーゼ。それでよいですね?」

「おう」

「では――時空ときくうの扉よ、呼応せよ。我は守人。時空ときくうの神と契約せし者」

守人が杖を掲げると、目の前の扉が銀色に発光した。

「時空神ジルティリードの名において、我、今ここに、時空ときくうの扉を開け放たん」

守人は杖の先端を扉に向ける。杖の先端の水晶が勢いよく回り出した。すると扉の光が一層強まり、アスカたちは光に包まれた。

「わあああっ!」

「きゃあああっ!」

目も眩む光に包まれ、アスカたちはしばらく目を閉じていたが、肌に当たる熱気にそろそろと目を開いた。

「あれ…ここ、うちのお城?」

「のようですね、姫様」

「それも、謁見間の前ですよ」

横を見れば、謁見間の扉がある。戻ってきたのだ、魔法界に。

「なんか結構あっさり……とにかく、母様たちに報告ね」

そのまま謁見間に入り、アスカは両親にすべての事情を話した。

カリンがなぜこんなことをしたのか、カリンの本心もすべて。

聞き終わったマジカリア女王は瞑目し、長く息を吐いた。

「……そうだったの。こんなことをしでかすまで追い詰められていたのね」

カリンは許可を得て、医務室へと運ばれた。

グレイトバン
暴走によって、だいぶ体に負荷がかかっていたらしい。精神的にも弱っていると医師が言っていた。

数日は絶対安静だそうだ。今はクラウンが付き添っている。

「けれど、フアイデールラフレッシモギョ時空廻廊の鍵を盗んだことは事実で、罪は罪」

ぴしゃりと言いい放つ女王。厳粛な声に、女王の裁決を待っていたアスカ、渡羽、ティアラはぴつと背筋を伸ばした。

「人間界へ渡り、リーフェリーフェミアルたちに多大な被害を与えたことも見逃すわけにはいきません。一人の死者も出ていないのは不幸中の幸いだけでも……」

ふう、とため息をつき、女王は厳しい表情で言い渡した。

「違法による時空移動及びリーフェミアルへの暴行、それによる魔法の存在の露見。」

最後の件に関しては、国王シーウォルド派遣によって記憶隠蔽に成功。

先述の件に関しては――無期の魔法力封印、同時に魔法牢留置に処す」

アスカとティアラは息を吞んだ。魔法牢は異界に創られた、特殊な魔法を施された牢獄のことである。

魔法牢は公にできない罪人や、重罪人、死刑囚などが入れられる。異界にあるため、脱牢は難しく、脱牢の危険性がある者も罪の重さにかかわらず留置・拘置される。

「国民も私たち以外の王家も王族も、この事実を知らないわ。内密

に事を進めるには、魔法牢に留置する他ないでしょう」

あまり身内をあそこに入れたくはないが、この事実を無かったことにはできない。

たとえば王族や王家でも、リーフェへの不法干渉は重罪だ。

基本的にリーフェに干渉していいのは女王試験の時と、リーフェが絶大な危機に瀕した時のみ。それ以外でリーフェに干渉することは罪になるのだ。

アスカたちもそれを分かっているのか、不服そうな顔をしてはいるが反論はしなかった。女王に一礼し、カリンの様子を見に医務室へ向かった。

医務室に入ると、カリンは意識を取り戻していた。ベッドに上半身を起こして座っている。アスカたちに気づくと、カリンはぼつが悪そうに俯いた。

「よかった。目、覚めたのね、カリン」

「あ、うん……」

俯いたまま視線をさまよわせるカリン。元の大きさに戻っていたクラウンが、カリンの肩に座ってカリンの顔を見上げた。

「あのさ……ごめん、姉さん。いろいろ」

「ん？ ああ、いいよ別に。あたしも、カリンの苦しみとか気づいてあげられなかったし」

「ううん。全部アタシが悪いんだ。ちゃんと自分の気持ちを母さんたちに伝えていれば、少しは違ったかもしれない。

我慢することが母さんたちのためになると思って……なのに、結局爆発しちゃって、迷惑かけまくって……情けないよ」

膝の上で両手を握りしめ、カリンは歯噛みした。

「こんなんじや姉さんに追いつけるわけがない。追いつけなくて当然だ。アタシは未熟で、未熟もいいところだ」

ぱたぱたっ、と拳の上に滴が落ちる。

「アタシ、本当はずっと姉さんに憧れてたんだよ。姉さんに追いつくために、たくさん修行した。

でも、どんなに頑張っても、努力しても、姉さんに追いつけなかった。アタシはずっと、姉さんみたいになりたかったのに……！」
憧れで自慢の姉さんみたいに。とめどなく涙があふれてくる。

本当に自分は未熟で情けない。素直になれず、何を言われても、何をされても受け入れて。追いつけないから八つ当たりして、嫌いなフリをして。

そんなことでしか自分を表せなかった。こんなことになるまで自分を省みることさえできないなんて。最低だ。

「リーフェミアルのことだって、言われる前から分かってたよ。

この憎しみは、アタシ自身から生まれてるものじゃないって。アタシの中にある先祖の記憶が、リーフェミアルを憎む気持ちだが、アタシの心を支配してるんだってさ。

分かってたけど、長い間、何度も夢を見たんだ。リーフェミアルとの戦争の夢を」

カリンはそつとまぶたを閉じた。剣や弓矢や槍、大砲など様々な武器で戦うリーフェミアルとテュレーゼミアル。飛び交う怒号と悲鳴、そして流れる涙と血。

「土地を追われる先祖たちの無念や怒りが夢を通して伝わってきて、少しずつ感化されて……それが先祖の心なのか、自分の心なのかわかんなくなっていく……」

自分は初めはリーフェミアルを憎んでいなかった。

ただ、なんでそんなことしたんだろうとしか関心がなくて、なのにないつからか見るようになった夢は、リーフェミアルへの恨みや憎悪ばかりを伝えてきて、それが怖くて飲み込まれた。

それも全部、自分が未熟だったから。先祖の記憶や憎悪に抗う力がなかったから飲み込まれて、自分を見失ってしまった。

「ごめん……本当に、ごめんなさい………」

膝に顔をうずめるカリン。クラウンが肩から離れ、無言でカリン

の頭を小さい手で撫でた。

「カリン……」

アスカは哀しげに顔をゆがめた。何を言えればいいのか分からない。何を言っても、カリンは自分のせいだと嘆くだろう。

情けないのは自分も同じだ。妹を慰めることさえできない。

「カデリーンさん」

一歩前に出て、渡羽がささやくように声をかけた。カリンは小さく「…なに？」と返した。ほとんど涙声だ。

「そんなに自分を責めないで下さい。誰にでも、失敗はあります。失敗があるから成功があるんですよ」

「…知った風な口きくな。アタシはまだ、アンタを認めちゃいないんだ……」

「はい。それでもいいです。でも、聞いて下さい。俺も昔、カリンさんと同じ失敗をしました」

思いがけない言葉に、アスカたちは軽く目を瞠った。

ぴく、とカリンの肩が動き、カリンは少しだけ顔を上げた。

「俺の母さんは童話作家なんです。それで部屋にこもりっきりの日がさらにあって、父さんも仕事で年に数回しか帰りません。

だから小さい頃はさみしいと思っていました。年の離れた姉さんが世話を焼いてくれましたけど、親にも構ってほしくて…でも忙しいのも子供心に分かっていましたから、何も言えませんでした。

それでも…我慢していてもやっぱり構ってほしくて、なんとか気を引こうとバカなことをしましたよ」

苦笑する渡羽。渡羽は遠い目で天井を仰いだ。

「家出をして、頃合いを見て帰るつもりだったんですけど、途中で交通事故に巻き込まれて、ものすごく心配させてしまったことがあるんです。

その時の母さんの顔は…今でも忘れられません」

忘れられない。あの底抜けに明るくて、一度も涙を見せたことなかった母が、病院のベッドにいた自分を見た途端、子供のよう

泣き出した。

恥ずかしいくらいに大声で自分にすがりついて、まだ高校生だった姉に慰められながら泣いていた。

その時に思った。自分はなんてバカなことをしたんだろう。もう二度とこんなことはしないと。

顔をカリンに戻すと、カリンと目が合った。

「カデリーンさん、過ぎたことを悔やんでもどうにもなりません。終わったことはなかったことにできません。」

でも、新たにやり直すことはできます。全ては戻らなくても、代わりに手に入るものもあります」

微笑んで、渡羽はカリンに手を差し出した。

「だから、これからやり直しましょう。家族や他人との付き合い方を。それから、リーフェミアルに対する考え方も」

「！」

カリンは目を睨り、呆然と渡羽の目を見返した。渡羽はにっこりと笑う。カリンはわずかに頬を朱く染め、パシッと渡羽の手を振り払って顔を逸らした。

「そうカンタンに気持ち切り替えられるか。アタシの中の先祖の記憶は消えやしないんだ」

「あゝ、そうですね。いきなり仲よく、なんて虫がいいですよ。すみません」

振り払われた手とは逆の手で、渡羽は後頭部を掻いた。「けどさ」と、カリンが小さく呟く。

「アタシ自身は、そんなにアンタのこと嫌いじゃないし……記憶に打ち克つためにも、少しなら……仲よくしてやっても、いいよ」

「カデリーンさん……」

「だからさっ、その……カリンでいいよ。呼び捨てでいいから。……」

……渡羽」

顔を逸らしたまま、カリンはもごもごと言った。渡羽は「はい」と笑みを深くした。アスカもうれしそうに破顔する。

クラウンがそつとカリンの顔を下から窺うと、カリンはほんの少しだけ、口元をほころばせていた。

17th 本心（後書き）

追伸列記簿

どうもこんにちは、甲斐日向です。マジラビ第十七話をお届けしました。

今回も少し長めですみませんっ。けれどもやりたかったことでできたのでよしとします。イエー。

今回の話はちょっとしんみり。特にカリンとクラウンの思い出は一番しんみりですね。でも僕は好きです。

正直、ここまでクラウンが目立つとは思っていなかった作者。アスカがカリンを止めるのに、どうしても一人『頑張る』ヒトが欲しかったので：クラウンに頑張ってもらいました。カリンに最も近いヒトですしね。

そんでもって、クラウンで本気でティアラのこと好きなんだなあ：と思ったり。ティアラが気持ちに気づいてくれるとよいねえ。それには素直にならんとね。

はてさて、次回は意外なヒトが出てきますよ。これまで案外触れられることのなかったティアラに関係のあるヒトです。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

18th 親子

カリンの一件がひと段落し、アスカたちは改めて魔法界を散策することにした。

城の庭園に出ると、眩しい光に目がくらんだ。太陽の光こそないが、暑さは人間界とさほど変わらない。

熱を持って輝く空はどこまでも広がり、世界を照らしているのだ。渡羽は空を見上げて目の上に手をかざし、眩しそうに目を細めた。

その隣でアスカがブロッサムを喚び出す。ブロッサムは呪文によって喚び出されると、ぴよこぴよことアスカの周りを回り、渡羽に飛びついた。

「わあっ！ わ、分かりましたから落ち着いて下さい」

仔犬のようにすり寄るブロッサムに、渡羽は困惑しつつなだめるように柄の部分を撫でた。

「んー、なんでブロッサムはこんなに渡羽に懐いてるのかしら。謎だわ……」

「ほうきは持ち主の影響を受けますからねー、姫様の気持ちの分、渡羽さんに懐いているのではないですか？」

何気なくティアラがそう言うのと、渡羽はまじまじとブロッサムを見た。

それじゃあブロッサムのこの行動は、アスカの愛情の大きさを表しているということだろうか。

ブロッサムがこれほど懐いているのは、アスカがそれだけ渡羽のことを好きだからというわけだ。

柄をこすりつけるブロッサムをアスカに置き換えてみて、渡羽は赤面した。

アスカも同じようなことを考えたのだろう、少し頬を朱くし、照れ隠しのように渡羽にくっついていいるブロッサムをひったくった。

「も、もう、ティアラったら変なこと言わないでよっ。渡羽、後ろ

乗って。あたしのとっておきの場所に連れて行ってあげるからっ」

早口でアスカは言い、ブロッサムにまたがる。

渡羽がためらいがちにブロッサムにまたがると、ふわりとブロッサムが浮き上がった。そのまま勢いよく雲の上まで上昇する。

「た、高いですね。どこまで行くんですか？ アスカ」

「ふふっ。ここよ」

「ここって？」

得意げにウインクするアスカに、渡羽は小首を傾げた。

アスカは六畳ほどの広さの雲の上で停まると「こ・こ☆」と真下を指差した。

「え……」

まさか。渡羽は真下——雲の上を見る。アスカはにっこりと笑って、

「そう。ここがあたしのとっておきの場所。さあ降りるわよ」

「降りるって……、！ アスカ!？」

ひょいっとブロッサムから飛び降りるアスカに、渡羽は思わず目をつむった。

「渡羽ー、何やってるのー？ 早く〜」

アスカの声に渡羽が目を開けると、アスカは白い雲の上で手を振っていた。

「え!？ 雲の上に乗ってる……？」

「どうしたの？ 渡羽。早く降りておいでよ」

きょとんとしているアスカ。雲は水蒸気が冷えて凝結した水滴や氷晶が群になったものだ。いくら凝結しているとはいえ、乗ることなどできないはずだ。

しかし、アスカが待っているので、渡羽は意を決してブロッサムから降りた。

ぼふんと柔らかい感触がして、渡羽の体はわずかに雲に沈み込みつつも落ちることはなかった。

「うわ……なんか不思議な感覚ですね……雲の上に乗るなんて……」

「人間界では雲に乗ったりしないの？」

「乗りませんね。そもそも乗れませんし」

「へえ、そうなんだ。こんなに気持ちいいのに、人間界の雲は不便ね。渡羽、こっち来てみて」

アスカが雲の端に座って手招く。ふわふわした雲の上をえっちらおっちら歩いてアスカの隣に腰を下ろすと、マジカリアが一望できた。

「絶景ですね。風も気持ちいいですし」

「でしょ？ よく城を抜け出してここに来るの。あたしのお気に入りの場所、渡羽に見せてあげられてよかった」

雲は風まかせでゆっくりと流れていく。二人は並んでマジカリアを眺める。いつまでも、いつまでも……

バルコニーに出てきたアスカは、夜の闇に覆われた町を見渡した。ぽつりぽつりと民家から明かりが漏れている。道には人間界のように街灯がないため、ところどころに照明魔法を頭上に灯しながら歩いているヒトがいる。

黒い空ではまるで星のように、小さな白い光が点滅している。

魔法界は太陽もなければ月や星もない。一日の終わりが近づくと、徐々に空の明度が落ち、夜が来る。

そして『コソツイアオ点光』と呼ばれる、人間界で言う『星』が光り始めるのだ。

人間界のように星座があるわけでも、位置が変わるわけでもないが、日によって光り方や色が変わる。

昼間の熱気は夜になると比較的落ち着く。少し熱をはらんだ風がアスカの髪を揺らした。

「姫様ー、ヨパンジョリーをお持ちしました」

魔法で自分の分とアスカの分のグラスをふわふわと浮かせながら、ティアアラが飛んでくる。

その後ろから渡羽が、ジュースの入ったグラスを片手に歩いてきた。ブロッサムは相変わらず渡羽にべったりだ。

「ありがとう、ティアラ。どう？ 渡羽。ヨパンジョリーのお味は☆」

「あ、いえ、まだ飲んでませんから：アスカと一緒に飲もうと思っ
て」

「そうなの？ んじゃ、せーので飲もっか」

ティアラから黄色く透き通った液体の入ったグラスを受け取ると、アスカは町の方へ体を戻した。

渡羽が隣に並ぶと「いくよー、せーの」と掛け声をかけ、三人は同時にグラスを傾けた。

「ぷはーっ、やっぱりヨパンジョリーは飲み口爽快ね！」

「この口の中に広がる爽涼感ほヨパンジョリー特有ですからね」

「見た目よりさっぱりしてますねー、少しラムネに似てるかも」

「夏にはつきものなのよ？ この飲み物。一度、渡羽に飲ませてあげたかったのよねー」

ごくごくアスカはヨパンジョリーを一気飲みする。

アスカの自室のバルコニーで、三人は夜の町を見下ろしていた。グラスの中の氷がカラン…と音を立てた。

ぼんやりと町を見ていた渡羽の前に、ふわりと手のひら大の光るものが舞い飛んできた。

「！？」

「おやおやあゝん？ めんずらしい子がいるでないの」

目を丸くしている渡羽の前で、光がしゃべった。

「！？ ！？」

「びっくらこいてるねい。あっはは、まあ仕方ないやな」

しかも、変な口調だ。渡羽が驚いていると、ティアラが「あつ」と声を上げた。

「んむむ？ おんやまあ、ティアラっこでないの。久し振りやねい」
光は手すりに降りると人の姿になった。正確には光を弱めて姿を

見せたというか。外見は二十代半ばの青年。

ボサボサの黒髪に、ダークイエローの瞳。火のついていない葉巻を口にくわえ、背中には透明な四枚の羽があるので妖精だと分かるが……服装は腰みの一つという、涼しげだがあまりうらやましくはない格好だ。

「アスカさまもお元気そうで。おつきなりやしたねい」

にかつと妖精が笑うと、アスカは引きつったように笑みを浮かべ、

「あー……ええと……誰だっけ？」

「うわお、俺っち忘れられんぼ！？」 いやまあ、最後に会ったのは五年以上前だがよう、そんなじゃまあ仕方ないやな」

ボリボリと頭を掻いて、妖精は手すりの上に胡坐をかいた。

「俺っち、ユイウエホイでさあ。ティアラっこの育ての親の」

「ええっ!？」

渡羽が驚嘆の声を上げる。

「あー……そう言えばそんな名前だったわね。言いにくいから忘れてたわ」

アスカが肩をすくめてため息混じりに言った。

一度ティアラの村に遊びに行った時に、偶然会ったことがあるのだが、このヒトは少々苦手なのだ。

「え……あの、育ての親って……」

「ああ、渡羽さんには言っていないませんでしたね。私、元は捨て子だったんです」

「す、捨て子？」

「はい。生まれて一年も経っていなかった私は、ジャングルの入口に捨てられていたんです」

「うんうん。んで、そこを通りがかった俺っちがティアラっこを拾ったわけさあ」

「ティアラと言う名前はお母さん——ホイの奥さんにつけてもらったんですよ。」

「そう言えばお母さんは元気？」

「はてなあ、俺っちもここ半年ほど、家帰ってないかなあ」

「ダメよ、お母さんひとりにしちゃ。お母さんはさみしがりやなんだから」

言いながらユイウエホイの隣に降りたティアラは、さっ、と葉巻をかすめ取った。

「あと、これもやめるように言ったわよね？」

「あああ、それねいと落ち着かねいのよ。火つけてねんだからいいでないのう」

「ダーメっ。それで話を戻しますが、お父さんに拾われた後、私はふたりのもとで育てられました」

葉巻をアスカに渡すと、アスカが小さな葉巻を指でぷしっと潰す。その瞬間、ユイウエホイはこの世の終わりのような顔をした。

「お父さんは影族なんですが、お母さんが水族で、水族の村で暮らしているんです。ただ、お父さんは放浪癖がありまして、私が村を出る前もよく放浪していましたね」

「うう、最後の一本だったのに、ひどいぜいティアラっこ」

「お母さんからも止められているでしょ？ いい加減にきなさい」

呆れるように肩をすくめるティアラ。常々、ティアラはしっかり者だと思っていたが、こういうヒトが身近にいたのならしっかりしていないもおかしくない。

「はあ…ティアラにそんな事情があったなんて……。アスカは知ってたんですか？」

「んー、だいたいはね。でも、言うこともないかなーって。訊かれなかったし」

ヨパンジョリーのおかわり分を注ぎながら、アスカはユイウエホイに説教をしているティアラをチラ見し、声をひそめた。

「…捨て子だったなんてさ、ティアラはそんなに気にしてないみたいだけど、あんまり気分のいいものじゃないでしょ？」

「まあ…そうですね……」

「どうして捨てられてたのかは分からないけど、ティアラが花族だ

ってことはすぐ分かったみたい。妖精は種族によって髪や瞳の色に特徴があるから。花族はピンクか紫の髪と瞳が主な特徴なの」

「じゃあクラウンは？」

「クラウンは水族よ。水色か青の髪と瞳が特徴」

言われてみればクラウンは水色の髪に蒼い瞳だ。妖精にはそういう見分け方があったのか。

「あの、もう一つ訊いていいですか？ ティアラは羽が二枚ですよ？ でも…その…」

名前が難しくて言えない。渡羽の言いたいことを察して、アスカは答えた。

「ああ、ホイはおとなだから四枚羽なのよ。妖精はおとなになると二枚羽から四枚羽になるの。つまり、ティアラはまだおとなじゃないってことね」

「そうなんですか」

アスカはずっと立っているのに疲れたのか、渡羽に柄をこすりつけているブロッサムに声をかけた。

「ブロッサム、ちょっと座らせてくれる？」

ブロッサムはアスカと渡羽を交互に見、ぐるんと横になって、柄の部分で渡羽の体をすくい上げた。

「うわ！」

ちょうどブロッサムに腰掛ける格好になり、渡羽は落ちないように慌てて柄につかまる。それからブロッサムはアスカの前に移動した。

「そんなに渡羽と離れたくないの？ もう、ブロッサムったら」

体勢を直せず横座りしている渡羽を乗せたまま、上機嫌で浮遊しているブロッサムに、アスカは苦笑した。

それを見ていたユイウエホイは「ひゅう♪」と口笛を吹いた。

「ほうき（アフィ）に好かれるマーティンなんて初めて見たぜい。あんだ、マーティンだろ？ 本物のマーティンだよな？」

目の前まで飛んできたユイウエホイに、渡羽は一瞬たじろいでか

ら頷いた。

「は、はい。そうです」

「うわーお、いろんな国を放浪したけど、マーティンなんて初めて見たぜい。」

滅多につてーか普通はお目にかかれねいかなあ。いーいみやげ話ができたぜい。あ、ついでに握手しとくれや」

「いいですけど……」

ためらう渡羽に、ユイウエホイは「おっと！」と額をパシッと手で叩いた。

「この大きさじゃ握手できねいわな。いよつと」

ぽんつ、とユイウエホイは魔法で大きくなった。身長は渡羽とさほど変わらないが、意外と体は逞しかった。

「ほんじゃ改めて」

「は、はあ……」

差し出された手を握り返すと、ユイウエホイはにんまりと笑った。「どーも。いい体験させてもらったぜい。ほんじゃ俺っちはそろそろ行くかね」

元の大きさに戻り、ユイウエホイは再び光に包まれる。

「お父さん、ちゃんと家に帰ってね！」

「近いうちにな」

ティアラの釘を差す声に軽い調子で返し、ユイウエホイはどこかへと飛び去って行った。ティアラは腰に手を当て、肩をすくめた。

「もう、何回言っても聞かないんだから」

娘と言うより母親のようだ。渡羽は微苦笑し、ユイウエホイの飛び去った方角に視線を投げかけた。

「おもしろいお父さんですね」

「変わっているんです。村でも『変わり者』という意味の『ブラボー』と呼ばれていましたから」

人間界でなら『ブラボー』は称賛の言葉だが、魔法界では逆のようだ。

褒めるつもりで人間界の住人が魔法界の住人に「ブラボー！」と言ったら悪口になるのか。

この世界に人間はいないからそういうことはないだろうが。

「いつも放浪しているということは…顔を合わせることは少ないんですか？」

「そうですね、年に数回くらいしか会いません。今回も会うのは三年振りでしたし」

「三年振り？　ずいぶん会ってなかったんですね」

「姫様の側付になってからは、私も村に帰ることがあまりなかったものですから……お母さんとは二年前に会いましたけど」

アスカの修行に付き合って、半年ほど魔法界に帰ってきていないので、正確には二年半会っていないことになるが。

きつとさみしがっているだろう。あのヒトはとてもさみしがりやだから。

会いたくないわけではないが、会えばしばらく帰してもらえないだろう。

それでは姫様の側付である意味がない。会いたくても会えない。

「さみしくないと言えましょうになりますが、もう慣れました。私は、ですけれど」

「そういえば、渡羽の父様にも会ったことないわよね。仕事で家を空けてるって美鳥母様に聞いたけど」

「ああ、はい。父さんは旅客船の船長なので…時々しか帰ってこないですよ」

「渡羽もさみしかったです？」

「え？　うーん、小さい頃は…そうですね、さみしかったですよ。今はもうティアラと同じで慣れましたから、それほどは」

「ふーん、そっか」

家族と長い間会えずにさみしいと思う気持ちは少し解る。今回帰ってきたのも同じ理由だし。三人はしばらく無言で夜空を眺めた。

翌朝、アスカたちは謁見間に集まっていた。女王と国王は玉座に座ったまま娘たちを見た。

「それではアスフェリカ、修行を頑張るのよ。今度会う時は魔法士ノエウイを卒業しているのを楽しみにしているわ」

笑顔で言われて、アスカは少し冷や汗をかいた。

「：う、うん。ガンバル」

「渡羽殿、アスカをよろしく頼むぞ。わしもそばについていたいの
はやまやまだが」

「次にそんなことしたら問答無用で離婚よ。」

「：ということ、アスカのことは任せる」

半眼での切り捨てるような一言に、国王は涙ながらに言った。渡羽はただ頷くしかできない。

泣くほど残念がることでもないだろうが。アスカはこれでシンにつきまとわれずにすむので、正直うれしいのだが。

ため息をひとつついて、女王は「ではそろそろ」と右手を前方に向けた。

「ファイディーラⅡボツⅡジェイシーエルク・リⅡラーチⅡタカヴ
アⅡツージャガⅡフォカストⅡレレッキーチヤメロネルク」

女王とアスカたちの間の足元に、白く光る円が現れる。ここ数日で何度も使った、時空と時空を繋ぐ時空移動の魔法だ。

「女王様、国王様、お世話になりました」

「姫様のお世話はおまかせ下さい」

光の中に入っていく渡羽とティアラを国王は笑顔で見送る。アスカは白光の円柱を見つめた。

これではばらくはまた家族と離れることになる。さみしさがよぎるが、これも自分が選んだ道だ。

アスカは父親と母親を見、笑みを浮かべた。

「じゃあ、いってくるね。父様、母様」

「ああ、風邪など引かんようにな」

「……ええ、行つてらっしゃい」

満面の笑みで見送る国王と対照的に、女王は少し硬い表情だった。元々、母親は笑みを浮かべることが少ないので、アスカは特に疑問に思わず、光の中に入ろうとした。

「――アスフェリカ」

名を呼ばれ、アスカは光に足を踏み入れる直前で動きを止めた。

「何？ 母様」

微笑むアスカに、女王は口を開きかけ――思いとどまるように口をつぐんだ。その様子に、アスカは訝しんだ。

「どうしたの、母様？」

国王は俯きがちの女王を気遣わしげに見る。女王は一度目を伏せ、ゆるゆると首を横に振った。

「……いいえ。頑張りなさい。最後まで。答えは自分の中に必ずあるのだから」

「？ うん」

どういう意味だろう。よく分からなかったが、アスカは今度こそ光の中に消えていった。

円柱はアスカが入ってから跡形もなく消える。三人が消えた場所から視線を外さぬまま、女王は独り言のように呟いた。

「最終選定の日は近い……誰が選ばれようとも、それがパーガウエクオの意味ならば、従う他ないわ」

イリアタルテが何を言いたいのか、シーウォルドは分かっている。だから、

「……そうだな」

ただ一言、そう返した。全てはパーガウエクオの意思次第。彼らを待つのは幸か不幸か。

18th 親子（後書き）

追伸列記簿

どうもこんにちは、甲斐日向です。マジラビ第十八話をお届けしました。

最近、めっきり冷え込んできましたね。そろそろストーブ出そうかなとか思い始めてる冷え症の僕。

はてさて、魔法界は夏真っ盛りですが、人間界は冬真っ盛りなりニュー世界。次回から人間界に舞台は戻ります。

今回はティアラの親が出てきましたね。ティアラの家庭はちょっと複雑ですね。妖精でもそういうことあるんだなーという感じ。最近シリアスな雰囲気ばかり続いてますねほんと。

んー、なんだか書くことないです……今回の話の内容について、特に補足することはないですし……では、次回のちょこつと予告でもいいよ受験シーズン突入！そしてドキドキの合格発表当日！渡羽たちは無事に高校に合格できたのか？

そしてここに来て、渡羽たちの恋模様が微妙に変化する。次回、19th 告白。乞うご期待！

というわけで、今回は誰かが告白します！四人の恋模様はどうなるのか。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

19th 告白

ある日、不思議な男の子に出会った。

朱い眼あかの、どこか普通の人間とは違う雰囲気を持った男の子。年齢は渡羽と同じか、少し下：くらいかな？

その男の子が無表情のまま、あたしに言ったの。

『アスフェリカ王女：いつか君を迎えに来る人がいる。それは君がよく知る人物で、とても身近な人だよ』

初めて会うのに、どうしてあたしの名前を知っていたのかってことにも驚いたけど、迎えに来るとい言葉がショックだった。

身近な人って誰？ 父様？ それとも他の誰か？ あたしはただ呆然と男の子を見つめていた。

『その時、君は：二つの大きな選択を迫られる。君の運命を決める選択だ。どちらを選ぶかで、君のその後の人生が決まる。だからその時が来たら、慎重に選んだ方がいい』

あたしの運命？ 選ぶって、何を？ だんだん頭が混乱してきて、目の前がぐらついた。でも、男の子は表情を変えずに淡々と告げてくる。

『でも君の選ぶべき道はもう決まってる。君は――』

* * * *

「姫様！」

ティアラの声に、アスカは物思いから現実に戻された。数回、目を瞬かせると、ティアラが文字通り目の前にいた。

「先ほどから渡羽さんが呼んでいますよ！」

言われてアスカは視線を下に向けた。今、アスカは渡羽家の屋根の上にいる。庭を見下ろすと、渡羽が困った風情で佇んでいた。

アスカは小さく呪文を唱えて、ふわりと渡羽のそばに降り立った。「アスカ、魔法があるとはいえ、やっぱり屋根の上は危ないですよ。それに、魔法を使っているところを誰かに見つかったらどうするんですか？」

吐く息が白い。眉を八の字にする渡羽をアスカは見上げる。出会った当初、目線はほとんど同じだったのに、今はほんのちよつとだけ目線が高くなった。

アスカはくすりと微笑み、うれしそうに笑った。

「心配してくれてるの？ 渡羽。ありがと」

アスカの満面の笑みに、渡羽は頬を赤らめた。少しだけ顔を逸らし、しどろもどろになって言う。

「と、当然じゃないですか。アスカに何、何かあったら困ります、から……」

「うん。それで用は何？ ずっと呼んでたんでしょ？」

「あ、はい。そろそろ出かけるので挨拶をしようと思ったんです」

「もうそんな時間？ 結構時間経ってたのね。じゃあ、いつてらっしゃい、渡羽」

「はい。いつてきます」

渡羽の背中を見送るアスカ。これまでいろんなことがあって、渡羽の背中はずいぶんとたくましくなったと思う。

それだけの月日が流れたのだ。優しい背中。穏やかなまなざし。どんな小さなことでも心配してくれる、あたたかい心。

渡羽に出会えてよかった。ずっとそばにいたい。けれど。
あの男の子の言葉が気がかりだった。アスカの胸に不安が広がっ
ていく。

今日はいつもの以上に冷え込んだ。どんよりと曇った空は、今にも
雪を降らしそうである。

冷たい風が吹く中、渡羽は人混みの中で目の前の掲示板を見上げ
ていた。吐く息が白く、時々眼鏡がうっすらと曇る。

「……あった!」

手に握りしめていた紙と、掲示板に貼られた紙面に羅列されてい
る番号のうちの一つを、交互に確認してほっとする。

今日は、高校入試の合格発表の日。

渡羽が志望していたのは慶星^{けいせい}高校。自分の実力では無難な所だが、
余裕とまでは行かなかったし、油断すれば不合格になる可能性もあ
った。

だから自分の受験番号が合格者の中にあったことに安堵した。

「よかった……」

夏休みに猛勉強した甲斐があった。これでようやく肩の荷が下り
た。後は……

「高尾さんとバルカンは……」

振り返った渡羽は次の瞬間、ものすごく嫌な顔をした。バルカ
ンが滝のような涙を流して満面の笑みを浮かべていた。

「あった…あったぜ、飛鳥」

「……へえ」

「合格だああああっ!!」

叫んでバルカンは渡羽にがばりと抱きついた。渡羽は「ひっ」と
顔を青ざめさせた。

「何するんですかっ! 抱きつかない…ちよっ、鼻水垂れてますよ!」
「うおおっ! やったぜ飛鳥ああっ!」

ぎゅうーっ、とバルカンは力の限りに渡羽を抱きしめる。

公衆の面前で抱きつかれたことと、男（それもバルカン）に抱きつかれたこと、それからバルカンの強い力でみるみる渡羽の顔が蒼くなっていく。

「バルカンくん！ 何やってるの！？」

声を聞きつけ、少し離れたところで受験番号を探していた明衣子^{あいちこ}が、人混みの合間を縫って駆け寄ってきた。

渡羽に抱きついていいるバルカンを引きはがし、

「もう！ いつも手加減してって言ってるのに！ うれしいのは分かるけど、渡羽くんに迷惑でしょ！？」

「いやあ：受かれると思ってなかったからよ：けどうれしいぜ、これでまた三人一緒だな！ 高尾は当然受かってんだろ」

「え、うん」

「よっしゃ、三人そろって合格！ めでてーなあ」

ほくほく顔でバルカンは明衣子と渡羽の肩に腕を回した。

うれしいのは二人も同じなので、仕方ないとばかりに顔を見合わせて苦笑した。

「おーし、これでようやく夢に一步近づけたぜ♪」

合格発表の帰り、モノレールの駅構内でバルカンが言った。「「夢？」」と渡羽と明衣子はきよんとする。

「おう！ オレな、慶高に合格したらアスカさんに告白しようと思っけてさ」

にかっとならうバルカン。明衣子は、渡羽とアスカが恋人同士であることをなんとなく知っているので、ぎくっとして渡羽を見たが、渡羽はと言うと怪訝な顔をしていた。

「告白？ 告白って何をですか。自分の数ある恥ずかしい失態でも告白するんですか」

「なんでそんなもんをアスカさんにコクらなくちゃなんねーんだ。

告白つつつたら一つしかねーだろ。愛の告白に決まってるじゃねーか」

誇らしげに胸を張るバルカンに、渡羽はたっぷり三泊ほど無言になった後に「…はあ!？」と眉根を寄せた。

「なんですかそれ!」

「おっと、今まで内緒にしてて悪かったが、オレ、夏休みにアスカさんと会って一目惚れしちゃってなあ。今までにコクろうか悩んだんだが、どうせなら合格してからの方がカッコよくね?」

明衣子は、もしかしたらそうなのかも、とバルカンの気持ちに気づいていたが、特に何も言わなかった。渡羽の方は、今初めてバルカンの気持ちに気づき、混乱していた。

(知らなかった…バルカンがアスカのことを…? えええっ、でも今までそんなそぶり見せたこと……)

と考えて、渡羽ははっとした。アスカと初めて会った時のバルカンの奇妙な言動の数々。やけにアスカのことを知りたがり、イヤになるほどの笑顔を振りまいていた。

(まさか…あれがそうだったのかーっ!?)

今頃気づく渡羽。鈍すぎる。

(でも…告白って、アスカは……)

アスカは自分の恋人なのだが。そう言えば、バルカンにはアスカが居候だということは言ったが、自分とアスカの関係を詳しく教えていなかった。

(今言うべきでしょうか…)

「あの、バルカン」

「ん? なんだ?」

「実はですね、アスカは…」

「あっ、渡羽ー!」

当の本人の声が背後から聞こえ、渡羽はがくつと脱力して振り返った。

「アスカ!？」

「アスカさん！」

顔を輝かせるバルカン。アスカは何も知らず、笑顔で駆け寄ってくる。

「えへへー、気になって来ちゃった。三人ともどうだった？」

「バッチリっす！」

「合格だったよ」

ぐっと親指を立てるバルカン、照れくさそうに微笑む明衣子。渡羽はなんだか気まずそうな顔をしているので、アスカは顔を曇らせた。

「どうしたの？ 渡羽。もしかして、ダメ…だったの？」

「え！？ いや、違います。合格でしたよ」

「そう？ よかった。じゃあみんな、おめでとう」

「ありがとうございます、アスカさん！！」

「ありがとうございます」

「――あ、そうだ。アスカさん、ちょうどいいや」

バルカンが動き、渡羽と明衣子は息を呑んだ。もしやここで！？

「？ 何？」

「そのー、アスカさんに前から言おうと思ってたんですけど……えつと…」

そのまま黙りこむバルカン。アスカは背の高いバルカンを見上げたまま待つ。渡羽と明衣子は複雑な気持ちでバルカンを見守る。

しばらくしてバルカンは思い切って言った。

「あの！ 明日、暇ですか！？」

渡羽と明衣子は脱力した。今ここで言うわけじゃないのか。

「明日？ うん、暇だけど」

「じゃあ、改めて話したいことがあるんで、明日の十時、家に行かせてもらいます！」

「う、うん、分かった」

ちょうどモノレールが到着し、四人はそのまま乗り込む。

バルカンは笑顔で、アスカは不思議そうな顔で、渡羽と明衣子は

複雑そうに、それぞれの思いを抱きながら。

翌日、バルカンは珍しく時間通りにやってきた。渡羽と待ち合わせをする時はたいてい遅刻してくるのに。

（まあ、告白するのに遅刻っていうのは格好悪いですからね……。それにしても）

自室でガーデニング雑誌を読んでいた渡羽はため息をついた。

家に行くということはつまり、渡羽家に来るということだ。アスカは渡羽の家に居候しているのだから。

（よくうちに来れますね。知り合いのいる家の前で告白なんて、恥ずかしくないんでしょうか）

どこかに呼び出すとかすればいいのに。アスカはバルカンが来たので外に出ていった。

ティアラがふわりと飛んできて、渡羽の肩に座った。

「姫様に告白なんて…勇気ありますね、その方」

「妙な心境ですよ。知り合いがアスカに告白なんて思ってもみなかつたし、アスカはその…俺と…ですし」

「結果は目に見えてますよね。でも、せっかく告白なさろうとしているんです。邪魔するのは気が引けますからね」

「そうなんですよね…」

結果は分かっているが、バルカンの勇気を無駄にしたくないのは事実で、だからあの後もアスカと自分がつき合っていることを明かさなかった。

バルカンの勇気は無駄に終わるだろうけれど、その勇気を出すことが大切だと思うから。

「……」

それでもやはり気になる。渡羽はぱたん、と雑誌を閉じ、部屋を出た。

「いらっしやい、バルカン」

「どっ、どーも！」

家の前まで出てきたアスカに、バルカンは緊張した。

いよいよ告白するのだ。告白なんて初めてでどうすればよく分からなかったが、とにかく想いを打ち明けたかった。

「あのっ、昨日の…話の続きなんですが……」

「うん？」

「オレっ………アスカさんのことが好きです！」

アスカはゆっくりと瞠目した。バルカンは顔を真っ赤にし、真剣な目をしていた。

「夏休み…初めて会った時から好きでした！　つきあってください
！！」

勢いよく頭を下げるバルカン。アスカはバルカンを見つめ、ふう、と一息をついた。

「…ありがとう、うれしいわ。でもごめんなさい」

それだけ言うのアスカは黙って、頭を下げたままのバルカンを見つめる。

バルカンはしばらく動かなかったが、やがて「そうっすか」と顔を上げた。

「やっぱりフラれちゃいましたか。分かってはいたんですけどね」

「……」

「そんな顔しないでください。アスカさんは悪くないっすよ」

「…あのね、バルカン。あたし…」

「——飛鳥とつき合ってるんでしょ？」

アスカと、ちょうど一階の窓からこっそり外に出てきた渡羽は驚いた。バルカンは苦笑する。

「気づいてましたよ、最初から。あの飛鳥が女連れなんて、そうでもない限りありえませんか。」

気づいたけど…一目惚れしたのも事実で、飛鳥から奪うことも、

何も言わずあきらめることもできなかった」

物陰に潜み、渡羽は息を殺してバルカンの声を聞いていた。バルカンの声は普段の彼からは想像できないほど静かで、大人びていた。「だからせめてオレの気持ち伝えて…それからあきらめようと思ったんです。やらないで終わるより、やって終わった方がスツキリすっかなーって。すみません、オレの身勝手につき合わせてしまって」「ううん、バルカンの気持ちうれしかったよ。あたしを好きになつてくれてありがとう」

「…はい」

いつもの笑顔で、バルカンはきびすを返した。

わずかに悲しみを含んだ笑顔でアスカが見送っていると、つと足を止めてバルカンが振り返った。

「アスカさん！ これからも飛鳥のことよろしく頼みますね。オレ、二人のこと応援してますから！」

「！」

それきりバルカンは一度も振り返ることはなかった。

「……渡羽」

「あっ、お、お帰りなさい、アスカ」

居間のこたつにもぐり込んでいた渡羽は焦って立ち上がった。アスカが戻ってくる前に急いで潜り込んだ直後だったので、声が裏返った。

アスカは俯いてゆっくりと居間に入ってきた。

「…その…バルカンは、なんて？」

知ってはいるがあえて問いかける。するとアスカは肩を小さく震わせ、渡羽にもたれかかってきた。

「ア、アスカ？」

「バルカンね…あたしのこと、好きだって、ずっと好きだったんだって……」

「…っ、そう、ですか」

「でも、あたしは渡羽の恋人だから『ごめんなさい』って言ったの。バルカン知らないかもしれないから、それを言おうとしたら『気づいてた』って。『最初から気づいてた』って……」

だんだんアスカの声が涙交じりになっていく。渡羽はそつとアスカの背に腕を回し、抱きしめた。途端、アスカが強くしがみつく。

「あたしは『気づいてなかった』！　バルカンの気持ち…っ。きつと言われなかったらずっと気づかなかった。」

もつと早く気づいていたら、今日までバルカンを苦しめなくてすんだかもしれないのに！」

ポロポロと涙を零し、アスカはしゃくりあげた。渡羽は何も言わず、アスカの背中を撫でる。

「…最後に、バルカンは言ってくれたの。『二人のこと応援してるから』って…。自分のことより…あたしたちのこと考えてくれて。」

やさしいよね。そんな…やさしい人の気持ちに応えてあげられなかったことが…かなしいの」

泣き続けるアスカの背中を、渡羽は何も言わず撫で続けた。アスカの気持ちたちが落ち着くまで。自分の気持ちたちが落ち着くまで。

「よう、飛鳥！　おはようさん！」

翌朝。学校にて、底抜けに明るい笑顔のバルカンに、渡羽はぽかんと口を開けて顔をしかめた。

まるで昨日の出来事がなかったかのようにいつもどおりだ。

失恋したばかりだというのに、なんだろうこの明るさは。

「受験合格したからのんびりできるな。あとは卒業式くらいだしな！」

あまりに普段と変わらない様子に拍子抜けだ。落ち込んでいるものかと思ったのに、心配して損した。

「…変わりませんね」

「ん？ 何がだ？」

「別に。なんでもありませんよ」

「なんだよ、飛鳥。気になる言い方だなあ」

にやにやと笑って肘で小突いてくるバルカンに、渡羽はこめかみを引きつらせた。

「君はいつも間抜け面ですわってことですよ」

「うおっ、ひでえっ！　なんかおまえ、冬休み明けてから変わってね？　眼鏡かけてても、地に近いつつーか……」

「そうですか？　じゃあ成長したんですよ。君は相変わらずバカ丸出しで、成長止まってるんじゃないですか？」

「さらに！？　やっぱおまえ変わったってえ。口調変わらねえだけでほとんど眼鏡外した時と一緒にじゃねーかあ」

泣き真似をして寄りかかってくるバルカンを、渡羽は押しのけようとする。

「ちよっ、重いですよ、バルカン！」

「――オレのことは気にすんな」

不意に耳元でささやくバルカンの声が、昨日アスカと話していた時のように大人びた。渡羽は手を止めてバルカンから顔を逸らした。

「……すみません」

「おまえが謝ることねーよ。フラれたのはアスカさんのせいでも、おまえのせいでもない」

「いえ、アスカとのことを……黙っていたことです。すみませんでした」

「ああ、そのことか。いーよ別に。飛鳥がそういうこと打ち明けるの苦手だって知ってたから。」

これでもおまえとは五年以上のつき合いだからな。ちゃーんと理解してやってんだぜ？」

その言葉に、渡羽は不覚にも泣きそうになった。バルカンの言葉でうれし泣きしそうになるなんて。

「……最悪です」

「何それ！ オレ今いいこと言ったのにひどくね！？ ぬあゝっ、飛鳥のバカ野郎ゝっ。地味眼鏡えーっ！」

「眼鏡をバカにしないでくれますか！？ この眼鏡は俺にとって大事なものなんです！ 眼鏡のどこがいけないんですか！」

「ほ、本気で怒るなよっ。ちょっとした冗談だろお？」

「眼鏡をバカにしたら許しません。眼鏡を笑う者は眼鏡に泣くんです！」

なんだかよく分からない会話をしている二人に、ちょうど登校してきた明衣子が声をかけた。

「おはよう、二人とも」

「あ、おはようございます」

「おはようさん」

「……」

二人が挨拶を返すと、明衣子は驚いたような表情で二人をじっと見つめる。

「どうかしましたか？ 高尾さん」

「えっ、ああ……なんか、いつもより二人が仲良しだなーと思って」

「はい？」

渡羽は哑然とする。そんなふうに見えたなんて。本当に最悪だ。

渡羽はどんよりとした面持ちのまま放心した。

ちらほらと咲いている寒桜を眺めながら、渡羽は帰路についた。

今朝の明衣子の言葉で、一日中気が滅入っていたため、気晴らしに図書館に寄ったので、もう日が暮れてしまっていた。

そこかしこにある街灯に火が灯り、明るく道を照らし出している中を渡羽は一人歩いていた。

「あれ？」

家の近くまで来た渡羽は、門前のライトの横に立っている人影を見つけて、軽く目を瞠った。

「アスカ？　こんなところで何やってるんですか？」

「あ、渡羽。おかえり。遅かったね」

「はい、ちょっと寄り道してたものですから……」

「あたしは渡羽のこと待ってたの。渡羽に渡したいものあってね。早くに渡したかったから」

「そうだったんですか。すみません、長い間待たせてしまっ」

渡羽は自分のマフラーを外し、アスカの首に巻いてやる。

「ふわ。ありがとう、渡羽」

「いえ。渡したいものというのは？」

「うん、これなんだけど」

アスカがロングスカートのポケットから何かを取り出し、渡羽の前に差し出した。開かれた手の中には、小さな小さな箱。

手のひらにすっぽりと収まるほどのそれは、ライトの光を反射して金色に光っていた。

「これは……」

「渡羽の合格祝い。本当は昨日渡そうかと思ってたんだけど、昨日はちょっと、あれ……だったから……」

言葉を濁すアスカに、渡羽は表情を曇らせた。

「あいつのことは気にしなくていいですよ。ムカつくぐらいいつもどおりでしたから」

「……ほんと？」

「はい。それより、この箱はなんなんですか？　随分小さいですけど……」

その上、錠までついている。この錠に合う大きさの鍵なんてあるのだろうか。

アスカはにこっと笑った。あの男の子に出会ってから考えていた。これを渡羽に渡そうかと。

ずっと迷っていたけれど、バルカンの言葉で心が決まった。やらないで終わるより、やって終わった方がいい。

「その箱は今は開かないで。いつか開くべき時が来るから。その時

が来るまでは、なくさずに持っていてね。約束」

指切りをするため、小指を出すアスカ。約束をする時はこうするのだと、前に渡羽に教えてもらったのだ。

渡羽はその細い指に、自分の小指を絡ませ、笑みを返した。

「はい。分かりました」

その箱はまるで、RPGなどに出てくる宝箱のような形をしている。

いったいこの箱には何が入っているのだろうか。

19th 告白（後書き）

追伸列記簿

十一月と言うと、昔の呼び方では霜月…ただし、これは陰暦の十一月であって、太陽暦では十二月頃にあたるそうですが…

のっけから小難しいことを言っている甲斐日向です。こんにちは。この頃、やけにだらだらとした生活を送っています。まあ、元々だらけてましたけど。運動不足…

はてさて、渡羽たちは受験を終え、無事に高校合格！よかったね。

そして、今回のハイライトはなんと言ってもバルカンの告白でしょう。サブタイトルにもなってますし。結果は見事玉砕ですが（笑）まあ、当然ですね。

でも、これでいろいろスッキリしたんじゃないですか、バルカンも。今回はちょっとバルカンがカッコイイかも（笑）

渡羽とバルカンのコンビはなんか好きです。バルカンという時の渡羽は毒舌ですし、バルカンが打ちのめされるのも書いてて楽しいので。

途中の、眼鏡について熱弁してた渡羽は、自分で書いてて「何言ってるんのこの子ーっ（笑）」と、ちょっとウケました。

言っておきますが、渡羽が毒舌なのはバルカンに対してだけで、他の人には優しいですよ？間違っても腹黒だとか思わないであげて下さいね。分かっているとは思いますが。

次回から渡羽たち三人は高校生になります。いやー、成長しましたね、みんな。最終回も近づいておりますよ。新キャラもちょこちょこ出てきます。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

アネクドート？ この花に永遠を誓う

「姫様ーっ。アスカ姫様ー！」

マジカリア国王城。その広い庭園の中を、妖精・ティアラは慌てた様子で飛び回っていた。

肩より少し長めのチェリーピンクの髪。毛先が少しだけウェーブしている。ストロベリーピンクの大きな瞳には、うっすらと涙が浮かんでいる。

ティアラが大慌てで庭園内を飛び回っている理由、それは――この国の第一王女である、今年で御年六歳になられるアスフェリカ様が、行方不明になってしまったのだ。

とはいっても、姫様が行方知れずになるのは別段珍しくない。

彼女はおてんばな上にイタズラ好きで、しょっちゅう大臣様や奉公人たちに、覚えてたての魔法でイタズラをしてどこかに隠れるのだ。『ティアラ様っ、なんとかして下さい！ わたくしたちでは手に負えませんわっ』

『ティアラー！ 君は王女の側近だろう、しっかり面倒を見たまえ！』

などと言われても、助けてほしいのはこっちも同じだ。

それだけではなく、城を抜け出して町や森に出かけることもしばしば。

そのため、彼女がいなくなることは珍しくはないのだが：ティアラはそんな王女の世話係なのだ。

王女にもしものことがあったら大変だ。罰としてクビになるか、下手をしたら処刑されてしまう。

（うう、そんなの絶対いやです）

「どこにいらっしゃるんですか、姫様あーっ！」

泣き叫ぶティアラ。そこに上から声が降ってきた。

「おい、その泣き虫ティアラ！」

反射的に頭上を振り仰ぐと、木の枝の上に一人の少年妖精が立っていた。空色の短髪に紺色の瞳。

どこか野性的な雰囲気をもとっている彼は、背中の透明な二枚の羽を羽ばたかせて、ティアラの前に降りてきた。

「あう：クラウン：」

ティアラは降りてきた少年――クラウンを見ると、びくつと身をすくませた。

クラウンはティアラより少し高いところで静止すると、腕組みをし、小バカにするようにティアラを見下ろした。

「まーたアスカ姫に逃げられたのか？」

「：ち、違います。ちよつと目を離れた隙にいらなくなってしまっただけです」

「それを逃げられたって言うんだろ？ アスカ姫の側付になって一年も経つていうのに、信用ないな、お前」

「うう、そ、そんなことは：」

「その点、おれの主はしつかりしてるぜ。あるじどこに行くにもおれを連れてくし、アスカ姫みたいに勝手にいなくなったりしないぜ？」

クラウンが近づいてきて、ティアラを鼻で笑った。反論しようにも、事実なので何も言い返せない。

彼はアスカの妹姫の世話係。クラウンの言う通り、妹姫であるカデリン様とクラウンはいつも一緒にいる。仲もよさそうで、問題など何もなかった。

それに比べて自分はどうかろう。姫様は自分に何も言わず行方不明。心を許してくれているなら、何か一言くらい、言伝でも書き置きでもしてくれるだろうに。

（一年も姫様のお世話をさせてもらっていますけど、姫様はいつも私に何も言ってくれません……私は姫様に嫌われているんでしょうか）

じんわりと涙が込み上げてくる。クラウンは、ふん、とそっぽを向いた。

「あーあ、こんなんで側付が務まるのかよ」

ティアラは涙が溢れそうになるのをぐっと堪え、おずおずとクラウンに問いかけた。

「姫様の居場所：知りませんか？」

頭の後ろで手を組み、クラウンは「さあな」と背中を向けた。

「たとえ知ってても教えねーよ」

するとみるみるティアラは涙ぐんだ。

「どうしてですか」

「つたく、お前はすぐ泣くな！ 泣き虫ティアラ！」

クラウンはむっとした顔で振り向き、ティアラの髪を引っ張った。

「ふええ、痛いですーっ。やめて下さいー！」

「へんっ」

ティアラの髪を放すと、クラウンはまたそっぽを向いた。ティアラはクラウンから少し離れ、ぐしぐしとしゃくりあげた。

「ひどいです：クラウンはいつも意地悪です。村でも私ばかりいじめて：：：どうしてそんなことするんですか？ ：私が、きれいなんですか？」

最後の言葉に、クラウンは目を剥いて、ぱっと振り返った。

「そんなわけないだろ！ むしろ：！」

言いかけて、クラウンは赤面して口元を押さえた。ティアラはきよんとしている。ぷるぷると肩を震わせると、クラウンはもう一度ティアラの髪を引っ張り、

「うっせえ、バーカ！ もう知るか！」

ぴゅーっとどこかへと飛んで行ってしまった。ティアラは涙目で髪を押さえて、「やっぱり意地悪です：」と呟いた。

「あっ、いた！ ティアラー！」

聞き覚えのある少女の声に、ティアラははっと振り返った。

「姫様！」

てててっとな駆けてくるのは、ティアラが捜し求めていた少女だった。

腰まで届く忘れな草色の髪に、アイスグリーンの大きな瞳。頭には紅い玉のついたカチューシャ。

白いパフスリーブのブラウスとピンクのジャンパースカート。そしてグラスグリーンのポシェットを肩から提げている。

「もうー、どこいったの？ さがしたよ」

「それはこちらのセリフですっ！ 突然いなくなっぴっくりして心配したんですよ！？ どこに行っちゃったんですかぁっ！」

わーんと泣きだすティアラ。アスカは悪びれることなく苦笑した。「またないてるー。ティアラってばなきむしだね」

「姫様が悪いんですっ」

アスカはよしよしと指でティアラの頭を撫でた。

「あのね、ティアラにあげたいものがあるの。はい」

アスカはポシェットから二つの花を取り出し、ティアラの前に差し出した。

「これは……ルティアの花……ですか？」

「うん、そう！」

オレンジ色の五枚の花びらを持つルティアの花。花びらの先が赤く、オレンジから赤に変わるグラデーションと、ほんのりと香る甘い香りが人気の花だ。

よく生け花やアクセサリ、小物、服などの柄にもなっている。

しかしルティアの花は、雨量が多く険しい溪谷にしか咲かない珍しい花でもある。一般に店で売っている物は本物に似せたレプリカで、本物には滅多にお目にかかれない。

この辺りでルティアの花が咲いている溪谷と言えば、隣国ジェンデイスとの国境近くにあるクルスレート溪谷か、北方のビフォアの谷だ。

「まさか姫様、これを取りに行っちゃったんですか！？」

「そうだよ」

「なんて危険なことを！ どこへですか！？ クルスレート溪谷！？ それともビフォアの谷！？」

「クルスレートけいこく」

にこにこと笑ってアスカは言った。ティアラはほっと息をついた。クルスレートは険しい谷だが、ビフォーの谷ほどではない。ビフォーの谷は常に強風が吹き荒れる危険地帯だ。雨が降ろうものならまさに嵐となる。

胸を撫で下ろしてからティアラはほっとした。そういう問題ではない！

「どこだって同じです！　お一人でそのような危険なところに行くなんて…！」

「ひとりじゃないよお。にいさまといっしょにいったもん。あと、ほんにんはバレてないとおもってるだろうけどバレバレで、とうさまもこっそりついてきてたし」

「……そ、そうですか…」

心配性な国王様らしい。けれど、殿下も一緒だったなら大事はなかったのだろう。

さすがはマジカリア国第一王子と言おうか、あの方の魔法力はずば抜けている。

「けど、どうしてルティアの花を取りに行かれたのですか？　ルティアの花が欲しいならお店から取り寄せをなさるか、別の方に行っているのとか…」

「おみせのはほとんどレプリカなんですよ？　にいさまにきいたもん。それに、ほかのヒトじゃダメなの。あたしがじぶんでてにいないと」

言い切るアスカに、ティアラは手を組んでうなだれた。

「…でも、やっぱり姫様ご自身が行かれる必要はないと思います。もしも姫様の身に何かあったら…私はとても悲しいです。

姫様は…アスフェリカ王女は、私の大事な主あるじなのですから」

「ティアラ…」

しゅんとするティアラに、アスカは目を丸くした。

「それから、どうして私に何も言って下さらなかったんですか？

言って下さればどこでもお供しましたのに……」

「ティアラにいったいちゃんみないでしょ。ティアラをおどろかさうとおもってナイショにしてたんだもん」

「そもそも、どうしてルティアの花を……？」

顔を上げると、アスカは満面の笑みを浮かべた。

「きょうはきねんびだから！」

「はい？」

「わすれちゃったの？　きょうはあたしとティアラがはじめてあったひだよ！」

「！」

そう。一年前のこの日、二人は出会った。女王がアスカの世話係として連れてきたのだ。アスカはそれを覚えていた。覚えていてくれたのだ。

「それでね、ティアラにはいつもお世話になってるから、なにかしてあげたいなっておもってにいさまにきいたの。そしたら、ルティアのはなをおくるといいよってしてくれたの。

しってる？　ルティアのはなをたいせいなヒトにおくると、ずーっとなかよしでいられるんだって。えっと……きずな？　がながくつづくんだってー」

無邪気に笑うアスカ。そのために——自分にルティアの花を贈るために、姫様は危険を顧みず、この花を取りに行ったのだ。自分の手で手に入れ、自分の手で渡したかったから。

感極まり、ティアラはまた泣きだした。ポロポロと涙が零れる。

「あり……ありがとうございます。そんな……そこまでして下さるなんて……」

「あのね、これ、ティアラのかみかざりにしようとおもったんだー。きつとにあうよ！　そうおもってもうかこうしてもらったの。

でもこのままだとはながおおきすぎるから、おおきくなって、ティアラ」

「は、はい！」

ティアラは魔法で大きくなった。背の高さはアスカとほとんど変わらない。少しだけティアラの方が高い。

アスカは小さな手で、ティアラの髪にルティアの花をつけていった。

ほんのりと香る甘い香り。それは紛れもなく本物のルティアの花の香りだった。

「よしっ。できたー。うん、やっぱりにあうよ、ティアラ！」

満足げにアスカは笑った。自分では見れないので分からないが、ティアラは姫手ずからつけてもらっただけで充分うれしかった。

「ありがとうございます、姫様。大事にします。ずっと」
目に涙を溜め、ティアラは破顔した。

あなたがくれた想いは、いつまでも私の中で生き続けるでしょう。
あなたのおそばにいられること、それが私の誇り。

——だから。

この花にかけて、一生、姫様にお仕えすることを誓います。

アネクドット？ この花に永遠を誓う（後書き）

追伸列記簿

皆様、どうもこんにちは。甲斐日向です。今回のお話は、ティアラがいつも頭につけているお花についての逸話です。

あれはアスカが贈ったものだということは以前にちらっと触れましたが、詳しいことには触れませんでした。

しかし、やはりティアラとアスカにとって大事な思い出なので、こうして番外編として書いてみました。

アスカとティアラの付き合いは長いですね。十年以上も一緒にいるのですから。

今回、小さい頃のアスカが出てきました。この頃のアスカは髪長かったんですね。逆にティアラは髪が短くて。

キャラの小さい頃って、書いていてなんだか微笑ましいです。特に現在と違うと楽しくなってきました。

クラウンも出てきましたよね。彼も書いてて楽しいです。

ちよっとティアラに対してひどいことばっかしてますが、そこはそれ、照れ隠しというものなんですよ。ふふふ。

それでは、次回の本編の追伸列記簿でまたお会いしましょう★

20th 入学

「ご苦勞様でした。下がってよろしい」
片膝を立てて跪いていた少女は深く首を垂れると、立ち上がって謁見間を後にする。

マジカリア女王・イリアタルテは、目を閉じて玉座にもたれかかると深く息を吐きだした。

「疲れているな。薬湯でも持ってこようか」

「いいわ、大丈夫」

顔を覗き込んでくる夫、マジカリア国王・シーウォルドに小さく手を振り、イリアタルテは目を半眼に開いた。

「これで、すべての女王候補の試験は終わったわね」

「ああ、あとは最終選定の決定を待つばかりだ」

「……」

半眼に開いたまま、イリアタルテはぼんやりと天井を見る。ややあつてぼつりと眩く。

「時間がかかるとよいのだけれど」

シーウォルドはイリアタルテを見る。

「そうすれば…少しでも長くいられるでしょう？」

「……」

答えはないが、イリアタルテは答えを求めているのでそのまま続ける。

「最終選定で選ばれても、選ばれなくても…それまでは“自由”でいられるわ……」

現女王である私が、こんなことを言うのはいけないことかもしれないけれど……次期女王なんて決まらなければいいのに」

「…まったくだな」

その答えが、『こんなことを言うのはいけないことかもしれない』に対してなのか、『次期女王なんて決まらなければいいのに』に對

してなのか、イリアタルテは考えなかった。

「ただ待つだけというのは、つらいな」

「……ええ」

シーウォルドの静かな声を聞き、再びイリアタルテは瞳を閉じた。

玄関横にある姿見の前で、渡羽はきゅっとネクタイを締めた。以前は赤いネクタイだったが、これからは青いネクタイだ。

4月。今日から渡羽は高校生になるのだ。

「わあっ、渡羽かっこいいっ！」

高校の制服に身を包んだ渡羽を見てアスカが歓声を上げる。

中学の制服は黒いジャケットとズボンに赤ネクタイだったが、高校の制服は白いブレザーにダークアッシュのズボン、青ネクタイだ。ブレザーの丈は普通より少し長めで太股の中間辺りまでである。

「なんだかまだ着慣れないですね……ネクタイ曲がってませんか？」

「うん、大丈夫だよ」

「準備できた？ 飛鳥」

美鳥がよそ行きの服装でやってきた。入学式に出席するためなので気合いが入っている。

「じゃあ行きましょうか。アスカちゃん、お留守番よろしくね」

「行ってきます」

「うん、いつてらっしゃーい」

アスカ（とティアラ）に見送られ、二人は家を出た。

昇降口付近は新生でごった返していた。真新しい制服姿の人混みの中から、渡羽を呼ぶ聞き覚えのありすぎる声がした。

「お、飛鳥く！」

喜々とした表情で駆け寄ってくるのは金髪長身のバルカンだ。

「はあ……おはようございます」

「おはようさん！」

明らかにため息をつく渡羽に対して、バルカンは満面の笑みを浮かべている。美鳥がバルカンを見上げ、顔を綻ばせた。

「あらあ、将之介君、久し振りねえ。しばらく見ない間に大きくなつたわねえ」

「どーも、お久し振りっす。相変わらず綺麗っすね」

「あらあら、お世辞なんか言っちゃって、もう。保護者の方は？」

「親父が来てますけど、保護者の控室に行きましたよ。ここにいても用はないしって」

「そうねえ、私も控室に行っていようかしら。じゃあ、飛鳥」

「はい。また後で」

人込みに紛れていく美鳥の後ろ姿を見送り、渡羽は首を巡らせた。
「さてと、クラス割でも見てきましようか」

「それならオレが見といたぜ。全員バラバラで、オレがC組、高尾がA組、飛鳥はD組だ」

「え…それは残念ですね」

「おっ。オレとの別れを惜しんでくれんのかー？」

「いえ、君とは違うクラスでほっとしてます。むしろ高校も離れてくれてたらもっとうれしかったです。」

きっぱりと返す渡羽に、バルカンはいつもの泣きマネをする。

「そこまで言うことないじゃないっ、飛鳥のおバカ！」

「君にだけは絶対に言われたくない単語です。高尾さんとクラスが違うのは残念ですよ」

すたすたと渡羽は昇降口に入っていく。その後を追いかけるが、バルカンは口を尖らせる。

「少しは俺にも優しくしてくれよう。小学校からのつき合いだろう」

「そんなことしたら君はすぐにつけあがるじゃないですか。これくらいでちよいどいいんですよ。」

そんなことより、もう高校生になったんですから、これからはもう少し落ち着いて行動して下さいね。下手にバカやらかして俺に火

の粉飛ばさないで下さいよ？」

その切り捨てるような声音に、バルカンは改めて、やっぱり眼鏡かけたままでも地に近くなったよな……としみじみ思ったのだった。

散々バルカンに、文句もとい忠告をした渡羽は教室に入った。

教室にはもうほとんどの生徒が集まっていて賑やかだった。黒板に苗字と席位置が書かれていて、渡羽は自分の席を探してそこに向かった。

「おはよう」

後ろの席から声をかけられ、渡羽は横を見た。

「あ……おはようございます」

茶髪がかった黒髪に人懐っこそうな笑みを浮かべる少年は、身を乗り出して問いかけた。

「僕、かとりじゅんぺい鹿取淳平。市外の中学出身んだけどさ、君は？」

「渡羽飛鳥です。俺も市外ですよ」

「へえ、どこの中学？」

「戸尾ヶ崎ですけど」

鹿取と名乗った少年は目を丸くして、さらに笑みを深くした。

「知ってる知ってる！ 昔、部活の合同試合でその選手と試合したんだけど、結果は惨敗」

「そうなんですか。部活って？」

「テニスだよ。戸尾ヶ崎ってテニス強いよね」

イスを引いて座り、渡羽は小首を傾げた。

「確か、都大会で準決勝まで残ったとか聞きましたけど」

「そうそう！ 僕、その準決勝に出た選手と当たってさ、結果は分かってたけど1点も取れなくてね」

軽く肩をすくめる鹿取。彼と話をしている渡羽は思った。人懐っこくさばさばとした雰囲気はどこかアスカと似ていると。

「渡羽は何か部活やってた？」

「え？ あ、えっと：園芸部です」

鹿取にアスカの面影を重ねていた渡羽は、一瞬答えるのが遅れた。
「へえ、地味だね」

真っ正直なところもアスカとよく似ている。そういえば：アスカは今頃何をしているだろう。鹿取と会話しながら渡羽はアスカのことを想った。

広い何もない空間。青い空と草原がひたすら広がり、そこにアスカは立っていた。

目を閉じ、魔法力を練っている。その後ろ――少し離れたところに、心配そうな顔のティアラと水晶玉が浮いている。

水晶玉の中には老いたツバメの鳥人が、真剣な顔つきをして映っている。

練り込まれた魔法力がアスカの周りで渦巻く。カツ、と目を見開き、アスカは魔法を発動させる。

「リロオイヴィヌ！」

放たれた炎が蛇の形になり、前方に設置しておいた的を呑みこんだ。

アスカはふう、と額を腕でぬぐい、くると振り返った。

「どう？ ヘベルク。結構いい感じだったと思うんだけど」

《ふむ。そうですね：確かに先ほどまでよりはよいでしょう》

ツバメの老鳥人は重々しく頷いた。

《しかし、油断はなりませんぞ。集中力持続を忘れませんように。

王女はすぐに集中力が途切れますからなあ》

「そうですねえ、それさえ直れば力そのものは上達してきているのですが」

ティアラも賛同し、こくこく頷いている。アスカはむっと顔をしかめる。

「何よ、いいじゃない、上達してるなら！」

《それにしてもですな、なぜ今頃になって昇級判定を頼まれたのですかな？　これまでそのようなことは一度も仰らなかつたではありませんか》

老鳥人——魔法協会会長のヘベルクが問うと、アスカは宙を仰いだ。

「んー、母様にちゃんと修行しなさいって言われたのもあるけど……やっぱり、いつまでも魔法士^{ノエウイ}つてのは王女としてまずいかなーって」

もう少し早く自覚していれば、とヘベルクは思ったが、あえて口には出さなかつた。

「で、今回はどうなの？　昇級は？」

《ふむ。なかなか腕は上がりましたしの、合格ですじゃ》

「やったあ！　じゃあ魔法師^{イオクイノ}に昇級ね！　ここならほとんど時間の流れを気にしないですむから、頑張ったかいがあつたわ」

今、アスカたちがいるのはレイチャネルと言う魔法具の中だ。この中は外の空間とは時間の流れが違い、外よりもゆっくり時間が流れる。

「そうですね。これまでの三ヶ月間、修行を続けていらつしやいましたものね。かなりの進歩です」

感動を声ににじませるティアラ。ほんの十個ほど、しかも基本的な魔法ばかりしか使えなかつたアスカが、今や三倍近い数の魔法が使えるようになった。

修行をサボってばかりだったアスカを考えれば喜ばしいことこの上ない。

「もうー、泣くことないじゃない」

「泣いてませんっ」

とは言っているが、実際涙ぐんでいる。

「さて、じゃあもう一頑張りしますか」

ぐっと気合いを込めて、アスカは再び的に体を向けた。

入学式、HRと終わり――放課後、バルカンと明衣子が教室までやってきた。

「帰ろうぜ、飛鳥」

金髪長身のバルカンは目立つ。渡羽は注目を浴びたくなくて、速攻で教室を飛び出した。帰りがてらに、一緒についてきた鹿取を紹介する。

「どうも。鹿取淳平です」

「初めまして。高尾明衣子です」

「坂月将之介。あだ名はバルカンだ」

「略して『バカ』と呼んであげて下さい」

間髪入れずに笑顔で言う渡羽。

「ちよっ、なんだよそれっ」

「うん、分かった。よろしく、バカ」

「いやいや飛鳥の言うとおりにしないでいいから！ 飛鳥あゝっ」

「冗談ですよ（半分本気でしたけど）」

「心の声が聞こえるようデスヨ!？」

明衣子には見慣れたやり取りをしている二人に、鹿取が「ぷつ」と吹き出した。

「あははっ、渡羽っておとなしそうな顔して結構言うんだね。おもしろいや。いつもこんな感じ？」

と、明衣子を見る。明衣子は初対面の人と話すのが苦手なので、少し口ごもった。

「あ：えっと、うん：最近はこんな感じ……」

「そっか。じゃあ、これからは毎日このコントが見れるわけだ」

「コント、ですか……」

バルカンと同列に見られたことが、渡羽にとっては少なからずショックだった。

「何はともあれ、よろしくな」

鹿取はにっこりと笑った。

入学式から数日後、昼ご飯を教室の隅で広げて鹿取が渡羽たちに問いかけた。

「ねえ、君たちは部活どうする？」

「部活？」

「ここは入部必須じゃないけどさ。僕はテニス部かな」

「オレは柔道部だな」

「わたしはまだ特に……渡羽くんは？」

「俺ですか？」

答えようとした渡羽より先に、バルカンがにまっと笑って割り込んできた。

「飛鳥は園芸部だろー。あ、でもここって園芸部あんのか？」

「勝手に人の入部先決めないでくれますか。俺は文芸部に入るつもりです」

バルカンの方を見ようとせず、渡羽はスパツと言う。するとバルカンは目を丸くした。

「えっ、おまえ、園芸部じゃねーのか!？」

「…なんでそんなに園芸部に入りたいんですか」

「いや、中学ん時、三年間ずっと園芸部だったし」

「だからなんですか。高校に入っても、中学の時に入っていたものと同じ部活に入るとは限らないでしょう」

ため息交じりに返す渡羽。バルカンはミートボールをつつきながら「まあそうだけだよ」と言葉を濁した。

「だってさ飛鳥、好きだったじゃん。土いじり」

「ガーデニングと言って下さい」

「なのになんで文芸部なんだよ」

「もちろんガーデニングは好きですよ。でも俺は、将来小説家になれたらいいなと思っているので、文芸部に入って文章力を高めたいんです」

微笑む渡羽に、三人は軽く目を瞠り、三者三様の反応を見せる。

「小説家？ 初めて聞いたぞっ」

「将来の夢があるっていいわよね」

「へえ、渡羽って小説家目指してるんだ」

「なれたらいいなって程度ですけど」

「でもなんで急に」

なぜか口を尖らせるバルカン。どうやら内緒にしておいたことに少しばかり腹を立てているらしい。

別に話すほどのことでもないと思って言わなかったのだが。それにバルカンに言うとなればこれ言われそうで嫌だったのだ。

「：ある人が修行を頑張っているから、俺も頑張ってみようかな、と思ったんですよ」

誇らしそうに笑った渡羽を見て、バルカンと明衣子は『ある人』が誰なのか察した。

バルカンは少し考えてから、観念したように一つ息を吐き、ぺしと渡羽の背中を叩いた。

「そっか。んじゃ頑張れよ！」

「うぐっ！ ：ゲホッ、ちよっ！いきなり背中叩かなくてくれますか！？」

口に入れたミニトマトが危うく喉に詰まるところだった。食事中に背中を叩くなど、（昔から思っていたが）なんて非常識な奴だろう。

「だ、大丈夫？ 渡羽くん！ もうっ、バルカンくん！」

「ははっ、悪い悪い」

「文芸部かー、真面目な子がたくさんいそうだね。渡羽は見た目、真面目クンだから気が合う女の子いるかもね」

からからと笑う鹿取に、渡羽は眉をひそめた。

「：なんの話ですか？」

「え？ 部活と言ったら部内恋愛でしょー♪ いい出会いが転がってるかもしれないじゃん」

渡羽は複雑な顔をする。自分はすでに彼女がいる身なので、今さら新しい女の子と出会ってもどうしようもないのだが。

一方、明衣子は顔をこわばらせる。渡羽とアスカの関係を、口には出さずとも知っているとはいえ、渡羽への想いをあきらめたわけではない。

渡羽が文芸部に入り、アスカに加えて新しいライバルができてしまったら……

（わたしなんか相手にされないかも……）

ただでさえ、渡羽には意識されていないのだ。ここでもうにか頑張らなくては。

「わ、わたしも文芸部、入ろうかな……」

教室の喧騒にかき消されがちだったが、渡羽はきちんと聞いている。

「高尾さんも文芸部ですか？」

「えっ、あ……うん……入ってみようかな」

「そうですか。一緒に頑張らしましょうね」

破顔一笑。明衣子はぽぽと頬を朱く染めた。

「あ、出会いと言やーさあ、オレのクラスにうわさ好きのカメラ小僧がいるんだけど、そいつから聞いた話でさ、この学校にすんげえかわいい先輩がいるらしいんだよ」

「何々？　どんな人？」

食いついたのは鹿取だけである。渡羽も明衣子もさして興味はなさそうだが、一応バルカンに顔を向ける。

「周りからは『めぐ』って呼ばれてて、小さくてツンデレでかわいいんだとき。いつも人に囲まれてるから一目見ればわかるって」

「うわー、見てみたいなあ。それだけ人気があるなら、もう彼氏持ちか好きな人いるかもしれないけど、もしかしたらってこともあるかもしれないし」

「だよなあ。一目見たいよな。で、うまくいけば彼氏の座に収められつかかもしれないし」

妄想を膨らませ、バルカンと鹿取は盛り上がっているが、渡羽はすぐに興味をなくして弁当をつつき始める。

明衣子は渡羽が興味なさげにしているので、内心少しほっとした。

「なっ、放課後に見に行こうぜ、飛鳥」

「はい？」

「行こうよ、渡羽」

「どこにですか？」

「どこって、うわさの『めぐ先輩』を見にだよ」

「：俺は別にいいですよ」

興味ないし。しかしバルカンと鹿取はすぐにはあきらめなかった。

「行こうぜ、飛鳥あ」

「そうだよ、見るぐらいいいじゃん」

「行きません」

「見ないと損するかもだぜ？」

「損したっていいです」

「もしかしたらお近づきになれるかもよ？」

「別にならなくてもいいですし」

頑なに拒否する渡羽に、鹿取は不満げな顔で上目遣いに無言の圧力をかけるが、バルカンは肩をすくめた。まあ、飛鳥の気持ちも分からなくはない。

「わーったよ。しゃーねえ、オレたちだけで行こうぜ、淳平」

「えー？」

バルカンは渡羽の耳元に顔を寄せ、囁いた。

「おまえはアスカさん一筋なんだもんな？」

途端に渡羽は顔を真っ赤にさせ、うろたえた。

「ななっ…」

にやっと笑うバルカン。渡羽は顔を真っ赤にさせたまま悔しげに顔をゆがめた。珍しくバルカンに一本とられた渡羽であった。

その翌日。渡羽は、やけに景気の悪い顔をしているバルカンと鹿取に、うわさの先輩のことを訊いてみると、

「はぁ……結局、うわさはうわさでしかないって感じだった」

「は？」

「あれは見なくてよかったかも。見ない方がきれいな想像のまま終われたよ……」

「……………」

あまりにも気を落としまくった二人に、

（『めぐ先輩』ってどんな人だったんだろう……）

渡羽は別の意味で興味を覚えた。

20th 入学（後書き）

追伸列記簿

ストーブ出してぬつくぬく。だけど今日はそれほど寒くない土曜日。

こんにちは。頭痛と戦いながらあとがきを書いている甲斐日向です。マジラビ第二十話をお届けしました。

本編の季節は春。ついに渡羽も高校生！ いや、ようやくここまで来たかって感じですよ。もう一年近く経つんですね。

本編を読む限りまったく分かりませんが、渡羽は少しずつ背が伸びています。成長期ですね。シンも言っていましたね。

さてさて、今回は新キャラが出てきましたね。彼、最初は名取だったんですが、僕が今読んでいる某マンガに同名キャラがいたので変えた方がいいかなーと思い、変えました。

別に同名キャラなんてたくさんいるんだし、いいかなーとも思いましたが、自分で納得がいかなかったので。

鹿取は男版アスカのイメージで書いてます。アスカが男だったらこんな感じかなーと。

明るいお調子者系なので、バルカンとは気が合うでしょうね。かといってバルカンほど渡羽に邪険にされるわけでもなく。

結構気に入ってるんですが、今後彼が出てくることはないでしょう。舞台が学校ではなくなるので。

次回は満を持して登場？ 渡羽父の登場です！ ベールに包まれていた父の登場を機に、話の流れはある方向へ向かいます。

なんか男の新キャラ多いですね？ というか、登場人物の男率が高い気がします。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

21th 予兆

「え、そうなんですか？」

買い物に出ていた渡羽は、井戸端会議をしていたおばさ…奥様方の話に、大きく目を瞠った。

「そうなのよお、もう残念よねえ」

「なじみ深いし、この辺りではあれが最後だったでしょう？」

「さみしいわよね…もう見れなくなるなんて」

頬に手を当て、しきりにため息をつく奥様方は、のっぽで眼鏡をかけた人と、恰幅のいい中ぐらいの背の人と、吊り目で背の低い人の三人組だった。

この三人は仲良し三人組らしく、よく一緒にいるのを見かける。

「今度の土曜が最後らしいわよ」

「まあ…じゃあ、その日は混むかもしれないわねえ」

「随分昔からあったわよね。私が子供の頃はもっと古くて…」

「そうそ、駅の売店に珍しいお菓子がたくさん売ってて、よく母にねだったわあ」

「駅と言えばあの辺りもだいぶ町並みが変わったわよねえ。昔はもつと…」

だんだん話が逸れ、思い出話に突入し始めたので、渡羽はさりげなく話を打ち切り、逃げるようにその場を去った。

おばさんたちの思い出話は始まると長いのだ。

奥様方から聞いたのは、渡羽の住む町で使用されている鉄道路線の一つが、近々廃線になるということだった。

その路線は渡羽家から最寄りの駅で、渡羽も時々利用しているので、さっきは本当に驚いた。

今や鉄道は、二本のレール上を鉄製車輪のついた電車や機関車が

走る、従来の鉄道システムではなく、モノレールやマグレブなどの新鉄道システムが主流となっている。

そのため、車輪で走る旧鉄道システムの鉄道は珍しいものとなっていた。

今度、廃線になる路線も、都内では数少なくなってしまった旧鉄道システムの列車だ。

奥様方の言う通り、市内では最後の旧鉄道路線だったのだ。

渡羽が最後にあの路線を利用したのは、夏にアスカとプールに行った時だ。

あの頃はまさか、この路線がいずれ廃線になるなんて思いも寄らなかった。

今度の土曜日だなんて急すぎる。と言っても、さっきまで自分が知らなかっただけで、前々からそんな話は出ていたのかもしれないが。

「ただいまー」

「あらっ、飛鳥、おかえりなさい。ちょうどよかったわ」

美鳥がぱたぱたと玄関に小走りでやってくる。やけにうれしそうだ。

「どうかしたんですか？」

「今ねえ、電話があったのよ」

「電話？ 誰からですか？」

「うふふ、お父さんよ」

「父さんから？」

渡羽はわずかに表情を明るくする。渡羽の父親は旅客船の船長で、日々世界中を巡っているいるため、年に数回しか帰らない。

連絡があったということはもうすぐ帰ってくるということだ。

「じゃあ、帰ってくるんですね、父さん」

「ええ。今週の土曜日ですって」

「…今週の土曜日？」

はて、どこかで聞いたような……

「：あ。母さん、その日に英高線えいこうが廃線になるって聞いたんですけど」

「ああ、そうそう。あそこは昔からよく使ってたから、ちよつとさみしいわよね」

今は新鉄道路線の方を利用する人が多いため、旧鉄道路線は廃線になるわけだ。渡羽もどちらかと言えば新線を利用している。

高校に行くにも、旧線を使って行けないこともないが、新線の方が近いのでそちらを使っている。

土曜日は普段なら学校は半ドンだが、今は短期休暇である皐月休みの時期なので休日だ。

「そうですね……そうだ」

一つの考えを思いつき、渡羽はボン、と手を打った。

そして土曜日。渡羽は午後からアスカと出かけることにした。

「それじゃあいつてきます」

「いつてきまーす」

「はーい、いつてらっしゃい」

渡羽とアスカ、それからティアラが向かうは――港。三人は渡羽の父親を迎えに行くのだ。渡羽の父、修吾しゅうごが乗る船は今日の午後、港に到着する予定らしいのだ。

港へは電車を乗り継いで行く。今日使うのは英高線。今日で廃線となるあの路線だ。

駅に着くと、駅周辺はやはり人が多かった。そこかしこで記念写真を撮る人を見かける。

電車に乗り込み、普段よりは客の多い電車に揺られ、アスカはふう、と一息をついた。

「渡羽、これって前にプールに行った時に乗った電車よね？」

「そうですよ」

「なんでこんなに人が多いの？ あの時はいくらに混んでなかった

わよね？」

「今日で廃線になるから、みんな最後の乗り納めなんでしょうね」
車両の中を見回し、渡羽は乗降扉に背を預けた。

「ハイセン？」

「路線の使用を廃止することです。今日を最後に、この路線は使われなくなるんですよ」

「この電車はもう動かなくなるってこと？」

窓に手を当てて、アスカは隣の渡羽に顔を向ける。流れていく景色は、プールに行く時に一度見ている。

「えーと、電車が動かなくなるのではなく、路線そのものが使われなくなるので、電車がここの線路を走ることはなくなるんですよ」

「ふーん、そっか。もう使われなくなるから、こんなに人がいるのね」

「そうです。かくいう俺たちもそうですけど。港に行くにはこの路線を使わないといけませんし、父さんを迎えにも行けて一石二鳥ですから」

「だから修吾父様を迎えに行くって言ったのね？」

「はい」

アスカはくすくすと笑って窓の外に視線を移した。

これまでは、到着時間がはっきりしないから迎えに行ったことはほとんどないと言っていたのに、今回迎えに行くと言ったのはそのためだったのか。

そうして電車に揺られること四十分、乗り換えの駅に着くと人の流れに乗って電車を降り、駅を出る。そこから十分ほど歩いて別の路線に乗り換えた。

ここからはモノレールで、十五分ほど乗ると港町が近づいてくる。駅から出ると、海は見えないが潮風が吹きつけた。

船着き場まではここからバスに乗っていく。バスに乗ること二十分。ようやく船着き場に到着した。

「わーっ、これが人間界の海なの？　すごい、汚ーいっ」

潮風になぶられる髪を手で押さえながら、笑顔でズバツと正直な感想を口にするアスカ。確かに、本来の碧い海とは言い難い黒ずんだ海だが……

「まあ、仕方ありませんよね。この海も……だいぶ環境汚染にやられてるようですし」

小さい頃に渡羽が見た時からきれいではなかったが、久し振りに見ても環境汚染は進み続けているようだ。国内で碧くきれいな海など、北の海くらいなものだろう。

少しずつ失われていく自然に心を痛めながら、渡羽は海を見渡す。そして、船着き場に停泊している旅客船を見つけて焦った。

「あつ、父さん……」

数年振りに海を見て忘れていた。自分たちは父親を迎えに来たのだった。

テトラポッドに打ち寄せる波を覗き込んでいたアスカとティアラを、渡羽は慌てて引っ張って行った。

大きな客船からは次々と客がタラップを降りてくる。そして最後にタラップを降りてきた人物を認め、渡羽はタラップに駆け寄った。

「父さん！」

「ん？ 飛鳥？」

手を振る息子に、渡羽家の大黒柱・渡羽修吾はわずかに目を瞠った。

「お帰りなさい、父さん」

笑顔で出迎えてくれた息子に、修吾は「ああ、ただいま」と笑みを浮かべる。修吾は豊かなひげを蓄えた屈強な壮年の男性だった。

再会は一年半振りで、懐かしい父の顔に、渡羽は眩しそうに目を細める。

「だいぶ背が伸びたな、飛鳥。私とあまり変わらんじゃないか」

「そうですね、でもまだ伸びると思いますよ。何せ成長期ですから」

「ははっ、そうだな。ところで、こちらのお嬢さんは？」

渡羽の後ろに控えめに立っているアスカに目を向ける修吾。渡羽は振り返ってアスカを紹介する。

「今、うちに居候しているアスフェリカさんです」

「アスフェリカ・グランジェです。はじめまして！」

ぺこっと頭を下げるアスカ。渡羽の父親だと思うと緊張する。

修吾は全体的な雰囲気は渡羽に似ている。穏やかで優しいおじさまという感じだ。しかし、

「初めまして、お嬢さん。渡羽修吾です。こんなにかわいらしいお嬢さんが新しい家族だなんてうれしいよ」

物腰や口調は翔子を彷彿とさせる。きっと翔子は父親に似たのだろう。

「さて、私は一度会社に戻って、帰りの準備やら報告やらをしなくてはならないんだが：飛鳥たちはどうするかい？」

「どれくらいかかります？」

「そうだね：一時間弱かな」

「それくらいなら待ってますよ。その遊園地に行ってますから、終わったらヴァモバに電話して下さい」

「ああ、分かった」

修吾と別れ、渡羽たちは海に面した小さな遊園地に向かった。入園料は無料だが、あまり人は入っていないかった。

初めての遊園地に、アスカは子供のようにはしゃいだ。ジェットコースター、次にティーカップと乗って、アスカが勢い任せにティーカップを回したため、二人とも目を回した。

酔いを醒ますため、フラフラしながら渡羽が観覧車にでも乗ろうと提案する。

幸い、観覧車は人が並んでいなかったのですぐに乗ることができた。ゴンドラに乗り込むと、二人はイスにへたり込んだ。

「うゝ、まだ頭がくらくらするゝ……」

「回し過ぎですよ、アスカ……」

「だって、みんなくるくる回っておもしろそうだったんだもん……」
「あれは少し回せば十分なんですよ。あとは余力で回りますから……」

「でも、あたし少ししか回してないわよ……」

「いえいえ、何回も回してましたよ……」

ぐったりとしている二人に、窓辺に座っていたティアラが心配そうに顔を曇らせる。

「お二人とも、大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃなーい／ありません」

アスカは窓に肩を預けると、目を閉じてため息をついた。

しばらく三人は無言だったが、ゴンドラが頂上付近まで来た頃、ようやく気分が落ち着いてきた。

「だいぶ気分がよくなってきました……」

「ん、あたしも……」

寄りかかっていた窓から身を起こし、アスカはふと思った。

「そういえば、こうしてデートするの久し振りね」

「えっ、デート？」

「でもお邪魔虫が一匹いるけど」

意味ありげに、ちらっとティアラを横目で見るアスカ。

「すすみませんっ。今すぐこの場を辞させていただきますうっ！」

「冗談よ。元々、デート目的で来たわけじゃないんだし」

からからと笑うアスカに、ティアラはほっとする。

ピルルル

狭いゴンドラの中で電子音が響いた。渡羽がジャケットの胸ポケットからヴァモバを取り出す。

「もしもし。……はい……今は観覧車に………ああ、はい。分かりました」

「修吾父様？」

「はい。帰りの支度が終わったそうなので、今、こっちに向かってるそうです。観覧車から降りたら第二ゲートの方に行きましょう」

「うん」

ゴンドラが下に着くまで、三人は徐々に水平線に沈んでいく夕日を眺めた。

その日の夕食は修吾のみやげ話で盛り上がった。特に興奮していたのは美鳥だ。世界中を旅している修吾の話は、珍しいことや不思議なことだらけだからだ。

その夜、渡羽は修吾に呼び出された。庭に出ると、父はビール缶片手に空を見上げていた。

背後の渡羽の気配に気づくと、修吾は肩越しに振り返った。

「見てごらん、月が綺麗だよ」

言われて空を見上げると、目玉焼きの黄身のようにまん丸なお月様が浮かんでいた。

「本当ですね……」

「あの子が踊り出すのも無理はないね」

「あの子？」

修吾は渡羽を横目で見、くすりと微笑む。

「眼鏡を外してごらん」

「？」

言われるままに眼鏡を外すと、月明かりの中で、月を背に少女が空中で踊っていた。

ロングスカートを翻し、素足でステップを踏みながら舞い踊る少女。銀の長い髪に月の光が反射して煌めいている。

その美しさに渡羽は言葉もなかった。

「たまにはそうして眼鏡を外してみるといい。せつかく、あんなに綺麗なものが見えるのにもったいないよ」

そのまま二人並んで月影の舞を眺める。渡羽は修吾が月を見るために呼び出したわけではないことが分かったので、話を切り出すのを待った。

ややあつて、ビールを一口飲み、修吾が口を開いた。

「飛鳥。正直に答えてくれないかい？」

渡羽は意識だけを修吾に向ける。

「アスフェリカさんは普通の人間ではないだろう」

目を見開き、渡羽は修吾に顔を向けた。修吾は月を見上げたまま、微笑んでさえる。

だが、瞳は月を見ていなかった。ましてや少女でもない。どこか遠い、こことは別の場所を見ているような――

修吾は自分と同じく“視える”人だ。だからもしかしたら、アスカのことにも気づいたのかもしれない。今さら隠しても修吾にはもうバレている。

穏やかである半面、ピンと張り詰めたプレッシャーを感じさせる修吾の横顔に、渡羽は俯いた。

「うん：アスカは：魔法使いなんだ。この世界とは別の世界の……」

「そうか……：たくさんの異能者や人外を見てきたが：異世界の魔法使いというのは初めてだよ」

「父さん、でもアスカは……」

「分かっているよ。私は異能者や人外に偏見はないし：滅多に家にいないしね、今さら同居を反対したりはしないよ。それに母さんがそうさせないだろう」

美鳥にとってアスカの存在は貴重かつ憧れだろう。美鳥は常人だし、異能者や人外は世界中にいたとは言え、そうそう出会うものでもない。

「飛鳥は、アスフェリカさんと恋仲なのかい？」

唐突な質問に、渡羽は一瞬で赤面する。修吾はやっぱりという顔で笑った。

「飛鳥ももうそんな年頃になったんだね。早いものだ」
けれど、と修吾はわずかに憂え顔になった。

「異なる者同士の恋は：難しいよ」

渡羽は意外そうに目を丸くし、顔を上げた。修吾は空から視線を外さずに続ける。

「世界中を旅しているとね：いろんな人に出会うんだ。本当に、いろんなヒトにね。今回の旅でもそうだった」

今回の旅客の中に雪女の親子がいた。彼女は人間の男性と結ばれたそうだが、旅行前に離婚したらしい。

やはり種族の違いというのはどうしても壁を作ってしまうのだ。

彼女は仕方がないと笑っていたが、淋しさはぬぐえないようで、時折涙を見せた。

「お客さんの中にはね、時々だけれど人外がいることもあるんだ。

そういうヒトの話を聞いているとね：人間との対人関係に悩んでいるヒトがたくさんいるんだ。特に恋愛となると、人間とはうまくいかないことがほとんどらしい。」

人外と魔法使いでは違うかもしれないけれど：住む世界が異なることに、変わりはないんだろう？」

話を始めてから、初めて修吾が渡羽と目を合わせた。渡羽は言外に「あきらめろ」と言われている気がして、さっと目を逸らした。

「そう：だけど……一緒にいたいんだ。この気持ちは変えられない」
変わりはしない。アスカを好きな気持ちは、嘘じゃない。黙り込んだ渡羽に、修吾は小さくため息をついた。

「うん。誰かを好きになるのはいいことだし、大切にすべきだ。飛鳥のしたいようにすればいい。」

ただ、選ぶべき時が来たら、その時は慎重によく考えてから選びなさい。後悔することのないように」

ぼん、と渡羽の肩に手を置いてから、修吾はきびすを返して家の中に入って行った。

残された渡羽はのろのろと眼鏡をかけ、空を見上げた。

ついさっきまで浩々と照っていた月は、雲に隠れて見えなくなっ
てしまった。

城の最奥——禁断の間で、イリアタルテは巨大な台座の上で浮揚している、鈍く蒼く光る巨石の前に跪いた。

「パーガウエクオよ、最終選定が終了したとのことですが……」

イリアタルテが語りかけると、パーガウエクオの原石は答えるように発光が増し、その表面に一人の少女が映し出された。

顔を上げ、映し出された人影を見たイリアタルテは、目を見開き、わずかに顔をゆがめた。しかしすぐに頭を下げ、平静を装う。

「承知致しました。では、そのように発表致します」

立ち上がると、イリアタルテは足早に禁断の間を去る。

パーガウエクオが示した次期女王は、アスフェリカ・グランジェ・ウィルⅡマジカリアだった。

21th 予兆（後書き）

追伸列記簿

最近、空気が乾燥してきたせいか喉が痛いです。さつまいもやみかんがおいしくなってきました。

みかん大好き人間の甲斐日向です。マジラビ第二十一話をお届けしました！

今回は渡羽父・修吾さんが出てきましたねー。修吾さんも翔子さんと同じく、かっこいい方なので好きです。

最初の方で、鉄道についてなんやかんや説明しましたが、まあ簡単にいえば車輪のついた電車はほとんど廃れて、近未来的な交通システムになっているということです。

ドラ○ものの時代とまではいかないと思いますが、近未来の町を想像していただければよいかと。

本編はいよいよラストスパートです。この分だと、最終回は十二月に入ってしまうですね…中途半端だなあ。

そろそろ最後ということで、これまでのマジラビのイメージソングを発表しようかと思えます。僕は小説を書く時は、たいていイメージソングを作りますねー。その方が楽しいからです！

まず、オープニングは水樹奈々さんの『「好き！」』、エンディングは小松未歩さんの『輝ける星』です。

どちらもアスカ視点で歌詞が合っているのでよく聴いています。あとはだいぶ昔に、同じく小松未歩さんの『チャンス』も聴いてましたが、今はもっぱらこの二曲ですね。

「好き！」は初めて聴いた時に、ぱっと思いつかんだのがアスカたちだったの〜。曲の雰囲気といい歌詞といい、アスカにぴったります。

いつも、歌詞に合わせてアスカたちが動いているのを妄想しながら

ら聴いてたりします。

輝ける星は大好きで昔からよく聴いていて、マジラビを書く時に、合ってるかも！ と思ったんです。

五話の最後でアスカと渡羽が手をつないで、星空の下を歩いている時とか、タイトルどおりですよ。

興味がある方、知ってる方は一度聴いてみて下さい。

はてさて、次回はまたまた新キャラ登場で、最後の波瀾を巻き起こします！ どうぞ最後までお付き合い下さいませ。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

22th 恋哀

マジカリア女王——それは、魔法界・テュレーゼを統べる王でもある。

かつてテュレーゼミアル——当時はジョアロトと言った——が、人間界・リーフェに住んでいた頃……一人のマーティンとジョアロトの小さないさかいをきっかけに、戦争が始まった。

長い長い戦争。ジョアロトもマーティンも、たくさんの血を流した。

二百年にも及んだその戦争は、ある十人の若者たちによって幕を閉じた。彼らは全員ジョアロトであったが、中立の立場にあった。ほぼすべての魔法を使いこなせたとされる“究極の魔導師”マジカリア。

炎系魔法を得意とした“爆炎の貴公子”、アイクレート。

ワニの獣人で土系魔法を得意とした“怒れる大地”ワーディオ。

氷雪系の魔法を得意とした“白銀の道化”トウォーレ。

水系魔法を得意とした“焔水の幻惑士”ジェンデイス。

闇系魔法を得意とした“漆黒の乙女”パッフィーナ。

木系の魔法を得意とした“宝樹の愛し子”ユリウス。

雲族の妖精で雷系の魔法を得意とした“疾る蒼雷”ゲルド。

治癒魔法を得意とした“安らぎの淑女”ネゼレッタ。

緋色の体をもつ鷹の鳥人であり、光系の魔法を得意とした“緋色の光弾”ロードバグ。

彼らが現れた頃には、戦争は熾烈を極め、ジョアロトは『魔法使いは人間を魔法で傷つけない』という誓約を破って戦っていた。

マジカリアたちは中立軍として両者に和解を求めたが、両者は一歩も引かなかった。

何度訴えても聞き入れられず、中立軍のリーダーであったマジカリアは、マーティンとジョアロトがこの地で共に暮らすことは不可

能だと悟り、あることを提唱した。

「このまま戦争を続けていても互いに被害が増すばかり。だから我々ジョアロトは、この世界とは別の世界に移住するのはどうだろう」
マーティンは喜び勇んだが、ジョアロトは、なぜ自分たちが出ていかなければならないのかと猛反対した。マジカリアは言った。

「元々この世界に住んでいたのは彼らだ。我々は移住者に過ぎない。それに、この世界は彼らの為に在る世界で、我々はその恩恵に与っていただけなのだ。

だから、この世界は彼らに委ね、我々は新たに我々だけの世界を求めればいい。異界の住人の邪魔が入らない、リーフェとは別の新たな世界を」

ジョアロトたちは涙した。新たな故郷として愛してきたリーフェを離れることは、とても悲しかった。

戦争に“敗けた”から悔しいのではない。土地をマーティンに“返す”のが許せないのではない。

思い出深い故郷を“離れなくてはならない”ことが“悲しい”のだ。

そうしてジョアロトはリーフェを離れ、新世界・テュレーゼへと移住した。

その時に終戦へと導いた十人を称え、彼らの名前を国の名前とした。彼らは以後、十貴士と呼ばれ、伝説となった。

ジョアロトのほとんどはテュレーゼへ移住したが、中にはどうしてもリーフェを離れたくないという者がいたので、十貴士のうちの何人かがリーフェに残り、残留者をまとめることにした。

この残留者——ジョアロトの力が、のちに現代の異能として残っている。

マジカリアは十貴士の長として、テュレーゼを治める初代の王となった。代々、マジカリア国の女王がテュレーゼを統べる王となったのはこれが所以である。

次期女王が決定したという一報は、テュレーゼ全土に伝えられた。連日、現マジカリア女王のイリアタルテのもとには、マジカリア国民や王家親類、他国民、王族などあらゆるヒトビトからの祝いの言葉や、謁見を求められた。

明らかに疲れた顔のイリアタルテのもとに、新たな謁見者がやってきた。

立场上、だらけた姿を見せるわけにはいかないので、玉座の背にもたれかかって肩の力を抜いていたイリアタルテは、謁見間の扉が開かれた際に、ささっと姿勢を正した。

入ってきた人物を見て、イリアタルテは軽く目を瞠った。

「ご無沙汰しております、女王陛下」

ショートのコバルトブルーの髪にアイスグリーンの瞳。二十代前半くらいの青年は、やわらかい笑みを浮かべて、玉座に続く階段の前で止まった。

「レイゼル」

「よく来たな、レイ。元気でやっているか？」

シーウォルドの問いに、レイゼルはにっこりと笑った。

「もちろんですよ、国王様。私も後も元気です」

「そうか。しかしだな、レイ。今は公的な場ではないのだから『国王様』でなくていいんだぞ」

「ふふ。そうでしたね、父上」

レイゼル・ブレイファン・ウィルⅡトウオーレ。結婚前はレイゼル・グランジェ・ウィルⅡマジカリアーアスカとカリンの実兄である。

「あなただったの。なら肩肘張る必要はないわね」

イリアタルテはほっとして背もたれに寄りかかった。レイゼルはくす、と微笑した。

「大変そうですね、母上。連日の謁見お疲れ様です。けれど私もそのうちの一人ですから。」

アスカが次期女王に決まったんですね。おめでとうございます。アスカにも直接、祝いの言葉を伝えたいんですが、アスカはどこにいます？」

その言葉に、イリアタルテたちは顔を強張らせた。

「…アスフェリカは、リーフェにいるわ」

「リーフェに？」

眉をひそめるレイゼル。

「…まだ修行から帰ってなかったんですか？」

「ええ。一度、里帰りはしたのだけれど……」

「うむ。また渡羽殿と一緒にリーフェに戻ったな」

「渡羽…アスカの主人だという少年のことですよ？」

イリアタルテは、あごに手を当てて考えながら言うレイゼルが、シーウォルドの若い頃に少し似ていると思った。

しかしすぐさま、昔を思い出した自分が恥ずかしくなってその考えを振り払った。

だが、その様子を見て、若い頃の自分を思い出していることに気づいたシーウォルドが、ちよっぴり嬉しそうな顔をしたので腹が立ち、

「そうよ。人当たりの良さそうな穏やかな少年だったわね。どこぞの粘着質男と違って」

と、シーウォルドに一発、魔法弾をぶち込んでから笑顔で言った。レイゼルは慣れたもので、その流れを気にしたふうもなく続ける。

「アスカはその少年のために、リーフェに残っているんですね。」

ですが、それは女王候補だったからこそ通ったわがままです。次期女王に決定した今となっては、リーフェに留まるのは許されないことです。

アスカもう子供じゃありません。それくらいは分かっているはずですよ。ですから、私が連れて帰ってきましょう」

笑みを浮かべるレイゼルに、イリアタルテの一発から復活したシーウォルドは困った顔をする。

レイゼルの言うことはもつともだ。だが、あのアスカがそう簡単に頷くだろうか。

イリアタルテも同じことを考えているらしい。渋い顔をしている。だが、遅かれ早かれそうなるはずだった。イリアタルテは体を起こして背筋を伸ばした。

「いいでしょう。アスフェリカのことはあなたに任せます」

「分かりました。では早速行って参ります」

レイゼルは時空移動魔法の呪文を唱え、リーフェへと飛んだ。

女王と国王は気遣わしげに、息子の消えた場所を見つめた。

突如降り出した雨に、渡羽とアスカは慌てて洗濯物を取り込んだ。小雨ではあるが、すぐにはやみそうになかった。

「はい、これで最後ね」

「お疲れ様です、アスカ」

「急な雨だったけど、早く気づいてよかったね」

「そうですね。…でもおかしいですね、今日の降水確率は0%だったんですけど……」

洗濯物はほとんど乾いていたので、たたんでしまう。自分の分の洗濯物を持って、渡羽たちは二階の自室へと上っていった。

ちょうど渡羽が部屋のドアを開けた時だった。天井に、一度どこかで見たとのある黒い穴がぼっかりと口を開いていた。

それが何か渡羽が思い出す前に、黒い穴から人が降ってきた。

「うわあっ」

「どうしたの、渡羽!？」

声を聞きつけて、アスカが向かいの部屋から飛んでくる。そして、降り立った人物を見て目を丸くした。

レイゼルはアスカの姿を認めるとにっこりと笑った。

「久しぶりだね、アスカ」

「レ、レイ兄様!？」

なぜ兄がここに？ その理由に、アスカはもしかと思いついた。
少し前に出会った朱い眼の男の子を思い出す。

俯き、顔を強張らせるアスカ。レイゼルは渡羽に視線を移し、
「君が渡羽飛鳥君だね？ レイゼル・ブレイファン・ウィルⅡトウ
オーレです。君のことは父上たちから聞いているよ。いつも妹が世
話になっているね」

「いえ、そんな…」

「でも、それも今日で最後だ」

「え？」

レイゼルは微笑みを口元にたたえたまま、蒼い顔をしているアス
カに顔を向けた。

「先日、次期女王選定の儀が終了した。最終選定にて、アスフェリ
カ・グランジェ・ウィルⅡマジカリア。君が次期女王に選ばれた」
正式名を呼ばれた時に、アスカは大きく身を震わせた。ティアラ
と渡羽も目を瞠った。

「次期女王に選ばれた以上、リーフェに留まる理由はない。ここで
修行をする必要はないんだよ」

「ちょっと待って…」

「君はこれから次期女王として、いろいろと勉強しないといけない
ことがあるからね」

「なんで…」

「元々、こちらに長く留まることはなかったんだし、本来の流れに
戻っただけ…」

「待って、兄様！」

アスカは顔を上げて、兄に問いかけた。

「どうしてあたしなの！？ あたしが選ばれるなんておかしいわ！
だって、あたしまだ魔法師イオクイノになったばかりなのよ？ 規則を破っ
て人間界に留まってるし、それに……」

「——それがパーガウェクオの意思だからだよ」

「！」

「それ以上の理由はない。“パーガウエクオが選んだ”。それが重要なんだ。“どうして”だとか“なぜ”という言葉に意味はない」
そう言われてしまうと、テュレーゼミアルである以上、何も言えない。

パーガウエクオはテュレーゼの至宝。テュレーゼを支える柱であるパーガウエクオの意思は、テュレーゼミアルにとって“絶対”なのだ。

「だから今すぐマジカリアに帰ろう、アスカ。皆、君の帰りを待っているよ」

すっと差し出された手。アスカはその手を見つめ、一步後ずさりした。

「…イヤ。イヤよ、兄様っ。あたしはここにいる！ 渡羽のそばにいたいのに！ 帰りたくないっ！」

「わがままを言っではいけないよ。パーガウエクオの意思に反するつもりかい？」

「それは……でも……」

首を左右に振りながら、アスカは少しずつ後退する。その分、レイゼルが近づいていく。

渡羽は何か言おうと口を開きかけたが、思い留まる。

何を言うというんだ。アスカは王女で、元々女王試験のために人間界に來ただけ。

アスカが魔法界に帰るのは自然な流れなのだ。自分と出会ったのは偶然で、これは当然の結果だ。

強く拳を握りしめる渡羽。その耳にアスカの叫びが飛び込んでくる。

「あたしは渡羽が好きなの！ だから女王にはならない！」

レイゼルは眉をひそめ、ため息をついた。

「まったく：昔からこうと決めたら聞かないね。アスカにとって、マジカリアはその程度の存在だったのかい？ 多くの民より、君にとって大切なのはたった一人の少年なんだね」

悲しげに投げかけられた言葉が、アスカの胸を痛ませる。同時に、アスカの頭にはマジカリアの民の姿が思い浮かんだ。

城を抜け出して、内緒で町に出てきた自分を、国民たちは戸惑いながらも受け入れてくれた。

子供たちとは一緒に遊び、時にケンカをし、大人たちにはお菓子をもらったり、連れ戻しに来た兵士たちからかくまってもらったりした。

いつでも温かく迎えてくれた民たち。そんな彼らはアスカにとって大切なもの。そして渡羽も同じくらい。

初めて逢った時、その物腰や笑顔に目を奪われた。再会した時は正直がっかりした。

けれど、眼鏡があろうとなかろうと、優しくて見ていると心があったかくなる笑顔は変わらない。

彼の笑顔を見ると不安が消えていく。安心できる。彼のそばは自分にとってホッとできる居場所なのだ。

どちらも大切に、どちらかだけを選ぶなんて、難しすぎる。

うなだれたアスカを見てから、レイゼルは渡羽にも視線を向ける。二人とも同じように顔をゆがめながらうなだれている。

（父上の言ったとおりだ）

以前、アスカが女王試験終了後もリーフェに残っていることを両親に聞いた時、父からアスカと渡羽がどれだけ互いを大切に想っているかも聞いた。だからこそアスカはここに残っているのだから。

レイゼルは小さく肩をすくめ、微苦笑した。

「アスカ、君はテュレーゼミアルで、渡羽君はリーフェミアル。私たちは住む世界が違うんだよ」

「分かってる。分かってるけど……」

二人の想いの強さは知っていたから、アスカを連れ帰るのは容易ではないことは分かっていた。

だが、決定してしまったことはどうしようもない。パーガウエクオの判断に間違いはない。従うしかないのだ。

さつきマジカリアの民のことを言った時、アスカは確実に揺れていた。愛国心を捨てたわけではないのだ。

「アスカ。今すぐ連れ帰るのはあきらめよう。明日もう一度返事を聞く。その時までには気持ちの整理をつけておくといい」

そう言うのと、レイゼルはそつとアスカの頭を撫で、魔法で姿を消した。

アスカはうなだれたまま動かなかった。渡羽も黙ったままだ。ティアラは二人を交互に見、沈痛な面持ちになった。

夜の帷が降り、静寂が辺りを包み込んだ頃、渡羽は一人庭に出ていた。空を見上げれば――望月。

あの日と同じ丸い月が渡羽を見下ろしている。ひと月前、修吾が渡羽を呼び出したあの夜と。

あの時、修吾は言った。

『選ぶべき時が来たら、その時は慎重によく考えてから選びなさい。後悔することのないように』

それがきつと今だ。父さんは分かっていたのだろうか。いつかこうして別れの時が来ることを。

分かっていたのかもしれない。だから、ああ言ったのだ。

渡羽は庭の隅へと歩きだした。ほとんど陽の当たらない一角を見ると、一輪の花があった。

それは、一年前にアスカが植えたルティアの花だった。そう。アスカと出逢ってからもうすぐ一年が経つのだ。

この花は、アスカが女王試験中にこっそり種を植え、芽が出た時に一度、渡羽に見せる予定だったが、シンの邪魔が入りうやむやになってしまった。けれど後日、改めて見せてもらった。

魔法界では雨の多い険しい谷に咲く花らしいのだが、水を多く与えれば普通の土地でも育つらしい。

花が咲いた時、アスカは魔法で花が枯れないようにした。おかげ

でこの花はいつまでも枯れずにある。

一年。長いような短いような時間。アスカと出逢ってから的一年はとても騒がしかった。

この一年で自分はずいぶんと変わったように思う。それは外面的なものだけではなく、内面的なものも。

アスカとの出逢いは、渡羽にある変化をもたらした。それは渡羽の人生を変えるもの。その人生を歩むキッカケとなった少女。

アスカがそばにいることは自分にとってプラスになるかもしれない。だからできることなら、アスカにそばにいてもらいたい。

アスカの笑顔は周りを明るくさせるのだ。自分の気持ちに正直で、こと決めたらまっすぐに前を見て突き進む。そんな彼女は憧れで愛しく思う。

きつとこの先、こんな風に強く誰かを想うことはないだろう。

渡羽は瞑目し、アスカとの出逢いを思い返した。文字通り突然の降ってきた出逢いだった。

人が落ちてくるなんて思いもしなかったから、本当に驚いた。

聞き慣れない言葉を発して戸惑った顔をしている彼女を、かわいいと思い、見とれてしまった。その後すぐに藍泉語で話したのでほっとした。

もう少し、彼女と話をしてみたかったけれど、用事があったためその場を離れた。

（さっきの子、かわいかったな）

少し紫がかった蒼い髪。透き通るような碧色の瞳。

（もしかしてヨルムト人：？）

だから言葉が分からなかったのかもしれない。ヨルムト語はあまり聞いたことがなかったから。

でももう会うことはないだろう。そう考えた時、背中から声をかけられた。

振り向いてまた驚いた。もう会えないと思った相手がそこにいた。

どうしてここにいるのかという疑問よりも先に、また会えたといううれしさがこみ上げてきた。

なぜかぼかんとしていたようだけど、そんなことはどうでもよかった。

うれしさと胸がいっぱいになり、呆然としていると彼女は「間違えました」と言って、立ち去ろうとした。

せっかく会えたのに――気づいたら彼女を引き止めていた。

いろいろと話してショックを受けることも言われたけれど、お礼を言うために彼女が自分を追いかけてくれたことがとてもうれしかった。

うれしさのあまり、彼女を家に誘ってしまった。

今思えば、なんて大胆なことを。初対面の、しかも女の子を家に誘うなんて、普通なら引かれてもおかしくないだろう。

けれど、おかげでアスカはそばにいてくれるようになった。一緒に暮らして、恋人になって、時を重ねた。

これからそうであってほしいと思うけれど。自分は選ばなくてはいけない。どちらかの道を。

渡羽はもう一度、月を見上げた。

ベッドの上で枕を抱え、アスカは悩んでいた。魔法界に帰るか、人間界に残るか……

朱い眼の男の子が言っていたのはこのことだったのだ。迎えが来た時、二つの大きな選択に迫られる。それは今後の人生を決める大事な選択。

帰りたくないと言えば嘘になる。テュレーゼは自分が住むべき世界。マジカリアは生まれ育った国だ。

大切な、愛する故郷。捨てることなんてできない。でも、渡羽と離れたくないのも偽りのない本心なのだ。

帰りたい気持ちと帰りたくない気持ちが心の中でせめぎ合っている

る。

あの男の子は、すでにアスカが選ぶべき道は決まっていると言っていた。その答えも聞いた。けれども、どうしても踏ん切りがつかず、抱え込んだ枕に頭を押しつけた。

「姫様……」

滞空しながら、ティアラは氣遣わしげに、悩み続けるアスカを見下ろした。

こればかりは自分は何も言えない。アスカが自分で、一人で決める。なくてはいいけないことだ。

ふと、魔法力を感じて窓の外を見ると、一対の羽の生えた本が浮いていた。

「あれは……」

ティアラが慌てて魔法で窓を開けると、本は小さな羽を羽ばたかせて部屋の中に入ってきた。

顔を上げたアスカの前で滞空する本。魔宝具・エシリムウェルハ^{ロゼアス}1。

「レイ兄様の使い魔……」

エシリムウェルハーがぼらりと開く。何も書かれていないページに、ぼんやりと字が浮かび上がってきた。

【まだ整理がつかないかい？ アスカ。でも、君のことだからもうすでに答えは出ているんじゃないかな？ ただ、その答えを決定づけるものがなくて悩んでいる。】

エシリムウェルハーは、言葉を遠く離れた相手に文章で伝える物。アスカは字を目で追って微笑した。さすが兄様だ。見透かされている。

【君が渡羽君のことをどれくらい想っているかは知っているよ。だから勘違いしないでほしいのは、私は君たちを無理やり引き離れたわけじゃないんだ。】

「うん……大丈夫、分かってるよ、兄様」

兄様はただ、迎えに来ただけ。でも……

「でもね、兄様。あたしは、渡羽と離れたくないの……」

ページが勝手に繰られ、次の文章が浮かび上がる。

【パーガウエクオの意思は絶対で、選ばれたからには君はテュレーゼに帰らなくてはいけない。テュレーゼミアルはリーフエに留まっ
ていてはいけないんだ。

でも——本当に君が、渡羽君のそばを離れたくないというのなら、
リーフエで暮らしたいというのなら……ひとつだけ、方法はある。】
アスカは目を瞠った。渡羽と離れなくてすむ……？

【その方法とは……】

ページが繰られ、新たに浮かび上がった文章を、アスカは食い入
るように見つめた。

翌朝、アスカと渡羽は庭に出てきた。そこで待っていたレイゼル
に、アスカはゆっくりと近づく。

「おはよう、アスカ。気持ちの整理はできたかい？」

「はい。兄様」

アスカはまっすぐにレイゼルを見つめる。その後ろでは渡羽が無
表情で、アスカの『答え』を待つ。

アスカがどちらを選んだのかは渡羽も知らない。そして渡羽にも、
選んだ『答え』がある。

夏の少し熱気を含んだ風が吹き抜けた。アスカはゆっくりと目を
閉じ、『答え』を出した。

22th 恋哀（後書き）

追伸列記簿

どうもこんにちは。甲斐日向です。マジラビ第二十二話をお届けしました。とうとうマジラビもクライマックスです。

サブタイトルは『れんあい』と読みます。

今回はアスカの兄、レイゼルが出てきましたね。とても出したかった方なのでうれしいです！

これでアスカの家族は全員出てきましたね。あ、渡羽の家族も全員出たか。

レイは初め、もちよつと厳しい人にするつもりだったんですが、最後の新キャラなので少し甘くしました。

冒頭で、以前にちよろつと本編に出てきた十貴士について少し語りました。彼らの存在はリーフェにもテュレーゼにも大きな影響を残しています。

そして今回、初めてアスカと出逢った時の渡羽の視点を書いてみました。

アスカと逢った時、渡羽はこんなことを考えていたわけです。渡羽も一目惚れだったんですね。

レイゼルが登場したことで、アスカは最後の選択を迫られます。渡羽とアスカの恋の結末はいかに？ 気になる結末は次回の最終回で！

それでは、次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

23th 約束

一陣の風が吹き、全員の髪を揺らした。目を閉じたアスカは、出した『答え』を告げた。

「ごめんなさい」

アスカは――渡羽に向かって頭を下げた。

渡羽の表情は変わらない。アスカはそのまま続けた。

「あたし、やっぱり魔法界に帰るわ。昨日、一晩中考えて、いろんなことを思い出して、分かったの」

初めて渡羽と出逢った時のこと。最初の願いを叶えた時のこと。

渡羽が告白してくれた時のこと。

プールでバルカンや明衣子と会った時のこと。翔子姉様やその家族と会った時のこと。

そうして一つ一つ思い出して、改めて分かった。アスカは顔を上げ、微笑んだ。

「あたし、渡羽のことが大好き」

渡羽は軽く目を瞠る。アスカははにかんで、下に少し視線をずらした。

「この一年…一緒に日々を過ごしたね。楽しいことも悲しこともあったけど…幸せだった。この一年は渡羽との思い出いっぱいだよ」けれど、思い出を振り返っていつて、マジカリアに里帰りした時あの時の町のみんなの笑顔を思い浮かべた時、心が温かくなった。

「いっぱいだけど…マジカリアのみんなの笑顔を思い出したら、切なくなった。…守りたいと思ったの」

自分の生まれ育った国。いるべき世界。守るべき愛する民。それは、どうしても捨てられないもの。

アスカは真剣なまなざしで渡羽を見つめ返した。

「だから、あたしは帰らなくちゃいけない。あたしは王女で、次期女王としての責任がある」

一晩考えて出した『答え』がこれだ。出した方がいいが、渡羽と離れるのはとてもさみしい。

初めて好きになった人。この世界に来て初めて巡り逢った人。い
としい人と会えなくなるのはつらい。

それでも選んだ。この結果に悔いはない。だって——忘れるより
いい。

エシリムウエルハー

“伝書本”によってレイゼルから示された、リーフェに残る方法。
それは“忘れる”ことだった。

魔法界に関わることは、一部を除いて人間界の住人が知ってはい
けない。だから、女王試験が終われば試験に関わった人間からは、
魔法界に関する記憶を消される。

アスカがこれからもずっと人間界に残っていれば、いずれ魔法界
の存在を人間が知ってしまう恐れがある。だから人間界に残りたい
なら、魔法界での記憶をすべて忘れなくてはならない。

家族のことも、魔法のことも、そして渡羽のことも。なぜなら渡
羽は魔法界の存在を知ってしまったっているから。

魔法界に関わったものすべてを忘れ、まっさらなただの人間とし
て人間界で生きること。それが女王に選ばれてもなお、人間界に留
まれる唯一の方法だ。

もちろん渡羽からもアスカの記憶は消え、二人は知らない者同士
となる。けれど結果的には、渡羽のそばにいたいというアスカの願
いは叶う。互いに記憶がないだけで。

それでもいいというのなら、リーフェに残ることができるのだが。
アスカはそんなのは嫌だった。

忘れて互いに見知らぬ者として同じ世界にいるくらいなら、違う
世界にいても記憶があった方がいい。

「魔法界に帰ったら：もう渡羽には会えなくなるけど、これがあた
しの選んだ道なの」

悲しげに微笑むアスカ。渡羽は表情を消し、ただアスカの目を見
つめ返している。

「それにね、女王の役目は魔法界を統べ、守ることだけど…もう一つ、大事な役目があるの。それは…リーフェを守ること」

テュレーゼミアルの故郷であるリーフェ。遠い昔、ジョアロトが新世界へと移住する時、一部のジョアロトがリーフェに残ることになった。

そのジョアロトたちを守り、導くために、誰かがリーフェに残らなくてはいけなかった。

十貴士の一人であり、マジカリアの恋人でもあったアイクレート。彼はそれを望んだ。

『アイクレート』

一人、丘の上から町を見下ろしていたアイクレートは振り返った。

『…マジカリア』

微笑んで佇んでいたのはいとしい恋人。

『おまえの考えていることは分かる。リーフェに残りたいんだろう？』

『！』

『「どうして分かったんだ」とでも言いたそうな顔だな。分かるに決まってる。おまえはそういう男だ。愛よりも仕事を優先する』

微笑するマジカリアに、アイクレートは顔をゆがめて顔を逸らした。

『…すまない』

『なぜ謝る？ 私だって似たようなものだ。それに、そういう奴だと知ってて、私はおまえを愛した』

目を伏せ、マジカリアはそっと恋人の胸に手を当てた。アイクレートの鼓動が手に伝わってくる。

『マジカリア…オレは、彼らを放ってはおけない。君とともに新世界には行けない。だが』

顔を戻し、アイクレートは痛みをこらえるように言った。

『君を愛している。心から、誰よりも』

『：知っているよ』

アイクレートと目を合わせ、マジカリアは初めてさみしげに笑った。つらいのは互いに同じ。

切なげにほんのわずか見つめ合い、アイクレートは一度目を伏せると、真剣な表情でマジカリアの瞳を見つめ返した。

『どんなに離れていようと、二度と逢えなくなろうとも、オレは君を愛し続ける。そして守り続ける。君と、君が愛したこの世界を』

『ああ。私もおまえを愛し続ける。遠く離れてしまっても、逢うことはできなくなっても、守ってみせるよ。おまえと、おまえの住むこの世界を』

その気持ちも互いに同じだから、マジカリアも涙を抑えて真剣なまなざしで頷いた。

互いに守ると誓った。愛し続けると誓った。遠く離れていても、心は繋がっていると。

その誓いは、マジカリアがテュレーゼの女王になってから、代々受け継がれることとなる。

テュレーゼとリーフェを守ること。それがテュレーゼの女王の役目。

泣きそうな顔で、アスカは笑った。拳を握りしめていないと、涙があふれそうだった。

「あたしね、本当に渡羽のことが好きなの。渡羽に関わるものの全部が好き。美鳥母様や修吾父様、バルカンに明衣子、翔子姉様……みんな大好き。そのすべてを守りたい」

マジカリアがアイクレートに誓ったように、自分も守りたい。離れても、逢えなくなっても、そうすることで、いとしい人を守るのなら。

「あたしは、テュレーゼの女王になって、渡羽の住むリーフェを守

りたいの！」

守るために、別れることを選んだ。あなたのすべてを守れるなら、さみしさもつらさも我慢しよう。マジカリアもきっと同じ思いだったに違いない。

アスカの叫びを聞いても、渡羽はしばらく無言だった。ちらっとレイゼルを見ると、レイゼルは腕を組んで、自分たちの様子を見ていた。

テュレーゼに帰る。それがアスカの出した『答え』。なら、自分の『答え』は――

「アスカがそう決めたのなら、俺は何も言いません」

渡羽は微笑する。アスカは大きく目を見開いた。

「俺も一晩中考えました。正直、アスカとは離れたくありません。でも、これは俺が選ぶことではないと思ったんです。だから、アスカが選んだことに従おうと」

自分には、アスカに帰った方がいいと薦めることも、帰らないでほしいと引き留めることもできない。どっちを言っても、アスカは困った顔をするだろうから。

渡羽はアスカに歩み寄り、アスカの手を取った。

自分を変えてくれた人。自信が持てなくて、将来の夢をあきらめていた自分。けれど、アスカを見ていて、もう一度頑張ろうと思った。

アスカに出逢わなければ、今も“小説家になりたい”という夢をあきらめていたかもしれない。

アスカの揺れる瞳を覗き込み、渡羽は満面の笑みを浮かべた。

「君と逢えてよかった。好きだよ、アスカ」

その瞬間、アスカの瞳から大粒の涙が零れた。流れ落ちる滴。アスカは顔をゆがめ、渡羽に抱きついた。

「渡羽……あたしも……あたしも大好きっ。渡羽に逢えてよかったよ……っ。

ごめんね、ずっと一緒にいたかったけど……ごめんね、ありがと

う…っ」

アスカは渡羽の胸で泣いた。渡羽はアスカをぎゅっと抱きしめた。そのぬくもりを忘れまいとするように。

アスカの傍らにいたティアラも涙ぐんでいる。レイゼルは頃合いと見たのか、時空移動魔法の呪文を唱えた。

地面に白い光の円が現れ、白光の柱が立つ。いよいよ別れの時が来たのだ。

泣きじゃくるアスカの背中をそっと撫で、渡羽はアスカの体をゆつくりと離れた。

「…アスカ」

「渡羽…あたし、守るから…ちゃんと…女王に、なって…っ。」

渡羽のいるこの世界を…守るからね…！」

「…はい」

「アスカ、そろそろ…」

レイゼルが声をかける。アスカはごしごしと涙をぬぐうが、涙はとめどなくあふれてくる。

ティアラが渡羽のもとへと飛んで行き、ぺこりと頭を下げた。

「渡羽さん、今まで…どうもありがとうございました…っ。私、渡羽さんのこと…忘れませ…ふえ〜ん」

泣き出したティアラに、渡羽は苦笑してティアラの頭を撫でた。

「ティアラも元気で。これからアスカのことを頼みますよ」

「はい…っ、もちろんです！」

何度も頷くティアラ。アスカはレイゼルを振り返り、最後にもう一度だけ、渡羽に抱きついた。

「渡羽…今までありがとう。…もし、もしもあの“約束”を思い出すことができたなら、その時は——あたしの名前を呼んで。あたしの、本当の名前を」

そう言って、アスカは渡羽の唇に口づけた。すぐに離れていくぬくもり。

渡羽は目を見開き、思わず手を伸ばしかけた。

「アスカ…っ」

光の柱へと走っていくアスカ。これでもう、逢えなくなってしまう。

いざ離れるとなると、切なさで胸が痛くなった。それでもアスカは走った。ティアラがその後を追う。

「アスカ…！」

もう届かないと解っていないながら、渡羽は腕を伸ばす。

胸を刺す痛みに、離れていく後ろ姿に、いとしさが募る。

アスカは体ごと渡羽を振り向き、後ろ向きで、とん、と地面を蹴った。

「さよなら、渡羽……」

アスカがの白光の中に飛び込んだ直後、レイゼルは小さく唱えていた魔法を発動させた。

光の中に消えていくアスカ。渡羽は声の限りに叫ぶ。

「アスカっ！ アスカアアアっ！！」

眩しい光が辺りを包み込み、渡羽は腕で顔を覆った。

光が消え、腕を下ろした渡羽はきよとした。

「あれ…？ 俺、なんで庭にいるんでしょう……」

レイゼルが発動させた記憶隠蔽魔法のおかげで、渡羽はアスカに関わる記憶を一切なくしていた。

そのため、なぜ自分が庭にいるのか理由が思い当たらない。

小首を傾げていると、家の中から自分の名を呼ぶ母の声が聞こえた。

「なんですか？ 母さん」

「あらっ、庭にいたの？ 飛鳥」

「はい。庭に出た覚えはないんですけど」

「？ まあいいわ、ちょっと来てくれる？」

渡羽が家の中に戻り、食堂に行くと、美鳥は頬に手を当てて、困

った顔を見せた。

「さつき、ちょっと休憩しようと思って、コーヒー淹れに来たんだけど……」

美鳥は一つのコップを差し出した。

「これ。誰のかしら？」

花柄のそれは、以前アスカが使用していたものだ。しかし、渡羽は怪訝な顔でコップを受け取った。

「…さあ？ 俺のじゃないのは確かですし、姉さんやましてや父さんのものではないでしょう」

数年前に嫁いで行った姉の物があるわけないし、こんなにかわいらしいのは姉の趣味ではない。

「そうよねえ。おかしいと思って他も見てみたんだけど、食器がね、一人分多いのよ」

「え？」

「誰かが使った形跡はあるんだけど…見覚えのないよねえ」

最近は客も来ていないので、美鳥と渡羽の分しか食器は使っていないはずだ。

食器は家族分あるが、翔子の分はもうないし、修吾は年に数回しか帰らないので食器棚の奥にしまっている。

今、食器棚の手前に置かれているのは二人分のはず。だが、見てみると確かに三人分。見覚えのない食器一式が一人分増えている。

「不思議よねえ。あ、でもこれはいいネタになるかも！ きゃーっ、不思議体験しちゃったわ♪」

美鳥はコップを食器棚に戻し、意気揚々と自室に戻って行った。

渡羽はしばらく考え込んでいたが、考えても分からなかったので、部屋に戻ることにした。

階段を上り、部屋に入ろうとドアノブに手を伸ばした時、ふと何か気になった。

向かいにある部屋——そこは以前、アスカが使っていた部屋だが、今の渡羽にとっては、結婚して家を出るまで姉が使っていた部屋、

としての意識しかない。

今はほとんど物置になっているから、なぜ気になったのか渡羽には分からない。けれど、渡羽はその部屋のドアを開けた。

「……………」

開けてみると、今までと何も変わらない、物が雑多に置かれた部屋だ。

「まあ、ですよ。何を期待してたんでしょう、俺」

さっきからおかしい。何か、頭に引っ掛かっているものがある。

心がざわついて仕方がない。

けれど、渡羽は気のせいだと自分に言い聞かせ、頭を振ってドアを閉めた。

そうして何日か過ぎていくうちに、渡羽はその疑問を忘れていった。

そして——それから八年後。

《念願の小説家デビュー、おめっとさーん！》

相変わらず、悩みとは無縁そうな（バカっぽい）笑顔に、渡羽はこめかみを揉んだ。

テレビ電話の画面の向こうにいるのは、小学校からの腐れ縁（別名・金魚のフン）であるバルカンこと坂月将之介である。

《いやー、ついにおまえも、一人前の小説家かぁ。よかったな、飛鳥》

「一応礼は言っておくよ、ありがとう。——で、君はデビュー作の小説読んだのか？」

眼鏡をくいと指で持ち上げ、渡羽が問いかけると、バルカンは視線を泳がせながら、

《あゝ…うん！ 読んだ読んだ》

「：君に訊いても無駄なことは分かってたけど、やっぱり読んでないんだな」

《いやー、読んだよ？ うん。ほら！ あれだ！ うん：おもしろかったぜ！》

バルカンは満面の笑みでぐっと親指を立てた。

「君にまともな感想を求めた俺がバカだった。いや、元から期待はしてなかったけど、念のためと思って言ってみたのに、本当、君には呆れさせられるよまったく」

肩をすくめ、やれやれと首を振る渡羽に、バルカンは画面に飛びついた。

《うっわ、何その顔！ その言葉！ ほんと、おまえって地の性格は意地悪いよな！

なんでか中学の終わり頃からは磨きがかかったしさあ。高校入ってから眼鏡かけててもほとんど地だったし。

「そういや、小説家になるって言い始めたの、その頃だったか？」
バルカンの言う通り、なぜか高校入学後、昔に思い描いて自信のなさからあきらめていたはずの、小説家になりたいと思う気持ちが強くなった。そして先日、その夢を叶えた。

夢に向かって進むうと思えるようになった理由は、今でも分からないが。

「ああ、君に話したのはその頃だな。地の性格が出せるようになったのは：どうしてかは分からないけど、俺の中で何かが変わったんだ」

それまでは、眼鏡をかけている時はどちらかと言えば消極的で、目立つのが苦手だった。

周りに流されることも多かった自分が、いつからか眼鏡をかけていても地の性格を出せるようになった。

子供の頃に、祖母にまじないをかけてもらった眼鏡。それは人外——霊が視えないようにするためのもの。

その眼鏡をかけるようになってから、眼鏡をかけると性格が変わ

るようになった。

けれど、その眼鏡は大学生の時に壊れてしまった。

性格が変わるのはまじないのかかった眼鏡をかけていたかららしい。眼鏡を新しくしたら、性格が変わることはなくなった。

まじないのかけられた眼鏡は一つしかなく、霊を視たくなかった渡羽は困って、ないのならいつそコンタクトにでもしようかと思っただが、長い間眼鏡生活だったため、眼鏡をかけないと落ち着かないことに気づいた。

なので無駄だと知っていても、今も眼鏡をかけている。まじないのかかっていない眼鏡では、嫌でも霊が視えてしまいが仕方がない。渡羽は紅茶をカップに注ぎ、口に運んだ。

《ふうん。ま、元々それが飛鳥の地だしな。オレはなんでもいいけどよ。あ、話変わるけどな、おまえ、いつ高尾にプロポーズするんだ?》

ぶうーっ

渡羽は盛大に紅茶を吹き出した。

《あー……大丈夫か?》

「ゲホッ、ゴホッ……いつ、いきなり何を言うんだ君は!!」

顔を真っ赤にして渡羽は怒鳴った。高尾明衣子。中学生の時に知り合い、高校に入ってからつき合い始めた渡羽の恋人だ。バルカンはにかつと笑う。

《だってよ、中学からのつき合いで高校の時にくつついて、今のおまえは念願の小説家になったわけだし。そろそろいいんじゃない?》
「う……いや、俺はまだデビューしたばかりで…生活も安定してないし…次の作品に向けて構想を練らないといけないし……」

煮え切らない渡羽に、バルカンが口を尖らせる。

《なんだよ、そんなこと言ったらいつまで経っても結婚できねーぞ! 高尾だって待ってるかもしれないしねーし》

「…でも、不安定な生活でプロポーズするのは……やっぱり、ちゃんと生活が安定してからの方がいいと思うんだ。…幸せにしてあげ

たいし」

俯きがちで、はにかみながら言う渡羽に、バルカンはため息をついた。

《そうかよ。ま、人それぞれだかな。にしても》

にやりと笑うバルカン。

《愛されてんなあ、高尾》

「！！」

赤面した渡羽は、思わず口を滑らせた。

「おっ、俺のことより、君の方はどうなんだよ！」

言ってしまったから、しまったと思った。途端にバルカンは、えへ〜としまりのない笑みを浮かべた。

《もちろん順調！　もうラブラブだぜえ〜。おまえにもこの幸せを分けてやりたい！》

バルカンは大学で出会った女性と先月、結婚したばかりだ。しかも、相手の女性は現在、六ヶ月だそうで。

《もう楽しみで楽しみでしょうがねえよ。四ヶ月後にはオレ、パパなんだよなあ〜》

なんてウザい父親だろう。絶対、完全にバルカンは親バカ、いや、バカ親になる。

渡羽は自分の失言と、バルカンのノロケに頭が痛くなった。

《なあなあ、飛鳥は産まれてくるの、男と女どっちだと思う？》

「気になるなら調べてもらえばいいだろ」

《バツカおまえ、先に知っちゃったら楽しみが減るじゃんか》

だったら訊くな。渡羽はだんだんイライラしてきた。似たような会話を、ここ数ヶ月で何度したことか。

「もう切るぞ。俺はいろいろとやらなくちゃいけないことがあるんだ」

《え〜、なんだよ。もう少し話聞いてくれたって》

ピッ、と渡羽はテレビ電話の通話ボタンを押して電話を切った。

小説家デビューして、渡羽はこの家を出ることにした。

一人落ち着ける場所で仕事をしたかったし、父親も退職し、家にいることが多くなったから、母親と二人でゆっくり過ごせるだろう。荷物整理を再開するため、自室に戻る。

渡羽が部屋に入ると、段ボール箱の上で退屈そうに足をプラプラさせたり、床でごろごろしたり、窓の外を眺めていた、三角帽子をかぶった三人の小人たちが、待ってましたとばかりに笑顔になる。

「待たせたね。じゃあ、続きやろうか」

三人の小人たちはこくと頷き、それぞれに割り当てられた仕事を再開する。

二十センチほどの背丈しかない彼らだが、見た目より力持ちで、自分より大きい物を軽がると運ぶ。

眼鏡が壊れ、霊をまともに見るようになってから、渡羽は少しずつそういったモノと関わるようになっていった。

霊は相変わらず苦手だが、妖精である彼らとはなかなか好い関係を築いている。今ではこうして、何かと身の回りの手伝いをしてくれるようになった。

「えーと、これはいる。これもいる。これは…どうしようかな」

整理をしていると、つんつん、とズボンの裾を引っ張られた。見ると、小人の一人が何やら小さな箱を持っている。

「？」

受け取って見ると、それは錠のついた金色の箱だった。手のひらにすっぽり収まってしまうほど小さな箱。

「こんなもの持ってたっけ…鍵かかっているみたいだけど、小さすぎるだろ、これ」

どことなく見覚えがあるようなないような。矯めつ眇めつしてみる渡羽。

（あれ？ 昔にもこんなことなかったかな）

何かがひっかかる。妙な違和感。思い出せそうで思い出せない。

（なんだろう。これに関して、何か大切なことがあったような…）
ずきん、と頭が痛んだ。思い出そうとすると、まるでそれをやめ

させようとするかのように痛みが増す。

（頭が痛い：！ なんなんだ、この箱は……っ）

小箱を落とし、渡羽は頭を抱えてしゃがみこんでしまった。小人たちは渡羽の異変におろおろするばかり。

時々、頭をよぎる映像。けれど、それはとても朧げで、蜃気楼のよう。

（誰か…いる？ 俺の記憶の中に、知らない誰かが……）

顔のない面影。これは女の子…？

『渡羽』

聞いたことのない、自分を呼ぶ声。いや、知ってる…？

錯綜する記憶。胸に突き刺さるような痛み。なんなんだこれは。

渡羽は震える手で強く頭を押さえる。その時、開けていた窓からふわりと、甘い香りが漂ってきた。

渡羽は動きを止め、顔を上げた。この香りは知っている。

庭の隅に、いつからか知らない花が咲いていた。その花は見たこともない花で、図鑑にも載っていなかった。

不思議なことに、その花は何年も枯れることなく、ずっと咲き続けている。

この香りはあの花だ。その香りを吸い込むと、頭痛が収まってきた。少しずつ、頭がすっきりしてくる。

そして突如、鮮明になる記憶。

「……！」

顔のなかった面影に表情が浮かび上がる。自分を呼ぶ懐かしい声。彼女との思い出の数々。

「あ……これ、は……」

甦る記憶。その中で、渡羽はある言葉を思い出した。

『渡羽：今までありがとう。…もし、もしもあの“約束”を思い出すことができたなら』

約束……そうだ、俺たちは約束をした。大切な約束を。

『その箱は今が開かないで。いつか開くべき時が来るから。その時

が来るまでは、なくさずに持っててね。約束よ』

そう言って、指切りをした。約束の証。

『その時は――あたしの名前を呼んで』

「アス……カ……」

のろのろと小箱を拾い、渡羽は小さく言葉を紡いだ。約束の言葉を。

『あたしの、本当の名前を』

「……アスフェリカ！」

……カチン……

錠の落ちる音がした。次いで、金色の小箱から眩しい光が発せられる。

驚いた小人たちが物陰へと隠れ、そっと顔を出して様子を窺う。小箱から発せられた光の中に、人影が見えた。渡羽はそれを見上げ、啞然とした。

そこにいるのは、記憶の中より少し年を重ねたいという人。

《……渡羽？》

あの頃より大人びた声。けれど、間違いない。彼女は――

「アスカ？」

《渡羽……思い出してくれたの？》

泣きそうなアスカの笑顔。渡羽の瞳が潤む。

「アスカ……！ 本当にアスカなのか！？」

《そうよ、渡羽。逢いたかった……》

アスカのまなじりに涙が浮かんだ。目の前にいという人がある。それは、ずっと願っていた奇跡。触れられないのが残念だけど、願いは叶った。

《渡羽……大人になったわね》

「……アスカこそ」

別れてから八年。渡羽は二十四歳。アスカは二十一歳。

魔法界と人間界では時間の流れが違うため、昔はアスカの方が年上だったのに、今では渡羽の方が年上になってしまった。

《渡羽、私、女王になったわ。今は母様にビシバシしごかれているの》

「あの女王様の指導なら、立派な女王になれるだろうな」

《うん。みんなは元気？ 美鳥母様や修吾父様とか……》

「元気だよ。父さんは退職して、今は家でのんびりする毎日で、母さんは変わらず童話作家を続けてる」

《翔子姉様は？ 確か、二人目が産まれるはずだったのよね？》

「アスカが魔法界に帰ってから無事に産まれたよ。男の子で、この前誕生日だったんだ」

産まれると言えば。顔をしかめた渡羽に、アスカは首を傾げた。

《？ どうしたの？》

「いや…バルカン、って覚えてる？」

《覚えてるわよ。バルカンがどうかしたの？》

「あいつにも…子供ができたんだ」

《えっ、うそ！ おめでどう！》

アスカは素直に喜んだが、渡羽はげんなりとした。

さっきのバルカンとの会話を思い出してしまったのだ。素直に喜ばしいと思えるのは最初のうちだけだ。

《みんなおめでたなのね。レイ兄様にも先月、一人目が産まれたし》

「そうなのか、それはうれしい話だな」

《ふふっ、それじゃあなんだか、バルカンの方はあんまりうれしい話じゃないみたい》

バルカンに対してきついのは変わっていないようだ。アスカは苦笑した。

《渡羽、眼鏡かけてるのに地でしゃべってるのね》

「ああ、眼鏡が壊れたから変えたんだけど、これにはまじないがかかってないから」

《そう。でも、そっちの方が見慣れているわ。》

あ、そうそう。最近ね、ティアラとクラウンが仲いいのよ。カリンの話だと、クラウンって昔からティアラのことが好きだったそう

なの》

それなら意地悪ばかりしないで、素直になればよかったのに。

そう父様たちに話したら、「素直に愛情を示せない人もいるんだよ」と、母様を見て言った。

そうしたら、「何が言いたいのよ、粘着質男!!」と、魔法弾を撃ち込まれた。どうして母様は怒っていたんだろう？

渡羽は苦笑した。その時の様子がありありと目に浮かぶ。

「そういえば、カリンはあれから…？」

記憶をすべて思い出したので、カリンのことも思い出した。あれから彼女はこうなっただろう。

《まだ魔法力は封印されたままだけれど、魔法牢からは出られたわ。今は目下、他人とのつき合い方を勉強中》

それを聞いて安心した。カリンもきつと変わるだろう。渡羽がほっとした時、鮮明だったアスカの姿がぼやけ始めた。

「！」

《あ…もうすぐ効力が消えるみたい。これは一度しか使えないから、今度こそ本当に逢えなくなってしまうけれど》

「そんな…やっと思ひ出せたのに」

しゅんとなる渡羽に、アスカはずっと気になっていたことを訊いてみた。

《ねえ、渡羽。明衣子とはどうなってる？》

すると、渡羽はかあつと頬を朱く染め、俯いた。よかった。この様子なら仲良くやっているようだ。

この四年間、ずっと気になっていた。明衣子には、ずっと渡羽を好きでいてほしいと頼んでおいたが、記憶隠蔽後どうなるかは二人次第だった。

明衣子はアスカが言わなくても渡羽を好きでいただろう。だが、渡羽が明衣子を好きになるかどうかは分からなかった。

自分がいなくなった後、渡羽が誰かと結ばれるのなら、明衣子がいいと思っていたから。明衣子にならいいと思っていたから、願

通りになってよかった。

《そう。幸せになってね、渡羽》

「アスカ……」

忘れていたとはいえ、元恋人に知られたのは、なんだか居心地が悪い。アスカは晴れやかに笑った。

《そんな顔しないでちょうだい。渡羽が幸せならいいの。私はその幸せを守るだけだわ》

一層、アスカの姿がぼやけ、揺らめいた。これが本当に最後だ。

渡羽は目に焼きつけるように、アスカをじっと見つめた。

「お別れ、なんだな……」

《ええ。もう一度だけでも逢えてよかったわ、渡羽》

「アスカ。俺は…離れていても、君を愛してる」

《！》

「他の誰を愛しても、君を一番に想う」

渡羽の真剣なまなざしに、アスカの顔が火照る。アスカは気恥ずかしそうに視線を逸らした。

《やっぱり大人になったわ、渡羽。そんなこと言うなんて》

姿が消えかけ、アスカは渡羽に顔を戻し、微笑んだ。

《でも、ありがとう。私もずっとあなたを想っているわ。さようなら、渡羽》

「さようなら、アスカ……」

完全にアスカの姿が見えなくなり、光も消えた。金色だった箱は黒ずんで、渡羽の手のひらに残っている。

二度と逢えなくなった最愛の恋人。けれど、心はずっと繋がっている。

物陰に隠れていた小人たちがおそろおそろ出てくる。渡羽は笑って、「もう大丈夫だよ」と、小箱を自分の机の上に置いた。

風に乗って、庭の隅に植えられたルティアの花の香りが流れてきた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

一筋の涙が頬を伝った。

再び逢えるかどうかも分からなかった最愛の人。記憶隠蔽魔法を打ち破り、彼は思い出してくれた。

とてもうれしかった。だからもう、心残りはない。

アスカは玉座から立ち上がり、窓辺に置いてある一つの植木鉢に近づく。

そこに植えられているのはルティアの花。

ただし、本物ではない。これは渡羽家の庭に植えたものをかたどったもの。

アスカが呪文を唱え、その花にかけた魔法を解いた。

花はしゅるしゅるとしおれ、枯れた。これで、庭に植えたルティアの花も枯れるだろう。

あれは、いつか渡羽に思い出してもらうための、最後の手段だった。もう役目は終わったから必要ない。

枯れた花をちよん、とつついて、アスカはパチン、と指を鳴らした。アスカの手元にグラスが現れる。

中身は黄色く透き通った飲み物——ヨパンジヨリー。

アスカは空を見上げる。里帰りした日のように、夜空いっぱいココウイアオに広がる点光を、ヨパンジヨリー片手に眺める。

渡羽と見たリーフェの星空ほどではないけれど、瞬く点光は綺麗ココウイアオ

だった。

この光の下に、たくさんのヒトたちが生きている。

ここが自分の生きる世界。守るべき、愛すべき世界——テュレーゼ。

——そして、もうひとつ。

次元を超えた遙か遠く。心から愛する、いとしい人が生きる世界——リーフェ。

ずっと守り続ける。どんなに離れていても、逢えなくなっても、心が繋がっている限り、いつまでも。

（END）

23th 約束（後書き）

追伸列記簿

十二月。一年が終わる月に、一つの恋物語が終わりを告げました。皆様、甲斐日向です。マジラビ最終話をお届けしました。

二〇〇八年五月に書き始めて七ヶ月……ようやく、アスカと渡羽^{ビリオド}の恋物語に終止符が打たれました。

この結末はマジラビを書き始めた時には出来上がっていました。本作マジカル☆ラビリンスのプロトタイプとも言える読み切りの方のマジ☆ラビでは、二人が恋人同士になって終了でしたが、本作では“その後”も描いています。

ちなみに僕の中で妄想していた読み切りの結末は、アスカは人間界に残り、二人が結婚して幸せな家庭を築く、というものでした。本作と読み切りは設定そのものが違うので、結末も違うのです。

もとは、オリジナルボイスドラマのシナリオとして書いて、その場限りで終わるはずだったマジカル☆ラビリンズが、まさかこんなに大きくなるとは、当時はまったく予想もしませんでした。

なぜか数年後に小説として書きたいと思い、設定などを変えて新たな物語としてこうして形になりました。

思い入れはなかなかのもので、こうして最終回を迎えられたことをさみしくもうれしく思っています。

最終回ということで、今回はいつもと違うBGMを流していました。小松未歩さんの『君がいない夏』と林原めぐみさんの『はなれていても』。この二曲です。

どちらかと言えば『はなれていても』の方がよく聴いていたかな。アスカ視点で歌詞がぴったりなのです。

ぜひ、聴きながら本編を読んでみて下さい！ 感動が倍増しますよ。

さて、内容については多く語りません。最後にいろいろ語ってしまおうと感動が薄れてしまいますので。

別々の道を歩むことになったアスカと渡羽ですが、想いはずっと繋がっています。結ばれることはなくとも、両想いです。

さて、マジラビは今回で終わりましたが、小説はまだまだ書き続けます！　すでに次回作の構想は出来上がっていますよ。次回作は短編かもしれないがまた長編か……

今まで、マジカル☆ラビンスをご愛読ありがとうございました。次回作での追伸列記簿でもお会いできることを願っています。

アネクドット？ イリアとシードの恋愛模様（前書き）

アスカの両親、イリアタルテとシーウォルドのなれそめ話。

アネクドート？ イリアとシードの恋愛模様

大国マジカリア。テュレーゼの創世神話の中で語られる十貴士が一人、“究極の魔導師”マジカリアから名を取ったテュレーゼの中心国。

その国の第二王女・イリアタルテは、一人気ままに王城の庭園を散歩していた。あの男が現れるまでは。

「はーっはっはっは！ ごきげんよう、イリア姫！」

耳障りな笑い声に始まり、風を取り巻いて目の前に降り立ったのは、隣国ジェンデイスの第二王子・シーワールドだった。

コバルトグリーン of の腰まで届く長い髪を一つに束ね、ストライプの入ったライトグレーのスーツを優雅に着こなす。シーワールドは微笑んで恭しく一礼した。

「お散歩ですか？ ご一緒しても」

「また出たわね、シーワールド！」

よろしいですか？　まで言わず、イリアは威嚇体勢を取る。フクシャ色のツンツンとした長髪にサルビアブルーの瞳。イリアはきつ、とシーワールドを睨みつけた。

「いい加減にしなさいよ！　毎日のように私につきまといて！　だいたいね、いくら王族だからってひよいひよいうちの庭に入っていないでくれる？　ったく、門番は何をしているのかしら」

「貴女に逢うためならば、どんな強固な壁も乗り越えて見せますよ。我が愛しのイリア姫」

そう言って、シーワールドはイリアの足元に跪き、イリアの右手を取ってその甲に軽くキスをした。

ぞわぞわっとイリアの背筋に悪寒が走る。イリアは悲鳴を上げ、シーワールドを爆発魔法で吹っ飛ばした。

「私に近づくな、粘着質男おーっっ！」

城の自室に戻ったイリアは、憤然としてドアを開けた。部屋で待っていた妖精のクオーツが驚いて飛んできた。

「イリア様、どうかなさったのですか？」

「どうもこうもないわ！　またあいつが来たのよ！」

「あいつ？」

「あの粘着質男よ！」

どさっとベッドに腰掛けて枕元のブラシを手に取り、イリアは乱れた髪を梳かす。クオーツは「ああ」と得心のいった顔で頷いた。

「ジェンデイス国のシーウォルド様ですね」

「あんな奴に“様”なんていらぬわ。キザ男で充分よ」

ぶんすかと怒るイリアに、クオーツは困ったように眉をハの字にする。

「イリア様はなぜそんなにシーウォルド様を邪険になさるのですか？　悪い方ではないでしょうに」

シーウォルド・リオーナー・ウィル・ジェンデイス。マジカリアと同じ十貴士“煌水こうすいの幻惑士”ジェンデイスから名を取った隣国の第二王子。

クオーツの言う通り、彼の悪い噂は一つも聞いたことがない。容姿端麗で、国民からの人望も厚く、魔法力も国内一の実力を持つ兄の第一王子にも引けを取らないとか。

アイスグリーンの切れ長の瞳は綺麗だと思ふけれど、あのしつこさにはどうしても腹が立つ。

シーウォルドとの出会いはついひと月前。ジェンデイス国との会合に出る父王に、珍しくついていったのが間違いだった。

他国の城に入るのは初めてだったので、イリアは父とジェンデイス国王にお願いして庭園を見学させてもらった。

その数日後、庭を歩いていたイリアを見かけたというシーウォルドが「一目で貴女を気に入りました」などと言って訪ねてきたのだ。それ以来、彼はイリアにつきまとっているというわけで。

「私は粘っこいものは嫌いな。それにね、あいつは私の好みの対極に位置してるのよ。いたっ」

怒り任せに髪を梳かしていたせいで、ブラシに髪が引っ掛かった。引っ掛かった髪の毛を外そうとすると、クオーツが魔法で大きくなり、そっと手を遮った。

「無理やりなさっては髪の毛が傷んでしまいます。綺麗な髪をお持ちなのですから大事にしませんと」

ブラシに絡まってしまったイリアの髪を、クオーツは丁寧に外してくれる。

ヒトと同じ大きさになったクオーツは、イリアより頭一つ分ほど背が高い。外見の年齢は十五歳のイリアより二つ年上くらいだ。

間近にあるクオーツの顔に、イリアの胸がどきんと高鳴る。さらにクオーツのセミロングの髪が胸の前に流れ、イリアはその髪に視線を落とす。

「……クオーツの方が綺麗よ」

風族特有の毛先だけ水色のクリーム色の髪。翠色の瞳。クオーツの髪はまっすぐにサラサラで、自分の癖っ毛なんかよりよっぽど綺麗だ。

「何か仰られましたか？」

顔を上げたクオーツと目が合いそうになり、イリアは頬を赤らめて顔を逸らした。

「な、なんでもないわ」

一度高鳴った鼓動はなかなか治まらない。イリアは一年前、クオーツに会ってから彼に恋心を抱いていた。

初めは兄ができたような感覚だったが、だんだんと彼に惹かれていった。

けれども、自分とクオーツは身分違いどころか種族も違う。

（私、どうして王家に生まれてきたんだろう）

せめて王家でなければ。庶民であったなら、種族の壁だけ越えればいい。それだけでも難しいことだが。

「はい、取れましたよ」

「ありがと、クオーツ。…ねえ、しばらくそのままの大きさでいてよ」

「え？　ですがこの大きさだと羽が邪魔になるかと」

「だったら羽は消せばいいじゃない。別にそんなに困らないでしょう？」

「……分かりました」

微苦笑し、クオーツは背中中の羽を消した。優しくて穏やかなクオーツ。イリアはそんな彼が大好きだった。あんなしつこい男よりもずっと。

その翌日も、翌々日もシーウォルドはやってきた。

今となっては、シーウォルドがイリアの周りをうろつくのも、シーウォルドがイリアに魔法で吹っ飛ばされるのも当たり前のことになっていた。

時には贈り物として、ドレスや宝石のついたアクセサリー、花束を持ってきたりもしたが、イリアは全部突き返した。

「もおーっ、しつっこいわね！　もう来るなって言ったでしょ！？　そんなもの持って来たって私はあんなにか嫌いなものよ！」

「照れていらっしゃるのですか？　そうですね、人前では恥ずかしいというならば、人のいない静かな所へまいりましょう。貴女のためにとっておきの場所を見つけたのです」

「ぎゃーっ、どこ連れてくつもりよ！　人気のないところって…クオーツ！　クオーツー！」

「ご安心を。何も危険などありません」

「あんと二人つきりっていうのが充分危険よ！　何されるか分からないじゃない！　クオーツ！　殺虫剤持ってきてー！」

「おや、虫が怖いのですか？　虫などこの僕が瞬く間に退治して差し上げます」

「退治されるのはあんたの方よ！ 近づかないでよ害虫ーっ！」

どんなに冷たくあしらってもシーワールドはイリアに会いに来た。ある時、イリアはシーワールドに尋ねてみた。

「ねえ、シーワールド。どうしてあんたは私につきまとうの？ 毎日そんな苦しい思いしてるのに」

魔法弾をぶち込まれ、うずくまっていたシーワールドは脇腹を押さえながら苦笑する。

「苦しくなどありませんよ。苦しいことがあるのなら、それは美しい貴女に逢えないことです」

イリアは思い切り顔をしかめた。

「よくもそう口が回るわね。恥ずかしくないの？」

「僕が貴女に逢いに来るのは、ひとえに貴女への愛ゆえ」

「ア、アイって……」

あまり聞き慣れないので赤面するイリア。シーワールドは立ち上がってイリアに近づく。イリアはさっと身構えた。

「イリア姫。僕は一目見た時から貴女に恋をしているのです」

「！」

微笑んでいるが、いつもと違って真剣な目だ。いや、いつだってシーワールドは真剣だった。

ただ、イリアはこれまで正面からシーワールドと向き合ったことはなかった。うっとうしさからまともに相手をしなかったのだ。

今、初めてシーワールドの瞳をまっすぐに見つめた。

「貴女は罪な女性だ。^{ひと}あの日から、貴女の瞳が、声が、姿が…僕を魅了してやまない。貴女を求めずにはいられないのです」

「んっ……」

リングのように顔を真っ赤にさせるイリア。正面きって言われたことがなかったので、イリアはシーワールドの顔が見ていられなくなり、ぐるんと体を反転させた。

（冗談やめてよ！ そんな真剣な顔で言うなんて反則だわ！）

シーワールドは背を向けたイリアの髪を一房手に取る。

「強く気高いイリア姫。僕を惹きつけてやまない貴女の心に、少しでも触れることができるのなら：僕は何度でも貴女に逢いに来ますよ。いくらでも愛の言葉をささやき続けましょう。」

ずっと貴女だけを想い、そばにいますから。イリア姫、何があるうとも僕は：貴女だけを愛し続けます」

「……………」

プロポーズとも言えるシーウォルドの告白を、イリアは耳半分で聞いていた。こんなふう^に真剣に気持ちをぶつけられたのは初めてで、戸惑ってしまう。

それに、どんなに想いを向けられても、自分には心に想うヒトがいるのだから。

何も答えずにいると、シーウォルドは手に取ったイリアの髪に口づけをし、「またお逢いしましょう、僕のイリア姫」と魔法で姿を消した。

動けずにいたイリアは、しばらくしてぽつりと呟いた。

「僕のイリア姫って：勝手なこと言わないでよ」

まっすぐに向けられたシーウォルドの想いに、イリアはどうしたらしいのか分からなかった。

それからシーウォルドはイリアに逢いに来る。シーウォルドの態度は相変わらずで、イリアは戸惑いながらもいつものように追い払った。

そんな風に日々が過ぎ、イリアは十六歳の誕生日を迎えた。

テュレーゼにはマジカリア女王を決めるための女王試験というものがあり、マジカリア王位継承者の十六歳の誕生日に数名の候補者が選出され、試験が行われる。

王家の者は十六歳になると自動的に候補者となるので、第二王位継承者のイリアも本日付で女王候補者となった。

候補者たちは人間界――リーフェへ赴き、主人^{あるじ}として選んだ人間

の願いを三つ叶えなくてはいけない。

王家の場合、女王試験を受けることは掟でもあるので、イリアはクオーツとともに掟に従ってリーフェへと向かった。

試験は順調。高校生の女の子を主人に選^{あるじ}び、願い事も二つ叶えた。リーフェに来て三日目のことだった。

「んーっ、あと一つ願いを叶えれば試験終了ねー！」

小高い丘の上にある木の枝に腰掛けたイリアは、両腕を空に向けて伸びをする。

「そうですね。ここまで何事もなくてよかったです」

「まあねー、リーフェに来てからうるさいのがいなくて平和だったし」

そう言っ、て、イリアははふと黙りこんだ。肩の近くに滞空していたクオーツが「どうしましたか？」と顔を覗き込んでくる。

「ふう……」

膝の上で頬杖をついてため息をつくイリア。

（この三日間、確かにうるさいのがいなくてせいせいしたけど、毎日顔を見ていたせいかあの男がいなくなんだか……）

「シーワールド様に会えなくて寂しいですか？」

「!!?」

ぎょっとしてイリアはクオーツを見る。

「な、何それ！ 寂しいって…なんで、あの粘着質男に会ってないからって私が寂しがらなくちゃいけないのよ!？」

「いえ、そのような顔をなさっていたのでそう思っただけなのですから…」

イリアは慌てて顔を逸らし、ぺちぺちと両頬を叩いた。

（うそでしょう!？ 私、そんな顔してたの!？）

シーワールドに会わない三日間を『寂しい』と思うなんて、ありえない。しかも、よりによってクオーツにそう感じているように見られるなんて。

（サイアク…ッ）

恥ずかしいような後ろめたいような、悔しさに似たものが込み上げてきた。

その後、イリアは主人の三つ目の願いを叶え、無事に試験終了となり、テュレーゼに戻ることにになった。

けれども、クオーツに言われたことが頭から離れなくて、ずっと心がモヤモヤしていた。

そんなモヤモヤを抱えたままテュレーゼに戻ったイリアを、城に仕えている者や家族はあたたかく迎えてくれた。

みんなからの労いの言葉に笑顔を返しながら、きっとあの男のことでだから、またキザなセリフでも吐きながら会いに来るんだろう、とイリアは内心苛立っていた。

（あー、ムカつく。全部あいつのせいだわ。今度顔出したら、問答無用で吹っ飛ばしてやるんだからっ）

と思っていたのだが。

「……シーウォルド様、会いに来られませんでしたね」

自室で窓から夜空を眺めていたイリアは、クオーツの言葉にぴくりと反応した。そう。シーウォルドは今日、一度も顔を見せなかったのだ。

シーウォルドの今までの言動からして、イリアが帰ってきたら絶対に会いに来るだろうと、魔法の準備をしていたのに。

「まあ、顔を見せなかった日が今まで全然なかったわけでもないし？ 明日は来るんじゃないの？」

と、この時は深く考えていなかった。ところが、その次の日も、また次の日も、さらに次の日も、シーウォルドが会いに来ることはなかった。

イリアがテュレーゼに帰ってきてから一週間。さすがのイリアもおかしく思い始めていた。あの粘着質男が一週間も顔を見せないなんて！

（それとなくお父様に訊いたら、あの男は体調を崩してるわけじゃないみたいだし。ということは、自分の意志で私のところに来てい

ないってことよね？ 一体どういうことよー!?)

今まで何度来るなど言っても会いに来ていたくせに。イリアは窓辺に持ってきた椅子に座り、頬杖をついてぶすくれた顔で外を見ていた。

こんなことは今まで一度もなかったので、困惑となぜか怒りがふつふつと沸き起こってくる。

(なんでこの私があいつのことでこんなにイライラしないといけないの!?) いえ、イライラしているのはいつものことだけど、いつもと違うイライラなのよ!)

怒りをぶつけたいのに、そうできる対象がない。イリアの怒りはついに頂点に達した。

「あーっ、もう! あっちが来ないならこっちから行ってあげるわよ!! 私に会いに来ない理由を聞き出して、今までのうっぷんを晴らしてやるんだから!!」

何よ、何度でも会いに来るとかそばにいらるとか言ってたくせに、うそつき男!」

イリアは勢いよく立ち上がり、おろおろとイリアの様子を窺っていたクオーツを連れ、ジェンデイス国へと急いだ。

ジェンデイス国は水の多い国で、川や池、湖があちこちにある。

湖の上に浮かぶジェンデイスの王城。イリアとクオーツの二人はそこにやってきていた。ジェンデイス城はシーウォルドの実家なので、彼はここにいるはずだ。

魔法力を辿り、庭園の奥にある林を抜けると、草原の広場のようなどころに出た。茂みに隠れながらシーウォルドを探していると、花畑に立っている彼を見つけた。

「いたーっ。あんの粘着質男! こんなところで花なんか眺めて何様のつもりよー!」

「イリア様に贈られる花を見つくりついていたのではありませんか?」

「え？」

クオーツがイリアの肩に止まって微笑む。その表情にイリアはどきっとするが、同時になぜかちくりと胸が痛んだ。

「シーウォルド様は真剣にイリア様のことを想っていらっしゃいます。それをイリア様も解っていますでしょう？」

イリアは口をつぐんで、俯いた。

（言われなくても解ってるわ。でも、私はシーウォルドよりもクオーツの方が…）

「あっ」

クオーツの焦ったような声に、イリアは顔を上げた。そして目に飛び込んできた光景に愕然とする。

花畑の中に立つシーウォルドのもとに、小柄な少女が笑顔で近づいていった。少女は花畑で摘んだであろう花束をシーウォルドに手渡す。

シーウォルドがうれしそうに笑みを返しながら受け取り、花束の中から花を一つ選ぶと少女の髪に挿した。

笑い合う二人はとてもお似合いだった。まるで恋人同士のようにズキン、とイリアの胸が痛む。だが、イリアにはその胸の痛みの理由が解らなかった。

どうして、シーウォルドと女の子が二人でいるところを見て胸が痛むのだろう。

クオーツが気まずげにイリアの顔を窺う。イリアは呆然と二人を見ていた。

その時、シーウォルドが自分の左耳のイヤリングを外した。あれは彼の法石だ。まさか……

シーウォルドが何事か話して、イヤリングを少女の前に差し出す。「！！」

無意識にイリアはその場で立ち上がっていた。自分の法石を異性に手渡す。それは魔法界での正式な求婚^{プロポーズ}の仕方だ。

茂みの音に気づいたシーウォルドと少女がこちらを振り向く。

「！ イリア姫…！？」

少女の方は驚いて口元に手を当てている。シーウォルドの驚いた顔なんて珍しい。けれど、今はそんなことはどうでもいい。

イリアの中に、言い知れない怒りと――悲しさが込み上げた。

「：そう。あんたがこの数日、私に会いに来なかったのはその子が原因だったのね」

「え？ あ、いえ彼女は：」

「私なんかよりその子の方がかわいいものね。素直そうで優しそうだし、私なんかとは大違い。だからその子に心変わりしたんでしょ？」

「心変わりだなんて、何を言っているんです？ 僕は」

「言い訳なんて聞きたくないわ！」

グッと両手を握りしめ、イリアはシーウォルドの言葉を遮った。

シーウォルドはイリアの表情に瞠目する。イリアは泣きそうな顔をしていたのだ。

「いつかはこんな日が来るんじゃないかって思ってたのよ。あんたはずっと私を想い続けるって言ったけど、あれだけ追い払われれば嫌にもなるわよね。あきらめなくなるわよね。当然よ。」

でもね、だからって突然顔を見せなくなるなんてあんまりじゃないの！？ 一言くらい言ってくれたっていいじゃない！ あんたが来なかったこの一週間、私がどんな思いで：っ」

ポロツとイリアの目から涙が一粒、零れ落ちる。イリアは弾かれたように踵を返してその場から逃げ出した。

「イリア様！」

「イリア姫！」

クオーツとシーウォルドの声に構わず、イリアは林の中を無我夢中で駆けていく。

モヤモヤを消すためにシーウォルドに会いに来たのに、モヤモヤが一層強まってしまった。もうどうしたらいいのか分からない。

苦しい。悲しい。誰か助けて。

「イリア姫！」

上空からシーワールドの声が降ってくる。足を止めたイリアの前にシーワールドが降り立つ。イリアは目に涙を溜めてシーワールドを睨んだ。

「なんの用よ！ 私のことなんかもうあきらめたんでしょ！？」

放っておいてあの子のそばにいなさいよ！」

「イリア姫、どうか落ち着いて。僕の話聞いて下さい」

「うるさいっ。あんたなんか大嫌いよ！ あんたは私の好みの対極にいるんだから！！ なのになんでよ！？」

ポロポロとさらにイリアの目から涙が零れる。ぬぐってもぬぐっても涙が溢れて止まらない。

「なんで…あんたに会えないからって、モヤモヤしなくちゃいけないの？ 女の子と一緒にいるところ見ただけで、胸が痛くならないといけないのよ。」

なんでっ…こんなに涙が出てくるのよおっ。全然、解らない……」
ついには顔を覆って泣き出したイリアを、シーワールドはそっと近づいていつて抱きしめた。

「何するの！ 放しなさいよバカ！」

「いいえ、放しません。放したくありません！ もう…離れたくありません」

ぎゅうっとシーワールドの腕に力が加わる。イリアは初めて感じるシーワールドのぬくもりに、少しだけ落ち着いてきた。

「ずっと貴女に逢いたかった。逢いに行きたかった。貴女に逢えなかった一週間…僕は狂おしさでどうにかなりそうだった。」

けれど貴女は女王候補となり、おいそれと逢える存在ではなくな

った」

「え…あんたが私に逢いに来なくなったのって……」
(私が女王候補になったから？ だから、気が引けてたというの？)
そんなことを気にする男だったなんて。いや、それよりも。

「それだけの理由で一週間、音沙汰なしだったの！？」 そんなの気

にしてないで、会いたいなら会いにすればよかったじゃないっ」

「そうするわけにはいかない。テュレーゼにおける女王がどれだけの存在かを貴女も知っているだろう」

今頃気づいたが、シーウォルドの口調がいつもと違う。シーウォルドの口から敬語以外を聞いたのは初めてだった。

「女王候補は、選定が終われば次期女王として選ばれるかもしれない。次期女王となれば、それこそ手の届かない存在だ。

そんな、この世界にとって大切な存在に、軽々しく近づくなんて……できるわけがない。してはいけないんだ」

いつも自信たっぷりのシーウォルドの声が、今は頼りなさげだ。

イリアは今までとは別の怒りを感じて、無理やりシーウォルドの腕を逃れる。

「何よそれ！ 私が女王候補になったから会えなかった！？ いずれは次期女王になるかもしれないからダメ！？ あんたの気持ちってその程度のものだったの！？」

「！」

「まだなくてもいいのに、なると決まったわけでもないものに躊躇するくらいの想いだったって言うのね！

ずっと私のことを想ってるって言ったくせに。そばにいるって……

……あ……愛し続けるって言ったのに、あきらめるの！？ 他の女の子のところに行くの！？ そんなの……勝手すぎるわ」

またじわりと涙がにじみ出てくる。視界がぼやけてきた。

「あんたはいつも勝手よ。うっとうしいくらい私の周りをうろついて、そのくせこんなふう突然いなくなって。勝手すぎるわ。どれだけ私を振り回せば気がすむの？」

この心のモヤモヤはあんたのせいでしょう！？ なんなのか教えなさいよ！ なんとかしなさいよ！ モヤモヤが消えるまで……他の女の子のところに行くなんて許さないんだから！！」

その瞬間に腕を引っ張られ、イリアは再びシーウォルドの腕の中にいた。

「うれしいですよ、イリア姫。貴女がそれほどに僕のことを愛してくれていたなんて」

「はあ！？ 何よそれ！？」

言葉通りうれしそうな声のシーウォルド。イリアはぼつと赤面した。

「先ほどの質問に答えましょう。貴女の心を惑わすモヤモヤは、嫉妬ですよ」

「嫉妬お？」

「ええ。貴女は僕が自分以外の女性というところを見て嫉妬したのです」

「なっ…バカ言わないでよ！ どうして私が嫉妬なんてしないといけないの！？ ありえないわ！ それより、こんなところさっきの子に見られたら大変でしょ！？」

「ふふ。確かに文句を言われるかもしれませんが。けれどご安心を。彼女は貴女が思い描いているような人ではありませんよ。彼女は僕の妹ですから」

「……………は？」

目を点にするイリア。シーウォルドはにこにこ笑いながらイリアの体を放した。

「いもう、と？」

「はい」

「で、でも！ あんた、あの子に法石を…」

「あれはですね、予行演習ですよ」

「予行演習？」

怪訝な顔をするイリアの前に、シーウォルドはさっき外したイヤリングを上着のポケットから取り出してみせた。

「本当は明日、貴女に逢いに行くつもりでした。これを貴女に渡すために」

差し出されたヒヤシンス色のひし形のイヤリング。自分の法石を異性に手渡すのは正式な求婚の儀式。

「イリア姫、誰よりも貴女を愛しています。ですからどうか、貴女の心の花を僕に咲かせて下さいませんか？」

イリアは差し出されたイヤリングをじっと見つめていた。これを受け取り、自分の法石を相手に渡せばプロポーズは成立する。

いつの間にかモヤモヤは消え、代わりに心臓がどきどきしていた。なぜか法石を交換してもいいような気がしていた。自分の好みとは対極にいる男だけれど、その想いは真実ほんとうのようだから。

「……あ、あんたがどうしてもっていうなら……もらってあげなくもないわ」

ためらってから、イリアがイヤリングを受け取った時だった。

「お兄様あゝっ！」

頭上から聞こえた少女の声に、イリアは手を引つ込めた。見上げると、さっきシーウォルドといった少女とクオーツが降りてきた。

「シードお兄様、ようやく見つけましたわ！ それと……ああん、イリアお姉様！」

「はい？」

自分を見て目を輝かせている少女に、イリアは目をぱちくりさせた。

「ああ、本物ですね？ 信じられませんわ。こんなにおそばで本物のお姉様を見られるなんて！ なんとという幸運でしょう！」

あら、いやですわ、あたくしったら名前も名乗らずに。イリアタルテ王女、ご無礼お許し下さい。あたくしはノーマリア・リオーナ・ウィルIIジェンデイスと申します。ノアとお呼び下さいませ」

ドレスの裾を広げ、お辞儀する少女。長い癖のない金髪。青い瞳。よくよく見ると、シーウォルドに似ていなくもない。

「イリア姫、ノアは昔から貴女に憧れていまして、姫へのアプローチも彼女のアドバイスなのですよ」

「はあ……えっと、ノア……でいいの？」

イリアが声をかけると、ノアは頬を紅潮させて身悶えした。

「ああん、お姉様に愛称で呼んでいただけなんて、あたくし幸せ

でとろけてしまいそうですわあ！ ああ、でもイリアお姉様は女王候補の身。『お姉様』だなんて軽々しく呼んではいけませんわよね！

「え、い、いいわよ？ 別に。好きに呼んでくれて」

「まああつ、なんてお優しいお言葉！ 素敵ですわ、イリアお姉様あん！」

清楚な女の子かと思ったらかななか激しい娘だ。さすがはシーウオルドの妹。しかし、なぜにここまで心酔されているのやら。

「ところでお兄様、プロポーズは成功しましたの？」

わくわくと尋ねるノア。シーウオルドは笑って頷いた。

「ああ、今法石を受け取ってもらったところだ」

「まあ！ では、あとはお姉様から法石をいただくだけですのね！？」

ノアが期待のこもった目でイリアを見る。イリアは赤面して、つい怒鳴っていた。

「か、勘違いしないですよ！ まだ完全にプロポーズを受けたわけじゃないんだから！」

「え？」

きよんとするノア。シーウオルドは分かっていたとでもいうように微笑する。

「この粘着質男が勝手に法石渡してきただけで、私はいいなんて一言も言っていないのよ！ だいたい、私はこいつのこと嫌いなんだから！」

法石を受け取られたからって調子に乗らないでよね！？ もう帰

るわよ、クオーツ！ 目的は果たしたんだからっ

「は、はい」

魔法で飛び去るイリアを、クオーツはシーウオルドたちに一礼してから追いかける。ノアが残念そうな顔で見送る。

「がっかりですわ。すぐにでも『あたくしのお姉様』になっていただけだと思いますのに。けれども、一歩前進したようですわね、

お兄様」

くるっと振り返って、ノアは楽しそうに微笑む。風が吹き、二人の髪を揺らした。シーウォルドはくすりと笑い、前髪を掻き上げる。あれだけ熱烈に思いをぶつけられたなら、応えないわけにはいかない。

「ああ。それと本人からお叱りを受けたから、明日からまた逢いに行くことにするよ。それがあの方の望みのようだからね」

僕はもう貴女の虜。僕のすべてを貴女に捧げますよ、いとしいイリア姫。

その後、イリアは次期女王に選出された。

彼女がシーウォルドに自分の法石を渡したのは、それから半年後。

『シード』と愛称で呼ぶようになったのはその一年後。

そして、周りから催促され続けてシーウォルドと結婚するのは、さらに四年後のこと。

ここから新たな物語が始まる。

アネクドート？ イリアとシードの恋愛模様（後書き）

追伸列記簿

どうもこんにちは！ 甲斐日向です。今回はマジカル☆ラビリンスの特別編で、アスカの両親のなれそめなんかを……

いやあ、お待たせしました。マジ☆ラビ内でも、いつか書くかも〜とか言っておきながらなかなか書かずにいましたが、ようやく形にできました。

でも、残念なのが一つ。イリア様のツンデレがほとんど書けなかったことです！！ あの先こそ、イリアのツンデレ超發揮なのに。

シーウォルドはもう少しクサイセリフ多くてもよかったかなと思います。シンと違って本当に若いんで、シンより輪をかけて口説き文句べらべらにしようと思ってたのに、思いつかなかったんです。

イリアはアスカそっくりの顔です。アスカの髪の毛先がはねてる感じ。性格はどっちかというとカリンに近い？

新キャラも二人出しました。クオーツとノーマリア。クオーツはイリアの片思いの相手として、ノアはイリアの誤解の相手として。しかし、クオーツはあんまり意味がなかったような。

現在、クオーツは城仕えはしていません。群れに戻って、結婚して家族と暮らしてます。ノアは当時、イリアより一つ下の十五歳。イリアをお姉様と慕い、王女でありながら十数年間城仕えをしていましたが、貴族の青年と恋に落ち、身分の差から駆け落ちしました。イリアとシードの物語はいかがだったでしょうか。まあ、日々あんなふうに、シーウォルド来る↓イリア怒る↓シーウォルド吹っ飛ばされる、を繰り返していたわけです。

でも、イリアがシーウォルドの法石を受け取ってから、彼も本気でイリアにアタックしにかかったでしょうし、ノアの助言もあって違う攻め方をしたりしたでしょうね。

ああ、シンのイヤリングが右耳にしかない理由分かりましたよね？ 左のイヤリングは今でもイリアが持ってます。ちなみにイリアの法石はブレスレットで、現在はシーワールドが持ってます。

法石の交換は日本での指輪交換ですね。アスカもプロポーズの時は法石（カチューシャの飾り珠）を相手に渡すことでした。

それでは、最後まで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3397e/>

マジカル☆ラビリンス

2011年9月20日03時21分発行